

## 目 次

■ 共通教育センター	1
■ 法文学部、人文社会科学研究科	17
■ 教育学部、教育学研究科	33
■ 理学部	57
■ 医学部医学科	73
■ 医学部保健学科、保健学研究科	87
■ 歯学部	115
■ 工学部	123
■ 農学部、農林水産学研究科	153
■ 水産学部	165
■ 共同獣医学部、共同獣医学研究科	181
■ 理工学研究科	199
■ 医歯学総合研究科	225
■ 臨床心理学研究科	235
■ 連合農学研究科	255





共通教育センター

## 令和3年度 共通教育センターFD 活動報告書

令和3年度に共通教育センター（以下、「共教C」と呼ぶ）が取り組んだファカルティデベロップメント(FD)の取り組みとその成果を、ここに報告する。年度当初に4つの企画（1. 授業改善に資するアンケート、2. 共通教育懇談会、3. FD講演会、4. 外国語部門主催の教員ワークショップ）を提案したが、これらを計画的に実行した。これらに加えて、ベストティーチャー賞選考や、教学IRコンソーシアム実施学生アンケートの結果分析を行った。COVID-19感染拡大防止に関わる様々な制約があった故の特殊事案も見受けられた。

### 1. 「授業改善に資するアンケート」の実施と、「授業改善メモ」まとめのウェブ上公開

いわゆる授業アンケートを、前期は7月15日から30日まで、後期は1月19日から2月2日にかけて実施した（第1、第3クォーターのみ開講の科目は授業最終日以降より）。アンケート実施期間を2週間にまで短くしたのは、授業を一通り受けた頃でないと授業全体についての評価にならないこと、最終回講義以降のアンケート回答には最終試験や最終レポートに対する感想など、授業とは関係ない評価やコメントが紛れ込んでくること、これらに対して考慮してのことである。アンケートの質問項目は、学生の授業履修態度や満足度、そして授業担当教員の授業運営についての資質を問うものである。これらの一部は、ベストティーチャー賞推薦者選定上の基礎データとなる。

共教Cでは、教員が提出する「授業改善メモ」の内容を整理し、web上で公開している。今年度は、記入された内容は基本的には全てweb上に公開することを前提とした項目に絞る様に、改善メモの設問に改訂した。また、FD委員が分担して公開できる記述を抜き出し、FD委員長がそれらを整理して、実際にweb上に公開される文言にまとめた上で、FD委員会でその文言について検討・承認する形に、作業の流れを改めた。

授業改善メモまとめ URL: <https://www.kagoshima-u.ac.jp/educenter/staffmember.html>

### 2. 共通教育懇談会の開催

12月16日16:10より学習交流プラザ2階学習交流ホールにて、対面と遠隔(zoom)参加を同時に可能とする複合形式にて開催した。17名の参加があった。テーマは「アフターコロナにおける授業の在り方」とした。COVID-19禍のもと2年間にわたって、オンライン・オンデマンド講義が実践され、その利点・問題点が明らかにされてきた。近い将来、以前では当然のこととして実施されてきた対面授業に回帰していくはずなのだが、以前よりも望ましい授業へと進化を遂げる機会としても期待される。この2年間の経験で見出されてきたオンライン・オンデマンド講義の利点を残して欲しいという要望がある。また、「学位の質保証」という観点でのカリキュラムの見直しや、教員の削減も進む中での「持続可能な」共通教育体制を構築する必要性にも迫られている。

懇談会ではサブテーマとして、「1. 未知の感染症の出現をも想定した共通教育の仕組み作り」、「2. 「学位の質保証」を意識した共通教育カリキュラムの試行・実践・評価」、「3. 持続可能な共通教育の試行・実践・評価」を設定し、これらについて問題提起を司会(FD委員長)が行なった上で、参加者の間で意見交換を行った。主な意見・問題提起をまとめると、以下の通りである。

#### ①未知の感染症の出現をも想定した共通教育の仕組み作り

- ・学生間の交流等は対面。ゲスト講師の授業は、オンラインで300名上限で実施。manabaを併用することで交流できる。オンライン授業では旅費不要となる。
- ・オンライン講義等で受講生を増やした場合、成績評価の負担との兼ね合いを考慮する必要がある。
- ・授業を運営する側として、ハイブリッド形式等、授業に関するサービスの提供をどこまでする事が妥当なのだろうか。
- ・対面とオンラインには両方共にメリット・デメリットがある。
- ・新型コロナ期間2年間の学生が、どういう評価を社会から受けるのか。また、コロナによってもたらされたこの状況を、社会はどう評価するのか。
- ・コミュニケーションスキルが鍛えられない状況になっている。
- ・学生の中には、家族の事情で対面授業に参加できない学生もいる。
- ・遠隔授業に慣れない新入生に対して、遠隔授業のトレーニングが必要。今後それを実施し続けるのか。

#### ②「学位の質保証」を意識した共通教育カリキュラムの試行・実践・評価

- ・学位の質保証は、成績評価も議論に含まれるのか。
- ・ルーブリックに従うと、ガイドライン上位20%に合わない場合がある。
- ・「質の保証」とは最低保証なのか。仮にそうだとすると、最低レベルの保証とは何か。
- ・専門教育科目との接続についてどこまで意識する必要があるのか。

#### ③持続可能な共通教育の試行・実践・評価

- ・共通教育では基礎になるような教育なので、評価については成績評価に対するガイドラインに合致しないのではないかと。
- ・そもそも、十分な基礎的素養を備えたと評価される学生に対する評価は、AなのかBなのか(昔はAという評価自体存在せず、設定時は特別優秀という意味があった)。
- ・共通教育センターの科目で、「初年次セミナー」や「大学と地域」の授業担当の教員を募っている状況で、学位の質保証が担保できるのか。
- ・ある部局では、各教員の担当科目を公開していて、重要な科目は担当が持ち回りになっていた。カリキュラム上優先すべく重要な科目と言うのであれば、特殊な専門性が必要ではない科目については、共通教育科目の必修部分については担当を持ち回りにすべきである。
- ・4年一貫した教育を視野に持った方が良い。従って授業負担について、「初年次セミナー」は部局の先生方もより多く担当した方がよい。一方共通教育の先生方も、共通

教育科目で求められている学生の能力・技量を探る為にも、専門教育に参加した方がよい。

- ・ 共通教育で何を行っているかを専門科目のみを担当する先生も知る必要があるのではないか。今後、専門科目を主担当する学部と、カリキュラムに関して情報共有する必要がある。

#### ④その他

- ・ アフターコロナでのオンラインについては、意欲的な学生のオンラインへの反響はよく（自分が学びたいだけ学べる）、また対面もよいので、ハイブリットにするのが一つの答え。
- ・ 学生間で教え合う方法がより厚みの増す教育になると感じており、先輩学生を活用するのも良い方法。そこで、スチューデントアシスタントを検討して欲しい。
- ・ 学習アドバイザー（学部生）やTA（大学院生）の雇用手続きが煩雑で、雇用上のハードルになっている。
- ・ オンライン授業のツールが増えることによって、意欲のある学生にとっては良い面も増えている一方で、モチベーションが保てない学生へのフォローが難しい。
- ・ 対面授業であっても Respon での不正な応答が横行しているなど、どこまでフォローできるのか悩ましい状況もある。
- ・ 多様化する学生に対して、主にどういう学生に授業をするつもりで対応するのか。どこまで、そしてどの様に多様化に対応するのか。

### 3. FD 講演会の開催

11月5日16:00から学習交流プラザ2階学習交流ホールにて、曾我日出夫先生（茨城大学名誉教授、元茨城大学大学教育センター長）をお招きし、表題「茨城大学における部局と連携した理数系初年次教育への取り組み」にてご講演を頂いた。当日は、COVID-19感染拡大防止策を考慮し、対面講演を基本としつつzoomオンライン配信も併用して講演会を開催した。他部局からの教員参加が少なかったのは宣伝不足によるものであり、この点は反省すべきである。ともあれ、16名が講演会に参加・視聴した。

講演の内容は、理数系、例として曾我先生が専門とする数学や物理学における、本学で言う共通教育科目と専門教育科目を一貫したカリキュラムとして捉え、その上で初年次理系教育の見直しに取り組んだ、と言うものであった。講演では、学士の学位取得の段階で身に付けるべき理数科目の目標や入学生の学修状況を考慮して、初年次での教育内容を吟味するとともに、その授業スキルや運用システムの開発について紹介された。さらに、その開発内容を正規カリキュラムに反映させるに至る苦労話についてコメントを頂いた。

教養部解体(1996年)から本学の総合教育機構に相当する組織の発足に至る経緯は、茨城大学と鹿児島大学とは似たところが多々ある。特に、教養（共通教育）科目の形骸化（学生の不人気、授業の質保証の問題、カリキュラムポリシーの不足、専門教育との分離）及

び、入学生の修学到達度の多様化への不対応の問題が顕著化した。「建前上の」教養教育の改革に乗り出したものの、2000年頃までは実質的な成果を得られなかったようである。

その中での反省点として、(1)教養教育の授業について各担当教員に任せ過ぎて、4年一貫カリキュラムの実質化が進まなかったことと、(2)多様なレベルにある学生の授業理解への支援が足りない(4年次卒業研究の段階で研究室毎に支援する形にはなっていたが)が指摘された。

これらへの対応として、2005年度から「教育向上プロジェクト」と呼ばれる概算要求事業に取り組み、下位グループの引き上げを目指した「パイロット授業」や授業の統一化も見据えた習熟度に応じた教材や指導法(e-learningも含む)を開発・実施について紹介された。この事業では数学の微積分、物理学の力学に主眼が置かれており、主に工学部との連携がこれにより進んだようである。これらの実施の為に、学科に依らない、授業コマ数を維持したままでのクラス編成を実現し、正規授業への導入を果たしたようである(ただし幾つかの課題がまだ残ったが)。

ただし、この様な取り組みを通して下位グループを引き上げるにはそれなりのコストが掛かることを意識し、どれだけそれを掛けられるのか、どれだけ成果を挙げられるのか、コストを掛けられない場合の対応(学年進級制や進路変更相談制度の導入など)も考慮しなければいけない事も言及された。

この様にこの講演会は、同じ分野において、本学では授業負担や各学部・学科のカリキュラムに都合の良いカリキュラムの議論しか行えておらず、また共通教育センターと部局とのカリキュラム構築における連携も模索する機会がない状況を何とか打開したいと願って企画した。それ故に、他部局からの教員参加が少なかったのは残念だが、この講演の内容に関連する全学会議体(教務委員会やFD委員会)の中で少しずつでも取り上げられる様に機会を模索する必要がある。

講演後の質疑では、以下の様なやりとりがあった。

- 自然科学系の科目における教養・専門教育連携については？

(自流通す)理学部以外の部局とは連携が図れたと思う。また、教養科目としての数学と基礎科目としての数学は違うがその区別が付きづらい。

- 他部局との連携方法は？

最初は親しい人へ接触し、次に反対しそうな教員、要人らに直談判しながら話を進めた。いわゆる「根回し」が必要。その上で、正式な教授会等の会議体へ話を持っていく作戦をとった。そうすると少数ながらも共感者が現れた。また、役割分担を率先して提案できる様な組織の雰囲気作りが必要。学長からの支持・信頼も得るとやり易い(必要なポストにつながるかもしれない)。

- 成果の検証をどうやって実施した？

徹底的に調査してから結果を見出すのではなく、仮説を立ててそれを検証する様に調査を進める様にしている。さもないと、短い期間で的確な対策法を見出すのは難しい。

- 実体験による常識が必要な物理学における、実験について

実験をやれば良いが、実現できなかった。実験指導を誰が担当できるのか、（文系学生も含む）多様なレベルの学生に対する教員の対応、教員人員の削減、などの問題がずっとあって、これらを解決する方法が見つからなかった。

- 教員側の熱意・能力が学生に伝わるのか？

授業についていけない学生の有無の観察、授業につまずいた学生に対する手厚い個別指導をすれば熱意が伝わった。しかし、自立的学習を促すのは難しい。「自分が理解できていないことが理解できた」という好意的な感想もあれば、「さっさと答えを教えて欲しい」という要望が多数出てしまう。オンライン授業は、教材がそれなりに用意され学生も自主的に学習せざるを得ないので、自主的学習が進むかもしれない。

- 人員の負担増加に強い抵抗がある。どうやって突破した？

必要な人員は概算要求予算で賄った。大学側で人員の需要だけを主張しても通らない。文科省側にもメリットがある様な交渉が必要。文科省側の他の施策と連携させて提案してうまくいくことがある。

- 自分（達）が関連する分野を教えたい、全学的に統一した内容を教えなければいけない。これら2者の線引きを踏まえてカリキュラムを考えられるか？

「特化した能力さえ育成すればそれで良いのか。」この問い掛けをベースに、複数部局に渡って共通に必要な授業内容を見つけていくことがポイントになる。例えば、工学系でも（その専門性を活かす）社会について、社会学における環境問題など、この様な発想で議論が進めば良い。しかし実際は、それほど突き詰めることができなかった。



図1: FD講演会(11/5開催)にてzoom越しで講演する曾我日出夫先生



#### 4. 共通教育センター外国語教育部門 第1回教員ワークショップ

##### A. 教員(FD)ワークショップ(英語部門主催)

FDワークショップは、平成31年度より外国語教育部門(英語・初修外国語)として行うことになり、英語は本年度第1回目を担当した。本ワークショップでは、講師に共通教育センターの教員3名(原先生、金岡先生、ハムチュック先生)をお招きし、2021年8月23日(月)10:00~12:20に、「新ポリシーの紹介及びオンライン教授体験の共有」と題し、Zoomによる遠隔会議にて開催した。参加対象者は、外国語教育に関わっている全教員(専任教員、非常勤講師)またその他、本ワークショップに関心のある方とした。

ワークショップの目的は二つあった。一つは成績評価、シラバスチェック及び評価アンケートに関する共通教育センターの新しい政策を紹介し共有した。それぞれのトピックについて短いプレゼンテーションと質疑応答が行われた。ワークショップの後半は昨年度に続き、遠隔授業についての意見交換が行われた。教員がグループに分かれ、オンライン授業の問題点、そして成功体験について自由に意見交換した。

当日の参加人数は合計25名(共通教育センター11名、法文学部1名、その他・不明13名 / 専任講師:16名、非常勤講師:9名)だった。事後アンケート(回答者25名)によると、83%(19名)が「ワークショップは有意義だったと非常に思う」、16%(4名)が「少しそう思うとあまり思わない」と回答した。ワークショップの感想として次のようなコメントがあった。

- ・「様々なご意見を聞いて参考になり、グループ討論も良かったが、ややnativeの発表に偏りすぎました。様々な方々のご意見をお聞かせいただくと有り難いです。」
- ・「各テーマに沿った先生方の懇意なご発表と、多くの先生方の遠隔授業に係るご苦勞を、オンラインとはいえ、じかに伺えて、話し合えたことは、貴重な時間だったと思います。」
- ・「アンケートの有用性については重要な情報があったが、このアンケートは数年前に変更してもよかったかもしれない。シラバスの情報が少しわかりにくかったので、シラバスを見直すか、簡略化するべきだと思う。しかし、シラバスに関する最も重要な情報の英語版を教師に送ることは、重要な最初のステップかもしれません。(英語から翻訳)」
- ・「同僚とアイデアを共有できたのは良かったのですが、一部のプレゼンテーションがわかりにくかったです。2つの発表では、内容がわかりにくかったです。政策の目的が明確でなかったため、多くの非常勤講師の役に立たなかったと思う。主催者の一人として、今後は特にネイティブスピーカーの先生方にも理解できるような講義内容、発表内容にしなければならないと感じました。(英語から翻訳)」

今後のワークショップの提案としては、遠隔授業において役立つ情報、教授法、技術についてもっと深く学びたいという意見及び資料を前もって配るなどして、交流会をもっと円滑にできる工夫をすべき、などの意見が寄せられた。また意見交換会をこれからもっと頻繁に行われると良いという提案もあった。

## B. まとめと今後の課題

外国語教育部門(英語)では、本FD教員ワークショップを通して、新ポリシーへの理解及びより充実した共通教育の英語授業を目指し、オンライン授業内容の改善の糸口を模索してきた。今回のトピックは、教員全員に関係するポリシー及び英語部門全体で行われる遠隔授業というトピックを取り上げたため、非常に関心のある話題であり、情報交換への意欲も高かった。今後の課題としては、ワークショップの開催回数及び時間の割り当て(発表より自由意見交換の時間を長くする)を考慮していく。また、交流会を遠隔で開催するに当たり、参加ルールなども決める必要がある。今後も、本ワークショップを通して授業改善に役立つ学びの場を設けたい。

## 5. 大学 IR コンソーシアム学生調査結果(令和2年度実施分)の評価・分析について

FD委員会では、令和2年(2020年)度実施分の「大学IR(Institute Research)コンソーシアム学生調査」に対して、「大学生活に対する意識」、「大学での学びの実態」、「英語学習の実態」という3大項目に分け、各大項目につき1つ以上の注目点について取り上げ形で分析を進めた。以下では、その結果で得られた知見や知見に対する解釈についてまとめた。

### ●評価する点

#### 【大学での学びの実態】

入学した時点と比べて学生自身の能力や知識がどのように変化したかを尋ねたところ、1年生では「Q. コンピュータの操作能力」が増えたと回答する者が最も多く、「大きく増えた」または「増えた」と回答した者の割合は85%を占める。

また、コロナ禍において本学が迅速にオンライン授業に対応できたこと、全学必修である共通教育科目「情報活用」がその下支えになっていることを、学生が実感した結果と受け止める。

「学生自身が文献や資料を調べる」、「授業中に学生同士が議論をする」を経験する1年生の割合も多く、その他多くの項目においても国公立大学Gよりも高い値を示している。全学必修である共通教育科目「初年次セミナー」において徹底した「文献調査」「ディスカッション」の重要性を教授している結果と受け止める。

#### 【大学生活に対する意識】

大学への適応感と充実感に関する項目として、本学学生は、1年生・上級生ともに「学生生活は充実している」者がそれぞれ6-8割を超え、他の国公立大学Gより高い状況になっている。項目別に見ていくと、「大学教員の学問的な期待を理解する」、「効果的に学習する技能を習得する」、「大学が求める水準に答えて学習する」、「時間を効果的に使う」、また上級生においては、「他の学生と友情を深める」の項目も他の国公立大学Gより高い状況になっており、大学への適応度はかなり高いと考えられる。

大学教育への満足度の項目では、新入生においては「共通教育/専門教育の授業」、「フレッシュマンセミナー、基礎ゼミ/専門のゼミ」、「教員と話をする機会」、「大学の中での学生同士の一体感」、「1つの授業を履修する学生数」の項目において、他大学より低い状況が続いているが、上級生になると、全ての項目が他の国公立大学Gより高い状況となっている。新入生の段階では十分理解できないことも、上級生になってから、その必要性や重要性に気づいていく傾向があるということであろう。

また、大学設備に関する満足度は、上級生になるとほぼ全項目、他の国公立大学Gより高い状況であり、特に「図書館の設備」、「インターネットの使いやすさ」、「健康・保健サービス」、1年生・上級生ともに高い状況であり、学生にとって利用しやすく快適な大学生活を提供できていると考える。

さらに、上級生のみへの質問項目である卒業後に備えて大学在学中に経験したいことについて、全項目で他の国公立大学Gより高い状況であり、将来に役立つ有効な経験を鹿児島大学で体験できている様子が伺えた。

### 【英語学習の実態】

2020年度1年生の入学時と直近調査時（2020年10月）における英語力（聞く力・読む力・会話力・表現力・書く力）の熟達度について、学生は入学時から調査実施時の10月まで、全ての能力において伸びていると実感しているようだ。その中で、特に「聞く力」及び「書く力」の伸び率が一番大きい。聞く力・読む力・表現力・書く力において、現在のレベルがB1レベルと回答した学生の割合が、入学時より多い。学生は入学時において、自分の英語力に自信がなかった可能性があるが、本学入学後に受講した共通教育の英語授業が良い成果をもたらしたという見方ができる。

表1： 英語力に関するアンケート集計結果のまとめ

	1年生入学時	1年生現在(10月)	3年生現在(10月)
聞く力(B1以上)	45%	54%	37%
読む力(B1以上)	74%	77%	63%

会話力(A1.2 以上)	56%	61%	46%
表現力( B1 以上)	58%	66%	50%
書く力(B1 以上)	55%	64%	42%

※B1 は英語学習者として中級レベル（習得しつつある者）を意味する。

## ●課題と考える点

### 【大学での学びの実態】

授業中、教員の考え方や意見に意義を唱えた： 1年生 6%、上級生 9%

学内での学習支援を受けた： 1年生 10%、上級生 18%

教員又は学生による単位とは関係のない自主的な勉強会への参加： 1年生 6%、上級生 22%

授業時間外に、授業に関連しない勉強をする時間： 1年生では「全然ない」と回答する者が最も多く（約 30%）、3年生では「1～2 時間」が最も多かった（25%程度）。

読書をする時間： 本学の学生のうち、最も多くの者が「全然ない」と回答しており、その割合は1年生で 39%、3年生で 40%を占めていた。

以上 5 点取り上げたが、これらから共通している言えることは、本学の学生が「学び」を「受動」と考えている点であり、本学教育における課題であると考えられる。

### 【大学生活に対する意識】

1年生の充実度は他の国公立大学 G より高い状況は見られたものの、例年より 10 ポイント程度下がっており、また、「大学教員と顔見知りになる」が 10 ポイント他の国公立大学 G より低く、「他の学生と友情を深める」が例年よりやや低かった。これらは、COVID-19 状況下における制限により、授業その他の活動からもたらされていたであろう多様で新しい関係性の構築が成立しにくかった可能性も考えられた。COVID-19 感染対策状況をしつつも、新入生への交流への配慮は今後も継続した課題となるであろう。

また、1年生の「実験室の設備や器具」がやや低かった理由としては、対面授業による講義展開が少なかった影響も伺えた。実験や実験設備・器具を用いての講義に関しても、上記と同じく、COVID-19感染対策状況をしつつ、講義の工夫が課題となると考えられた。

上級生全体においては、ほぼ全項目で他の国公立大学Gより高い満足度であったが、学部によっては20ポイント以上満足度の低い項目もあり、キャンパス別での対応も課題となるであろう。

### 【英語学習の実態】

2020年度上級生（2020年10月）における上級生の英語力（聞く力・読む力・会話力・表現力・書く力）の熟達度を1年生（現在）と比較すると、下がっている傾向が見られる。「書く力」及び「聞く力」においてこの傾向が特に強い。上級生の英語レベルが下がった原因として挙げられるのは2年次、3年次に英語を学ぶ機会が少ないことが推測される。学部で英語教育を継続する必要がある。

特に上級生において、「聞く力」、「書く力」、「会話力」の水準が低い傾向が見受けられる。(A.1-A2.2) 1年生（現在）の場合、「聞く力」の水準がもっとも低い。(A1-A2) 英語力は、グローバルな社会づくりに欠かせないツールであり、英語の授業のみならず全教科において重要視する必要がある。

2020年度の1年生と上級生（2020年10月）における英語力（聞く力・読む力・会話力・表現力・書く力）の熟達度の結果は、あくまでも自己評価によるものであり、英語のレベルの正確な評価とは言えない。学生の自己評価だけではなく、様々の方法を用いて測る必要がある。

### ●課題への具体的対応案

#### 【大学での学びの実態】

授業時間外の学習時間については改善が見られる、コンピュータの操作能力が向上したと実感している。「議論をする」ことを経験する機会も多い。

それにも関わらず、「自分の興味あることを自ら学びつかみ取ろう」とする意欲に乏しいのは、「学ぶ」動機づけが弱いからではないか？何のために「学ぶ」のか教授する必要があるのと思われる。そのために、「キャリアアップ」、「生涯学習」、「一般社会人講師による講演」といった教養科目群の充実が望まれる。

また「教員あるいは学生による単位とは関係のない自主的な勉強会」については、学生がその機会を知る術そのものが少ないことが推測される。語学教育におけるLOLや各種講演会を学生にも広く周知するシステムが必要である。また初年次セミナーにおいて、「学ぶ動機」について議論する講義回を増やしてもよいのではないか。

## 【大学生活に対する意識】

COVID-19 がもたらす影響が大きい状況であり、大学側としても経験のない対応を考え続けなければならない。大学生活に対する意識としては、感染対策を十分にとりつつも、学生同士や学生と教員間の交流方法を増やす工夫は必要と考える。対面での交流を増やすこと、オフィスアワーをオンラインで行うなどの対応を増やしていくことが考えられる。

一方で、対面を苦手とする学生にとっては、オンラインやオンデマンドの手法を用いた交流方法を活用して、その修学をサポートする手段が増えたとも考えられる。今後も、学生の状況を把握し、その状況にあった対応を考えていく必要があるだろう。

## 【英語学習の実態】

上級生の英語力の低下について： 3年次の学生に関しては、学部での英語教育がカギとなり、2年次から英語教育を継続する必要がある。既に理・農・水・工の4つの学部では2年次の共通教育英語授業を必須科目にしており、英語力の維持に効果的である。

1年生（現在）の聞く力の低水準及び上級生の「聞く力」、「書く力」、「会話力」の低下について： 英語のクラスサイズは38～43人であり、毎回学生全員に発表の機会を与えることが難しいが、共通教育センターでは学生が表現力・会話力を磨けるプログラムを提供している。LOL 外国語ラウンジやグローバル・ランゲージスペースでは、学生が毎週英語を練習することができる。また、P-SEGの海外研修を通して、英語力をレベルアップすることができる。さらに、授業外学習の一環として、リスニングや発音を練習するためのアプリも共通教育の英語先生が自主的に授業に取り入れている。学生にこれらのプログラムの情報提供をより効果的に促す必要がある。

英語力の熟達度の正確な測り方について： 英語力の熟達度について、学生の自己評価だけで測るのではなく、例えば、外部試験の導入や授業の一環として行われている英語力テスト(G-TELP)でより明確に英語レベルを測ることができる。また、授業中にも英語力を測るテストをすることによって、英語力がどのぐらい伸びたかを把握できる。

## ●昨年度挙げた改善・対応策の進捗状況

### 【大学での学びの実態・大学生活に対する意識】

授業時間外の学習時間について1年生では改善が見られる。1年生の最も多くが「6～10時間」（1週間あたり）と回答しており、その割合は29%を占めていた。これは、授業において定期的な小テストやレポートを課すことが定着していることに起因すると考えられる。また、2019年（53%）までの低下傾向が下げ止まり、2020年に55%と横ばいになった。しかし他大学と比較して低い傾向のため、教養科目群の一層の充実が望まれる。

ともあれ、COVID-19の影響があったものの、さまざまな面で改善が見られる。今後もこれらを継続しつつ、さらなる改善を図っていただけることを期待する。

#### 【英語学習の実態】

カリキュラムや授業の改善、適切なテキスト選定を英語部門全体で継続的に行っている。また、習熟度別クラス編成によって、学生一人一人に合った英語教育を実施している。共通教育センターの履修案内では学生にも習熟度別クラス編成という制度を紹介している。こうして、1～2年次のカリキュラムは体系化され、英語教育に関することは全てエビデンスと実践で検証しながら、理想的な教育に向け進めている。一方教員は、LOL 外国語ラウンジ、P-SEG やグローバル・ランゲージスペースと P-SEG の海外研修に対し積極的に支援し、取り組んでいる。

●コロナウイルス感染症対応に関する本学・各部局の取組との関連に影響すると思われる回答とその内容

#### 【大学での学びの実態】

1年生および3年生の両方において、「C. インターネットを使って授業課題を受けたり提出したりした」と回答する者の割合が非常に多かった。本学では2020年度コロナ禍においていち早くオンライン授業に対応し、授業再開することができた。上記の回答結果は、本学の感染症対応を反映するものであると思われる。

#### 【大学生活に対する意識】

共通教育科目は受講人数が多く、COVID-19対策を行う場合、遠隔授業形式を取らざるを得ないことが多く、学生同士や教員との交流を望む学生の大学生活の満足度に影響を及ぼしやすい。この点、感染対策を行う場合においては、速やかに遠隔授業に切り替えられる柔軟性も持ちつつ、対面授業と遠隔授業のバランスや、遠隔授業の中で交流の組む込まれた授業構成や計画を工夫していく等の必要があるだろう。

#### 【英語学習の実態】

特にコメントなく、結果内容は昨年とほぼ一緒のため、コロナウイルス感染症対応の影響は低いと思われる。

### 7. ベストティーチャー賞受賞者についての取り組み

FD委員会では、令和2年度ベストティーチャー賞にトレマーコ・ジョン先生（共通教育センター、准教授）を推薦した。COVID-19禍のため対面講義が学期途中でオンライン講義に切り替わる中、2021年10月に実現した対面講義を公開して頂いた。

そしてFD委員会は、令和3年度ベストティーチャー賞に共通教育センター体育・健康教育部門（福満博隆・石走知子・末吉靖宏、各先生）を推薦した。この年度から同一科目を担当する複数教員から成るチームも推薦することができることになった。実際チーム推薦の要望が出てきたので、個別教員の選考と並行して、「ベストティーチャー賞チーム推薦申し合わせ」を制定し、実際に提出されたチーム推薦がこの申し合わせの条件を満たす事を確認した。そして最終的に、合議の上で今回はチーム推薦が時機を得たものと判断した。

体育・健康教育部門チームは、「体育・健康科学実習」と「体育・健康科学理論」の授業内容の設計を行い、チーム構成員それぞれが担当するクラスにおいて受講生から高い評価を得た。特に、令和2年度から3年度にかけて、COVID-19 禍において実施困難な実習に替わる教材を開発し、またチーム自身が「鹿児島大学新入生ストレスチェック」を全学的に実施し、その分析結果が速やかに授業へのフィードバックに反映した事に注目した。これら授業への取り組みは、受講生の健康維持やストレス軽減に効果が見られ、平時においても注目すべき取り組みとして、高く評価された。

こうして、今回からチームに対する推薦が導入されることになり、広い分野にまたがり、全学必修科目も含まれる共通教育科目を担当する共教C/総合教育機構の教員を対象とする推薦対象者・チームの選考方法は、より複雑なものにならざるを得なくなった。困ったことに、それが必ずしも公平なものとはなり得ない。チームだけでなく個人に対する自薦・他薦も受け付けることにした結果、推薦理由書によって高評価のポイントを的確に提示できる可能性が高くなる一方で、「授業改善に資するアンケート」から読み取れる授業担当教員の取り組みに対する評価は、事情を把握できているFD委員による追加の情報や意見も織り交ぜたとしても、相対的に不利になったかもしれない。結果、ベストティーチャー賞に関わる選考は、アンケート結果を用いた順位付けに軸足を置いた客観性重視の方法から、教員・チームに対する自薦・他薦をも考慮した主観的な方法へと変貌するはずである。この流れは、他部局では多分見られない、総合教育機構/共通教育センター固有のものかもしれない。ここに至り、何の為のベストティーチャー賞制度なのか、制度そのもののあり方について重要な示唆を提示する手段として、今後も選考過程について議論を深めていく必要がある。

## 8. FD 活動への教員参加実績

共教C教員のFD企画参加率は表2の通りである。参加率は高い水準（目標の75%より高い）を保っているが、前年度よりも6ポイント（2名分相当）下がっていることは見逃せない。授業改善メモの提出率が大幅に改善された。その一方で、ベストティーチャー賞受賞者による公開授業の参観者が少なかったのは残念である。受賞者は令和4年度に非常勤講師を担当されるが、今回に限らず、講師担当期間中に参観しておくべきだろう。

表2 各FD企画における専任教員参加率

合計参加率		83 % (専任教員 36 名中 30 名 参加)
企画別 参加率	FD 連続セミナー	11 % (専任教員 36 名中 4 名 参加)
	FD・SD 合同フォーラム	33 % (専任教員 36 名中 12 名 参加)
	若手教員研修会	14 % (専任教員 36 名中 5 名 参加)



ベストティーチャー賞 受賞者公開授業	8 % (専任教員 36 名中 3 名 参加)
共通教育センターFD講演会	36 % (専任教員 36 名中 13 名 参加)
共通教育懇談会	47 % (専任教員 36 名中 17 名 参加)
授業改善メモ提出	67 % (専任教員 36 名中 24 名 参加)
学部FD講演会	19 % (専任教員 36 名中 7 名 参加)

注) FD 教員ワークショップ(外国語教育部門)も開催されたが、出席者未集計の為、上記には計上していない。

## 9. まとめ

共教CにおけるFDの取り組みは、初年次教育・教養教育・体育／健康教育・外国語教育・情報教育という広い分野にわたりながらも、各分野間で互いに参考にできる内容について情報交換しながら繰り広げられているところに、大きな特徴がある。またどの分野においても、大学入学時の学生を相手に、その時々の入学生の特質や社会情勢を良く観察した上で、講義の内容や運用方法について柔軟に修正・発展させていくことが必要であろう。大きな時代のうねりに翻弄されながらも、学生を勇気付け、学問への動機を確立させて行き、大学生活を有意義に過ごすのに必要なスキルを高めるのに、何をどうやって教授するのかについて、FD活動を通して探求する姿勢を持ち続けることが大切である。

令和3年度のFD活動は、COVID-19感染拡大防止への対応が必要な状況を残しつつ、対面講義への回帰の中で行われた。オンライン・オンデマンド授業への取り組みが注目され続けている一方で、それらでは実現できない対面授業ならではの意義や求められているものについて、今後追求していく必要があるだろう。これは、「学位の質保証」からの要請、教員を取り巻く環境の変化と相まって、簡単なことではない。実施した内容が本当に効果的・効率的・有意義だったのか、その検証方法も同時に探る必要がある。





法文学部・  
人文社会科学研究科

## 令和3年度 法文学部・人文社会科学研究科

### ファカルティ・デベロップメント活動報告書

令和3年度の鹿児島大学法文学部、大学院人文社会科学研究科のファカルティ・デベロップメント活動（以下、FD活動と呼ぶ。）の取組とその成果を、ここに報告する。

#### 第1章 FD活動への取り組み状況

令和3年度のFD活動の取り組みは、基本的には前年度の取り組みを踏襲するかたちでおこなわれた。令和3年度におこなった主な取り組みは以下のとおりである。

- ・ 定例委員会

4月からほぼ毎月（2022年度1月を除く）定例委員会を開催した。

- ・ 授業参観／視聴

前期は6月11日(金)から6月30日(水)、後期は12月1日(水)から12月24日(金)の期間でおこなった。前期・後期ともに15の授業を視聴可能とし、教員には「授業参観報告フォーム」の提出を求めた。参観者数は前期43、後期22。

- ・ FD 講演会

→第2章「FD活動の特筆すべき取り組みについて」を参照。

- ・ 授業アンケート&所感と対応

→第2章「FD活動の特筆すべき取り組みについて」を参照。

- ・ 授業実践発表会

→第2章「FD活動の特筆すべき取り組みについて」を参照。

- ・ 教職員 FD ワークショップ

→第2章「FD活動の特筆すべき取り組みについて」を参照。

- ・ 学生を交えたFD コミュニケーション・ワークショップ

→第2章「FD活動の特筆すべき取り組みについて」を参照。

・エクセレント・レクチャラーの選出と公表

本年度はこれまでの選出の流れを見直し、①前期授業アンケートの実施、②学生にエクセレント・レクチャラーに相応しいと思う教員アンケート（エクセレント・レクチャラーアンケート）をmanabaで実施、③上記①②等を踏まえエクセレント・レクチャラーの選出基礎データを作成し学科長が選出、④選出されたエクセレント・レクチャラー候補3名程度の授業を、学部長、副学部長、FD委員長、各学科長からなる選定委員会が後期中に参観しベスト・ティーチャー候補者を決定、とした。

・教員対象 FD アンケート

→第2章「FD 活動の特筆すべき取り組みについて」を参照。

## 第2章 FD 活動の特筆すべき取り組みについて

以下、令和2年度のFD活動の特筆すべき取り組みについて紹介する。

### ■FD 講演会

2021年9月27日（月） 11:00-12:00 に東京大学大学院情報学環教授 吉見俊哉氏を招いて講演会「大学は何処へ 未来への設計」を実施し、研究者の自由な時間の確保に向けた教職分業のあり方や制度等について議論をおこなった。また、同月22日には、教職員及び学生を対象とした講演会に向けた勉強会を開催した。勉強会では農中至（法文学部法経社会学科）が本テーマに関して発表し議論を交わした。講演会には38名の参加、勉強会には13名の参加があった。



■授業アンケート&所感と対応

前期は7月19日（月）から8月11日（水）まで、後期は2月21日（月）から3月11日（金）の期間でおこなった。質問内容は基本的に前年度のものを引き継いだ。教員には授業アンケートに対する所感（気づきや感想）と対応（今後の授業に向けての取り組みや抱負）等について報告を求めた。報告者数は、前期19、後期は33名。

2021年度前期 授業アンケートへの所感と対応

コース別回答率

	回答数	教員数	回答率
法学コース	2	14	14.3%
経済コース	2	15	13.3%
地域社会コース	3	10	30.0%
多元地域文化コース	9	29	31.0%
心理学コース	3	10	30.0%
総計	19	78	24.4%

Q1.担当した授業のアンケートの結果について、全体としての印象を選んでください。

	法学コース	経済コース	地域社会コース	多元地域文化コース	心理学コース	総計
全て想定内だった	0.0%	0.0%	5.3%	15.8%	5.3%	26.3%
ほぼ想定内だったが、一部想定外もあった	10.5%	5.3%	10.5%	26.3%	10.5%	63.2%
想定内と想定外が半々だった	0.0%	0.0%	0.0%	5.3%	0.0%	5.3%
一部は想定内だったが、ほとんどは想定外だった	0.0%	5.3%	0.0%	0.0%	0.0%	5.3%
完全に想定外だった	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
総計	10.5%	10.5%	15.8%	47.4%	15.8%	100.0%

2021年度後期 授業アンケートへの所感と対応

コース別回答率

	回答数	教員数	回答率
法学コース	6	14	42.9%
経済コース	4	15	26.7%
地域社会コース	6	10	60.0%
多元地域文化コース	12	29	41.4%
心理学コース	5	10	50.0%
総計	33	78	42.3%

Q1.担当した授業のアンケートの結果について、全体としての印象を選んでください。

	法学コース	経済コース	地域社会コース	多元地域文化コース	心理学コース	総計
全て想定内だった	9.1%	6.1%	3.0%	18.2%	3.0%	39.4%
ほぼ想定内だったが、一部想定外もあった	9.1%	3.0%	12.1%	18.2%	12.1%	54.5%
想定内と想定外が半々だった	0.0%	0.0%	3.0%	0.0%	0.0%	3.0%
一部は想定内だったが、ほとんどは想定外だった	0.0%	3.0%	0.0%	0.0%	0.0%	3.0%
完全に想定外だった	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
総計	18.2%	12.1%	18.2%	36.4%	15.2%	100.0%

■授業実践発表会

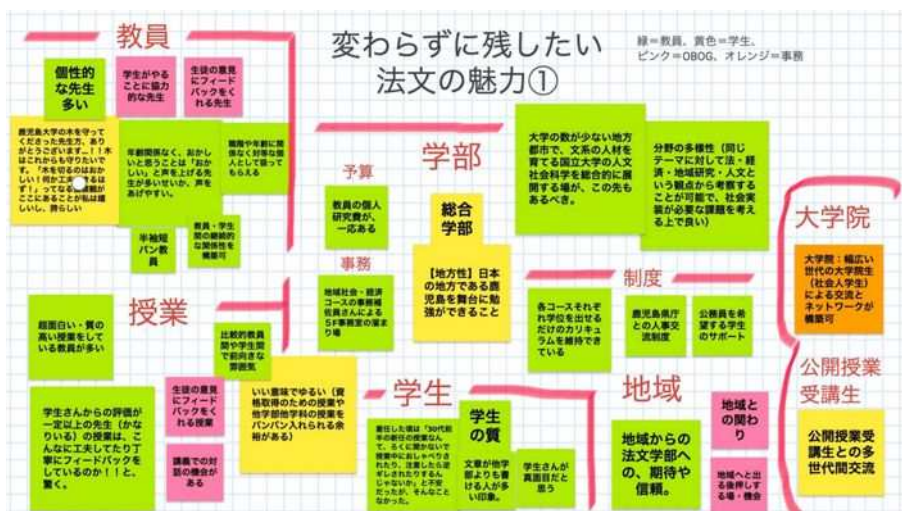
夏季・秋季法文学部オープンキャンパスに合わせて、8月6日から8月31日及び11月9日から11月23日までのあいだ法文学部のホームページにゼミ活動およびコース紹介ポスターを掲載した。ポスター数は、夏季は計27件、秋季は計26件であった。

■教職員 FD ワークショップ (昼休みの法文族)

法文学部の本質的なFD (Faculty Development) を考えるならば、教員及び学生だけでなく、法文学部を構成する職員や卒業生の声にも耳を傾けそれをFD活動へ反映することが重要であるが、そうした声を聞く機会は多くない。また、改組等によって教員同士や教員と学



生とのあいだに分断やボタンの掛け違い的な認識のズレが生じているケースも散見される。このような法文学部の状況を踏まえ、①法文学部内で教職員学生 OBOG らの相互理解をはかる、②参加者間で法文学部構成員としての当事者意識を醸成し、前向きな議論がしやすい環境をつくる、③議論した内容を次年度の FD 委員の計画にできれば繋げる、④10 年後の理想的な法文学部像を描き、10 年後に向けて今からできることを始める、の4つを目的とした法文教職員学生 OB・OG ワークショップ（通称：昼休みの法文族）を、8月から2月までのあいだ計12回開催した。活動のまとめ等は manaba の「法文学部 FD 関連情報」のスレッド等に掲載し共有した。また、活動に関わった法文 OBOG を「法文学部の活躍する卒業生」で紹介した。







### 10年後に向けて今からできること

## 負担のないゆるやかな「つながり」づくり

◆分野の多様性・先生方の個性や親しみやすさ・地域性を活かし、気軽につながれるツールや場づくりを、小さく始める。

ラジオ

総研棟1F  
スペース活用

HP・SNSでの  
情報発信

つながることがゴールではなく、つながった先のワクワクが想像できる。  
将来の対策のためではなく、今このときから学部面の面白さを育てたい。  
一緒に一歩踏み出せるゆるやかな土壌（カルチャー）を作っていきたい。

■学生を交えたFD コミュニケーション・ワークショップ  
2022年3月17日（木）の午後1時から3時まで、法文学部FD委員会主催で、FDワークショップを開催。テーマは「教員と学生の対話を通じて考える授業改善」で教員13人、学生9人、合計22人が参加。

参加した教員並びに学生からは以下のようなコメントがあった（一部抜粋）。



授業をより良いものにしたいという先生方の熱意が感じられる機会となりました。また、学生という立場を気にすることなく、先生方と授業に関して思うことを話せました。加えて、エクセレントレクチャーの先生方の授業での取り組みから学ぶことが多いので、ゼミ運営やミーティングの主催等で活かしたいです。今後も開催して頂きたいと思いません。

エクセレントレクチャーの先生方の創意工夫が分かり大変参考になりました。また、学生との意見交換の中で、課題レポートに対するフィードバックの重要性を改めて感じました。特に入学以来対面授業の少ない現2年生にとっては、教員とのつながりを感じられる貴重な時間となっているようです。毎週全てのレポートに目を通すのは大変ですが、学生の生の声が聞けてモチベーションアップに繋がりました。

授業に対する先生方の工夫が多種多様であり、学生へのアプローチを様々な手法で行なっているのだと再認識できました。授業に対する課題点と改善案について先生方と対等な立場で話し合うことができ、通常であれば知ることができない先生方の率直な意見に触れることができました。また、普段は伝えられないような学生目線の意見もフランクに伝えることができたため、大変有意義な時間となりました。

コロナ禍での授業方法に悩んでおり、本やオンライン講座では授業法について勉強していました。今回のワークショップは、法文学部のエクセレント・ティーチャーズが実践例や学生さんからの反応まで、手の内を全て明かして下さり、それは何よりも実際の貴重で、興奮しました。また、グループセッションで学生さんから授業方法に関する質問を受け、「自分は講義で何を伝え、身につけてほしいのか」を改めて考える機会にもなりました。

zoom やオンデマンドといったこれまでになかった授業形態のなかでも、先生方が各々の工夫によってよりよい授業をしてくださっているということがよく分かりました。先生方とこのように授業について直接対話をする機会がなかったため、自分自身の授業への向き合い方を見直す契機にもなりました。教育効果の高い授業の実現のためにも、このような議論の場を増やし、さまざまな視点からの意見を取り入れることが必要だと感じました。

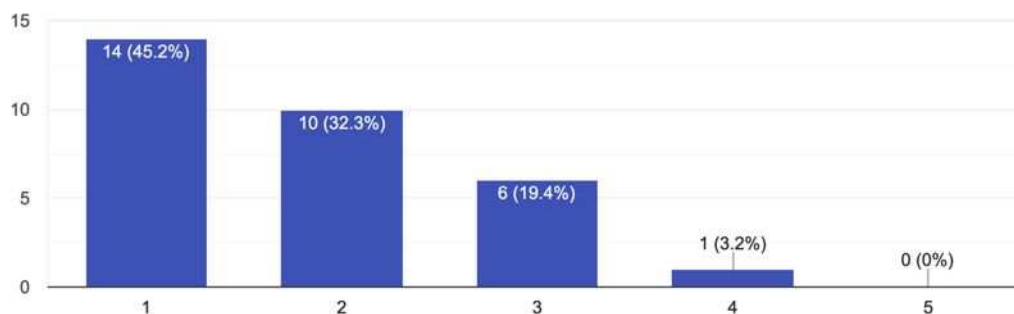


■教員対象 FD アンケート

令和 3年度法文学部 FD 活動を評価し、成果や改善点を把握する目的で 3 月 7日～14 日の期間で実施。FD 委員会で実施した 7 項目について「均等目盛」を用いて「高く評価できる」「全く評価できない」を尋ねたほか、他部局や他大学の FD 活動に参加した実績、令和 2 年度エクセレント・レクチャラーの推薦、令和 3年度法文学部 FD 活動全般についての意見や次年度の活動についての要望について尋ねた。

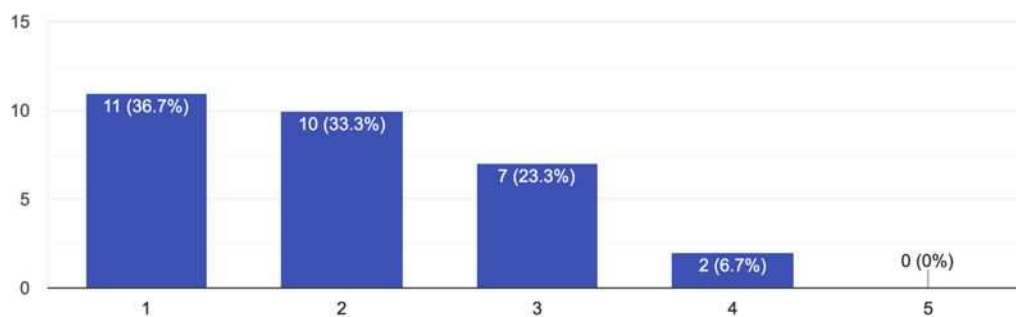
高く評価できる 1 2 3 4 5 全く評価できない

【授業参観／視聴】 前期は6月11日(金)から6月3...評価をお願いします。「わからない」場合は無回答。  
 31 件の回答



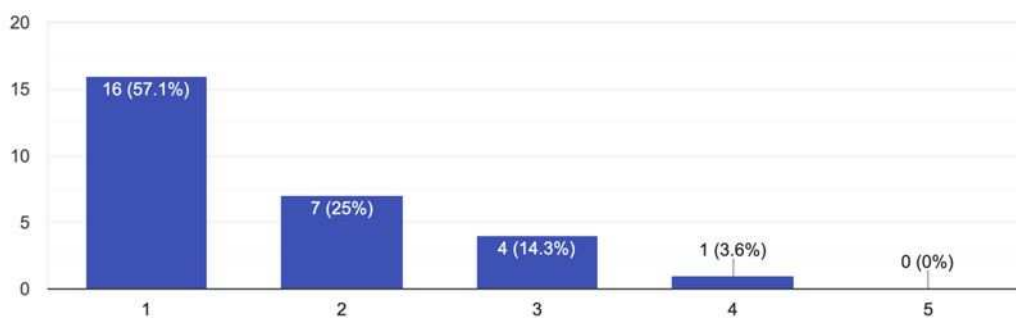
【授業アンケート&所感と対応】 前期は7月19日...価をお願いします。「わからない」場合は無回答。

30件の回答

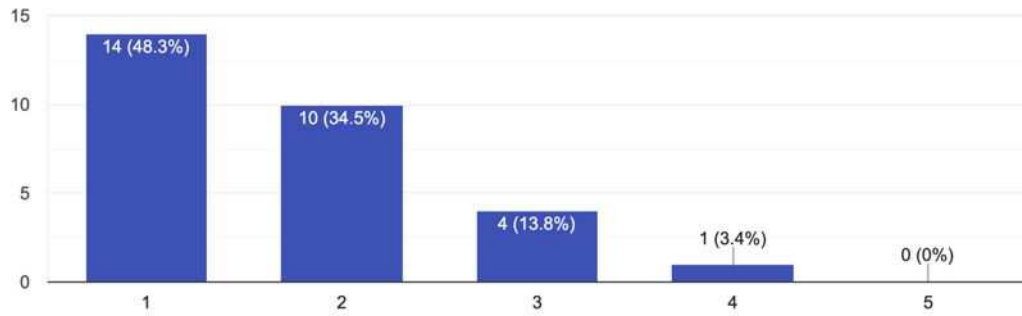


【FD講演会及び勉強会】 2021年9月27日（月） 11:00-12:00に東京大学大学院情報学環教授吉見俊哉氏をお招きし講演会「大学は何処へ 未来...をお願いします。「わからない」場合は無回答。

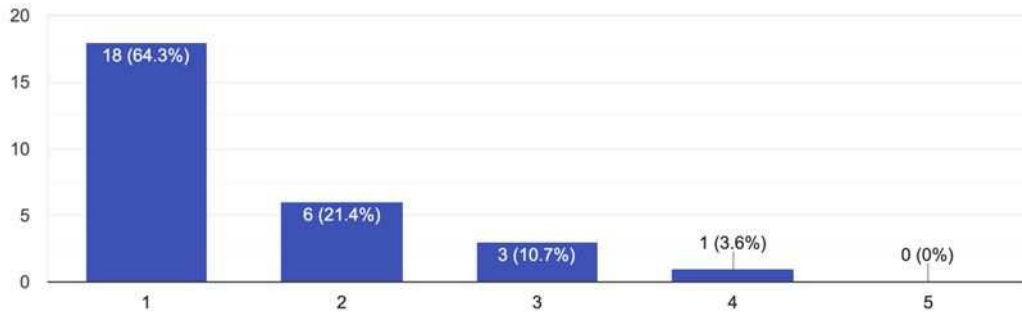
28件の回答



【教育実践発表／実施報告】夏季・秋季法文学部才...をお願いします。「わからない」場合は無回答。  
29件の回答

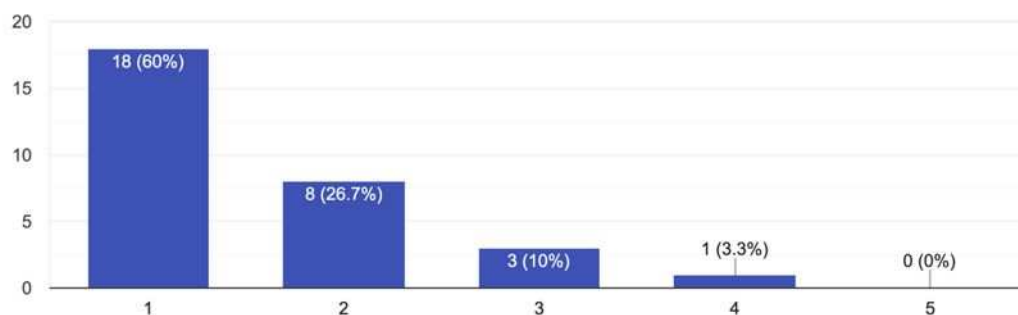


【昼休みの法文族】（1）法文学部の本質的なFD（Faculty Development）を考えるならば、法文学部を... 評価をお願いします。「わからない」場合は無回答。  
28件の回答



【学生を交えたFDワークショップ】「オンライン...をお願いします。「わからない」場合は無回答。

30件の回答



鹿児島大学の他部局や他大学のFD活動に参加した実績がありましたら、お知らせください。4件の回答

ありません。

なし

臨床法学教育学会に参加している。

特になし

令和3年度法文学部FD活動全般についてのご意見、次年度の活動についてのご要望がありましたらお書きください。11件の回答

特になし

一教員として学部FD活動の重要性と必要性を認識する一方で、活動そのものがルーチン化していくことも懸念しております。

現状を維持しつつ、改善すべき点があれば随時ご対処頂ければよいかと存じます。

今年度のFD活動お世話になりました。

量より質で、FD委員の負担にならなり活動が今後大切になってくるように思います。

1年間おつかれさまでした。

いつも大変お世話になっております。要望についてですが、現在でもたくさんの取り組みをさせていただいており、十分に参加できておらず申し訳なく感じております。次年度も可能な限り参加できよう努めたいと思います。引きつづきどうぞよろしくお願いいたします。

FDというのは既存の授業を実施する能力を向上させるだけでなく、カリキュラム編成へのフィードバックや新しい授業形態の模索なども含まれると思います。この点につい

ては教務委員会との連携も必要となろうかと思いますが、学位の質保証には必要なプロセスですので、何卒宜しくお願い致します。

メールの連絡だけであるとなつて見落としてしまうので、できれば、教授会の報告事項で発言いただくと大変ありがたいです。すみません。

「昼休みの法文族」は、卒業生の話を直に聞くことができる非常にいい取り組みだと思います（なぜか開催時間に移動していることが多く、あまり参加できずすみません）。担当の先生のご負担でもあると思いますが、来年度も月1回くらいでも実施していただけるといいなと思います。何かあればお手伝いしますので、お声がけください。

人員が減っているなかで、ルーティンワークでないかたちで実りあるFD活動が続けられればと思っています。今年度のFD活動お疲れ様でした。ありがとうございました。

### 第3章 令和3年度FD活動まとめ

法文学部でのFD活動は、これまでさまざまな取り組みが確立され、その活動内容も充実している。そこで、今年度の活動もこれまで蓄積のある取り組みを中心におこなわれた。ただし、「授業アンケート&所感と対応」については、学生によるアンケート疲れの問題が長年にわたり指摘されてきた。また、新型コロナウイルス感染拡大は、教員や職員そして学生のコミュニケーションや相互理解の機会を奪い、それによる問題も近年顕在化していた。令和2年度に改組の完成年度を迎え、法文学部として今後の未来像を少しずつでも議論していく必要があるという認識もFD委員内部では存在した。以上から、令和3年度は「学生を交えたFD コミュニケーション・ワークショップ」（継続）や、新規事業として「昼休みの法文族」を企画立案し、学生と教職員、OBOG間のコミュニケーション及び相互理解の促進に取り組んだ。

また、本年度はFD活動の見直しや業務軽減も積極的におこなった。例えば、FD活動として長年取り組んできた「授業実践発表会」は、法文学部の教育活動を内外、特に受験生である高校生に理解してもらう活動であり、FD活動というよりも広報活動に位置づくと考えられた。そこで、本年度広報委員長とも相談し、次年度以降は広報委員会が引き取ることとなった。また、それぞれの担当事業についても引き継ぎ資料及びフロー等を作成し次年度の担当者の負担軽減につとめた。

令和3年度の専任教員のFD活動参加率は以下のとおりだった。

令和3年度専任教員のFD参加率(回答様式)				
			部局名( <b>法文学部</b> )	
<b>合計参加率</b>		<b>75.6 %</b>	<b>(専任教員 78 名中 59 名参加)</b>	
企画別 参加率	FD講演会・勉強会	65.4 %	(専任教員 78 名中 51 名参加)	
	教員対象FDアンケート	41.0 %	(専任教員 78 名中 32 名参加)	
	授業参観	83.3 %	(専任教員 78 名中 65 名参加)	
	教職員FDワークショップ	9.0 %	(専任教員 78 名中 7 名参加)	
	学生を交えたFDコミュニケーション	16.7 %	(専任教員 78 名中 13 名参加)	
	授業アンケート	66.7 %	(専任教員 78 名中 52 名参加)	



大学 IR コンソーシアム学生調査結果（令和 2 年度実施分）の分析について  
 （ 法文 ） 学部

<p>評価する点</p>	<p>現役合格者の割合が多い【1年生】。授業を通じた学習経験において「学生が自分の考えや研究を発表する」「授業中に学生同士が議論をする」機会が多い【上級生】。授業内外の学習状況において「授業中居眠りをした」割合が少ない【1年生】。入学後の能力の変化において、「批判的に考える能力」「異文化の人々に関する知識」「地域社会が直面する問題を理解する能力」が増えたという回答が多い【1年生】【上級生】。入学後の能力の変化において、「国民が直面する問題を理解する能力」「文章表現の能力」「グローバルな問題の理解」が増えたという回答が多い【上級生】。</p>
<p>課題と考える点              (3点以上)</p>	<p>①大学への適応感において、「大学の学生向けサービスを上手に利用する」「効果的に学習する技能を習得する」「大学が求める水準に答えて学習する」「時間を効果的に使う」「他の学生と友情を深める」機会が少ない【上級生】。</p> <p>②大学生生活の充実感において、「大学生活は充実している」と回答した割合が低い。【1年生】【上級生】。</p> <p>③大学教育への満足度において、「将来の仕事と授業の結びつき」「他の学生と話をする機会」「大学の中での学生同士の一体感」が低い。【上級生】。</p>
<p>課題への              具体的な対応案</p>	<p>①②③については、本年度から試験的に実施している「昼休みの法文族」（法文学部教職員現役 OBOG らで2週間に1回オンラインで集まり、法文学部の可能性や課題、今後の取り組みについて議論する場）において関連したテーマを議論し既に改善策も検討している。また、本活動を通していくつかのプロジェクト（法文学部 HP にある「活躍する卒業生・在校生」欄で活躍する現役生や OBOG のインタビュー記事を掲載し、将来の仕事と授業との関連性を紹介したり、教員と学生、大学院生等がよりフラットにつながり研究や教育について議論できる場の創造）にも既に着手している。</p>

<p>昨年度挙げた 改善・対応策の 進捗状況</p>	<p>①②③は継続して実施中である。</p>
<p>コロナウイルス 感染症対応に関 する本学・各部 局の取組との関 連に影響すると 思われる回答と その内容</p>	<p>「大学への適応感」や「大学教育への満足度」「大学生生活の充実感」の低さは、コロナウイルス感染拡大に伴う授業の遠隔化との関連性が大きいと考えられる。また、授業を通じた学習経験において「実験、実習、フィールドワークなどを実施し、学生が体験的に学ぶ」機会が少ないことも同様だと言える。</p>



**教育学部・  
教育学研究科**

はじめに

本年度、教育改善委員会では、新型コロナウイルス感染症対応2年目を迎えての授業改善の視点を「ハイブリッド教育」と「SDを土台としたFD活動」の2点に定めた。双方とも、遠隔授業の導入を経験して見えてきた課題として設定したものである。

「ハイブリッド教育」は対面授業と遠隔授業を組み合わせることで授業方針を立てるものであり、昨年度前期に取り組んだ緊急対応としての遠隔授業だけでなく、積極的に学習管理システム manaba や Web 会議システム Zoom、YouTube 等を活用して授業改善を行うことを目指した。昨年度から実施している授業紹介では、遠隔授業の難しさだけでなく、有効性や可能性への理解も深めており、対面授業との組み合わせを行う上での工夫として参考になる知見が紹介された(2章)。今後の課題としては、コロナ対応の中での成績評価をめぐる課題の精査があると思われる。単に試験がレポートになったなどの実施形態の変化だけでなく、manaba を活用したポートフォリオ評価の割合が増加したといった評価自体の変更・修正などについても検討していきたいと考えている。

学生の授業アンケートでは、昨年度「授業形態」の項を加えたが、ハイブリッド教育においては多様な授業形態が取られたことから、本年度は、教員が予め授業形態について分類することとした(1章)。これはアンケートの分析上必要な手続きであったが、ハイフレックス型(対面と遠隔の同時開催)なども含めると、今後は分類がより煩雑になることも考えられる。ハイブリッド教育における授業アンケートのあり方について再検討が必要だといえよう。

2つめの「SDを土台としたFD活動」については、「教職員が共に考える大学教育の意義～新型コロナウイルス感染症への対応を通して」と題してFD講演会を実施した(4章)。これまでの教育学部の教育改善活動は、主として「授業」のみに向けられてきたが、新型コロナウイルスの危機対応において、全教職員が大学教育のあり方について考え、授業のみならず、新入生へのオリエンテーション、教育実習や体験活動、進路相談、卒論指導などの各方面における教育改善に取り組むことになった。この経験を活かすことを今回のFD講演会のテーマとした。

岡山大学の田中岳教授をお招きしての対談では、現在の国立大学法人の抱える問題が具体的に見えてきた。それは、組織としての大学が内包している職域間・職位間の格差やコミュニケーション不全とどのように向き合うか、それは学問の自由を担う大学の社会的使命を果たす上で不可避であり、学生教育にとって決定的要件であるということである。また、この講演会では、リレートーク「教員と職員の協働のための課題」を実施したが、グラフィックレコーディングを導入したことで楽しい企画となった。ファシリテーションの有効性を実感することができ、参加者からも好評を得た。

本年度は、学生FD委員会も充実した活動を行った(3章)。例年参加している学生FDサミットは今年も不開催であったが、現状の課題を精査し何ができるかを考えようという認識が委員の間で共有された。特に3年生が中心となって、学生へのアンケートを実施した結果、100人を超える回答が集まった。また、シンポジウムでは、コロナ下の学生と教員・大学の連絡体制の課題や、学生からみたアクティブラーニングの利点などについて論議が深まった。

大学院については、教育学研究科教育実践総合専攻が最終年度となるため、前期にアンケートを実施して課題に対応するよう心がけた(6章)。また、昨年度、院生からの要望に応じて導入したプリンターは、修士論文作成に活用された。

年度末には、初めての試みとして、教育改善セミナーを開催した(5章)。2部構成の企画を立て、前半は附属学校園との共同研究を授業改善に活かすことをテーマとしたラウンドテーブル、後半は令和2年度鹿児島大学ベストティーチャー賞を受賞した中島友樹先生に講演をお願いした。教育学部の豊富な経験・知見を再確認することができ、今後のFDに活かす展望が開けたと考えている。

令和3年度専任教員のFD参加率(回答様式)

部局名( 教育学部 )

合計参加率	100 % (専任教員 82 名中 82 名参加)	
企画別参加率	前期授業アンケート	100 % (専任教員 82 名中 82 名参加)
	後期授業アンケート	93 % (専任教員 82 名中 76 名参加)
	前後期授業紹介	26 % (専任教員 82 名中 21 名参加)
	教育学部FD講演会	23 % (専任教員 82 名中 19 名参加)
	学生FD委員会FDシンポジウム	6 % (専任教員 82 名中 5 名参加)
	教育改善セミナー	35 % (専任教員 82 名中 29 名参加)
備考	FD講演会には、他に、事務部9名、附属学校・他学部15名の参加があった。 教育改善セミナーには、教員29名の他に、事務部4名、附属学校園13名、他学部1名の参加があった。	

## 目次

- 1章 授業アンケート回答の分析
- 2章 令和3年度教育学部授業紹介報告
- 3章 教育学部学生FD委員会の活動
- 4章 令和3年度鹿児島大学教育学部教育改善委員会FD講演会
- 5章 令和3年度鹿児島大学教育学部教育改善委員会教育改善セミナー
- 6章 令和3年度教育学研究科教育実践総合専攻「教育改善アンケート」調査  
附 大学IRコンソーシアム学生調査結果（令和3年度実施分）の分析について

### 1章 授業アンケート回答の分析

#### 1. アンケート実施方法

令和3年度前後期の授業アンケートを下記の要領で実施した。

- 実施時期：前期 令和3年7月12日（月）～8月11日（水）  
後期 令和4年1月17日（月）～2月4日（金）
- 実施科目：事前調査で各教員が開講する授業科目から1つ以上を指定。調査では主に用いた授業形態（(a)リアルタイム配信授業、(b)オンデマンド配信授業、(c)講義資料・課題提示による授業、(d)対面授業から1つ）についても回答を求めた。回答がない場合、履修者数が多い科目1つを指定した。
- 実施手段：manabaによるオンライン回答
- 質問項目：Q1～Q11の11項目。Q1,11以外は4件法（1.そう思う、2.だいたいそう思う、3.あまりそう思わない、4.そう思わない）による回答。

- Q1. 【学習時間】この授業に関して、あなたは毎週平均してどのくらい学習をしましたか。予習、復習課題、掲示板を読むなど、すべてを合わせた時間で回答してください。
- Q2. 【主体性】あなたはこの授業に主体的に取り組むことができましたか。
- Q3. 【理解度】あなたはこの授業の内容を十分に理解することができましたか。
- Q4. 【シラバス内容】この授業はシラバスの内容に沿ったものでしたか。
- Q5. 【シラバス目標】シラバスに記載されている学習目標を達成できましたか。
- Q6. 【説明】教員の説明は分かりやすかったですか。
- Q7. 【興味関心】この授業は、あなたの興味・関心を高めるものでしたか。
- Q8. 【資料】資料（板書、スライド、講義動画、配布資料等）は授業の理解を助けるものでしたか。
- Q9. 【質問】この授業は質問しやすい雰囲気でしたか（メールやmanaba上での質問等を含む）。
- Q10. 【満足度】この授業は全般的にみて満足するものでしたか。
- Q11. 【自由記述】この授業の良かった点や感想等を自由に書いて下さい。

前後期の平均スコアを表1に示す。

表1 令和3年度授業アンケートの平均スコア

	前期	後期		前期	後期
Q2	1.59	1.67	Q7	1.56	1.58
Q3	1.71	1.74	Q8	1.44	1.48
Q4	1.41	1.42	Q9	1.63	1.70
Q5	1.70	1.72	Q10	1.51	1.53
Q6	1.48	1.51			

- フィードバック：担当教員によるアンケート結果についての振り返りをmanabaで公開した。

#### 2. 実施状況

令和3年度の授業アンケートと教員によるフィードバックの実施状況を表2に示す。後期の回答率が前期にくらべて低下している。この傾向は昨年度も同様であった。これは後期のアンケート実施期間が年度末の慌ただしい時期と重なることが主な原因として挙げられるが、アンケートの回答

締め切り日が影響した可能性もある。多くの授業で、最終回に授業アンケートを周知あるいは、授業内に時間を設けてアンケートの回答をさせているが、後期は一部の授業の最終回前にアンケートを締め切らざるをえず、回答できなかった学生が一定数いた可能性がある。来年度以降対策を講ずることで、回答率の改善が期待できる。

また、教員によるフィードバックは、昨年度前期は半数近くで実施されたが、その後実施率が低迷している。フィードバックの重要性については論をまたないが、実施率の低迷は授業アンケート回答率低下にもつながりかねないため、来年度以降いっそう周知を徹底する必要がある。

表2 授業アンケートとフィードバックの実施状況

	R3前期	R3後期	R2前期	R2後期
実施科目数 <sup>a</sup>	94	77	99	86
履修登録者数	2663	3335	3490	2955
回答者数	1435	1149	1825	1180
回答率	53.9%	34.5%	52.3%	39.9%
フィードバック数	31	— <sup>b</sup>	47	22
実施率	33%	— <sup>b</sup>	47%	26%

<sup>a</sup> 入学年度によって名称が異なるなど実質的な同一科目を含む

<sup>b</sup> 本稿執筆段階では未実施

### 3. 結果

#### (1) 平均スコアの傾向と推移

平成30年度前期を基準としたときの各アンケート項目の全授業平均スコアの推移を図1に示す。なお、結果をみる際は、アンケートの選択肢を先述の通り設定したため、スコアが低いほど評価が高いことに注意されたい。スコアの変動が比較的小さいA群（主体性、説明、興味関心、資料、満足度）と大きく変化したB群（シラバス内容、シラバス目標、質問）に分けることができ、以下各群の傾向を概説する。

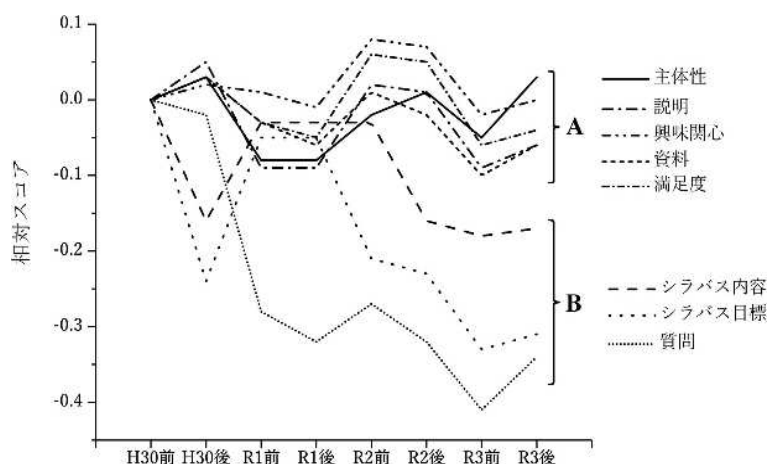
##### (i) A群の傾向

図1からA群のスコアは互いによく似た挙動を示すことが見て取れる。平成30年度から改善傾向にあったが、遠隔授業が開始された令和2年度前期に悪化した。しかし、今年度前期には再びコロナ禍前の水準にまで回復している。これは多くの授業が対面形式に戻ったことや学生、教員が遠隔授業に慣れてきたためと考えられる。後期後半は新型コロナ感染の再拡大により多くの授業が急遽遠隔に切り替わるといったアクシデントがあったためスコアは全般的に悪化したものの、「主体性」以外の項目については悪化の度合いは小さい。

##### (ii) B群の傾向

B群のスコアは平成30年度からいずれも大きく改善している。シラバス内容、シラバス目標は昨年度にかけて大幅に改善し、その後もスコアを維持している様子がわかる。近年のシラバスの実質化についての取り組みが一定の成果として現れたといえる。また、質問のしやすさはここ数年で最も大きな改善がみられた項目であり、多くの授業で質問をしやすい雰囲気が醸成されつつあると考えられる。また、本項目は今年度後期につい

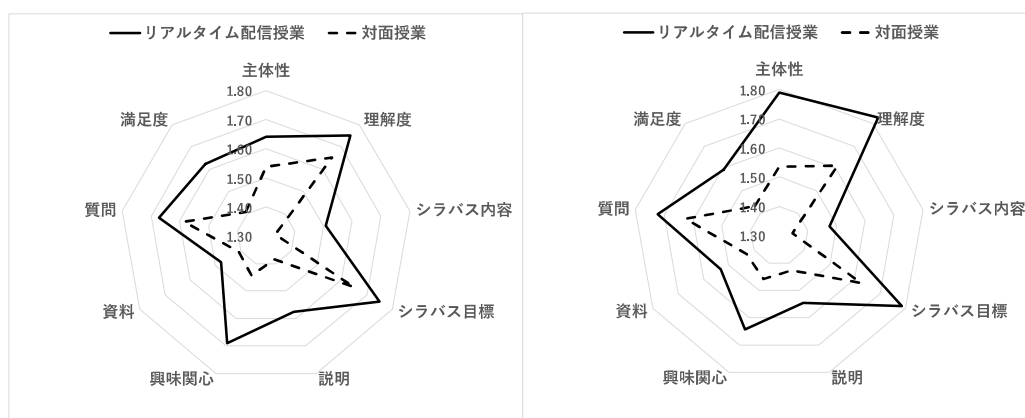
図1 平成30年度前期を基準とした各アンケート項目の平均スコアの推移



ては幾分悪化したものの、コロナ禍にあっても良好なスコアを維持していたことは特筆すべきである。授業紹介では、「対面授業ではほとんど質問がでなかったが、遠隔授業では Zoom の chat 機能等で質問がでるようになった」といった例も報告されており、質問のしやすさにおいては必ずしも遠隔が不利ではないのかもしれない。

## (2) 授業形態ごとの比較

授業形態ごとにスコアの集計を行った。ここでいう「授業形態」は、授業で主に用いた形態1つを指し、ブレンド授業や、後期後半に遠隔に切り替わった授業もあるため、評価には注意が必要である。図2に前後期の遠隔リアルタイムと対面授業のスコアの比較を示した。なお、遠隔オンデマンド、資料による授業は授業数が非常に少なく、平均値から傾向を読み取ることが難しいため除外した。すべての項目で対面の方が良いスコアであることがわかる。とりわけ主体性、理解度、興味関心といった項目はスコアの差が大きく、遠隔授業では十分な配慮が必要である。



次に授業形態ごとの授業外学習時間の比較を図3に示す。リアルタイム配信授業では後期でやや学習時間が減ったのに対し、対面授業ではやや増加しているなどの違いが見られたが、授業形態による差はそれほど大きくない。また、授業外学習時間が「1時間以下」と著しく不足している層が2~4割に上り、2時間に満たない層まで含めると6~8割にも達することが浮き彫りとなった。コロナ収束後はサークル活動やアルバイトといった様々な活動が本格的に再開し、授業外の学習時間はさらに減少することも懸念される。引き続き授業外学習時間の確保を呼びかけるとともに、授業内においても適宜復習を盛り込むなど、こうした学生へのフォローが必要であろう。

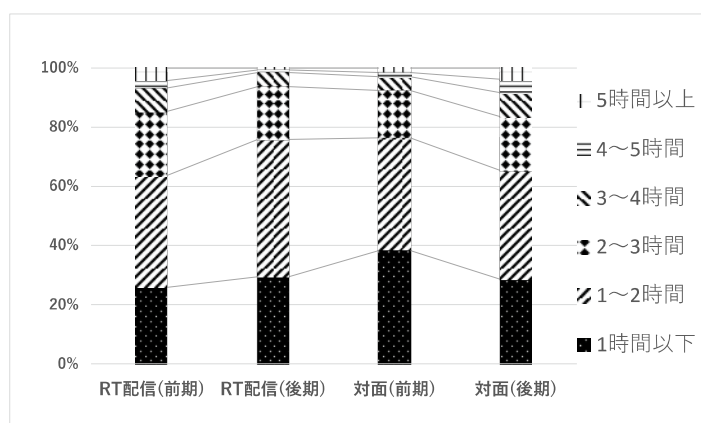


図3 授業外学習時間の比較。RTはリアルタイムを表す。

## 2章 令和3年度教育学部授業紹介報告

### 1. 授業紹介の実施計画

#### (1) 授業紹介の目的と枠組み

「鹿児島大学ファカルティ・ディベロップメントに関する指針」では、FDを「大学、部局等、そして教員が、本学の教育理念を実現するために、カリキュラム及び授業の内容や方法を開発・改善することにより、教育の質の向上を図るとともに、学生支援を行う自発的な取組を指す」と定義付けられている。また「教員の責務」として、担当する授業方法や運営方法等の改善を自発的に行うことが求められている。

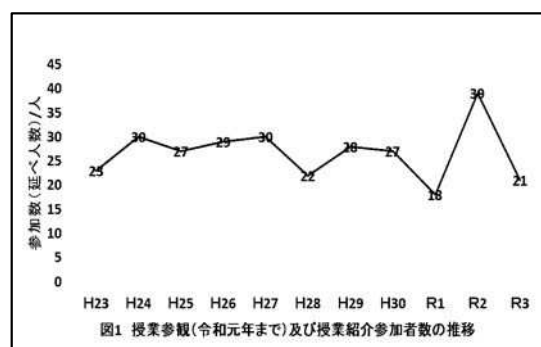
本学部の教育改善委員会では、これらの目的を実現するために、例年「教員相互による授業参観」を実施してきたが、新型コロナウイルス感染拡大により、昨年度に引き続き本年度も「授業紹介」を実施した。以下、その実施状況等について紹介する。

## (2) 授業紹介の実施

教授会での周知を図った後、前期7月30日(金)～8月25日(水)、後期1月19日(水)～2月4日(金)の期間に実施した。教育学部専任・特任教員が担当する教育学部開講の授業科目及び教育学研究科・教職大学院の授業科目から、各教員が自身の担当科目1科目を選択し、「授業準備」「授業運営」「成績評価」「授業時間外学習の支援」について、実施方法・工夫・課題等の記入及び提出を求めた。

## 2. 授業紹介の実施状況

2回の授業紹介は、教育学部教員から報告いただいた。報告件数は、延べで前期14件、後期7件の合計21件である。今年度は新型コロナウイルス感染第4波・第5波・第6波と感染者の増加が繰り返された。先生方はその都度授業方法を臨機応変に変更せざるを得ず、その対応等で忙殺されている中でのご報告であった。深謝したい。



## 3. 授業紹介における記述

昨年度は、遠隔ライブ中心の授業形態であったが、今年度は「遠隔+対面」「対面のみ」という授業形態も増加した。以下、各授業の工夫した点などについて、前期回答の一部を抜粋し紹介する。なお、紙面の関係上、紹介できなかったその他の回答及び後期分の回答については、教授会資料等を参照されたい。

### (1) 授業準備

#### ① manabaの活用、資料の事前提供

- ・授業前に、manabaのコースニュースで次回の手定と前時の振り返りを示すことで、受講への動機づけを行うようにした。
- ・講義と連動した全授業のノートを、講義の初日までにmanabaのコンテンツとして受講生へ提供している。
- ・指導略案作成のための、教科書会社提供の年間指導計画作成資料や、附属学校の公開研究会で提供された指導案などもコンテンツとして提供している。
- ・代用附属学校の研究公開で配布された指導案や各都道府県教育委員会がインターネット上で公開している指導案を事前に確認し、学生にとってより参考になるものを優先して紹介した。

#### ② 授業方法(遠隔、対面)を考慮した授業準備

- ・授業では、中学校及び高等学校の数学科教科書のコピーを利用する必要があった。新型コロナウイルスの影響によって、突然、遠隔授業になる可能性もあったため、前期授業の最初のあたりで、前期で利用する予定の教科書のコピーをすべて配布した。結果としては、前期のすべての授業を対面形式で実施することができたが、前期授業の見通しを受講生にもってもらおう上でも、よかったように感じている。



- ・対面授業に先立って、授業動画を視聴させ、1人1つ以上の質問を提出させた。また、コロナの影響で対面授業に参加しにくい者が居ることを考慮し、動画を視聴し質問提出までを求め、対面授業の参加は任意とした。

## (2) 授業運営

### ① 授業方法の選択

- ・対面授業を教室で受講するか、Zoomによる遠隔授業を受講するかは受講生に選択させた。実際には教室で行う授業をZoomで中継する形を採用した。
- ・教室に対して受講人数が多かったことから、3分割したグループに分け、それぞれ別時間に授業を行った。例年のように大人数であれば、他の受講生から刺激を受けたり話し合い活動をおして自身の作品を見直すことができるのだが、小人数になったことで、自分のなかで深く考えて進めているように感じた。小人数にしたことで教員が一人ひとりの指導に時間をかけることができたためか、例年より作品の質が上がっていることに驚いた。
- ・授業形態としては、第1回：遠隔ライブ (Zoom)、第2回：課題提示型、第3回～第9回：遠隔ライブ (Zoom)、第10回～第15回：遠隔と対面 (ハイブリット形式) で行った。遠隔授業は授業内容の提示 (いろいろな資料を簡単に共有できる) ではとても有効であったが、話し合い活動などアクティブラーニングの取り入れに課題がみられた。

### ② 学生の反応を活かす授業

- ・Zoomのコメント機能を多用している。また、スマホやタブレットではテキストでコメントが書けないので、それらの学生には「チャットで書いてね」と伝え、私がそれを適宜読み上げて共有している。
- ・授業時は対面式の利点を活用すべく、学生との対話の中で講義が進行するよう心がけた。

## (3) 成績評価

### ① manabaの活用

- ・毎回授業終了後に、manaにて自動採点の小テストを実施。特にレポートも求める。授業中の態度20%、小テスト、レポート40%、期末試験40%である。
- ・レポートは、WordをPDF化しないでmanabaに提出させています。Word形式のレポートは、ダウンロードせずに「表示」ボタンを押して表示することができるので非常に採点が楽である。
- ・各種の提出課題についてはmanaba上で公開し、各自の取組を客観的に考察できるようにした。これらを総合的に評価するようにした。

### ② 評価方法の工夫

- ・教室を美術館にみたと、作品タイトルや解説を書いたカードとともに作品展示をし、受講生全員が自由に鑑賞し合う時間を設けた。成績については、このカードと作品によって評価した。本来は一人ずつ前に出て発表する形式をとっていたが、この鑑賞方法に変更したことで、制作者は思いのたけをすべて吐き出し、また鑑賞者は作品を隅々までじっくりとみて積極的に質問するようになった。これによって、本人のなかで達成感が強くなったのではないかと感じた。

## (4) 授業時間外学習の支援

### ① 支援の工夫

- ・短歌実作へむけて、課した歌題と同様のテーマで作られた古典和歌を例示して参考にさせた。また提出された短歌に対して、教員側が添削および代案を提示することによって受講生各自の課題提出への意識を喚起した。
- ・対面授業ではすべての質問を扱えないことや対面授業に出席できない学生が居ることを考慮し、提出された質問すべてについて対面授業後にmanabaで回答を公開した。ただ、これについても対面授業にあまり出席していない学生は閲覧しておらず、工夫が必要であった。

### ② 今後の課題

- ・対面授業ではすべての質問を扱えないことや対面授業に出席できない学生が居ることを考慮し、提出された質問すべてについて対面授業後にmanabaで回答を公開した。ただ、これについても対面授業にあまり出席していない学生は閲覧しておらず、工夫が必要であった。

- ・以前であれば、履修者は模擬授業の準備・練習をいわゆる「空き教室」でしていたようだが、（コロナ禍においてやむを得ないことではあるが）教室の開錠施錠が必要になり、その対応に難儀した。

#### 4. まとめ

昨年度に引き続き「授業紹介」の形式で、教員相互の情報交換を実施することで、冒頭に示したFDの目的を達成することができた。寄せられた情報は、いずれも有益なものばかりであった。そして、何よりも各教員がコロナの感染状況に応じて、様々な工夫を凝らしているという事実を共有できたことが大きい。今後も、状況に応じた情報交換を継続したい。

### 3章 教育学部学生FD委員会の活動

#### 1. 学生FD委員会の概要

学生FD委員会は、本学部の授業や教育の改善を目的としてFD活動を担う学生主体の組織で、各専修2名の委員から構成されている。FD委員会の具体的な活動として全国学生FDサミットへの参加や学部シンポジウムの企画・実施、ソフトボール大会の運営、履修支援等のピアサポート活動などを行っている。

今年度のFD委員会は、新型コロナウイルスの影響もあり、全国学生FDサミットの中止や大学祭規模縮小によるソフトボール大会の中止などと活動内容が制限されている中での活動となった。

#### 2. 各活動についてと振り返り

##### (1) FDシンポジウム

新型コロナウイルスの影響による新しい授業形態へ切り替わって2年目の年を迎えた今年度は、遠隔授業におけるアクティブラーニングに焦点をあて、「近年における、授業・連絡等の在り方について」というテーマを設定してシンポジウムを開催した。学生FD委員によって教育学部全学生を対象にアンケートを実施し、オンライン化された授業や連絡体制について、学生は日々どのような状況におかれているのか調査を行っている。シンポジウムでは、これらの調査結果をもとに、教員と学生がよりよい環境づくりを目指した意見交換を行った。以下は、アンケートの抜粋である。

#### 【学生FD委員会アンケートについての報告】

回答者：115名（1年生21名、2年生38名、3年生41名、4年生15名）

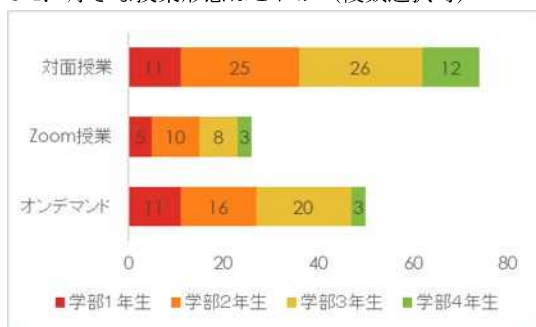
##### 1. 現在の対面/オンライン授業の割合



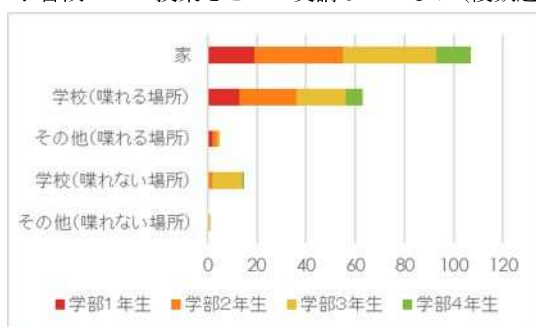
##### 2-1. 現在の対面授業の満足度（5段階評価） 2-2. 現在のオンライン授業の満足度（5段階評価）



3-1. 好きな授業形態はどれか（複数選択可）

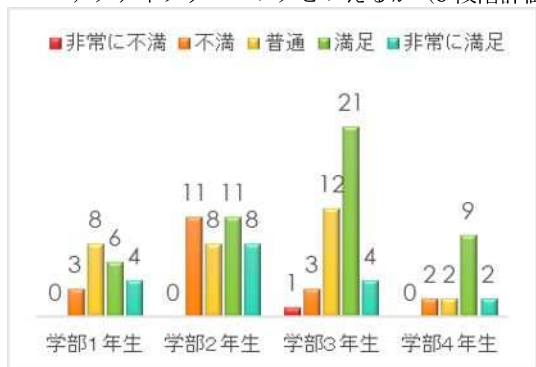


4. 普段 Zoom 授業をどこで受講しているか（複数選



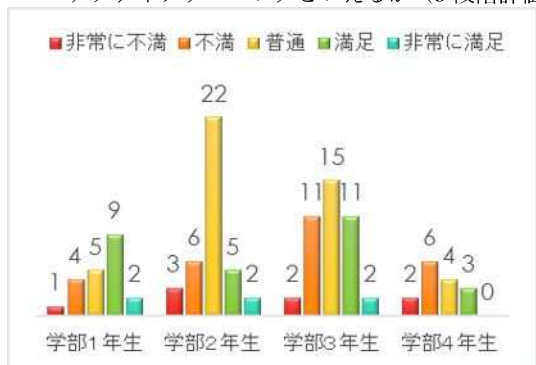
5-1. 現在の対面での授業内容は

アクティブラーニングといえるか（5段階評価）



5-2. 現在のオンラインでの授業内容は

アクティブラーニングといえるか（5段階評価）



3-2. 選択した理由を教えてください（任意回答）

計 71 件の回答 ○良い点 △悪い点 (学年)

【対面授業】

- リアルタイムで行われる授業形態の方が自分にあっているから (1,3)
- 対面授業は、オンラインより集中できるから (1,2,3,4)
- 授業の内容だけでなく、学ぶ場の雰囲気も感じることが出来るから (1)
- 人の顔が見えるから／孤立感がないから／対面でないと楽しくない (1,2,3)
- 学びに対して前向きになれる／気持ちが入りやすい (2,3)
- 授業内容が理解しやすいし、他の人とも直接交流できるから／意見交換がしやすい (1,2,3,4)
- 先生や友人に直接質問しやすい (1,2,3,4)
- より深い学びを得られると感じたから／専門科目は対面の方が学びが深い (2,3)
- インターネット環境を心配する必要がない (1,2)
- 実技ができるから (4)
- 数学のような理論的な授業は細かい計算過程や教授のぼそっと放つ一言などが非常に有用なことが多いために、これらは対面がよい (2)

【Zoom 授業】

- 一人で学習する分集中力が上がる (2)
  - △対面授業に対して講義形式になることが殆どで、アクティブな学びができていないような気がする (3)
  - △ディスカッション等を行う形式であれば対面が適切である
  - △知識を淡々と述べるようなものについてはオンデマンドで十分ではないか (2)
- 【オンデマンド型授業】
- 学習の時間を長くとることができ、本来授業する 90 分に加え思う存分勉強することができる (3)
  - 気になったところ、聞き取れなかったところを何回でも見られる (1,2,3)
  - レポートを書く際にじっくり見返したり止めたり出来るから (1,2,3)
  - 急な用事にも対応することができる／好きな時間に受けられる (就活との関連) (1,2,3,4)
  - パソコンでノートを取ったり、資料を見たり、調べ物をしたりしやすく、頭に入りやすい (2)
  - 先生側の授業の準備が整っており、効率よく勉強できる (2)
  - △特にオンデマンドは、教員からの直接の授業ではなく、自分が学びを得たという実感が薄くなるため (3)

【オンライン授業 (Zoom、オンデマンド) 両方に関わるもの】

- 体調が悪くても欠席せずに自分の体調に合わせて受講することができる (2,3)
- 外出するのが怖いという気分になったときでも欠席せずに授業を受けることができる (4)
- 自宅でも受講できるため、忘れ物が起こり得ないことはとてもありがたい (3)
- 遠隔でも学べることは多い (3)
- △オンライン授業は、学びの幅が狭いから (4)
- △オンラインだと、自分の勉強のやる気が中々起きない (2,3)

6. あなたが考えるアクティブラーニングについて教えてください（任意回答） 計 40 件の回答

< 1 年生 >

- ・グループワーク／グループワークやディベート／生徒同士での話し合い
- ・グループ活動などで、自分の意見を積極的に他者と交換すること
- ・自分の考えを周りの人と共有することで深め、さらに意見を出し合うことで自分になかったものを得られること
- ・生徒自身が考察し、授業内容の理解に近づく活動
- ・発言回数が多い

< 2 年生 >

- ・Zoom のグループ活動であっても活発に話し合いを行うこと
- ・教師と生徒が、課題目標に対しての活動を通して実感を伴う学びを得ること
- ・問題や他の人と対話することを通して考えが深められる授業
- ・主体的に、自らの考えを話し合い、他人の意見を聞いて深めること
- ・他人と話して互いの意見を交換して自分も相手も考えを深めること
- ・教授が一方的に話すだけではない授業
- ・学生同士の交流が活発であること
- ・生徒同士で話し合い、グループで発表するなど
- ・全員で1つの授業を作り上げる授業
- ・自分で考え、アウトプットする機会があること
- ・本人が主体的に学び、深めようとする

< 3 年生 >

- ・教師と生徒の相互的な活動がある。授業中に話したり、考えたりして、疑問を解決する時間がある
- ・意見交換／学生同士の話が多い／他の人と良く話す／話し合いが活発である状態
- ・活動的な学びという直訳から、学習者が主体となって学習に取り組むものである
- ・グループ等の皆が意見を述べ、それについてしっかり反応が得られる授業
- ・学生それぞれの意見から、テーマについて考えを深めることができる学習
- ・先生からの一方的な指導ではなく、受講生が主体的に学ぶこと／先生や受講生との会話がある授業
- ・思考を深く働かせる授業
- ・授業に積極的に参加する
- ・授業外でも科目の内容に何かしら触れる活動

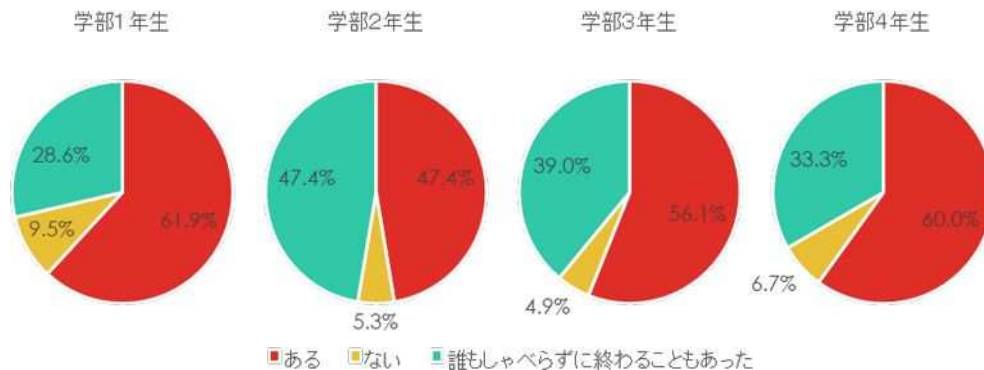
< 4 年生 >

- ・自分の意見を出したり他者の意見を共有したりする学習
- ・他の受講生と積極的に関わる
- ・生徒同士でも教師と生徒の間でのコミュニケーションでもいので、とにかく自分で言語化して相手がそれを理解できるかまた相手が言ったことを自分がちゃんと理解できているかということを確認できるような授業

◇アクティブラーニングとは異なるが、以下のコメントもあった

- ・対面でも淡々とただ講義資料を書き写す教授もいれば、細かく丁寧に解説してくれる教授もあり、熱量の差を非常に感じる (2)

7. Zoom のブレイクアウトで司会決めや喋り出しに困ったことはあるか



8. Zoom の授業で困ったことや要望などはありますか（任意回答） 計 33 件の回答

【ブレイクアウトルーム／話し合い活動】

- ・Zoom で知らない人との話し合いが主になる授業は辞めてほしい。会ったこともない人と違う環境下で話し合うのは、かなり細かく題材や話し合いの進め方、工夫がない限り、難しいしあまり学びはないと感じる。生徒に投げっぱなしの授業に感じる (3)
- ・Zoom のブレイクアウトルームの時間は、誰一人喋らなかつたり、挨拶だけして議論に参加しなかつたり、意見を述べても誰もコメントしてくれなかつたりする／ブレイクアウトがうまくいかない (2,3)
- ・グループワークで喋りづらい話を切り出せない／アイスブレイクの時間をもうけてほしい (1,2)
- ・挨拶をしても返事が返ってこない (2)
- ・司会は先生が決めて下さると助かる (2)
- ・人によりけり／誰も話さないこと／話し出すタイミングが分からないこと (1,3)
- ・発言しづらい／ブレイクアウトではじめに発言した人に責任がのしかかりやすい (2,3)
- ・勇気を出して司会役を買って出ても話し合いに参加してくれない人、話が途切れるとすぐにカメラとマイクをオフにする人がいるととてもやるせない気持ちになる (1)
- ・発表者 1 人だけに顔出しを求めるのは恥ずかしい (3)

【授業全般について】

- ・Zoomの授業だからといって先生の方が一方的に話し続ける授業では全く理解が進まない。対面授業でないなら、なおさら生徒の間での話し合いもできないので全く理解ができない状態が続く。そのようなことになると学習の遅れを非常にとってしまうのでやめてほしい。ブレイクアウトルームを活用したり講義中でも気軽に話せるような雰囲気作りをした上で授業をしてほしい (2)
- ・毎回の授業で課題が出るのは負担が大きい。授業者全体で、課題の量を共有し合ったうえで分散させて課してほしい (3)

- ・スライド中心の授業ならオンデマンドで十分。わざわざリアルタイムで行う必要性を感じない (2)
- ・英語だと特に指示が分からない (1)

【インターネット環境や配布資料等について】

- ・こちらの回線落ちで、再度入りなおす際、先生の勘違いで遅刻扱いになったり、理解不足で欠席扱いにされたり、出席確認の機会を失ったりした (3)
- ・インターネット環境やパソコンの不調で上手く受講できないことがある (1,2)
- ・大量の資料を自分でコピーしなければならない (2)
- ・スライド資料が配布されない (2)

【その他】

- ・対面とオンラインが前後する時の移動/場所の確保 (2)
- ・授業前の連絡等が上手くいかない時がある/授業内外の周囲との連絡や協力がしづらい (2)
- ・話せない環境にいるとき (3)
- ・声を出せない状況で授業に参加する人がいること (3)

12. 課題について困ったことや要望などがありますか (任意回答)

<1年生>

- ・論文を書く課題や発表を目標にした課題などの比較的重たい内容の課題がそれぞれの授業で出され、重なること
- ・多すぎて、困っている (1,2,3 自分の勉強時間が取りにくい、多すぎる講義がある)

<2年生>

- ・上の先輩との繋がり等がないので、わからなくなった時に誰にも相談できず困ることがある
- ・課題の提出時間を 0:00 と設定されると一日分時間を勘違いしてしまう

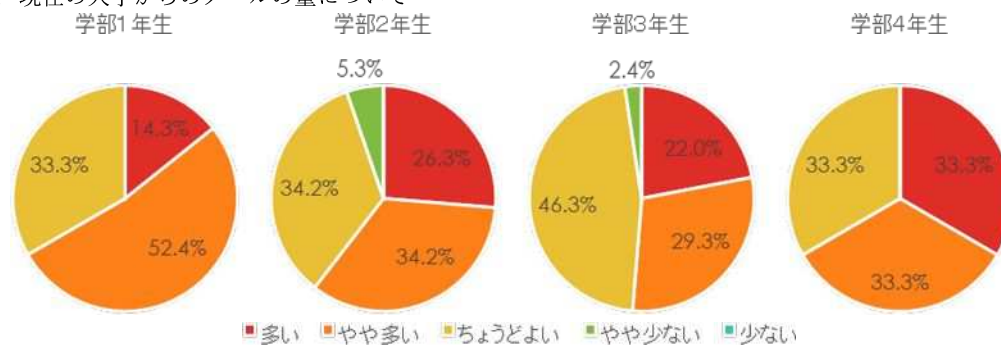
<3年生>

- ・授業当日に課題を締め切られると、バイトや用事がある際に、どうしても提出できないので、せめて授業後の 24 時間後以降にして欲しい (1,3 次の日まで提出など)
- ・文献を読んでレポートを作成しなさいという課題では何を書けば良いか分からなかった (2 課題の説明が少ない)
- ・レポート等を共有する際は、せめて名前が見えない形で共有して欲しい
- ・授業全体で、課題の量を共有し合った上で分散させて課してほしい
- ・フィードバックが欲しい

<4年生>

- ・生徒同士での話し合いができない期間が続くと、分からない課題があると自分で調べてやるしかないが、それでは課題の解決が非常に難しい

13. 現在の大学からのメールの量について



14. メールに関して要望がありますか (任意回答)

<1年生>

- ・就職関係のメールや他の学年対象など関係があまりないものが届くため、メールが多いように感じる (1,2,3)

<2年生>

- ・マナバの個別指導でのやりとりをやめてほしい。重要な書類に不備があった際、メールとマナバが混雑してしまい見逃してしまうことが多々あった
- ・自分に関係のないあるいは興味のないものは外せるようにしてほしい (システムの的に難しいとは思うが)。希望する配信、重要度が分かるように、manaba の通知が埋まってしまいうためまとめてほしい (1,2,3,4)

< 3年生 >

・就職関係のメールは、その分野に興味がある人が随時 manaba を確認すればいいと思うので、導入に必要なかもしれないが、正直あまり必要ないと思う。1年間で大学からのメールが3,000件程溜まって、本当に必要なメールを見逃してしまったり、埋もれてしまったりしてしまう。

< 4年生 >

・メールの重要度が明確に分かるような工夫をしてほしい  
・以前 manaba 上で該当学生だけでなく全体に向けて何度も情報を発信していた教員がおり、とても迷惑でした。実習やその補講の伝達事項、各学科のお知らせなどは今一度対象学生を確認してから発信してもらいたいです

## 15. その他、教育学部に望むこと、期待することなどがありますか（任意回答）

< 1年生 >

・4年間で各種類+第二免許の教員免許を取ることのできる時間割プランや、先輩方の4年間の時間割例などを紹介して欲しい

< 2年生 >

・対面授業を増やしてほしい。実習に行った附属中学校で生徒たちが対面で話し合い活動も行っているのを見て、なぜ大学ではこれができないのか疑問に思った

・14.メールに関しての要望でも述べたように、重要なことや書類等は担当教員に任せるだけでなく個人に電話等で連絡するなどを行って頂きたい

・実習系の連絡はなるべく早くしてほしい。2週間の県外移動の自粛やアルバイトの制限がある中で、2週間後の予定は決定していたりする

・親睦を深められる機会が欲しい

< 3年生 >

・授業中の感染対策が甘いと感じる。教壇の亚克力板を外したり鼻出しマスクであったり意識が低いと感じるため、感染対策強化を望む。そうでないと対面授業を受ける気になれないため。

・教育現場の良い部分だけ見せようとしすぎている。悪い部分もあることはしっかりと紹介しないと、先生を目指す人たちが知らない情報も現場で気づいては遅い。

・授業料免除。介護体験と授業がかぶったときに公欠を使えるか代替課題をもらえるようにしてほしい。授業料を払っているのに不利益だと思う。

・授業を監査の人などに見に来て欲しい。理不尽な程に単位認定させて貰えない授業もあると耳にした。

・知識を知ること大事だが、指導案の書き方や模擬授業を行うなど実践的な学習を増やしてほしい

・集中講義の日程をシラバスにも書いて欲しい（もう少し早めに連絡できないのか）

・建物をもう少し綺麗にして欲しい。音楽美術棟とか。

< 4年生 >

・教育学部以外の学部で教員免許を取得すると教育学部で学ぶこと何かの差があるかと言われれば正直に言ってそこまで思いつかない。教員免許を複数取るのは魅力的ではあるものの、他学部の学生はその代わりに専門性を非常に高めている。であれば教育学部は教育に関する授業の内容をもっと充実させるべきではないか。教員免許取得に必要な科目だけでなく、より実践に即した内容や教師の本質を問うような内容、また最新の教育時事を取り上げて議論するような内容を行っても良いのではないか。

・教室の清掃にもう少し力を入れてほしい

## (2) ピアサポート

昨年度に作成した新入生への履修支援冊子『履修登録のすすめ』を来年度の教育課程に合わせて修正し、より分かりやすい内容へと改善した。また、4月に新入生だけでなく2年生以上も相談できる窓口をオンライン上に開設し、各学科のFD委員が実習に対する相談や履修に関する質問を受け付けられるような体制を整えた。

## 3. 今年度の成果と今後の課題

教育学部全体がコロナ禍における授業方法や連絡体制に慣れてきたなかで、新たな課題が多く見えてきた。シンポジウムでは学生側に立つことで初めて知る問題点も多くあり、まだオンライン化が続くと予想されるなかで、より良い学習環境づくりのために教職員と学生双方が工夫し努力しなければならないことがあるのではないかと感じた。また、学生FD委員会の在り方については、積極的に参加する学生の偏りが生じてしまい、学生が主体的に取り組むための活動方法を今後検討する必要がある。

## 4章 令和3年度鹿児島大学教育学部教育改善委員会 FD 講演会

### 1. 講演会について

開催目的 従来、教育学部の教育改善活動は、として「授業改善」に向けられてきた。しかし、新型コロナウイルス蔓延の危機対応において、全教職員が大学教育の在り方について考え、授業のみならず、新入生へのオリエンテーション、教育実習や体験活動、進路相談、卒論指導などの各方面における教育改善に取り組むことになった。これらを通して「SDを土台として初めて FD が実現する」ということを学ぶ経験となったといえる。しかし、これまで教職員全体が行う SD 活動は行われていない。そこで教員と職員が連携して取り組む SD 活動の視点について考えることを目的とし開催する。

テーマ 「教職員が共に考える大学教育の意義～新型コロナウイルス感染症への対応を通して」

講演者 岡山大学 全学教育・学生支援機構 田中岳教授

グラフィックレコーディング 関美穂子さん

開催日時 2021年9月29日 13:30 - 15:30

会場 Zoomによるリモート開催（発信：教育実践総合センター1階多目的室ほか）

出席者 43名（うち教育学部教員19名、教育学部事務職員9名含む）

会の流れ あいさつ（教育学部長 有倉巳幸先生）

講演と対談「学生中心の大学教育を実現するチームづくり」

田中岳教授＋前田晶子先生（教育改善委員会委員長）＋江頭大典総務係長

リレートーク「教員と職員の協働のための課題」

① 授業・教務 大淵貴之先生＋富山陽子教務係長

② 学生生活・教育実習 片岡美華先生＋本坊綾学生係長

③ 協働 清水香先生＋前田晶子先生

田中先生からのコメント

グラフィックレコード紹介

野村事務局長挨拶

武隈教育担当理事挨拶

本年度の教育改善委員会講演会は、新型コロナウイルス感染症対策を1年半行ってきて、教員と事務職員との協働が重要であると再認識したことから、SD・FDの融合を目指し、「新しい形」の研修会を行った。「新しい形」の1点目は対談形式を取り入れ、あたかもラジオ番組を聞いているような方法での講演・研修会としたことである。また、リレートークを行うことで教員と事務職員との協働作業を講演会上で行ったことも画期的だといえる。実際準備段階で打ち合わせの中で情報共有や新たな知見を得ることができた。2点目はグラフィックレコーディングという手法を取り入れたことである。リアルタイムでトーク内容がイラスト化、文字化されていき、まとめが視覚的に入り、要点が整理されたことも新鮮であった。以下、本講演会のまとめに変えて関さんのグラフィックレコードを掲載する。

2. 講演概要



**対談** 学生中心の大学教育を実現するチームづくり 岡山大学 田中岳教授

0:00:00~ 0:03:39~

① 田中さんがいた 京都精華大学のお話を聞かせてください! (0:10:00~)

② 新しい何かを始めた時 協力してもらうには? (0:21:00~)

Q-Links

みんなが実は普段から思っていることを実現した

状況は是言のが大事

上司は変わる。自分の志をみせろ。どう維持するか?

不遇の時こそ人間を試すところ

学生に平等に教える大学自身がそうあるべき

職員にも年10万円の個人研究費

大切なことは教職員合同で決める

教員と職員は平等!

同俸給(月給)

学生運動 自身の差別問題から始まった

心理的 安全のある 機能性 チーム

50年経っても変わらない現状

この言葉があるということは 教員と職員が交わっていないということ

私立は...一部は職員

国立は...抜本的な見直しが必要

意識改革から行動変容へ

手段

「教職協働」

協働しないと達成できない

大きな目標

があることが重要

歴史的背景もふまえて、単なるかけ声ではなく どう変わっていくか? 考えていきたい

複雑にからんでいる

鹿児島大学教育学部 FD講演会 2021.09.29 教職員が共に考える大学教育の意義 ~新型コロナウイルス感染症への対応を通して~

**講演** 学生中心の大学教育を実現するチームづくり 岡山大学 田中岳教授

0:31:00~

ただの「仲良し」ではない

クリエイティブになる

学生が学び

文立が前向きに生産的に作るチームへ

協働しないと達成できない

大きな目標

があることが重要

歴史的背景もふまえて、単なるかけ声ではなく どう変わっていくか? 考えていきたい

意識改革から行動変容へ

50年経っても変わらない現状

この言葉があるということは 教員と職員が交わっていないということ

私立は...一部は職員

国立は...抜本的な見直しが必要

手段

「教職協働」

心理的 安全のある 機能性 チーム

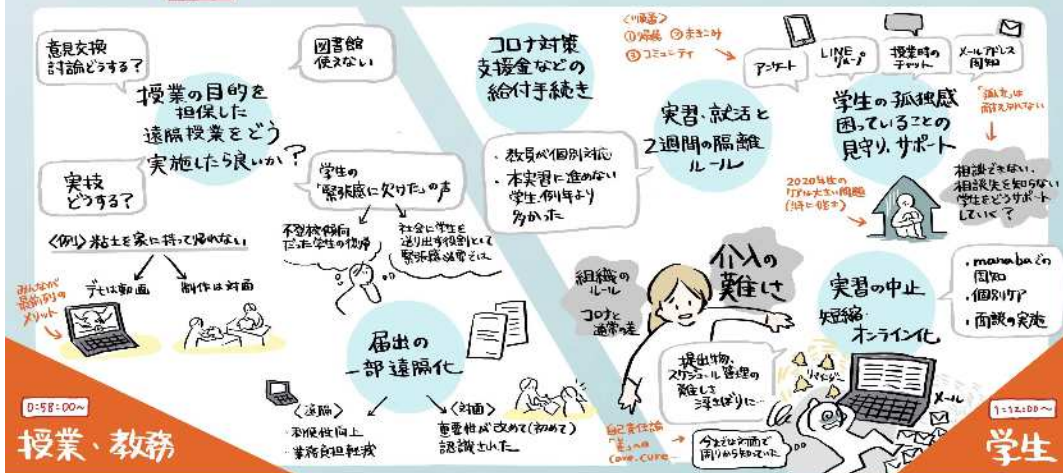
複雑にからんでいる

鹿児島大学教育学部 FD講演会 2021.09.29 教職員が共に考える大学教育の意義 ~新型コロナウイルス感染症への対応を通して~



# リレートーク 新型コロナウイルス感染症対策を通して考えたこと

0:54:00~



0:58:00~ 授業、教務

1:12:00~ 学生

鹿児島大学教育学部 FD講演会 2021.09.29 教職員が共に考える大学教育の意義 ~新型コロナウイルス感染症への対応を通して~ Graphics provided by 阿部文雄

# リレートーク 新型コロナウイルス感染症対策を通して考えたこと

教職員への回答 1人も来ませんでした

—アンケート—

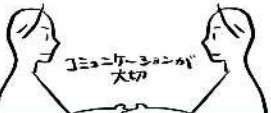
Q1. 新型コロナウイルスの流行で、働き方が良くなった点は何かですか?

- ・オンライン会議が広がり、遠隔地におられる方々とも会議、打ち合せも立ちやすくなりました。
- ・学会の会議がリモートなので、その場で資料を置いて提示したりできて効率的。対面でやってたと思うとソツとする。
- ・自分が発言しなくてよいオンライン会議は、リラックスして出席できるようになったのがよかった。
- ・会議等が対面とオンラインの区別で開催される。
- ・業務の効率化が進んだと感じることがある(会議の時間短縮など)。
- ・テレワークが選択肢として位置づけられたこと。
- ・オンラインの活用方法を知ることができた。

Q2. 新型コロナウイルスの流行で、働きが悪くなった点や困っていることは何かですか?

- ・先生方や学生さんと、やはり対面でお話ししたり、ご相談したりしたいこともありですが、そうした場が不足しているように思っています。
- ・まだ困ってなくて、困ったら困るので、進行中。コロナで大学閉鎖になっても自宅で仕事できるように、現在の、家用のpcを研究室と同様の作業ができるようにアプリ入れたりしている。とても大変。1ヶ月はかかりそう。
- ・画面を監視する時間が長すぎることが多くなった。視力が落ちてきている。
- ・教員の事務的仕事が増え、研究が後回しになったことがある。
- ・要件以外のコミュニケーションが取りにくいこと。
- ・世の中の状況によって日程や方法など急に変更になることが多く、何處も授業等予定を相みなおさなければならぬ点。
- ・人と人とが顔を合わせて話すことが少なくなることで雑談や笑顔も減り、人との間に壁を感じるようになったこと。
- ・教員同士顔を合わせる機会が全くなかったため、情報共有や相談などがしにくくなった。

1:31:00~ 協働



鹿児島大学教育学部 FD講演会 2021.09.29 教職員が共に考える大学教育の意義 ~新型コロナウイルス感染症への対応を通して~ Graphics provided by 阿部文雄

# リレートーク 新型コロナウイルス感染症対策を通して考えたこと

—アンケート—

Q3. 新型コロナウイルスの流行以前から、教育学部において改善すべきと感じてこられたことはありますか?

- ・個人的には、改善すべきと強く感じるまでの事項はございません。
- ・教員の働き方ではないが、学生の開始が安すぎる。良い学生が民間の時給の良いバイトに流れて、大学のバイトに集まらない。1000円くらいにしてほしい。
- ・会議時間が長すぎる。案の提案がなく、一からみんなで話し合うことが多かった。
- ・教員・職員の間での業務の共有し、課題を共に改善していく必要があると思います。
- ・流行の前夜、ということに特に浮かぶことはありません。
- ・これは教員がするべきなのだからと感じる依頼が多くなってきていること。
- ・細かい事務的仕事や実習の引率等が増え、研究に充てる時間が年々減ってきているように感じる。また、学生に対して過保護になってきていると感じる。

Q4. 今回のFD講演会は教員と職員の「協働」をテーマにしています。それぞれに聞いてみたいことや質問はありますか?

- ・事務の皆様には、いつも丁寧にご助言いただき、とてもありがたく思っている次第です。事務の方々の視点から、日頃の業務について、細かいことでもかまいませんので、教員に改善してもらいたいと感じておられることをうかがうことができれば、と思った次第です。
- ・教員に言われるか、されて嬉しかったことを知りたい。
- ・オンラインで模擬授業を実施されている先生方の具体的な取り組み。
- ・教員・研究機関ならではの良さ(または難しさ)を感じることはありますか?
- ・対面のコミュニケーションができればそれが一番だと思いますが、対面が難しい場合にさらなる「協働」のためにどのような形・方法が考えられるかについてご意見を聞きたくしたいと思います。
- ・教員も職員もそれぞれがプロフェッショナルであるべきだと思うのですが、職員の方が教員に求めていることが少し分からないので聞いてみたいです。また、拘束時間が決まっていない教員は時間の使い方が職員の方と少し違っていると思うのですが、質問などで電話や窓口に来てほしくない時間帯を教えてください。

1:31:00~ 協働

田中先生コメンテーター 1:41:00~ 頼田先生コメンテーター 1:49:00~ 野村専務局長挨拶 2:00:00~ 武隈教務長挨拶 2:03:00~

鹿児島大学教育学部 FD講演会 2021.09.29 教職員が共に考える大学教育の意義 ~新型コロナウイルス感染症への対応を通して~ Graphics provided by 阿部文雄

### 3. 参加者からの感想（一部抜粋）

- ◇ ドラレコは、表現されたものを見ることで、頭に入ってきたことが再確認できたこともよかったです。「敵とのコラボレーション」という本の紹介を頂き、まずは読んでみようと思いました。（教育学部）
- ◇ 教員として、事務系の方々に迷惑をかけないことから協働は生まれるような気がします。これからも教員として迷惑をかけないようにします。国の方では新総裁も決まりましたが、トップが何をしたいのかビジョンをしっかりと示したうえで、教員と職員が協働で、ブレーンとしてそれを具現化する積極的な提言や組織を主体的に作ってビジョンを具現化していく体制づくりが求められていますね。（教育学部）
- ◇ みんな仕事を改善したいとは思っているけど、言うとなら「あなたやって！」となるから黙りますよね。身近に、言ってしまうがために命をすり減らして仕事している人を知っているの、あぁはなりたくないとも思っています。（教育学部）
- ◇ 良かった点として、対談形式を視聴するので、気楽に参加でき、聞きやすかったです。また、グラフィックレコーディングは見るだけで楽しかったです。事務の方の話が聞けたのでよかったです。改善点として、事務の方々の緊張感がもう少し下がるとういと思いました。そして、教職ともに学生の学習環境を支援している、大学の研究力を維持しているという共通認識を深めたいと思いました。（教育学部）
- ◇ グラフィックレコーディングが実に見事でした。聞き取り調査でメモを取るの、あんな適確に記載できれば素晴らしいです。どういったトレーニングを積まれると、あのような芸当を習得できるのでしょうか？機会があれば、ご教示いただきたいと思いました。（教育学部）
- ◇ Zoomながら職員が登壇する初の試みは“新鮮”で、「教職員の協働」のきっかけになること間違いないと感じました。グラフィック・レコーディングに接したのも初めてで、こちらも配信の際に確認したいと思っています。（附属学校事務）
- ◇ 教職協働がうまくいかない原因について、昔は、権力的な部分が大きかったように感じますが、今は、教員も職員も業務量が増え、心身の余裕がなくなっていることも要因ではないかと考えています。私はありがたいことに、現在、教職協働できている感覚があります。こういった、人を大事にしてくれる方々と頑張っていきたい、とやりがいにつながっています。（教育学系事務）
- ◇ FD活動紹介チラシのデザインがとてもよかったです。岡山大の先生が事務官から大学教員になったキャリアの持ち主でこうしたFD・SD活動に積極的に取り組まれておられた方でしたので、お話に説得力がありました。学部の方でも誠実取り組み状況をお話いただき、参考になりました。教職大学院でもFD活動を毎月1回実施しており、その中で授業リフレクションを行うようにしています。（教職大学院）
- ◇ 前任地の私立大から課題に着任して3年が経過しましたが、事務職員との協働の機会が少なくなったと思っていました。事務職員の方々の雰囲気も異なるようにも感じますが、その背景には国立大学での事務職員の採用や異動形態があるところのご指摘にはっとしました。協働は目的でなく手段というのは、そのとおりだと思いますので、協働を手段として機能させるような取り組みが必要かと思えます。例えば、異動までの標準的な期間をもっと長くする、といったことはすぐにでもできないのでしょうか？（水産学部）
- ◇ 教員も事務職員も目指すところは同じであるはずなのでそれぞれの専門性を生かしながら「共に考える」ことが非常に重要。お互いの仕事・役割を理解しつつオープンに意見交換する機会を持つ。組織は「仲良しこよし」ではだめということは聞いたことがあったがなぜダメなのかということがただただ波風を立てないだけでなく生産的な対立があってこそ組織が成長するという話が印象に残った。（医歯学域医学系）
- ◇ 職員と教員が腹を割って言いあえる関係を築ければ本当に大学にとっても学生にとっても素晴らしいことだと思います。グラフィック・レコーディングは、初めて実際に見ました。その場で理解もしやすいし、振り返りでしっかりと理解を深めることができました。通常の授業等でも、取り入れることが出来たら、素晴らしいと思います。（理学系事務）
- ◇ 今日のFSD会に参加して良かったと思っていますが、同時に絶望感も感じております。私はまだ4年しか勤務していないが非常に息苦しく閉塞感を感じています。そしてこの大学の改善・改革を諦める日も遠くないと思います。今日は1時間ぐらいは希望を味わった会議でした。（共通教育センター）
- ◇ 事務職員の私にとって、教職協働は常に重要なポイントであり、難しい問題でもあります。教員と職員の間に見えない垣根があることも事実ですが、日々の仕事の中で、先生方と同じ問題を共有したり、一緒に何かを作り上げることができたときは、非常に充実感があります。コロナ禍の状況で、所属している工学部でも教員と職員が協力して、（最終目的としては）学生のために動くことができた、と、今日は、改めて振り返る機会にもなりました。自由にフラットに発言できる職場をいつも意識していければと思います。（工学系事務）
- ◇ まず、最初の教員と職員の「格差」の問題が残っていることに驚きました。現在、私は、管理職として動いていますので、職員とは密に連携を図っています。ですから、そのような問題があるとは思っていませんでした。私達は「技術者」になるための教育をしていますので、教育学部の先生方の教育論は、私にとっては新鮮でした。（医学部保健学科）
- ◇ FD講演会というと少し堅苦しいので、もっと気軽に「職員」と「学生」がホンネでトークできるような企画（教員は脇役で）が定期的にあるとおもしろいかもしれないと思いました。（農学部）

## 5章 教育改善セミナー

**趣旨：**教育学部では、附属学校園との共同研究を行っている。多くの教員が関わるこれらの研究の蓄積をどのように授業に活かし、学生に還元できるのか、本セミナーでは、FD活動として初めてこの点にスポットを当てた。ラウンドテーブルでは、附属学校園と学部教員のペアによって4つの共同研究が報告された。

また、本年度の教育学部ベストティーチャー賞の授賞式を実施し、鹿児島大学ベストティーチャー賞受賞者の中島友樹先生による講演を行った。中島先生は附属学校との共同研究や自身の教職経験を活かした授業に取り組みされたことで、選考過程において高い評価を受けている。

### 概要：

日時：2022年2月22日（火）13:30-15:30

場所：オンライン開催

第Ⅰ部 ラウンドテーブル：学部と附属学校園による共同研究の取り組み

附属小学校の共同研究

国語部の研究 国語部教員、原田義則（共同研究者）

理科部の研究 理科部教員、土田理（共同研究者）

附属中学校の共同研究

体育部の研究 体育部教員、中島友樹（共同研究者）

附属特別支援学校

小学部の研究 初村多津子（小学部主事）、片岡美華（共同研究者）

第Ⅱ部 教育学部ベストティーチャー受賞式・講演会

教育学部保健体育科 中島友樹先生

講演「教員養成において教育実践の知見を活かす」

### 内容：

第Ⅰ部では、4つの報告が行われた。

まず、附属小学校国語部の共同研究の報告では、「点から破線の取り組みへ」というコンセプトが示された。今回の報告の背景には、従来型の教育実践を「段階的に経験する学びへと転換を図る」ことが中教審で提案されたこと、また教職課程コアカリキュラムにおいても子どもの実態を視野にいたした「授業設計」の重要性の理解が重視されてきたことなどがあり、にもかかわらずコロナ対応によって教育実習と授業との関連が持ちづらい状況が昨年度より続いていることなどから、今回、大学の授業と附属小学校の授業をつなぐ新たな共同研究が構想された。子どもの姿がみえる「本物の授業づくり」をどのように学生に体験させればいいのか—そこで、4月当初から附属小教員と共同研究者の継続的な交流を行い、6月の公開研究会に向けた授業づくりのプロセスを大学の後期授業で取り上げるという計画が立てられた。実際に、子どもの事実（ノートや授業中の姿）を双方が共有することで、当初の指導案作成の段階からみると、発問が変化し、その結果としての子どもの学びの深まりがみられたとされた。

初等教育コース必修科目「国語科教育Ⅰ」（2年生以上）では、文学の授業が子どもの実態に応じてどのように変わるかを学生に経験させる試みが先の共同研究の成果を取り入れて行われた。具体的には、「読み」の発達を目的とした授業において、通常小学3年生では困難とされている「作品世界全局を結合させ読みすすめる」ことが、この学級の実態としては可能であろうということが附属小教員と共同研究者の間で了解されたことで、指導案の修正と発問の変更が行われ、公開研究会の授業ではねらい通りの子どもの姿が見られたことが学生に示された。

特に興味深かったのは、実際に附属小教員と共同研究者の「対談」形式で学生に示された点である。学生は「教えるという行為の面白さ」を実感として掴んだようであるが、おそらく子どもの変化を知るだけでなく、授業づくりのプロセスを目の当たりにしたことのインパクトが教職へ

の動機づけに繋がっているのではないかとと思われる（写真参照）。報告では、隣接地のメリットを活かした「教材研究の時間」の継続的な確保、さらに連携をシステム化することの可能性として具体的に金曜日の15:50～18:00という時間帯についても示された。一週間のなかで金曜日の夕方にZoomをつなぐというまさに「破線」的な関わりの提案であった。



続いて、附属小学校理科部の共同研究の報告が行われた。ここでは、学部の養成段階で重要となる力量形成とは何かを焦点化し、その上で共同研究としてどのような連携を行うのが明確化されることの必要性が提起された。具体的には、学部在学中にできることは「授業がみえる」ための能力形成であり、授業を観る個所が分かることであるという提案であったが、これは共同研究者が20年以上に渡って理科部と関わりながら蓄積されてきた経験から導かれたものであった。

「初等理科授業研究」では、まずはモデル授業のビデオ視聴から始まり、学生らの「みる」の土壌を耕すという。続いて、研究公開前の授業参観と5月の授業公開、そして6月から7月にかけて継続的な授業参観が行われている。学生は、毎回まとめを作成するが、そこでの授業を観る観点の変化があるという。学生の中にみられる変化は、授業参観を始めて5～8時間目あたりでみられるという点が興味深い。

授業の最後には、模擬授業と報告会が行われるが、国語部と同様に、附属小理科部の教員が指導助言に入っている。実は、附属小側の教員の中にかつての本授業の受講者が複数いるということもあって、学生が毎週訪問することや共同研究に学生が参加することについての理解と体制が整っているといえる。授業者と共同研究者、学生の相互に「授業をみることの価値」が共有されているからこそ、最後の報告会が土曜日の午後から夜までという十分な時間を確保しての実施が可能になっていると思われた。

三つ目は、附属中学校体育部の報告がなされた。この報告では、まずは体育科授業で従来難しいといわれていた「はね跳び」の取り組みが紹介されたが、体育科そのものの面白さに引き込まれる内容であった。「技ができるようになる」ということ背景には、生徒個人のそれぞれの課題を把握することや、教師が的確な補助の立ち位置を占めること、意図的に遠くの生徒に声をかけることを通して広い体育館が統一感のある空気で満たされるような工夫がされているということであり、それらのひとつひとつが研究の蓄積に裏付けられているのである。また、附属中の授業者からは、はね跳びで怖さやけがへの不安から思い切り取り組めないという現状を乗り越えるために、共同研究者と共に取り組んだことで子どもの劇的な変化がみられたということが紹介された。また、学校目標である「主体的に学習に取り組む態度」の育成にとって、このはね跳びの授業が重要な場を提供することになったということである。



共同研究者からは、大学での剣道の授業も紹介された。礼儀作法や型の獲得ばかりで部活のような授業を受けてきたという学生に対して、剣道のもつ勝負の面白さを経験させ、むしろ「負けから学ぶ」ということも実感させていったという。学生は、できる人だけが活躍するのではなく、剣道の本質を踏まえた授業の魅力を経験したようである。

これらの附属学校の授業と大学の授業は、「今」の授業改善と「将来」の授業改善という筋で繋がっている一つまり体育科の授業研究という大きな枠組みの中で積極的なつながりをもっている

のであり、教育学特有の授業改善の視点が示された。

最後は、附属特別支援学校小学部の報告であった。障害児教育学科の教員3名が、特支学校の小・中・高等部に関わりながら公開研究をはじめとした共同研究に組織的に取り組んでいるという。先の3つの報告が提案している組織的な附属学校園との共同研究が、ここでは開校当初から実施されているということで、その研究の継続性と多面性から多くの示唆を得ることができた。

とりわけ興味深いのは、子どもの「実態」をどのように掴むかという教育実践の中核に位置づく問題を軸として共同研究が組み立てられている点である。共同研究者が「新版K式発達検査」の導入を提案して以来、これまで10年以上に渡って全児童生徒のデータが集約されており、小学部から高等部までの成長・変化を捉える基礎資料となっている。このような校内における子どもの実態把握の方法は、教員の人事異動に伴う研修でも工夫がなされており、本年度は共同研究者が行った検査の様子をVTRに撮り、それを観ることによってレポートの取り方、検査道具の準備の流れ、検査の順番の目安、検査中の視点も含めて、教員が常に確認することができるようにしたということであった。また、データを取るだけでなく、検査結果を踏まえてどのような教育を行うかについても夏の研修で具体的に深めているという。日常の実践と深く関わった研修が実施されている。

さらに、新版K式発達検査の導入は、発達検査としての役割だけでなく、特支学校の各学部をつなぐツールとして位置付いているという。共同研究者からは、0歳から成人まで用いることができるこの検査を用いることで、小学部から高等部までをつなぐ「共通言語」としての有効性を活かしているということも指摘された。この研究は、論文や書籍としても公表されている。

第Ⅱ部では、令和2年度鹿児島大学ベストティーチャー賞を受賞された中島友樹先生の学部における表彰式と講演会を行った。中島先生の担当科目「体育科教育」の授業は、昨年度遠隔授業として実施されたが、スライドや動画資料が工夫され、随時学生が閲覧することができるようmanaba等で整えられただけでなく、学校での実践場面をふんだんに取り入れることで体育科教員への動機づけを高めるものであったという。学生からは、「体育科への深い理解に加え、広い意味で活用できる学習になった」「自分の中で一番ためになり、今後に活かすことのできる授業内容だった」「体育科以外にも通ずる教育観を学ぶことができた」などの声が寄せられている。

教育学部では、とりわけ実技系科目やアクティブラーニングをどのように遠隔授業で実現するかが課題となっているが、その意味で「体育科教育」では示唆に富む授業が実践されており、全学でも高く評価されている。

さて、講演「教員養成において教育実践の知見を活かす」では、「理論と実践の架け橋」となるための取り組みとして、3つの内容が紹介された。バレーボールの教材化、オンラインでの表現活動、卒論研究である。今回紹介された「小学校体育D」では、「バレーボールの特有の楽しさとは？」という問いをもとに授業が展開されている。紹介された内容は次の通りである。まず、受講生のゲームを動画に撮り、データとして可視化して、ほとんどラリーが続いていないことを認識させる。次に、学生らよりもはるかに長くラリーが続いている中学校体育の動画を視聴させる。すると、見た目にはよりバレーボールの楽しさが増しているように見えるが、実は触球回数が多い生徒と少ない生徒の差が激しいことに気づくようになる。そこで、ラリーが続けばいいというわけではないことを踏まえさせたうえで、次に「ボレー」(的当てゲーム)というこの



表彰式の様子（於教育学部）

スポーツの本質的な要素に着目させ、アタックが頻出しボレーが楽しめることに焦点化した授業づくりへと誘っていくのである。このように、「バレーボールの本質的な楽しさに触れるゲーム」ための教材化は、「ゲームを診る」視点の深化とともに深められていく点が示された。

続いて、Zoomを活用した表現活動として「表現リズム遊び：おいしいごはんをつくろう！」が紹介された。学生もまだ遠隔授業にさほど慣れていない昨年度の授業である。35秒の動画づくりであるが、BGMに併せて料理の動作を録画するという取り組みで、学生自身にとって新鮮な体験であったと同時に、体育科授業のイメージが広がったようである。表現活動は、ある意味で教育を構成するすべての領域にまたがるものであり、この授業で行われた表現の「オンライン共有」への取り組みは体育科教育に止まらない提案であった。

最後に、卒論研究について紹介された。生涯スポーツをテーマとしてまとめられた卒論研究は、附属学校での調査、研究と執筆（運動有能感（上・中・下位群）に対応する効果的な教師行動）、学校へのフィードバックというプロセスのなかで行われている。中島先生が冒頭で述べられた「理論と実践の架け橋」に学生も参加し、体育科授業の科学的根拠と実践的展開の面白さが実感されたのではないだろうか。

附属学校園は「お隣さん」—この中島先生の提起は、第I部の各報告でも出された点であり、今回のセミナーの成果を象徴しているといえる。また、その兩者をつなぐ接点は「授業を見る・観る・診る」ということに集約されるということも、全体を通じて感じたことであった。

## 6章 令和3年度教育学研究科教育実践総合専攻「教育改善アンケート」調査

### 1. はじめに

教育学研究科教育実践総合専攻（以下、本専攻と略記）では、例年後期の12月に教育改善に係る学生アンケートを実施してきた。今年度も、昨年度から引き続き新型コロナウイルス感染症対策下という特殊な状況の中で、学生の学修・研究上あるいは生活上の困難等、早急に対応が求められる事態の把握に努めるべく、前期の7月から9月にかけて実施した。なお、今年度は本専攻の最終年度でもあり、なお一層の早急な対応が求められた。

### 2. 調査の実施方法

令和3年度の調査方法は以下の通りである。

- ・実施時期 2021年7月20日（火）～9月10日（金）まで
- ・対象者 本専攻在籍学生
- ・調査手段 Google フォームを用いたweb方式（匿名）
- ・周知方法 担当係である総務係を介し教務係より一斉メールを送信

### 3. 結果及び教育改善委員会の分析や対応

本専攻最終年度の今年度の回答者数は、例年に比べて大幅に減少し、昨年度の半数の6名であった。以下、質問項目ごとに回答を示し、本委員会としての分析や対応を附記する。なお、記述回答の本文は、基本的に回答者入力のままとする。

#### (1) 教育学研究科教育実践総合専攻の授業について

##### 【満足している点】

- ・ゼミに満足しています。先生が丁寧に対応してくださるからです。
- ・ほとんどの授業がグループワークなどがあり、皆と協働できているところ
- ・先生方や受講生と話をしながら考えを上げたり、深めたりできるところに満足しています。
- ・様々な分野の人たちとこうしたり取りがえるのは、大学院だからこそなのかなと思っています。
- ・どの授業も深い学びを提供してくれる点です。

##### 【改善して欲しい点】

- ・授業登録がしにくい点に改善の余地があると思います。システムがわかりにくく、扱いにく

いからです。鹿児島大学出身者の方に毎回お尋ねしています。

- ・授業の人数が少ない場合は、学生の研究課題によって授業を進んだほうがいいのかもしいかな。
- ・シラバスの内容と違うときがある。学生の実態に合わせて変えるのはありがたいが、内容が違くと後期の履修登録に迷ってしまう。
- ・他の大学院のことを知らないで、“大学院ってこういうものだ”と思えば特に改善してほしいことは思いあたりません。
- ・最終課題の提出日が重なることが、かなり負担です。1週間前とかではなく、事前に課題の内容と提出日を知らせてくれるとありがたいです。

## (2) 研究・学修環境（設備・備品・消耗品等）について

### 【満足している点】

- ・図書館で貸借などすぐ対応していただけるので助かっています。
- ・満足している点については、指導先生の責任感が強いということです。理由とは、先生はどんなに忙しくても、真剣に論文の指導をしてくれます。
- ・ipadの貸し出しはありがたいです。また、ipadに入っていないソフトも、必要であれば対応していただけたのは嬉しかったです。
- ・学校内で自分の居場所を探す手間が省けるので、院生研究室があるのはありがたいです。また、学内のWi-Fiは不安定なので、院生研究室内にWi-Fiがあるのもとてもありがたいです。
- ・研究室で机が割り振られ、自由に使える点がよいです。

### 【改善して欲しい点】

- ・文系棟までwifiが飛んでいてくれたらもっと便利だろうと思います。wifi環境が整備されることは遠隔授業やメールやりとりなど学習と直結していると思います。
- ・院生室の環境を改善してほしいです。理由は、院生の人数が少ないので、消毒剤がないです。他のは、院生室の椅子が壊れています。修理したり、変えたりしていただいけませんか。
- ・集まることのできる教室の少なさ。（コロナ禍の中仕方ないことですが。）
- ・ストレートで入学してきた方々には必要ないかもしれませんが、ブランクがある人に対して改めて研究の進め方や修士論文の位置づけのようなものについて話していただける時間（講義）があるとうれしいなと思います。また、院生研究室の年度初めのリセットが難しいので、そこをどうしていけるかを一緒に考えていただけたらうれしいです。（例、コピー機はあるが接続方法がわからない、ロッカーはあるが鍵がなかったり誰のものかわからないものが残っている、机上や引き出しに残っているもの問題など）
- ・PLCにWi-Fiルーターを設置してほしいです。

## (3) 研究成果の口頭発表（修士論文発表会を除く）に係る指導や支援について

### 【満足している点】

- ・指導先生のおかげで、毎週研究課題に関する文献を読み、レジュメを作成し、毎週ゼミの時に先生に説明させていただきました。このような方法では、私は完全に文献の中に入ることができず、レジュメを書くことによって情報を抽出する能力を鍛えることもできます。このような方法が大好きです。

## (4) 研究成果に関する論文執筆（修士論文を除く）に係る指導や支援について

### 【満足している点】

- ・迅速丁寧にご指導いただき大変感謝しています。
- ・私は外国人ですから、論文を書く時、書き言葉の意味がよく分かりません。私の指導先生は間違った文法を直してくれる時間がたくさんかかります。このような方法は助けになりました。
- ・忙しい中、何度も添削していただけてありがたいです。

### 【改善して欲しい点】

- ・自分自身の問題ばかりなので、特にありません。

## (5) その他、大学院での学修や生活全般について意見や要望

- ・M2の学生としても、もうすぐ卒業します。でも、やはり私の提案を言いたいです。いくつかの課程の登録学生が少ないなら、先生は学生の要求によって授業を手配してもいいと思います。

多くの授業は学生の論文を書くための知識ではなく、課題と関係なく教育学と関係のない知識です。以上は自分の要望です。

- ・コロナによって同学年の人たちとつながりの薄い時間を過ごしてきたので、修士論文の提出と口頭試問等が終わった後で尚且つ卒業前に、1度でいいので参加自由のお疲れ様会のようなものができたらうれしいなと思います（コロナの都合もあるのでできるかどうかはわかりませんが）。年度末は先生方も事務の方々も忙しいのは承知していますが、みんなとやり取りができる手段を一緒に考えていただけたらうれしいです。

#### 総括〔全体のまとめ〕

##### 【満足している点】

- ・ゼミ担当の教員が丁寧に対応してくださる点。
- ・グループワークを通して皆と協働できる。
- ・教員や院生との対話を通して考えを広げたり、深めたりできる点。
- ・どの授業においても深い学びを提供してくれる点。
- ・タブレットの貸し出しがありがたかった。
- ・論文発表に対して、専門的なサポートと指導を提供してくれた。

##### 【改善して欲しい点】

- ・Wi-Fi環境の整備（院生研究室、文系棟、PLC 他）
- ・院生研究室の環境改善（椅子の修理、消毒液の設置、年度初めのリセット 等）
- ・システムがわかりにくく、履修登録がしにくい点。
- ・授業内容がシラバスと異なるものがある。

#### 4. おわりに

アンケート回答率の向上が例年の課題でありながら、今年度が本専攻の最終年度であることから、昨年度より回答率が低下したことは反省すべき点である。

本章冒頭に述べた通り、今年度は昨年度から引き続き新型コロナウイルス感染症対策下という特殊な状況の中での実施となった。結果的に回答率は低下したものの、回答内容については、今後の教育学研究科における学修環境等の充実に向けて、大きな示唆を与えるものとなった。

#### 附 大学 IR コンソーシアム学生調査結果（令和3年度実施分）の分析について

##### 【評価する点】

**1年生調査：**第一に、授業を通じた学習経験については、とくに「実験、実習、フィールドワークなどを実施し、学生が体験的に学ぶ」が42.4%と高くなっており（本学平均24%）、1年次から学校体験等を取り入れている本学部のカリキュラムの特色が反映していると評価される。

第二に、「入学後の能力の変化」について、「分析力や問題解決能力」（61.9%）、「批判的に考える能力」（63.3%）、「文章表現の能力」（69.1%）、「時間を効率的に利用する能力」（58.3%）の各項目は、本学平均と比べて約10%高くなっており、単なる知識の習得に止まらない思考力や表現力の向上がみられる点は、学士教育として望ましい学習が実現しているとして評価できる。

**上級生（3年生）調査：**第一に、「授業内外の学習状況」において、「大学の職員室に将来のキャリアを相談した」が33.7%であり、本学平均（22%）、国公立大学G（28%）よりも高くなっている点が挙げられる。要因として、まず、学部内に「教職支援室」が設置されていることが相談しやすい環境を構成していると考えられる。ただし、教職支援室の予約が取りにくい状況が続いていることから、潜在的には相談者はより多く存在すると考えられる。また、学部教員の多くが関わって教員養成基礎講座や教員採用試験対策プログラムなどのキャリア支援を行っていることが成果に繋がっていると考えられる。

第二に、「授業を通じた学習経験」については、「授業中に学生同士が議論をする」が86.7%（本学平均66%）と高い傾向にある。また、「入学後の能力の変化」については、「コミュニケーション能力」（70.4%）、「プレゼンテーション能力」（70.4%）、「卒業後に就職するための準備の度合い」（74.5%）の各項目では本学平均を超えており、評価できる。

第三に、就職に関しては、就職希望者が78.6%と高くなっており、それに比例して「将来展望有り」（「見通しあり・理解実行」＋「見通しあり・理解不実行」）の割合が76.5%と本学平均（65%）よりも高率である点が注目される。



教育学部では、学校現場等における体験・実習やアクティブラーニング型の授業が1年次から行われているため、上述の成果が上がっているといえる。また、県教委派遣の実務家教員を中心として学部全体で早期から教職等への動機づけを行っており、理論と実践の両面における学習環境の充実に取り組んでいることが指摘できる。

#### 【課題と考える点】

**1年生調査：課題①** 入試において、本学第1志望者が51.8%となっており、本学平均（52%）水準ではあったものの、昨年度過去最高であった58%からは落ち込む結果となった。また、現役率は79.1%であった。この数値も本学平均並みである。新型コロナウイルス感染症対応により出前授業などの高大連携事業が制限されたことが影響していると考えられるが、今後も教育学部の広報活動を充実させる必要がある。

**課題②**「授業内外の学習状況」について、「授業をつまらなく感じた」（71.9%）、「授業中に居眠りをした」（33.8%）の項目が本学平均よりも高い数値になっている点が課題である。ただし、「授業時間外に、他の学生と一緒に勉強したり、授業内容を話したりした」（56.1%）は本学平均（51%）、国公立大学G（47%）よりも高率であることから、学習意欲は決して低くはないと考えられる。

**課題③**「一般的な教養が増えた」と感じる学生の割合については、ここ数年の落ち込みが問題となっている。教育学部では、2018年69.8%から2019年51%へと減少し、2020年は54.7%と微増したものの、依然として課題であるといえる。

**上級生（3年生）調査：課題④** 英語運用能力について、本学部は「聞く力」「読む力」「会話力」に対する自己評価がA2レベルに止まっており、本学平均と比しても低い状態にある。一方、「表現力」はA1とB1の割合が拮抗しており、二極化している点が課題である。

**課題⑤**「大学設備に対する満足度」について、「実験室の整備や器具」「コンピュータの設備や施設」「コンピュータの訓練や援助」「インターネットの使いやすさ」の項目は、いずれも本学平均よりも10%以上低いものであり、改善が必要である。

**課題⑥**「大学への適応感」「大学生生活の充実感」は、1年生と3年生の双方において低い数値となっている。特に、3年生においては、「大学の学生向けサービスを上手に利用する」（41.8%）、「大学教員の学問的な期待を理解する」（49.0%）、「効果的に学習する技能を習得する」（53.1%）、「大学が求める水準に応じて学習する」（54.1%）で本学平均よりも10%以上低くなっている。また、「大学生生活の充実感」（「充実している」＋「まあまあ充実している」の合計）は、1年生（52.5%）、3年生（72.4%）となっており、全学平均（1年生63%、3年生85%）と比較して低い数値となっている。

**1年生調査：課題①**については、2020年度は新型コロナウイルス感染症再策で中止等を余儀なくされたが、2021年度には再び高大連携事業が行われたことや、オープンキャンパスで在学生も交えたオンライン座談会等の取り組みが行われたことで、改善が期待される。

**課題②**については、学生側の学習意欲を喚起するような授業改善を実施していく必要がある。授業アンケート結果のデータ分析に加え、各授業の形成的評価や課題の適切さの考察等を行い、対面・遠隔の双方に適した内容と方法について模索することが求められる。

**課題③**の一般教養に対する学習達成感の低さについては、昨年度に引き続き課題となっているが、学部においても共通教育で学習した教養の大切さを意識づけ、例えば、学部にもG.P.A.を導入することで共通教育と専門教育の連続的な評価について検討している。また同時に、学生の「教養」観について、アンケート等を通して明らかにする必要があるだろう。

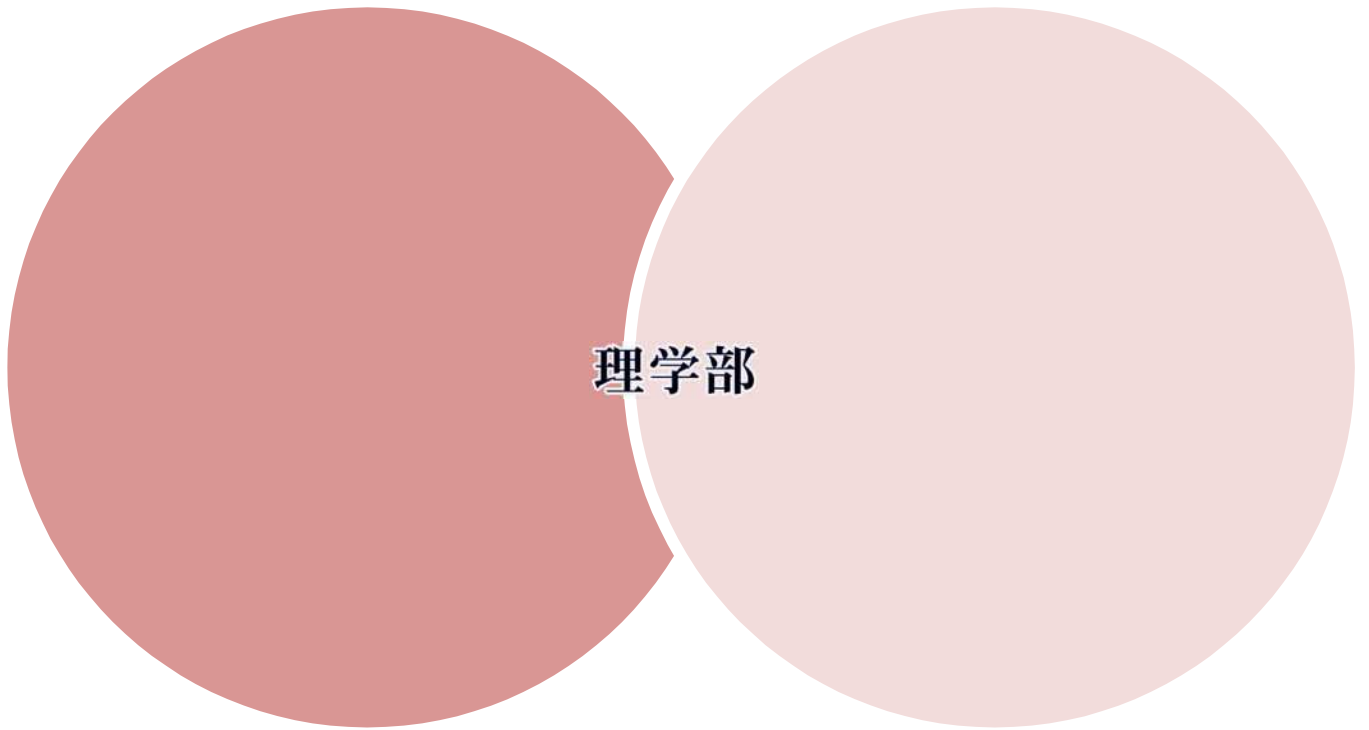
**上級生（3年生）調査：課題④**は、教育学部の学生にとっての英語運用能力の向上策についてであるが、諸能力のうち、「表現力」については自己評価はA2以上が多くなっているため、その点を評価しつつ「聞く力」「読む力」「会話力」についても苦手感を払拭していく必要がある。小学校英語の導入など、教職と関わる学習の中で能力形成を行っていくことや、また学部・全学の交流協定校との取り組み等も活用する必要がある。

**課題⑤**については、理系棟の校舎改修により設備の利用環境が整ったにも拘わらず、依然として「大学設備に対する満足度」が低い状況にあることから、感染症対策を取りつつ、学生にとっての利便性を高めるなどアクセシビリティの観点からの課題の整理が必要である。

**課題⑥**の「大学への適応感」「大学生生活の充実感」が低い数値に止まっていることについては、1・3年生ともに深刻な問題である。新型コロナウイルス感染症対応により活動等が制限されたことが大きな要因と考えられるが、学部レベル、学科レベル、個々の授業レベルでの学生との関わりを充実し、学生FD委員会など学生主体の活動についてもより支援していく必要がある。

教育学部では、実践的科目群を中心として、4年間を通して教育者としての自己形成が図れるようカリキュラムを再構成しているところである。それらを通して上記の課題に対応していきたい。





# 令和3年度理学部 FD 活動報告書

理学部 FD 委員会委員長 内海 俊樹

令和3年度に理学部で実施したFD活動の概要と課題点などについて、次の順で報告する。

1. 学生による Web 授業評価アンケート（期末:7月、1月）
2. FD 講演会(令和3年9月、令和4年1月)
3. 学生・教職員の FD 活動への参加状況
4. その他 FD 委員会関係の取り組み

なお、令和3年度は、以下に示した全6回の理学部FD委員会を開催し、各履修プログラムを担当する教員の中から選出されたFD委員の協力のもと、理学部教員によるFD活動を実施した。理学部教員の皆様のご協力と、Web アンケート処理などに対応して下さった事務職員の皆様に心より感謝申し上げたい。

## 理学部 FD 委員会会議開催状況

- 第1回 令和3年5月7日（オンライン会議）
- 第2回 令和3年6月2日（オンライン会議）
- 第3回 令和3年7月9日（オンライン会議）
- 第4回 令和3年11月5日（オンライン会議）
- 第5回 令和3年12月23日～令和4年1月5日（メール会議）
- 第6回 令和4年3月22日（オンライン会議）

## 令和3年度 鹿児島大学理学部ファカルティ・ディベロップメント委員会委員

委員長 内海 俊樹

委員 松本 詔 数理情報プログラム

委員 新永 浩子 物理・宇宙プログラム

委員 神長 暁子 化学プログラム

委員 上野 大輔 生物学プログラム

委員 北村 有迅 地球科学プログラム

改組に伴い、令和2年度より理工学研究科理学系は1専攻5プログラム、理学部は1学科5プログラム体制へと移行した。FD委員は各プログラムの学務委員が兼務し、理学科長がFD委員会委員長を務めることとなった。従って、改組後の理学部FD委員会の構成員数は、6名である。ま

た、令和2年度は改組初年度ということもあり、理学部長補佐がFD委員会にオブザーバーとして参加したが、令和3年度はオブザーバーを置かなかった。

## 1. 学生による授業評価アンケート

理学部における授業評価アンケートの目的は、学生による授業評価を通じて、授業担当の各教員が自らの授業の改善の手がかりとすること、さらに、その活動を通して履修プログラムのカリキュラムをはじめとする種々の教育システムの改善につなげることにある。受講学生の率直な声を担当教員にフィードバックすることで、個々の授業や履修プログラムのカリキュラムをより教育効果の高いものにすることができれば、理学部での教育をさらに充実したものへと改善することができる。

令和3年度もmanabaを利用した期末授業アンケートを実施した。manabaでの授業アンケート項目は、令和元年度のものから一部変更して14項目とし、学生の自由記載欄も設けた以下に示すような内容とした。

### 授業のわかりやすさについて

1. 1先生の説明は、あなたにとってわかりやすかったですか。
  1. わかりやすかった
  2. わりとわかりやすかった
  3. ややわかりにくかった
  4. わかりにくかった
1. 2先生の声は聞き取りやすかったですか。
  1. 聞き取りやすかった
  2. わりと聞き取りやすかった
  3. あまり聞き取りやすくなかった
  4. 聞き取りやすくなかった
1. 3総合的に見て、この授業はわかりやすかったですか。
  1. わかりやすかった
  2. わりとわかりやすかった
  3. ややわかりにくかった
  4. わかりにくかった

### 授業運営について

1. 4シラバス（講義要項）に即した内容の授業が行われていたと思いますか。
  1. そう思う
  2. わりとそう思う
  3. あまりそう思わない
  4. そう思わない
1. 5授業の開始時間、終了時間は守られていたと思いますか。
  1. そう思う
  2. わりとそう思う
  3. あまりそう思わない
  4. そう思わない

1. 6 総合的に見て、この授業の運営はどうでしたか。
  1. よかった
  2. わりとよかった
  3. あまりよくなかった
  4. よくなかった

#### 学習成果について

1. 7 あなたは講義中に熱心に受講したと思いますか。
  1. そう思う
  2. わりとそう思う
  3. あまりそう思わない
  4. そう思わない
1. 8 受講の結果、新しい知識を得ることができましたか。
  1. できた
  2. わりとできた
  3. あまりできなかった
  4. できなかった
1. 9 受講の結果、新しいものの見方や考え方を得ることができましたか。
  1. できた
  2. わりとできた
  3. あまりできなかった
  4. できなかった
1. 10 この授業へのあなた自身の取り組み、この授業から得られたことなど総合的に見て、あなた自身の自己評価はどうですか。
  1. よかった
  2. わりとよかった
  3. あまりよくなかった
  4. よくなかった

#### 授業の難易度と進度について

1. 11 授業の難易度はあなたにとって適切でしたか。
  1. 適切であった
  2. わりと適切であった
  3. あまり適切ではなかった
  4. 適切ではなかった
1. 12 授業の進み方のペースは、あなたにとって適切でしたか。
  1. 適切であった
  2. わりと適切であった
  3. あまり適切ではなかった
  4. 適切ではなかった
1. 13 総合的に見て、授業の難易度と進度は適切でしたか。
  1. 適切であった
  2. わりと適切であった
  3. あまり適切ではなかった
  4. 適切ではなかった
1. 14 その他、この授業について思うことがあれば、自由に書いてください。

令和元年度以降、期末授業アンケートは、一部の不定期実施科目と集中講義を除いて、教職専門科目と非常勤講師担当科目を含むほぼすべての科目を対象として、manaba を使用した Web アンケートで実施している。アンケートの設問は、先に示したとおりである。このアンケートは、前・後期のそれぞれの期末に、10 日から14 日程度の期間をとって実施した。いくつかの設問については、遠隔授業を対象とした設問としてはそぐわないと考えられるものもあったが、遠隔授業と対面授業が混在して実施されたことを考慮して、削除することなくそのまま実施した。したがって、学生にとっては、回答しにくかった科目・設問もあったかもしれない。

担当教員の任意で、中間期でのアンケートも実施された。中間アンケートは、アンケートの結果をタイムリーに授業に反映することができるように、学部共通のフォーマットを準備することはしていない。通常の授業アンケートは、授業終了後に集計して情報を提供するため、次期あるいは次年度の授業改善に資することはできても、アンケートに答えた受講生自身がそのメリットを享受することはないので、アンケートの意義を実感することはない。一方、中間アンケートについては、授業担当教員がアンケートに対する対応を実践することにより、受講生自身が、アンケートに回答したメリットを授業を通して享受することができるだけでなく、アンケートの重要性を容易に理解できる。アンケートに回答することの重要性を認識することにより、各種実施される他のアンケートへの回答率の向上にも繋がるのが期待できる。しかし、中間アンケートを実施している教員は、そう多くはない。今後の期末授業アンケートをはじめとする各種アンケートの回収率の向上を図るためには、中間アンケートの実施率を増やし、その結果を、リアルタイムで授業に反映させることは重要な取り組みとなる可能性があることを認識しているが、令和3年度は具体的な方策は実施しなかった。

manaba 上で回答された期末授業アンケートは、それぞれの教員が、当該年度のみならず、年度を遡って確認できるようになっており、担当している授業アンケート結果を複数年に渡って参照しつつ自己分析を行うことが可能である。理学部としては、アンケートの集計結果を保存し、必要に応じて学部およびプログラム・学科のカリキュラム改善のための基礎データとして活用できるようにしている。また、ベストティーチャー賞候補者選出のための参考資料として利用することも可能である。

理学部では、平成13年度より授業評価アンケートを実施しているが、その際に集計結果を教員評価のための資料として利用しないことと決めている。これは、授業改善以外の目的にアンケートを転用することは、授業改善の面では逆効果であるという専門家の意見とも一致している。

令和2年度からは、新型コロナウイルスの感染拡大の防止対策の一環として多くの授業が遠隔授業となり、令和3年度もかなりの数の授業が遠隔で開講されたと推測される。Zoomでのオンライン授業では、授業中に時間をとってmanabaにアクセスさせるのは、ネットワークトラブルなどの懸念や操作性の問題（特にスマートフォンで授業を受けている場合）などから授業中のアンケート実施を避けたり、あるいは、オンデマンドの授業の場合は、学生にアンケートへの協力を呼びかけてもなかなか回答に結びつかないなどで、アンケートの回答率の向上は困難な状況に置かれている。令和2年度と令和3年度の期末授業アンケートの回答状況を「表1 令和2年度と令和3年度の期末授業アンケート状況」にまとめた。

表1 令和2年度と令和3年度の期末授業アンケート状況

令和2年度	前期	後期	通年
科目数（科目）	102	116	218
延べ受講人数（人）	5230	5279	10509
延べ回答総数（人）	2171	1746	3917
回答率（％）	41.5	33.1	37.3
令和3年度	前期	後期	通年
科目数（科目）	100	110	210
延べ受講人数（人）	4935	4875	9810
延べ回答総数（人）	1808	1590	3398
回答率（％）	36.6	32.6	34.6

令和3年度のアンケート回答数は、前期1808件、後期1590件だった。令和2年度は、それぞれ2171件及び1746件だったことから、前期は令和2年度の83%、後期は91%、通年では令和2年度の87%へと低下した。しかし、令和元年度の回答率と比較すると前期は178%、後期は96%、通年で128%と高い値を示した。このことを考慮すると、令和3年度の回答件数が極端に落ち込んだわけではなさそうだ。紙媒体によるアンケートからWebアンケートへと変更になった平成30年度のFD報告書によると、「Webアンケートでは大きく回答率が低下することが危惧されていた。」との記載がある。しかしながら、令和元年度から令和2年度にかけては増加傾向にあった。即ち、令和元年度の回答率は、前期14.9%、後期22.1%であったのに対し、令和2年度は前期41.4%、後期33.1%と改善が見られていた。しかし、令和3年度は、前期36.6%、後期32.6%と低下傾向にある。令和2年度後期の回答率の低下は、アンケート疲れの兆候かもしれないと予想していたが、令和3年度は、予想が現実のものとなりつつある可能性を示している。これまでも増して、理学部教員、及び、学生への協力依頼を徹底する必要がある。

IRコンソーシアム学生アンケートの3年生の回答率を比較してみよう。令和元年度は50%であったが、令和2年度は40.4%、令和3年度は39.3%と低かった。この点についても、多くが遠隔授業となった事が強く影響したと考えられる。例年、当該学年のほぼ全員が受講する授業などを利用して回答の時間を設けたり、対面で回答を呼びかけたりするが、令和2年度と3年度は、そのよう



な機会を設けることができなかつた。しかし、高いアンケート回答率の学部もあることを考慮すると、理学部での実施方法については、検討の余地があるものと考えられる。IRコンソーシアムの認知度はどの程度であろうか？ 認知度の低さが、回答率が低いことの要因のひとつかもしれない。加えて、教員側もIRコンソーシアムそのもの、及び、IRコンソーシアム学生アンケートから得られる情報の有用性などについての認知度が低いのもかもしれない。学生への呼びかけだけでは、回答率の向上はなかなか難しく、IR関係の講演会を開催するなど、教員と学生双方の認識を高める方策が必要ではなかろうか。

令和元年度から、期末授業アンケートの設問は、「授業のわかりやすさについて」、「授業運営について」、「学習成果について」、「授業の難易度と進捗について」の大きく4つのカテゴリーを設けて実施している。それぞれの項目のまとめに該当する設問は、次のとおりである。

- 1. 3 総合的に見て、この授業はわかりやすかったですか。
- 1. 6 総合的に見て、この授業の運営はどうでしたか。
- 1. 10 この授業へのあなた自身の取り組み、この授業から得られたことなど総合的に見て、あなた自身の自己評価はどうですか。
- 1. 13 総合的に見て、授業の難易度と進捗は適切でしたか。

令和3年度のアンケートの結果をもとに、これらの設問に対する回答を「表2 各項目まとめの問いに対する回答割合」にまとめた。設問に対する回答は「1」から「4」の4段階評価としており、「1」が評価が最も高く、「4」が評価が最も低いことを示している。

表2 各項目まとめの問いに対する回答割合

設問	前期（回答数：1808人）				後期（回答数：1590人）				
	1	2	3	4	1	2	3	4	
1. 3	回答数（人）	803	720	225	60	767	620	161	42
	回答割合（%）	44.4	39.8	12.4	3.3	48.2	39.0	10.1	2.6
1. 6	回答数（人）	1040	618	111	39	983	525	58	24
	回答割合（%）	57.5	34.2	6.1	2.2	61.8	33.0	3.6	1.5
1. 10	回答数（人）	813	793	156	46	748	709	114	19
	回答割合（%）	45.0	43.9	8.6	2.5	47.0	44.6	7.2	1.2
1. 13	回答数（人）	823	759	164	62	775	672	120	23
	回答割合（%）	45.5	42.0	9.1	3.4	48.7	42.3	7.5	1.4

いずれの設問に対しても回答「1」と「2」で80%以上を占めており、回答を「4」とした学生は多くても4%に達することはなく、回答した殆どの学生は、理学部の授業に満足していると判断することができる。令和3年度は令和2年度に引き続き、新型コロナウイルスの感染拡大防止の措置として、多くの授業で遠隔授業が実施された。教員は遠隔授業の実施には慣れてきたものの、改組後の新カリキュラムに沿った授業の運営・計画の大幅な変更、授業資料の準備などに多くの時間を費やしたと考えられる。新入生に対する遠隔授業対応の準備・指導も実施されたため、授業

の実施に支障となるようなトラブルの発生はなかったようである。コロナ禍前と変わらない教育効果をあげることができたのではないかと推察される。

設問1. 3 「総合的に見て、この授業はわかりやすかったですか。」に対する回答をコロナ禍前の令和元年度とコロナ禍中にある令和2、3年度とを比較してみよう。「3」または「4」と回答した（より低い評価をした）学生の割合は、令和元年度は、前期19.1%、後期20.2%であったのに対し、令和2年度は前期18.2%、後期10.9%、令和3年度は前期15.7%、後期12.7%であった。このことは、科目によっては、遠隔授業の方がむしろ教育効果を高めた可能性があることを示しているのかもしれない。また、後期の方が前期より低い値を示している。この点については、令和2年度は、「教員と学生が共に遠隔授業に慣れてきたことと、遠隔授業についての実施法や教授法に関する情報が蓄積したこと、あるいは、情報交換が活発に行われた結果を反映しているのかもしれない。」と分析していたが、いちがいにはそうとも言えないようだ。正しく分析するためには、科目ごとに年度を追って分析する必要があるだろう。設問1. 6の授業の運営に関して、「1」または「2」と回答した（より高い評価をした）学生の割合は、令和元年度は、前期91.6%、後期92.1%であったのに対し、令和2年度は前期89.5%、後期92.5%、令和3年度は前期91.6%、後期94.8%であった。コロナ禍中とコロナ禍前で大差ない割合となっており、遠隔授業が概ね混乱なく順調に実施された事を反映しているものと理解できる。続いて、設問1. 10 「この授業へのあなた自身の取り組み、この授業から得られたことなど総合的に見て、あなた自身の自己評価はどうですか。」について比較してみる。「1」または「2」と回答した（より高い評価をした）学生の割合は、令和元年度は前期85.7%、後期86.6%であったのに対し、令和2年度は前期88.8%、後期90.3%、令和3年度は前期88.9%、後期91.6%であった。令和2、3年度が高い値を示したのは、レポートなどの課題提出やこまめな小テストの実施などにより、コロナ禍前よりも多くの学生が、勉学に対する充実感・満足感を得たからかもしれない。設問1. 13 「総合的に見て、授業の難易度と進度は適切でしたか。」については、「3」または「4」と回答した（より低い評価をした）学生の割合は、令和元年度は前期14.2%、後期14.4%であったのに対し、令和2年度は前期12.8%、後期9.4%、令和3年度は前期12.5%、後期8.9%であった。不満を感じた学生の割合は、コロナ禍前より低くなっており、学生自身の都合に合わせて授業の動画・資料を繰り返し閲覧したりするなど、オンデマンド授業の特性が発揮された効果のひとつではないかと捉えることができる。当面は、対面授業と遠隔授業が混在することが予想される。今後は、対面授業の教育効果を高めるために、遠隔授業のメリットを取り入れた授業展開が普遍的に実施されるようになる可能性もある。全学的に実施される遠隔授業に関するアンケートの分析結果を共有し、あるいは、理学部期末授業アンケートに書き込まれた学生のコメントなどを丹念に拾い上げて整理しておけば、そのような新しいスタイルの授業の構築や展開に反映させることが容易であろう。

アンケートの回答結果を示すレーダーチャートを作成して教員へ返却することは、令和元年度より実施していない。これに伴い、令和2年度からは、授業担当教員が自身で授業アンケートを集

計することとした。このことにより、アンケートの内容を担当教員が詳細に分析するきっかけとなれば良いが、授業改善の作業、特に、授業改善報告書（理学部では「授業アンケートの自己分析と今後の対応」）の提出がなおざりになることが危惧された。しかし、少なくとも平成30年度（レーダーチャート配布あり）と令和2年度（レーダーチャート配布なし）で比較したところ、レーダーチャートを作成して教員へ返却しなくとも、「授業アンケートの自己分析と今後の対応」の提出に影響はないという結果が得られた。そこで、令和3年度も引き続き「レーダーチャート配布なし」で「授業アンケートの自己分析と今後の対応」の提出を依頼し、その結果を「表3 『授業アンケートの自己分析と今後の対応』の提出状況」にまとめた。

表3 「授業アンケートの自己分析と今後の対応」の提出状況

	令和2年度			令和3年度		
	前期	後期	計	前期	後期	計
提出科目数	29	34	63	39	53	92
提出教員数	19	16	35	23	33	56

令和2年度の提出教員数は35名、提出科目数は63科目であり、この値は令和2年度以前と大きな違いはなかった。これに対して、令和3年度の提出教員数は56名、提出された授業科目数は92科目へと、教員数、授業科目数とも大幅に増えた。このことは、自身の授業を客観的に見直し、より良い授業にしようとする多くの教員の努力を表しているものと考えられる。「授業アンケートの自己分析と今後の対応」のフォーマットを見直し、成績評価の分布の確認について記入する欄を設けたが、このことが取り組むべき課題を掘起こしたり、あるいは、改善策を考えるきっかけとなり、提出数の増加に結びついた可能性もある。

令和3年度の開講科目数（124科目）と常勤教員数（58名）に基づくと、「授業アンケートの自己分析と今後の対応」が提出された科目の割合は43%、提出した教員の割合は57%となる。令和3年度は、提出した教員数・授業科目数とも大幅に増えたものの、割合は決して高い値ではない。提出の受付期間を延長するなど、より提出しやすい環境を整える必要もありそうだ。

## 2. FD 講演会

令和3年度の理工学研究科・工学部との合同FD講演会、及び、理学部FD講演会は、対面での実施を検討したが、新型コロナウイルスの感染状況を鑑み、オンラインで開催することとなった。

### (1) 理工学研究科・理学部・工学部合同FD講演会

令和3年度の理工学研究科・理学部・工学部合同FD講演会は、工学系委員が世話係となって、令和4年1月19日（水）13時00分～14時00分に開催した。新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、理工学研究科執行部教員などは理工系総合研究棟2階のプレゼンテーションルームに集合し、そのほかの教員は各自の研究室などで、それぞれZoomによるリアルタイムオンライン

配信で参加した。講師は、関西学院大学ライティングセンター・准教授の福山佑樹氏にお願いし、講演題目は、「高等教育におけるアクティブ・ラーニングの実践―理系事例を中心として―」であった。講演内容や詳細については、本報告書の理工学研究科のページを参照されたいが、多くの重要なご示唆を頂いた非常に有益な講演会であった。

## (2) 理学部 FD 講演会

令和3年度の理学部FD講演会は、令和3年9月15日(水)に理学部教授会に引き続いてオンライン形式で開催された。講師には、令和元年度ベストティーチャー賞を授与された物理・宇宙プログラムの中西裕之教授と、令和2年度ベストティーチャー賞を授与された化学プログラムの加藤太郎助教を迎え、授業運営の手法や工夫等をお話し頂いた。本講演会は、Zoomによるリアルタイムオンライン配信により実施し、理学部執行部など一部教員は理学部大会議室にて参加したが、その他の教員は、自室などから参加した。

コロナ禍での遠隔授業への取り組みは2年目となり、学生、教員ともにオンラインでのやりとりに慣れつつあるものの、令和2年度から時間外学習への取り組みが本格化し、新たな教材の作成や授業方法の見直しが必要となっている。会議の多くがオンライン形式となって教員同士の情報交換の機会も減少しており、各教員が個々に手探りで対応を進めている状況である。講演会に先立って教員を対象に行った時間外学習についてのアンケートにおいても、時間外学習に参加する学生が少なく、時間外学習されてしまう等、教員が苦心している様子がうかがえた。そこで、後期授業の開始前に講演会の開催を企画した。

中西教授の受賞はコロナ禍前の授業を対象としたものであったが、コロナ禍前とコロナ禍中でそれぞれ工夫した点についての具体的な内容であった。コロナ禍前の授業では、演習問題やアンケートを通じた授業の振り返りや学生とのコミュニケーションの積み重ねを大事にしたとのことであった。期末試験以外にmanabaの小テストで予習・復習となる演習問題を出題してこまめに学習を促すようにし、学生が畏縮せずに自分で考えるように問題作成や採点方法などを工夫した実例の紹介があった。また、毎回の授業の振り返りのアンケートで講義内容の定着や理解度を確認し、授業中の発言やアンケートの回答に対して丁寧なフォローをしたことも学生からの高い評価につながっていた。遠隔授業に対応したオンデマンド配信動画の作成については、板書形式の授業のように学生にノートを取らせるための工夫や、動画の公開や振り返りのタイムスケジュール等について、独自アンケートによる学生の反応も含めて具体例の提示があった。学生の意見を見ながら次々に改善を加えていき、講義ノートもチェックする等、非常に丁寧に授業の構築をしている様子がうかがえた。



加藤助教は、コロナ禍前から授業中の緊張感を保つために対話を重視しているとのことで、本講演もスライドは使わずに画面に向かって話す形式で実施された。学生が自分で考え、自分の言葉で話し、決めたことを実践できるよう、対面形式であれば教室内を巡回しながら、また、Zoomでのリアルタイムオンライン開講であればアイコン等を話題のきっかけに学生に発言を促すとのことで、講演の中でも実演しながらの説明であった。授業後にも学生が主体的に学び続け、研究対象として興味を持つことができるように、学生の視点で考えることを心掛け、既に解明されていることとともに、まだ解決されていないことも伝えているとのこと



であった。授業の最初に前回の授業の振り返りの時間を設け、次に今回の授業の目標を提示した上で授業を展開し、目標を達成したことを確認する振り返りで締めくくることが授業内容を確認するように授業を構成しているとのことであった。

中西教授、加藤助教ともに学生とのコミュニケーションを積極的に行い、その際に自己肯定感を持たせるように心がけているとのことで、丁寧に努力を積み重ねている姿が印象的であった。教授会と同日開催であったことから、質疑応答含めて1時間という短い時間での開催だったが、参加率は8割程度（58名中45名の参加）と非常に高く、学生の発言の促し方、小テストの出題方法、授業の進め方、成績評価方法、Zoomを使用する場合の学生とのコミュニケーションの取り方等について質問が次々にあがり、関心が高かったことがうかがえた。

（報告：神長 暁子）

### 3. 学生・教職員のFD活動への参加状況

学生・教職員ワークショップへの参加を含め、各部局のFD講演会や学内・学外の教育関連の講演会への参加は、教員の教育スキルの向上だけでなく、FD活動に対する意識の啓発においても重要である。

表4. 令和3年度専任教員のFD活動参加率

合計参加率		94.8 %（専任教員 58名中 55名参加）		
企画別 参加率	理学部FD講演会	77.6 %	（専任教員 58名中	45名参加）
	理工合同FD講演会	58.6 %	（専任教員 58名中	34名参加）
	授業計画改善	65.5 %	（専任教員 58名中	38名参加）
	授業公開・授業参観	1.7 %	（専任教員 58名中	1名参加）
	FD・SD合同フォーラム	3.4 %	（専任教員 58名中	2名参加）
	FD連続セミナー	6.9 %	（専任教員 58名中	4名参加）

令和3年度の常勤教員のFD活動参加率を「表4 令和3年度専任教員のFD活動参加率」にまとめた。58名の常勤教員のうち55名が何らかのFD活動に参加しており、FD活動参加率は、FD参加達成目標の75%を大きく超える95%であった。この値は、令和2年度の88%、令和元年度の93%を超え、最高値を記した。一人で4回以上のFD活動に参加した教員は8名、1回は9名であり、平均は2.4回であった。令和2年度と比較すると、4回以上のFD活動に参加した教員数に変化はなかったものの、いずれのFD活動にも参加しなかった教員は7名から3名へと減少しており、また、1回しか参加しなかった教員数も15名から9名へと減少した。これらのことは、多くの教員が、FD活動に2回以上参加したことを示しており、理学部教員がFD活動の重要性を認識して積極的に参加したことを示している。いずれのFD活動にも参加しなかった教員は3名であったが、担当する履修プログラムでの偏りが見られた。

令和3年度も理工研及び工学部との合同講演会と理学部単独の講演会の二つが開催された。それぞれ参加者数は、34名(58.6%)、45名(77.6%)と良好であった。理学部FD講演会は、教授会終了後に引き続いて開催した。夏季休業期間中で学会なども開催される時期であり、参加者数が少ないのではと危惧されたが、予想に反して45名(77.6%)の参加があった。これまでの理学部FD講演会への理学部教員の参加率は高くても35%程度、ここ数年で最も参加率が高かった令和2年度でも30名(51.7%)であったことを考慮すると、非常に高い参加率であった。詳細については、前出の「2.-(2) 理学部FD講演会」を参照願いたい。コロナ禍中での授業構成・展開の工夫、時間外学習の運営など、理学部教員の多くが課題として捉えている話題であった。それぞれが手探り状態で解決に取り組んでいる共通した話題であり、身近な理学部の教員の講演ということもあって、関心が高かったものと思われる。本講演会は限られた時間ではあったが、聴講者とのディスカッションの時間を多く取って、講演会自体がアクティブラーニング形式となるように実施した。このような実施形態は、令和2年度のオンラインでの講演会に倣った試みであったが、非常に活発に意見交換・情報交換がなされ、理学部教員の問題意識の高さや関心の強さが現れた講演会であった。全学的にも遠隔授業に関する内容のFD連続セミナー、あるいは、FD・SD合同フォーラムが開催されたが、残念ながら、これらの企画への参加率は高くても約7%と、令和2年度と同程度の水準であった。内容はタイムリーで、すぐに自身のFDに役立つような題目の講演が多かったが、令和2年度と同様に、授業時間帯と重なったりするなど、理学部の多くの教員にとっては聴講を見送らざるを得ない時間帯であったのかもしれない。

授業計画改善は、「授業アンケートの自己分析と今後の対応」の提出という方法で実施している。令和2年度は23名(40%)の教員からの提出であったのに対し、令和3年度は38名(65.5%)から提出があり、大きく増加した。令和3年度は、授業の実施形態・内容、あるいは成績評価などについて、遠隔授業への対応が概ね順調に進行し、成績や授業アンケートの結果を分析して今後の授業に活かす方策などを検討する余裕も少しずつ生まれ、「授業アンケートの自己分析と今後の対応」を作成・提出することができるようになったのではないだろうか。

授業公開・授業参観は、令和2年度に引き続いて1名であった。しかし、この数値は、理学部の教員が授業の改善に対する関心が低いというのではなく、授業公開・授業参観のメリットが見えにくいことと、時間的余裕が少ないことが要因ではないかと考えられる。とはいえ、このままでは参加率の向上、ひいては、理学部教員の授業運営のスキルアップにつながることは難しい。参加率が増加しない要因を分析し、気楽に授業公開・授業参観できる雰囲気・環境づくりを工夫する時期に来ているのではないかと考えられる。

#### 4. その他FD委員会での取り組み

令和3年度は、「鹿児島大学ベストティーチャー賞実施要項」の一部改正があった。理学部FD委員会では、「鹿児島大学ベストティーチャー賞実施要項」と齟齬が生じないように、「鹿児島大学理学部におけるベストティーチャー賞の実施に関する申合せ」の一部を改正した。

理学部では、内部質保証システムを構成する一つの要素として、成績評価の分布に関する情報を教員全員で共有し、それぞれの自己点検評価や授業改善に活用するため、次の手順を実施している。まず、成績評価の分布表を全教員に配布し、プログラム会議にて閲覧・確認する。各プログラムのFD委員は、FD委員会にてプログラム会議の結果を報告し、その内容をFD委員で相互に確認する。さらに、FD委員会議の結果を教授会にて報告・確認する。FD委員会の席上、成績評価の分布の確認報告の中には、FD活動に取り入れるべき様々な意見やアイデアが含まれることもある。これらの貴重な意見などは会議メモとして記録してFD委員で共有し、学部のFD活動に反映させることができるようにしている。

理学部FD委員会では、期末授業アンケートの集計が終了した後で、いわゆる授業計画改善書として「授業アンケートの自己分析と今後の対応」の提出を全教員に依頼している。令和3年度は、この「授業アンケートの自己分析と今後の対応」のフォーマットを見直し、成績評価の分布について確認したかどうかを記入できるようにした。また、自由記述欄には、成績評価の分布に対するコメントを記入しやすいように工夫した。

令和3年度は、理学部改組から2年目を迎え、対処すべき問題点や改善すべき課題も徐々に始めている。改組後の理学部のカリキュラムでは、1年生向けには内容を一新した「基礎教育科目」を、2年生以降は専門としない分野を知るための科目として「基礎専門科目」を開設している。基礎的な知識量や勉強意欲の異なる学生に対応するための情報を得て、授業のブラッシュアップに資する機会として、これらの科目を担当する教員の懇談会を執行部の主導で実施した。担当者が担当履修プログラムの枠を超えて抱える悩みや問題点を発掘して共有することができ、いくつかについては、すぐに改善策を実施することができた。参加者には好評を博したのみならず、理学部の教育で重要な位置を占める科目群をさらに教育効果の高いものとするために、懇談会を継続して開催してほしいとの要望が強かった。そこで、令和4年度からは、時間外学習やア

クティブラーニングなどの話題も含めて、FD委員会が主体となってこの懇談会を企画・実施することとした。

令和3年度は、一般社団法人 大学 IR コンソーシアムが主催した「第5回会員向け講演会」に理学部FD委員会委員長が参加した。この講演会は、令和3年11月30日の午後、Zoomによるオンライン講演会の形式にて開催された。詳細については、理工学研究科の「他機関主催FD研修会参加報告」を参照願いたい。

大学 IR コンソーシアム・アンケート令和2年度実施分の結果について、分析・評価した。課題として挙げた点など、簡単にまとめた表を次ページ以降に記し、令和3年度理学部FD活動報告とする。



大学 IR コンソーシアム学生調査結果（令和2年度実施分）の分析について

理学部

<p>評価する点</p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 将来展望を持ち、やるべきことに取組んでいる学生が増えた。</li> <li>2. 3年生では、卒業後に就職するための準備の度合いが、さらに高まった。</li> <li>3. 3年生は、TAなどの補助を受ける機会が多いと回答しており、実習・演習などでのサポートが手厚いことが伺える。</li> <li>4. 1年生のインターネットの利用が増えた。3年生はもともと高水準であり、大きな変化はなかった。</li> <li>5. 授業時間外に学習などに使う時間が増えた。</li> </ol>
<p>課題と考える点 (3点以上)</p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. プロジェクト型の授業やディベート、プレゼンテーションの訓練、専門性のある資格を取得するためのプログラムの受講、教員との個別相談、卒業生や先輩、学外者との情報交換を希望する学生が増えており、対応する必要がある。</li> <li>2. 1年、3年とも進学希望者が減った。</li> <li>3. 1年、3年とも7割近くの学生が授業をつまらないと感じているものの、授業に関連しない勉強をする時間は低レベルのままであった。</li> <li>4. 読書の時間は全くない学生が増え、時間も減った。一方、テレビやゲームに長時間を費やす学生の数が増えた。アルバイトや大学で過ごす時間が減った分が、テレビやゲームで浪費されている可能性がある。</li> <li>5. これまでの傾向と異なり、高校時代の経験では、授業以外に興味のあることを勉強したり、作文の練習をしたり、読書をした学生の割合が低かった。</li> </ol>
<p>課題への 具体的な対応案</p>	<p>課題1と2は、評価する点1と2の裏返しとも考えられる。課題3と4は、大きな問題である。課題4は、コロナ禍にあることが大きく影響していると考えられる。課題1から課題4については、現在実施しているキャリア教育を中心として、情報提供の機会を増やすことを検討する。また、オンデマンド授業や時間外学習の課題などを工夫することにより、改善できる可能性があり、授業計画・内容や実施方法について、教員間の情報交換の場を設ける。</p> <p>課題5に対しては、入試倍率が低かったことと関連している可能性があり、今後の動向を注視する。出前授業、オープンキャンパスなども含めて、高等学校との連携を活用し、自発的に学習することの面白さや重要性を伝える。</p>
<p>昨年度挙げた 改善・対応策の 進捗状況</p>	<p>&lt;授業計画や実施方法などの検討&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 理学部は改組後、1年生向けには内容を一新した「基礎教育科目」を、2年生以降は専門としない分野を知るための科目として「基礎専門科目」を開設している。基礎的な知識量や勉学意欲の異なる学生に対応するための情報を得て、授業のブラッシュアップに資する機会として、これらの科目を担当する教員の懇談会を実施した。令和4年度からは、時間外学習やアクティブラーニングなどの話題も含めて、取り組む予定である。</li> <li>・ 1年生にとっては、相談相手となる教員がわかりにくいので、担任の決定方法を見直した。</li> </ul> <p>&lt;インターネット環境などの整備&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 入学前に新生生のネット環境を把握し、遠隔授業に対応可能なネット環境の整備をサポートした。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 対面と遠隔がモザイクとなっても受講に支障がないように、空き教室の情報を記入した時間割を配布・掲示した。</li> <li>・ Wi-Fi の接続スポットを拡充し、共通スペースにコンセントを増設した。</li> </ul>
<p>コロナウイルス感染症対応に関する本学・各部署の取組との関連に影響すると思われる回答と その内容</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 専門分野や学科の知識、批判的に考える能力、人間関係を構築する能力、プレゼンテーション能力が増えたと感じる学生が減った。1年生がその傾向は強い。</li> <li>・ 授業や実験に出る時間は、週あたり 20 時間以上の学生は極端に減少、11 時間以上をカウントして、やっと前年度の 20 時間以上の数字に届く程度。</li> <li>・ 1年生は、休み時間にクラスメートと情報交換したり、時間外に一緒に勉強するなどの学生間の交流が著しく低下した。</li> <li>・ 1年生は、学内施設の利用も低かった。</li> <li>・ 1年生は、実験や実習などで学ぶ機会が極度（69→10%）に低下した。3年生はほぼ変化なし。</li> <li>・ 授業時間外に教員と面談する学生は1年生、3年生とも減少した。</li> <li>・ 部活動や同好会に参加する機会・時間ともに減った。特に1年生は、全くない学生がほぼ4割に達した。</li> <li>・ アルバイトの時間は全くないとの回答が増え、時間数も減った。</li> <li>・ 特に1年生で、大学のサービスを受ける、教員と顔見知りになる、友情を深めるなどが、軒並み低い値となっており、大学への適応感を得られていない。</li> <li>・ 1年生は大学生活の充実感と満足感が低下した。3年生の場合は、これまでの実績があるので、落ち込みはさほど大きくない。</li> </ul>



医学部 医学科

# 令和3年度医学部医学科 FD 活動報告

## 1. はじめに

医学部医学科では、1)『学生による授業評価アンケートの実施と、アンケート結果のフィードバックに対する教員からの意見収集』、2)『卒業生アンケートの実施』、3)『医学教育や診療参加型実習に関する教職員の国内研修』、4)『学内講師による医学教育講演会及び研修会』を実施した。上記4つの活動計画に基づき、中期目標及び年度計画に掲げられた「専任教員のうち75%以上のFD活動参加」の達成を目標に定め、令和3年度のFD活動を行ったので報告する。

### 2-1. 学生による授業評価アンケート

本学科では全授業科目(実習を含む)を対象とした学生による授業評価アンケートを平成23年度から実施しており、令和3年度も同様に実施した。まず1年生から4年生までの専門教育科目48科目(1科目の中で複数回アンケートを行っている科目あり、選択科目・臨床実習を除く)については、学習と授業に対するアンケート用紙を学務課医学教務係から科目責任者に配布し、科目責任者が試験時(試験を実施しない科目については授業最終回)にアンケートを実施した。

また、授業評価アンケートの実施方法について、今年度から紙媒体による実施だけではなく、学習管理システム「manaba」を利用したwebアンケートも実施した。この場合は、授業最終回に回答時間を確保して実施している。

なお、今年度、2つの方法で授業評価アンケートを実施する中で、学生からの自由記述意見に、紙媒体かmanabaかどちらかの方法に統一してほしいとの要望があった。これを受け、実施方法についてFD委員会医学科部会において検討し、集計の効率化を図る観点からも、令和4年度以降は実施方法をmanaba上での実施によるwebアンケートのみとすることとなった。

1年生から4年生までのアンケートは、学生の学習の実態とカリキュラム、教員の指導方法について具体的な改善点を明らかにするために実施し、学生自身の学習に対する自己評価(4項目)、科目について(8項目)、講師の指導について(5項目)、全体評価(1項目)の各項目について5段階の評定尺度で回答し、さらに自由記述欄に自由な意見を記載してもらった。

なお、結果は医学教務係が速やかに集計した後、結果及び自由記述内容を科目責任者とコースコーディネーターに報告した。

次に4年次の1月から開始する臨床実習では、実習開始前のオリエンテーション時にアンケートの目的や内容、実施方法を説明した後、それぞれの臨床実習ユニット（診療科をグループに分けたもの）での実習について、実習終了時に授業評価アンケートを実施した。また、6年生の選択実習では、6年次 OSCE（Objective Structured Clinical Examination：客観的臨床能力試験）終了時にアンケートを実施した。

5年生から6年生までのアンケートは、自身の学習に対する評価（6項目）、実習計画・実施について（5項目）、指導について（1項目）、全体評価（1項目）の各項目について3～11段階での評定尺度における回答を集計し、自由記述欄に自由な意見を記載してもらった。

なお、アンケート用紙は記名式で、学生の記載後は学生自身によって学務課医学教務係に届けられ、教員や指導生の目に触れることが無い状況で実施した。

令和4年度からは、臨床実習・選択実習アンケートについても manaba 上での実施による web アンケートへと移行することとした。

## 2-2. アンケート結果

全てのアンケート結果は医学部 FD 委員会医学科部会、医学部教務委員会医学科部会、医学科会議にそれぞれ報告した。以下にアンケート結果の概要を記載する。

1年生から4年生までの専門教育科目全48科目（内、アンケートを2回実施した科目が1科目、3回実施した科目が1科目、計51回実施）から計4,101件（平均80件/科目）、臨床実習では前期（4年次の1月から5年次の7月上旬）272件、後期（7月中旬から翌1月）104件の計376件（平均47件/臨床実習ユニット）、6年生の選択実習では539件の回答が得られた。

アンケートの自身の学習に対する評価という項目について、1年生から4年生までの専門教育科目（【別表1】参照）においては、令和2年度の評価平均が3.83～3.98であったのに対し、令和3年度は3.93～4.09となっている。5年生の臨床実習（【別表2】参照）では令和2年度の評価平均が4.14～4.35であったのに対し、令和3年度は4.31～4.61、6年生の選択実習（【別表3】参照）では令和2年度の評価平均が4.08～4.31であったのに対し、令和3年度は4.21～4.38となっていて微増している。低学年、主に1年生のうちは、まだ高校までの「受動的学習」から大学における「能動的学習」への意識の変革が進まず、自主的な学習が十分に行われているとは言えない状況ではあるが、学年が進むにつれて自主的な学習に対する意識の向上が見受けられる。

また、全体的に見ると、令和3年度は令和2年度と比較して学生の自己評価や、科目についての評価、講師の指導の評価、全体評価が高くなっている。医学科がこれまで行ってきた

FD活動がこの結果につながっているのだとすれば幸いである。

なお、臨床実習及び選択実習では、学生を診療の課題解決の場に参加させる「診療参加型実習」の実践が求められている中、学生の回答における診療参加型の割合は、臨床実習では令和2年度が39.9%に対して令和3年度は42.4%と増加し、選択実習においても令和2年度の37.1%に対して令和3年度は45.7%と増加した。選択実習の見学・講義型の割合は、令和2年度が54.1%だったのに対して令和3年度は39.6%へと大きく減少した。

令和2年度は新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止の観点から、多くの診療科が見学・講義型の実習を実施したことにより、「診療参加型」の割合が少なく「見学・講義」の割合が多かったが、今年度はこれまでの新型コロナウイルス感染症対策のノウハウが蓄積し、可能な範囲で診療参加型実習を実施できたことにより、「診療参加型」の割合が増加したと考えられる。引き続き、診療参加型実習推進のための取り組みが重要と考える。

【別表1】授業評価アンケート集計結果(1年生～4年生)

自身の学習に対する評価	1 全く行 なかつた	2	3 どちらとも いえない	4	5 非常に 行った	該当なし	評価平均	SD
積極的に学習した(質問・予習・復習)	0.6	2.8	16.5	49.8	30.3		3.98	0.73
教科書や参考文献で広く、深く学習した	0.8	4.7	21.4	46.6	26.4		3.93	0.78
原理の理解や臨床への応用を考えながら学習した	0.6	2.3	15.2	48.9	31.7		4.09	0.73
グループ学習ではグループのために貢献した	1.0	1.2	15.5	38.7	32.3	42.5	4.09	0.76
科目について	1 全くそ う思わ ない	2	3 どちらとも いえない	4	5 非常に そう思 う		評価平均	SD
シラバスには必要な情報がわかりやすく記載されていた	0.9	2.2	21.1	46.7	29.1		4.00	0.77
学習内容は有用である	0.9	1.9	10.0	44.5	42.7		4.28	0.70
効果的な学習方法が用いられた	1.2	3.2	14.8	46.2	34.5		4.09	0.78
他の授業との関連や発展がよく理解できた	1.0	2.0	13.9	48.0	35.0		4.13	0.73
科目の教育目標に沿った評価(範囲、内容、レベル)だった	1.2	1.9	13.0	49.2	34.7		4.14	0.73
学習した領域への興味、関心が高まった	0.8	1.9	12.6	45.8	38.9		4.19	0.74
難易度は	1 難しい	2	3 適切	4	5 易しい		評価平均	SD
難易度は	7.8	19.8	61.6	6.5	4.2		2.78	0.69
時間数は	1 長い	2	3 適切	4	5 短い		評価平均	SD
時間数は	3.1	6.7	76.8	10.4	3.0		3.02	0.58
講師の指導について	1 全くそ う思わ ない	2	3 どちらとも いえない	4	5 非常に そう思 う	該当なし	評価平均	SD
講義・実習等はよく準備されていた	1.0	2.8	11.8	45.6	38.8		4.17	0.77
理解を促すための工夫がされていた	1.1	3.3	13.3	44.9	37.4		4.13	0.79
質問を促し、積極的に質問に応じてくれた	0.7	2.2	16.0	42.9	38.2		4.15	0.76
学習領域の講師として適切であった	1.0	1.6	10.6	43.2	43.5		4.27	0.71
授業を担当した複数の講師は連携して効率的に指導した	1.1	2.4	14.6	43.2	37.7	9.8	4.14	0.79
全体評価	1 全くそ う思わ ない	2	3 どちらとも いえない	4	5 非常に そう思 う		評価平均	SD
この授業を来年度の学生にも勧めたいと思う	1.4	2.3	15.3	43.8	37.2		4.12	0.78

【別表2】臨床実習アンケート集計結果(5年生)

自身の学習に対する評価	1 全く行わ なかった	2	3 どちらとも いえない	4	5 非常に 行った		評価平均	SD
積極的に実習した	0.0%	0.3%	3.7%	51.1%	44.9%		4.41	0.58
実習に関連する項目を自主学習した	0.0%	0.3%	4.3%	52.1%	43.4%		4.39	0.58
診療のルールに従って行動した	0.0%	0.3%	2.7%	37.9%	59.2%		4.56	0.56
患者・スタッフに医学生として礼儀正しく振る舞った	0.0%	0.3%	2.9%	32.4%	64.4%		4.61	0.56
グループメンバーを助け、協働して学習した	0.8%	0.8%	7.2%	49.1%	42.1%		4.31	0.71
<b>実習計画・実施について</b>							平均	SD
主な実習方法は								
診療参加型							42.4%	1.99
模擬診療型							21.3%	1.43
見学・講義							39.2%	1.83
<b>指導について</b>	1 全くそう 思わない	2	3 どちらとも いえない	4	5 非常に そう思う		評価平均	SD
指導医はあなたの学習を熱心に支援した	0.0%	0.3%	2.4%	38.7%	58.7%		4.56	0.56
<b>全体評価</b>	1 全くそう 思わない	2	3 どちらとも いえない	4	5 非常に そう思う		評価平均	SD
この授業を来年度の学生にも勧めたいと思う	0.0%	0.8%	3.7%	41.3%	54.1%		4.49	0.61

【別表3】選択実習アンケート集計結果(6年生)

自身の学習に対する評価	1 全く行わ なかった	2	3 どちらとも いえない	4	5 非常に 行った		評価平均	SD
積極的に実習した	0.0%	0.9%	9.7%	48.9%	40.5%		4.29	0.67
実習に関連する項目を自主学習した	0.0%	0.7%	8.4%	48.7%	42.2%		4.32	0.66
診療のルールに従って行動した	0.2%	0.0%	8.2%	46.7%	44.9%		4.36	0.65
患者・スタッフに医学生として礼儀正しく振る舞った	0.2%	0.0%	7.3%	46.6%	45.9%		4.38	0.64
グループメンバーを助け、協働して学習した	0.0%	0.0%	16.3%	46.1%	37.6%		4.21	0.70
<b>実習計画・実施について</b>							平均	SD
主な実習方法は								
診療参加型							45.7%	3.08
模擬診療型							16.5%	1.79
見学・講義							39.6%	3.15
<b>指導について</b>	1 全くそう 思わない	2	3 どちらとも いえない	4	5 非常に そう思う		評価平均	SD
指導医はあなたの学習を熱心に支援した	0.0%	0.7%	6.7%	32.8%	59.7%		4.51	0.65
<b>全体評価</b>	1 全くそう 思わない	2	3 どちらとも いえない	4	5 非常に そう思う		評価平均	SD
この授業を来年度の学生にも勧めたいと思う	0.2%	0.9%	8.0%	33.0%	57.9%		4.47	0.70

### 2-3. web アンケートの実施について

これまで web アンケートによる実施では、アンケート回答率が低下することが危惧されていた。今年度、1年生から4年生までの授業評価アンケートのうち、manaba でアンケートを実施した科目は 22 科目であり、このうち、令和2年度と比較して回答率が上がった科目は7科目、下がった科目は 15 科目との結果であった。結果的に、科目数だけを見ると回答率は低下している。しかしながら、昨年度までの紙媒体実施ではアンケート用紙の配布を失念して回答率が0%になる科目もあったが、今年度においてはその事例はなかった。manaba で実施した場合、担当職員が回答率を確認することができるため、回答率低下という点は改善可能であると考え。次年度以降については、回答率に注意して実施したい。

また、臨床実習アンケートについては、前年度と比較して回答率が大きく低下した。提出方法は、実習終了後に記入したアンケート用紙を学務課まで学生自身に持参させるようにするものだが、今年度は提出を失念する学生が多かったものと推測できる。これについても、実施方法を Web アンケートに変更して回答のアナウンスを促すことにより、回答率の向上が期待できる。より多くの回答を得ることで、教育活動の改善につなげていきたい。

### 2-4. アンケート結果のフィードバックに対する教員からの意見収集

以前から授業(実習)評価アンケートの結果を各担当教員にフィードバックしていたが、平成28年度からそのアンケート結果等に対する各担当教員からの意見収集を開始している。

実施方法については、授業(実習)評価アンケート結果とともに意見収集のための様式をメールで送付し、各科目の責任者及びコースコーディネーターが担当教員の意見をとりまとめた上で、様式に記入し、学務課医学教務係に提出するという形で行った。

様式については、授業評価アンケート集計結果にみられる学生の要望・傾向等の分析及び評価について、学生の要望・傾向等に対する授業科目への反映について、その他(授業評価アンケートに対するご意見など)という3項目を用意し、それぞれに対する意見を記入してもらった。

意見収集の結果として、37科目延べ72名の教員から回答が得られた。学生の意見等を今後の授業に反映させる必要があるという意見が大多数であり、PDCA サイクルの活性化という当初の目的が十分に達成されたと考えられる。教員からの意見を踏まえ、必要とされる教育的素養について議論を行い、それらを改善できるような FD 研修会の開催を今後も継続して検討していく予定である。



### 3. 卒業生アンケートの実施

医学科では教育内容やカリキュラム等の現状分析並びに改善を目的として、平成 28 年度から卒後 3 年目と 10 年目の卒業生に対してアンケート調査を実施している。実施方法は、鹿児島大学医学部医学科同窓会（鶴陵会）の協力を得て、会報誌の発送時（3 月）に卒業生アンケートの依頼文書を同封し、依頼文書に載せている URL 又は QR コードから web で回答してもらうものである。併せて、卒業時点で学務 web システムに登録されていたメールアドレスに回答をお願いする通知を送信して依頼した。

今回、同窓会が現住所を把握できている 170 名に送付し、59 名から回答を得られた。その結果、初期臨床研修開始時に医学英語に関する能力が不足していたとの回答が得られ、教務委員会医学科部会と情報を共有した。卒業生アンケートについては継続して実施していく予定である。

### 4. 医学教育や診療参加型実習に関する教職員の国内研修

国内研修については、医学教育や IR、診療参加型臨床実習に関連する研修等に教職員が参加することとした。

これを受け、令和 3 年度は 1 名の教員が令和 4 年 1 月 22 日、23 日に岐阜大学医学教育開発センター主催のオンライン研修会「第 81 回医学教育セミナーとワークショップ」に参加した。

このワークショップへの参加によって、Institutional Research（IR）についての必要性・効果を学ぶとともに、情報収集を十分に行うことができた。

## 5. 学内講師による医学教育講演会及び研修会

### 5-1 『入学試験面接評価者講習会』

日 時：令和3年12月20日（月）15：00～16：30

主 催：医学部FD委員会医学科部会、医学部入試委員会医学科部会

会 場：鶴陵会館 中・小ホール

講 師：橋口 照人（医学部長）

郡山 千早（入試委員会医学科部会長）

田川 まさみ（医歯学教育開発センター長）

対象者：医学科入学試験面接担当予定教員

参加者：45名

目 標：本学科のアドミッションポリシーに基づく評価基準に従った公平で信頼性の高い面接評価を行いながら、受験生の能力を引き出す方法について、講義やグループワークで習得する。

総 評：面接評価者にとって面接の進め方や評価基準の標準化がより重要となる一方で、面接質問事項は多様化が求められている。今回の講習会は、医師としての適正のある受験生の資質・能力を明らかにするためにはどのように質問の工夫を行えばよいか等の、ルーブリックを検討するディスカッション形式の講習会を行った。次年度以降も講習会を継続して実施していくことが望ましい。



## 5-2 『医学科新任教員 FD 研修会』

日 時：令和4年1月11日（火）15:00～16:45

主 催：医学部 FD 委員会医学科部会

会 場：基礎講義実習棟 第1講義室

講 師：橋口 照人（医学部長）

下堂 蘭 恵（医学部教務委員会医学科部会長）

田川 まさみ（医歯学教育開発センター長）

西 順一郎（FD 委員会医学科部会長）

対象者：医学部医学科の教職員

参加者：18名

目 標：鹿児島大学医学部医学科の教育目標、教育理念、カリキュラムを理解し、本学の教員として求められる教育への関わり、責務を認識する。

総 評：令和2年度11月以降・令和3年度に医学科教員として採用された教員を対象に教育理念やカリキュラム、鹿児島大学の医学教育の特色と課題について講話をおこなった。また、グループワークを実施し、自由に意見交換することで、上記目標の達成に大変有意義であった。



5-3 『ベストティーチャー賞受賞者による講演会』

日 時：令和4年2月7日（月）16：00～16：50

主 催：医学部 FD 委員会医学科部会

会 場：Zoom によるオンライン講演

講 師：下堂 蕙（リハビリテーション医学分野 教授）

嶽崎 俊郎（国際離島医療学分野 教授）

三井 薫（遺伝子治療・再生医学分野 准教授）

対象者：教職員

参加者：27名

目 標：講義における具体的な工夫内容や進め方について、知識を習得し、教育内容・方法の改善に資する。

総 評：令和2年度の医学科最優秀ベストティーチャー賞受賞者である下堂蕙教授に「令和2年度の授業や実習を振り返って」との演題で、医学科ベストティーチャー賞受賞者の嶽崎教授には「離島フィールドを活用して疫学研究を学ぶ」、三井准教授には「「ベストティーチャー賞」を受賞して」との演題で、それぞれ授業で実践している工夫等これまでの取り組みをご紹介いただき、授業参加誘導等の実践方法を学んだ。アクティブラーニングの推進や今後の講義内容等を考えるうえで大変有意義であった。授業の質の向上に資するためにも、本講演会は継続して実施していきたい。

## 6. おわりに

令和3年度は前述の4つの活動計画に基づいて本学科のFD活動を行ったが、最終的な専任教員の参加率は75.9%（医学科所属教員数145人中110人参加）となり、目標に定めた「専任教員のうち75%以上のFD活動参加」は達成された。しかしながら、令和2年度に引き続き、令和3年度においては新型コロナウイルス感染症の感染拡大を受け、当初実施予定であった「医学教育や診療参加型実習についての学外講師による講演会」を実施できなかった。

令和4年度に向けては、一般社団法人日本医学教育評価機構（JACME）による医学教育分野別評価受審の結果を受けて、今後の医学教育の改善に資するために、改善指摘事項に挙げられた「臨床教授へのFD活動」、「診療参加型臨床実習」に関連する研修会の実施を行うなど、引き続き医学教育の体制を見直し、教育体制をより充実させるようなFD活動を行っていくことが、本学科の今後の発展に非常に重要である。

また、令和4年度には、CC-EPOC（卒前に行われる臨床実習の評価をオンラインで記録できるツール）の運用開始に伴い、使用方法等の研修会を実施する必要があるため、学外講師を招聘し、充実した研修会となるように準備を進めていきたい。

今後もFD活動を通じて、本学科の大学教育及び医学教育の現状を分析し、継続的な改良につなげていくことで学生の教育環境改善に貢献していく予定である。

最後に、大学IRコンソーシアム・アンケートの令和2年度実施分の結果について、令和元年度実施分と比較して分析・評価を行った。評価する点や課題として挙げた点など、簡単にまとめた表を次ページ以降に示し、令和3年度医学部医学科FD活動報告を終了する。

大学 IR コンソーシアム学生調査結果（令和2年度実施分）の分析について

<p>評価する点</p>	<p>(鹿児島大学全体と比較した上で)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「学生自身が文献や資料を調べる」機会が高く、自学自習の習慣が身についている。</li> <li>・英語能力が高い水準にある。</li> </ul>
<p>課題と考える点 (3点以上)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「授業をつまらなく感じた」という項目が「ときどきした」、「ひんぱんにした」の合計が50%を超えている。</li> <li>・「教員が提出物に添削やコメントをつけて返却する」比率が鹿児島大学全体と比較して低い。</li> <li>・「授業中に居眠りをした」との項目で「ときどきした」が47.0%に上っている。</li> </ul>
<p>課題への 具体的な対応案</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2年連続で行っているが、引き続きベストティーチャー賞受賞者などの授業評価の高い教員に「授業時の工夫」等についての講演を依頼し、アクティブラーニングの推進に取り組む。</li> <li>・学生に対して充実したフィードバックを行うように努める。</li> <li>・「学生を飽きさせない工夫」として、動きのあるスライドの作成やアクティブラーニング等の授業の組み立て方を検討する。</li> </ul>
<p>昨年度挙げた 改善・対応策の 進捗状況</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・(課題) 1年次と比較し、3年次になると遅刻が増加している (具体的な対応案) 遅刻に対するペナルティの強化、授業開始時にレスポンドで参加確認をするなどの工夫 (進捗状況) 遅刻については減少している。引き続き、現状より遅刻が減少するように努める。</li> <li>・(課題) 読書時間が少ない (具体的な対応案) 教養を身につけるためにも、適切な推薦書を紹介するなど読書を楽しむ機会を作る工夫をおこなう (進捗状況) 読書時間は増加しておらず、推薦図書を紹介するなど引き続き工夫を行う必要がある。</li> <li>・(課題) (1年次質問) 高校のころに授業中に質問をした学生の割合が少ないため、受動的教育に慣れている実態がみられる (具体的な対応案) 学生の質問を促す講義方法が求められる (進捗状況) 新任の教員に対して、医学科独自の新任教員FD研修会を開催し、アクティブラーニングの推進・重要性等について講演を行っている。また、医学科ベストティーチャー賞受賞者に講師を依頼して「授業時における工夫」という内容で講演を行っている。前述等により、アクティブラーニングの推進に取り組んでいる。</li> </ul>

<p>コロナウイルス感染症対応に関する本学・各部署の取組との関連に影響すると思われる回答とその内容</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・問5C：インターネットを使って授業課題を受けたり、提出したりした →「ひんぱんにした」との回答が前年度の23.2%に対して、今回は69.0%に増加しており、新型コロナウイルス感染症対策としてオンラインでの授業を実施したことが影響していると考えられる（上級生調査）。</li> <li>・問5M：大学の教職員に将来のキャリアを相談した（卒業後の進路や職業選択など） →「まったくしなかった」との回答が前年度の55.8%に対して、今回は72.0%に増加している。医学科は6年次までであるので、この問については3年次での調査でも時期が早いかもしれないが、オンライン授業実施により登校の機会が減少し、対面で教職員と接する機会も減少したことにより、相談する機会が少なくなったと考えられる（上級生調査）。</li> </ul>
---	---







医学部 保健学科・  
保健学研究科

# 令和3年度 医学部保健学科・保健学研究科 FD 活動報告

## 医学部保健学科 FD 活動

### はじめに

令和3年度医学部FD委員会保健学科部会の活動として以下を実施した。

1. 学生による授業評価アンケート及び学生アンケート結果に対する教員のフィードバックアンケート
  2. 遠隔授業に関するアンケート
  3. FD講演会・研修会の実施
    - 1) 保健学科における教学IR (Institutional Research)推進のための講演会
    - 2) 面接試験の実施と評価方法に関する講演会
    - 3) 学外講師による保健学教育講演会または研修会（理学療法学専攻）
    - 4) 学外講師による保健学教育講演会または研修会（作業療法学専攻）
  4. ベストティーチャー賞推薦のための学生アンケートおよび各専攻ベストティーチャー賞の選考
  5. 教務委員会との連携による授業参観の実施
  6. FD活動への教員参加状況の把握
- 以下にその概略を述べる。

## 1. 学生による授業評価及び学生アンケート結果に対する教員のフィード

### バックアンケート

#### 1)方法

実習、演習と非常勤講師による授業を除く全ての授業科目を対象として、学生による授業評価を実施した。学生による授業評価は各授業の最終講義後に学生に周知し、manaba で回答を得た。アンケート結果は、学務課で取りまとめることとし、回答学生が教員には特定されないことを十分に周知したうえで実施した。授業評価のアンケート項目以下の通りである(表1)。

#### 2)授業評価アンケートの回収状況

<令和2年度>

- ・前期授業:授業評価アンケート回収率:52%(全科目平均)  
教員フィードバックアンケートの科目回収率:80%
- ・後期授業:授業評価アンケート回収率:20%(全科目平均)  
教員フィードバックアンケートの科目回収率:65%

## <令和3年度>

- ・前期授業:授業評価アンケート回収率:53%(全科目平均)  
教員フィードバックアンケートの科目回収率:34%
- ・後期授業:授業評価アンケート回収率:53%(全科目平均)  
教員フィードバックアンケートの科目回収率:34%

表1. 令和3年度授業評価アンケート

質問内容	5	4	3	2	1
出席状況は良好だった。	非常に 良好だった	かなり 良好だった	良好だった	良くなかった	非常に 良くなかった
授業に意欲的に取り組む努力をした。	非常に努力した	かなり努力した	努力した	あまり 努力しなかった	努力しなかった
授業の予習あるいは復習をした。	非常に 予習復習をした	かなり 予習復習をした	予習復習を した	あまり 予習復習を しなかった	予習復習を しなかった
授業科目にふさわしい内容であった。	非常に ふさわしかった	かなり ふさわしかった	ふさわしかった	あまり ふさわしく なかった	ふさわしく なかった
シラバスの内容は明確であった。	非常に 明確であった	かなり 明確であった	明確であった	あまり 明確でなかった	明確でなかった
授業内容はシラバスに 沿ったものであった。	非常に 沿っていた	かなり 沿っていた	沿っていた	あまり 沿って いなかった	沿って いなかった
授業の難易度は以下の通りであった。	丁度よかった	やや 簡単であった	簡単であった	かなり 難しかった	非常に 難しかった
この授業を他の学生にも 勧めたいと思う。	非常にそう思う	かなりそう思う	そう思う	あまり思わない	思わない
この授業は自分にとって 価値があった。	非常にそう思う	かなりそう思う	そう思う	あまり思わない	思わない
授業が一方的な知識の伝達だけでな く、双方向（アクティブ・ラーニング の導入など）に行われた。	非常にそう思う	かなりそう思う	そう思う	あまり思わない	思わない
シラバスに記載されていた学習目標を 達成できましたか	非常にそう思う	かなりそう思う	そう思う	あまり思わない	思わない

### 3) 学生による授業評価アンケートの結果

前期開講分は76科目、後期開講分は69科目からアンケートを回収した。前期開講、後期開講別にアンケートの中の各項目について評価点(1～5)の平均値と標準偏差を求めた。点数が高いほど評価が良いことを示している。前期開講科目と後期開講科目のそれぞれについて、令和元年度と令和2年度との比較を表2、3に示す。

表2. 学生による授業評価の前期開講科目の令和2年度と令和3年度との比較(平均点)

質問項目	令和2年度 (71科目)		令和3年度 (76科目)	
	平均	標準 偏差	平均	標準 偏差
出席状況は良好だった。	4.52	0.22	4.11	0.91
授業に意欲的に取り組む努力をした。	3.95	0.25	4.13	0.89
授業の予習あるいは復習をした。	3.23	0.47	4.44	1.13
授業科目にふさわしい内容であった。	4.07	0.32	3.98	0.96
シラバスの内容は明確であった。	3.92	0.30	4.20	0.89
授業内容はシラバスに沿ったものであった。	3.91	0.28	3.90	0.99
授業の難易度は以下の通りであった。	4.30	0.45	3.81	0.90
この授業を他の学生にも勧めたいと思う。	3.88	0.34	4.11	0.91
この授業は自分にとって価値があった。	4.04	0.36	4.13	0.89
授業が一方的な知識の伝達だけでなく、 双方向(アクティブ・ラーニングの導入など)に行われた。	3.79	0.41	4.44	1.13
シラバスに記載されていた学習目標を達成できましたか	3.67	0.25	3.98	0.96

\*各質問項目に対して1点から5点の5段階で評価

表3. 学生による授業評価の後期開講科目の令和2年度と令和3年度との比較(平均点)

質問項目	令和2年度 (66科目)		令和3年度 (69科目)	
	平均	標準 偏差	平均	標準 偏差
出席状況は良好だった。	4.52	0.34	4.63	0.83
授業に意欲的に取り組む努力をした。	4.00	0.48	4.12	0.91

授業の予習あるいは復習をした。	3.22	0.62	3.47	1.00
授業科目にふさわしい内容であった。	4.19	0.46	4.25	0.88
シラバスの内容は明確であった。	4.08	0.46	4.14	0.89
授業内容はシラバスに沿ったものであった。	4.11	0.43	4.11	0.89
授業の難易度は以下の通りであった。	4.21	0.69	4.48	1.13
この授業を他の学生にも勧めたいと思う。	3.98	0.46	4.03	0.98
この授業は自分にとって価値があった。	4.18	0.45	4.20	0.91
授業が一方的な知識の伝達だけでなく、 双方向（アクティブ・ラーニングの導入など）に行われた。	3.83	0.49	3.93	0.98
シラバスに記載されていた学習目標を達成できましたか	3.83	0.47	3.84	0.91

\*各質問項目に対して1点から5点の5段階で評価

#### 4) 結果の解釈

##### ① 学生自身の自己評価

授業への出席状況は、前期は4.11点であったが、後期は4.63点と改善し、前期は1年生が遠隔授業などに当初対応できていなかった可能性があり、1年生の入学時における遠隔授業への対策が必要である。意欲的に取り組む努力については、令和2年度よりも前後期ともに増加しており、学生の授業への自覚や教員の魅力的な講義への取り組みの成果と考える。

##### ② 授業に関する評価

授業科目の内容に関する項目として、「授業科目にふさわしい内容であった」、「この授業は自分にとって価値があった」については、4点以上の評価であり、一定の授業の質が確保されていると考えられた。いずれも令和2年度に比べて増加の傾向であり、改善に向けた取り組みの成果が出ている。

##### ③ アクティブ・ラーニングに関する評価

授業が一方的な知識の伝達だけでなく、双方向（アクティブ・ラーニングの導入など）に行われた」という項目に関しては、前期は4.44点、後期は3.93点であり、令和2年度と比較して、前期科目では大幅に改善されていた。アクティブ・ラーニングに対する教員の認識が高まり、アクティブ・ラーニングが定着しつつある。一方、アクティブ・ラーニングの導入に積極ではない科目もあり、今後の聞き取りと導入に向けての理解を得る必要がある。さらに、対面および遠隔授業におけるアクティブ・ラーニングの在り方を検討していく必要があると考えられた。

#### 5) 学生授業評価アンケート集計結果の教員へのフィードバックに対する授業担当教員からの意見

教員フィードバックアンケートの科目回収率は、令和2年度に比べて大幅な低下が認められた。昨

年度は実施方法を紙面から manaba に移行したため、教員フィードバックの実施方法の周知を行ったことにより回収率の向上に繋がったと思われる。今後は、教員フィードバック回収率の向上に向けて、周知方法や実施時期の検討がさらに必要であると考えられた。

教員からのフィードバックアンケートは各教員が担当する授業科目に対する学生の授業評価アンケートを、教員が自己評価するものである。評価の項目は、学生の自身に対する学習の評価、科目に対する学生からの評価、講師に対する学生からの評価、全体評価の 4 項目であり、学生アンケートの自由記述での回答も含まれており、教員にとって開講授業の方法や内容を振り返るうえで貴重な情報となっていると思われる。

## 2. 遠隔授業に対する学生アンケートの実施

令和2年度に引き続き、令和3年度においてもコロナ禍により遠隔授業にて対応する科目が多く存在するため、遠隔授業に対するアンケートを施行した。表 4 に遠隔授業に関するアンケート項目を示し、表5にアンケート結果を示す。

### 1) 遠隔授業導入の割合 (授業評価アンケートの対象科目)

前期科目:76 科目中 76 科目 (うち、48 科目 (63%)は遠隔のみ)

後期科目:69 科目中 69 科目 (うち、32 科目 (46%)は遠隔のみ)

※学生のアンケート結果に基づく集計

### 2) 遠隔授業の満足度や理解度

5 点満点中で満足度は前期 3.83 点、後期 3.98 点、理解度は前期 3.73 点、後期 3.93 点であり、満足度、理解度とも比較的良好な結果であり、昨年度と比較して僅かではあるが改善傾向がみられる。新型コロナウイルスにより遠隔授業が導入されて2年目になり、教員および学生の双方で遠隔授業について適応しつつあり、授業方法や内容にも改善がみられてきているが、さらなる対策改善が必要である。

### 3) 対面と遠隔での理解度の違い

遠隔と対面で理解度の違いがないと回答したものは、前期 32%、後期 42%であり、遠隔の方が理解度が低いと回答したものが前期 36%、後期 26%であり、前期と比較して後期では遠隔授業に慣れて適応していることが伺える結果であった。また、約 10%の学生で遠隔の方が理解しやすいと回答していた。これらの結果は、講義科目によっても差異があり得る。

表4. 令和3年度遠隔授業に関する授業評価アンケート

質問内容	5	4	3	2	1	—
本科目の2021年度前期の講義形態は以下のいずれでしたか。	—	対面授業のみ	遠隔授業と対面授業の組み合わせ	Zoomでのリアルタイム配信はなく、オンデマンドによる動画視聴や課題作業、manabaでの課題提示などの遠隔授業のみ	Zoomでのリアルタイム配信による遠隔授業のみ	
本科目の遠隔講義の全体を通しての満足度はいかがですか。	非常に満足だった	かなり満足だった	満足だった	やや不満であった	かなり不満であった	対象外・該当しない
本科目の遠隔講義を通しての理解度はいかがでしたか。	非常に理解できた	かなり理解できた	理解できた	やや理解できなかった	かなり理解できなかった	対象外・該当しない
本科目の遠隔講義（Zoomやオンデマンド教材）での資料の見やすさはいかがでしたか。	非常に見やすかった	かなり見やすかった	見やすかった	やや見づらかった	かなり見づらかった	対象外・該当しない
本科目の遠隔講義（Zoomやオンデマンド教材）での教員の声の聞こえやすさはいかがですか。	非常に聞こえやすかった	かなり聞こえやすかった	聞こえやすかった	やや聞こえづらかった	かなり聞こえづらかった	対象外・該当しない
本科目の遠隔講義における教員の工夫が感じられましたか。	非常に工夫を感じた	かなり工夫を感じた	工夫を感じた	やや工夫を感じなかった	かなり工夫を感じなかった	対象外・該当しない
本科目の遠隔講義の進行についていけましたか。	非常に進行についていけた	かなり進行についていけた	進行についていけた	やや進行についていけなかった	かなり進行についていけなかった	対象外・該当しない
本科目の遠隔授業において、自身の学習態度や意欲はいかがでしたか。	非常に積極的・意欲的に取り組んだ	かなり積極的・意欲的に取り組んだ	積極的・意欲的に取り組んだ	やや積極的・意欲的に取り組めなかった	かなり積極的・意欲的に取り組めなかった	対象外・該当しない
科目を遠隔で行った場合と対面で行った場合を比較すると、理解度に違いがあると思いますか。	—	わからない (判断できない)	遠隔と対面で理解度に違いはない	対面の方が理解度が低い (遠隔の方が理解しやすい)	遠隔の方が理解度が低い (対面の方が理解しやすい)	—
本科目は、以下のどの講義形式が望ましいと感じましたか。	—	わからない	遠隔講義と対面授業の併用が望ましい	対面授業のみが望ましい	遠隔講義のみが望ましい	—
本科目の遠隔講義に関して、感じたことや意見を自由に記載してください。						

表 5. 学生による遠隔授業に対する授業評価結果

	令和2年度前期		令和3年度前期	
	前期 (67 科目)	後期 (64 科目)	前期 (76 科目)	後期 (69 科目)
本科目の遠隔講義の全体を通しての満足度はいかがですか。	3.60	3.83	3.97	3.98
本科目の遠隔講義を通しての理解度はいかがでしたか。	3.61	3.73	3.93	3.93
本科目の遠隔講義 (Zoom やオンデマンド教材) での資料の見やすさはいかがでしたか。	3.69	3.90	3.97	3.97
本科目の遠隔講義 (Zoom やオンデマンド教材) での教員の声の聞こえやすさはいかがですか。	3.71	3.96	3.97	4.01
本科目の遠隔講義における教員の工夫が感じられましたか。	3.59	3.79	3.85	3.91
本科目の遠隔講義の進行についていけましたか。	3.63	3.71	3.88	3.88
本科目の遠隔授業において、自身の学習態度や意欲はいかがでしたか。	3.65	3.77	3.93	3.89
科目を遠隔で行った場合と対面で行った場合を比較すると、理解度に違いがあると思いますか。				
わからない(判断できない)	26%	24%	29%	24%
遠隔と対面で理解度に違いはない	31%	32%	43%	42%
対面の方で理解度が低い (遠隔の方が理解しやすい)	10%	8%	9%	9%
遠隔の方で理解度が低い (対面の方が理解しやすい)	33%	36%	19%	26%

※対面授業が 100%と回答した前期 2 科目、後期 2 科目は除く  
実数は平均値を示す。



### 3. FD 講演会・研修会の実施

#### 1) 保健学科における教学 IR (Institutional Research) 推進のための講演会

講演会名: 教学 IR とは? 取組を推進するための体制や仕組等について

講師: 鹿児島大学 IR センター 特任教授、山形大学 学術研究院 教授

浅野 茂 先生

日時: 令和 3 年 2 月 22 日 (火) 16:00~17:15

開催方法: Zoom

参加者: 保健学科教員 30 名

今後、教学 IR を保健学科で推進していくために、教学 IR に関する基本的な理解が必要と考え、今年度は、鹿児島大学 IR センター 特任教授の浅野茂先生に教学 IR の必要性和仕組み、教学 IR の具体的内容、鹿児島大学の現状と方向性など教学 IR に関する基本的な内容をご講演頂いた。講演会後のアンケート結果でも教学 IR に関する教員の認識が深まり、教学 IR の必要性や重要性の理解に繋がり、今後の教学 IR の推進に向けて多大な効果があったと考える。なお、本講演会は、当初は保健学科と保健学研究科で開催する予定であったが、全学の教員にも提供して欲しいとの要請があり、鹿児島大学 IR センターとの共催で開催した。

保健学科・保健学研究科FD委員会  
鹿児島大学IRセンター共催講演会

日 時：令和4年2月22日（火曜日）  
16：00～17：15

Zoom開催：ミーティングID: 923 2340 7913  
パスコード: 652474

**教学IRとは？**  
取組を推進するための体制や仕組等について

講師：鹿児島大学IRセンター  
浅野 茂 特任教授  
(山形大学 学術研究院 教授)

オープニングリマークス  
保健学科長 赤崎安昭教授

クロージングリマークス  
保健学科教務委員会委員長  
榎間春利教授

The poster features a central illustration of a male lecturer in a blue suit pointing at a presentation board with charts and graphs, while three female students in blue uniforms sit at a table in front of him, looking at their papers. The background is a light grey with a wooden floor texture at the bottom.

## 2) 面接試験の実施と評価方法に関する講演会

講演会名: 面接試験の妥当な評価と運営

講師: 鹿児島大学大学院医歯学総合研究科 医歯学教育学 教授

田川 まさみ 先生

日時: 令和4年2月10日(木) 16:00~17:15

開催方法: Zoom

参加者: 保健学科教員 24名

保健学科の教員から面接試験に対する講演会の要望があり、年間計画にはなかったが、本講演会を開催した。田川先生から、医療系学部の入試選抜における面接試験の必要性、面接官としての評価方法、学生の就職試験時の面接試験の指導方法などを講演して頂いた。長年、医学教育で携われた経験に基づく示唆に富む講演会であった。また、講演後のアンケートでは、3つのポリシーの整合性、一般入試での面接試験の導入などについての意見があり、今後のFD活動の展開に繋がる有意義な講演会であった。

### 保健学科・保健学研究科 FD委員会主催講演会

日時: 令和4年2月10日(木曜日)

16:00~17:15

Zoom情報:

ミーティングID: 945 2364 6122

パスコード: 924803

### 「面接試験の妥当な評価と運営」

講師: 田川まさみ 教授  
(医歯学総合研究科 医歯学教育学)

オープニングリマークス  
保健学科長 赤崎安昭教授

クローズングリマークス  
保健学科入試委員会委員長  
松成裕子教授



### 3) 学外講師による保健学教育講演会または研修会(理学療法学専攻)

講演会名:臨床実習前の OSCE 導入の実践と臨床実習指導への波及効果

講師:渡邊 観世子 先生

国際医療福祉大学保健医療学部理学療法学科 准教授

日時:令和3年12月3日(金)13:30~14:30

開催形式・場所:Web形式(Zoom) ※桜ヶ丘共通教育棟4階401講義室でも視聴化

共催:鹿児島大学医学部保健学科理学療法学専攻

参加者:臨床実習指導者(30名)および学内教員(10名)の計40名

令和3年度から理学療法学専攻では学生がこれまで身につけた臨床技術を客観的に評価するために長期学外実習前に OSCE(Objective Structured Clinical Examination;客観的臨床能力試験)を導入することとなった。OSCEは6期末での実施を予定しており、その後の7期に実施される学外臨床実習施設との円滑な連携が重要となる。実習指導における教育の質を維持しつつ、学生ならびに患者の安全を考慮して臨床実習を効果的に実践していくために、OSCEをいち早く導入した臨床実習教育の実践に携わる講師を招き、教員・臨床実習指導者を対象にOSCE導入による臨床実習指導の効果などについて講演してもらい、教育指導方法の改善や質の向上に資することを目的に本研修会を開催した。



### 3) 学外講師による保健学教育講演会または研修会（作業療法学専攻）

- ・講演会名：作業療法の魅力を伝える講演会  
「コロナ禍における臨床と臨床実習」
- ・講師：誠愛リハビリテーション病院 リハビリテーション部  
作業療法課 課長 古江 伸志 先生
- ・日時：令和4年2月7日（月）13：30～15：00
- ・場所：WEB開催
- ・参加者：保健学科教員と学生：42名

#### 【講演内容】

作業療法学専攻では例年「作業療法の魅力を伝える講演会」として本専攻卒業生あるいは保健学科の前身である医療技術短期大学部を卒業し、地域で活躍している作業療法士に作業療法の魅力を伝える講演会を実施している。

今年度は、医療技術短期大学部（3期生）を卒業され、福岡県の誠愛リハビリテーション病院（本専攻の臨床実習施設）で活躍されている古江伸志先生に遠隔でご講演して頂いた。

ご講演の内容は、国内外のコロナ感染者の推移、誠愛リハビリテーション病院リハビリテーション部でのコロナ禍における臨床の取り組みや感染対策、そしてコロナ禍における臨床実習の取り組み・学生教育、養成校との連携など多岐に渡ってご講演して頂いた。また、臨床実習を間近に控えている本学3年生に対しては、臨床実習に向けての心構えや臨床実習施設がどのようなことを学生に求めているかなどを詳しくかつ丁寧に講演して頂いた。

ご講演終了後には、学生から臨床実習についての不安な点や臨床実習の内容などに関して質問が出され、古江先生より丁寧な説明が行われ、有意義な研修会となった。

## 鹿児島大学医学部保健学科 作業療法学専攻 講演会

### 「コロナ禍における臨床と実習」



特定医療法人社団 三光会  
誠愛リハビリテーション病院  
リハビリテーション部 作業療法課  
課長 古江 伸志

## 4. ベストティーチャー賞推薦のための学生アンケート

令和3年度医学部保健学科でのベストティーチャー賞を選出するにあたり、以下の要領で保健学科所属の1～4学年の全学生を対象としたアンケートを実施した。

### <2021年 保健学科ベストティーチャー賞候補者に関するアンケートの要領>

対象:2021年12月現在で保健学科に在籍している1～4年生

実施期間:2021年12月20日(月)～2022年1月7日(金)

アンケート内容

過去1年間を振り返って、自分にとって最も有意義であった授業科目とその担当教員(授業を実施した教員)を1つのみ挙げてください。候補の選出にあたっては、以下に示す5つの観点を参考にしてください。また、その授業および教員に関して、5つの観点を1～5点(5点が最も良い)で評定してください。有意義であったと感じた理由やベストティーチャーとしての推薦理由を記載してください。

①回答者の在籍している専攻

②有意義であった授業科目と担当教員(授業を実施した教員)

③②で選んだ授業と教員に関して、以下の観点から1～5点(5点が最も良い)で評定してください。

③-1. 授業の実施方法(教材等の分かりやすさ、理解度の確認など)

③-2. 授業への教員の熱意(授業の準備状況、配布資料の工夫など)

③-3. 能動的学習の促進(アクティブ・ラーニングの活用、学生自身による思考の促進など)

③-4. 授業時間以外の学習支援(自己学習の促進、宿題・レポートなどへの取組など)

③-5. 学習目標の達成(内容の理解度、目標の達成度、講義に対する満足度など)

④②で選んだ授業と教員に関して、有意義と感じた点およびベストティーチャーとしての推薦メッセージがあれば、ご記入ください

### <アンケート結果の回収概要>

・回答期間:2021年12月20日(月)～2022年1月7日(金)

・対象:学科在籍中の1～4年生488名

(看護学専攻323名、理学療法学専攻83名、作業療法学専攻82名)

・回答数:看護学専攻169名(52.3%)、理学療法学専攻37名(44.6%)、作業療法学専攻43名(52.4%)

### <アンケート結果の活用>

学生アンケートからの推薦者リストをFD委員会で供覧し、各専攻におけるベストティーチャー賞候補者を選考するうえでの資料とした。また、学生アンケートからベストティーチャー賞として推薦のあった科目、学生からの推薦コメントは、被推薦教員にフィードバックした。

### <令和3年度ベストティーチャー賞>

各専攻 1 名ずつの教員と1チームをベストティーチャーに選出し、4 月開催の教授会で表彰した。また、そのうちの 1 チームを医学部保健学科から全学のベストティーチャー賞候補者として推薦した。

## 5. 教務委員会との連携による授業参観の実施

令和3年度では、教務委員会との連携で教員による授業参観を実施した。授業参観科目は、保健学科の各専攻(看護学専攻、理学療法学専攻、作業療法学専攻)において令和2年度 BT 賞を受賞した教員の担当科目から推薦を依頼した。BT 賞受賞者から推薦のあった科目について、授業参観としての参加者を募り、4科目に対して計9名の教員による授業参観への参加があった。授業参観の参加後には、報告書の提出を求め、講義のわかりやすかった点や工夫していると感じた点などの意見を聴取した。

表. 令和3年度授業参観実施科目

科目名	授業参観人数
災害看護学－避難所運営への支援－	6名
整形外科Ⅱ－下肢の疾患2. 股関節疾患－	1名
カウンセリング論－うつ病者のカウンセリング－	1名
高次神経障害治療学－機能障害別アプローチの実際5 (注意障害とその認知リハビリテーション)－	1名

## 6. FD 活動への教員参加状況の把握

令和3年度の医学部保健学科における FD 活動への参加率は 88.37%であった。授業アンケートフィードバック、FD 講演会・研修会、授業参観の FD 活動への参加状況を把握した。

合計参加率		88.37 % (専任教員 43 名中 38 名 参加)		
企画別 参加率	授業アンケートフィードバック	34.88 %	(専任教員 43 名中	15 名 参加)
	教学 IR に関するFD講演会	69.77 %	(専任教員 43 名中	30 名 参加)
	面接試験に関する FD 講演会	55.81 %	(専任教員 43 名中	24 名 参加)
	理学療法専攻企画 FD 研修会	18.60 %	(専任教員 43 名中	8 名 参加)
	作業療法専攻企画 FD 研修会	11.63 %	(専任教員 43 名中	5 名 参加)
	授業参観	16.28 %	(専任教員 43 名中	7 名 参加)

## 終わりに

令和3年度においては、コロナ禍ではあるが、これまでの経験に基づき With Corona時代として新

たな FD 活動を模索することになった。医学部保健学科では manaba や遠隔システムを有効に活用し、遠隔での授業の実施に加え、新型コロナ対策を講じたうえで対面での講義や実習、演習を行い、コロナ禍での学修機会の確保や大学教育の質の担保に努めた。FD 活動においては、教学 IR や面接試験に関する FD 講演会、理学療法と作業療法における専門職としての研修会や授業参観企画、授業評価アンケートへの教員フィードバック、ベストティーチャー賞の選考など、年度計画を遂行することができた。

今後、教学IRを推進することは、FD活動の展開においても不可欠で重要な課題であり、PDCA サイクルを回しながら今後も教学IRの導入、実施に向けてFD活動を進めていく必要がある。また、教員のニーズに応える形で面接試験に関する講演会を開催したが、教員の関心も高く、多くの参加者があり、今後も教員のニーズを探りながら FD 活動を行っていく必要がある。

# 保健学研究科 FD 活動

## はじめに

令和3年度 FD 委員会保健学研究科部会の活動として以下を実施した。

1. 修了学生における修学達成度などに関するアンケート(保健学研究科運営委員会との共同)
  2. 修了生の就職先からの情報収集のためのインタビュー企画の検討
- 以下にその概略を述べる。

## 1. 修了学生における修学達成度などに関するアンケート

<令和3年度 保健学研究科 博士前期および博士後期課程修了者へのアンケートの要領>

対象:保健学研究科博士前期および博士後期課程に在籍しており、令和4年3月に修了を予定している者20名

実施期間:令和4年3月10月～3月18日

### アンケート内容

・満足度を5点が最も満足度が高いとして、1～5点で評価してください。

- ① 大学院での講義内容や講義方法について
- ② 研究指導について
- ③ 事務手続きや書類に関して

・達成度を5点が最も達成度が高いとして、1～5点で評価してください。

- ④ 自身の達成度について
- ⑤ 努力度を5点が最も努力度が高いとして、1～5点で評価してください。
- ⑥ 自身が努力した程度について

・在学中に最も学びになったことについて、教えてください。(自由記載)

・博士前期課程を卒業(修了)するにあたり、以下についての自己評価をお教えてください。

- ⑦ 保健学に関する優れた専門的知識と技術を獲得できた
- ⑧ 地域の保健・医療において、高度専門職業人として果たすべき役割を実践する能力を獲得できた
- ⑨ 研究を行うための基礎的な能力を獲得できた

・博士前期課程を卒業(修了)するにあたり、カリキュラムに対しての評価をお教えてください。

- ⑩ 豊かな人間性と広い視野を獲得できるように大学院全学横断的教育プログラムや、博士前期課程共通科目によって専門領域以外の様々な人々と共に学べるように編成されていた



- ⑪ 専門領域における基礎的能力を補強し、専門的学習を促進するために領域共通科目を配置されていた
- ⑫ 高度専門職業人としての優れた知識・技術を修得し、様々な地域における保健医療に関する課題を解決するための研究力、教育力を獲得できるように専門科目(特論・特別演習・特別研究)が配置されていた
- ⑬ 他専門領域を理解し、協働できるようになるために、他領域の専門科目を修得できるように編成されていた

・本学の大学院への進学について

- ⑭ 本学の大学院への進学を周りの人に勧めたいと思いますか
  - ⑮ 修士論文発表会後に他分野の大学院生や教員との情報交換を行うような懇談会が必要だと思いますか。
  - ⑯ 修士論文発表会後に他分野の大学院生や教員との情報交換を行うような懇談会が開催された場合、参加したいと思いますか。
  - ⑰ 調査結果は、学内での教育改善や学外で情報収集を目的にご報告させていただく予定ですが、個人情報はその中には一切含まれませんのでご安心ください。
- ・調査結果を報告することに同意していただけますか。

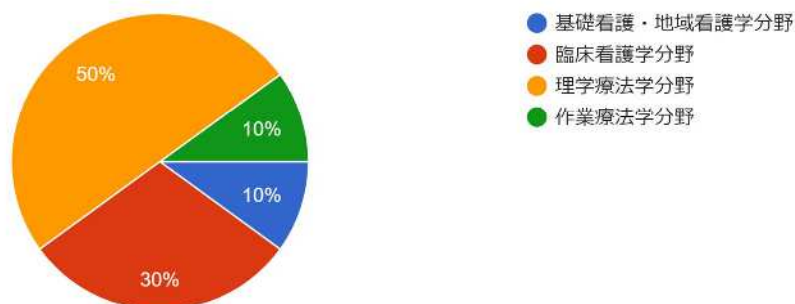
### <アンケート結果の回収概要>

回答数: 修了予定者 20 名のうち 10 名 (50%) から回答を得た。

回答者の内訳は以下の通りであった。

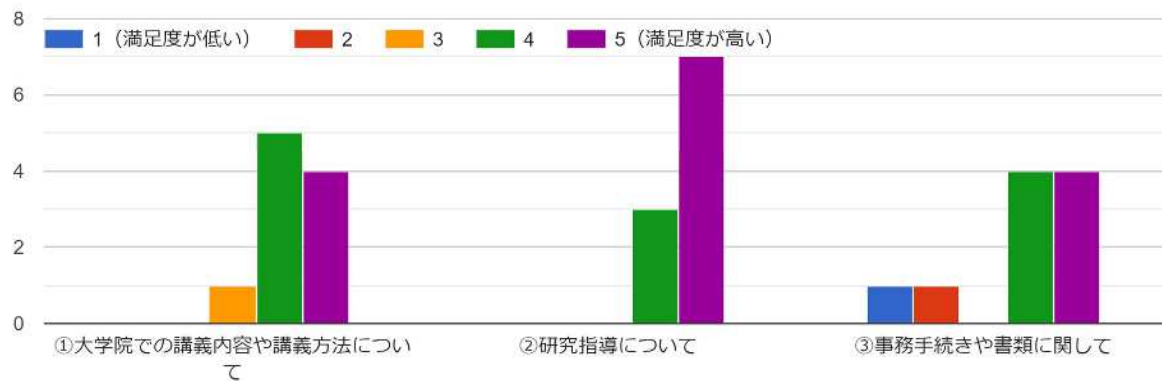
分野

10 件の回答

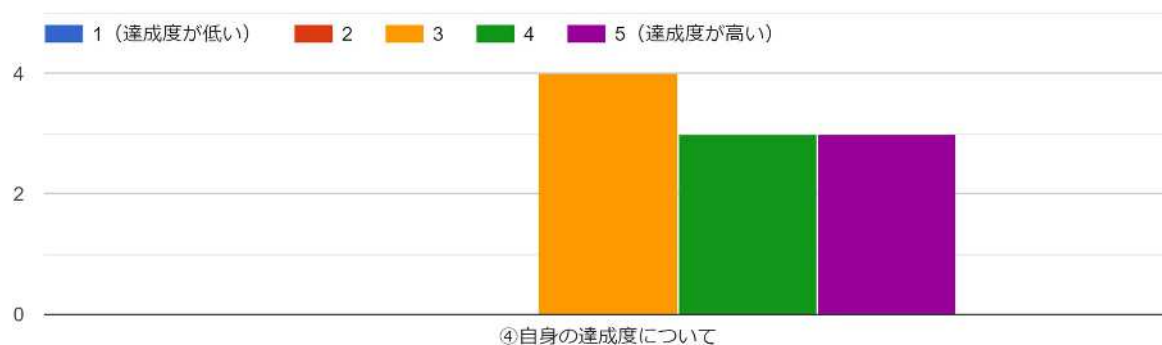


## <アンケート結果の概要>

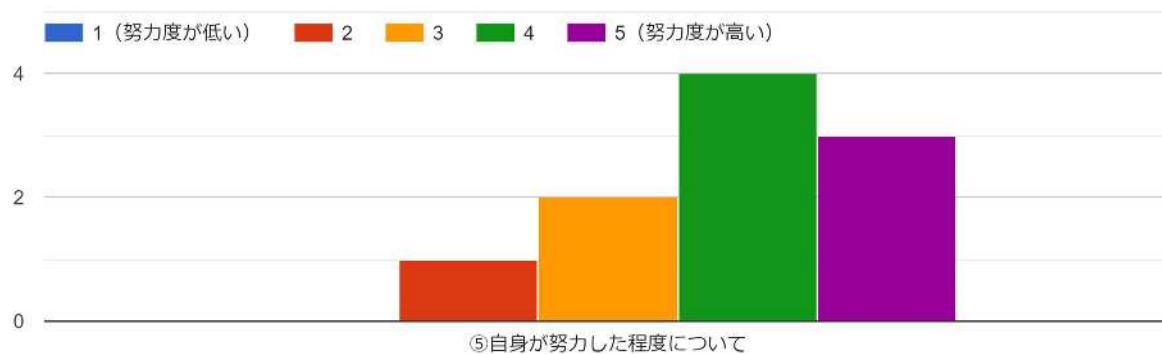
満足度を5点が最も満足度が高いとして、1～5点で評定してください。



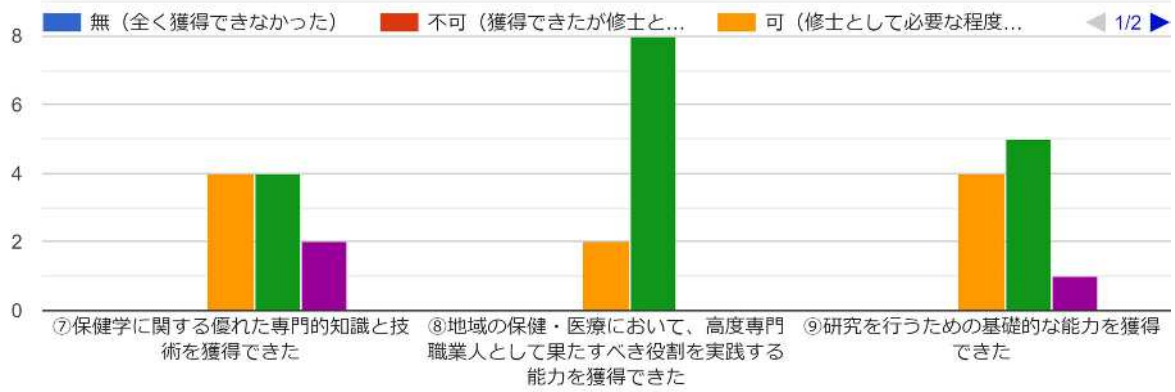
達成度を5点が最も達成度が高いとして、1～5点で評定してください。



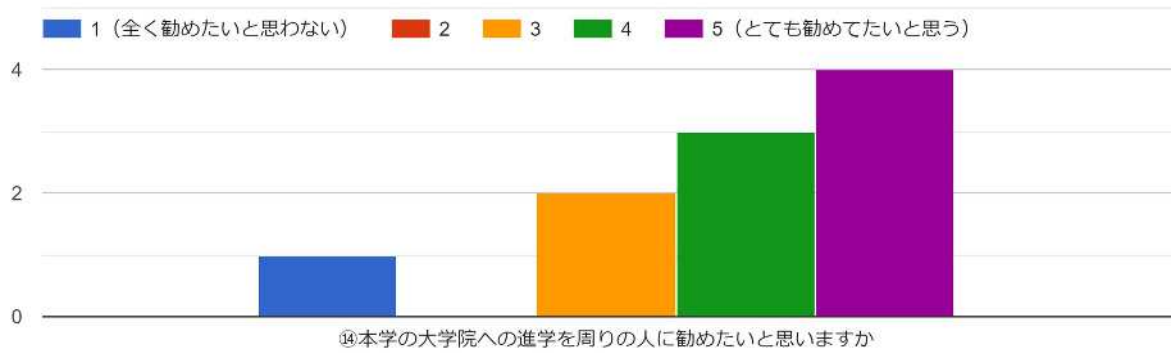
努力度を5点が最も努力度が高いとして、1～5点で評定してください。



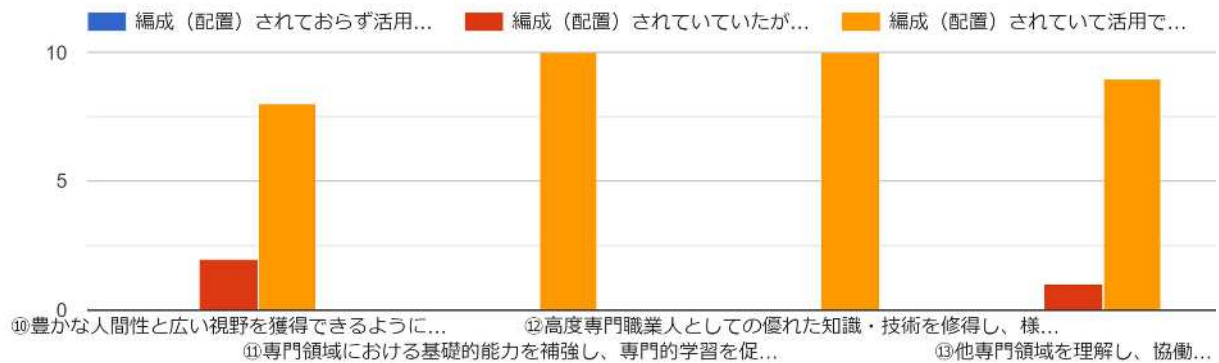
博士前期課程を卒業（修了）するにあたり、以下についての自己評価をお教えてください。



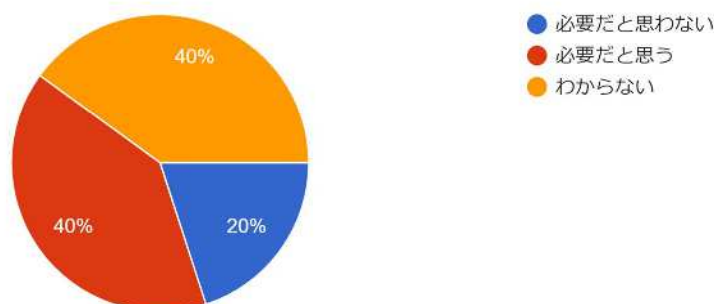
本学の大学院への進学について



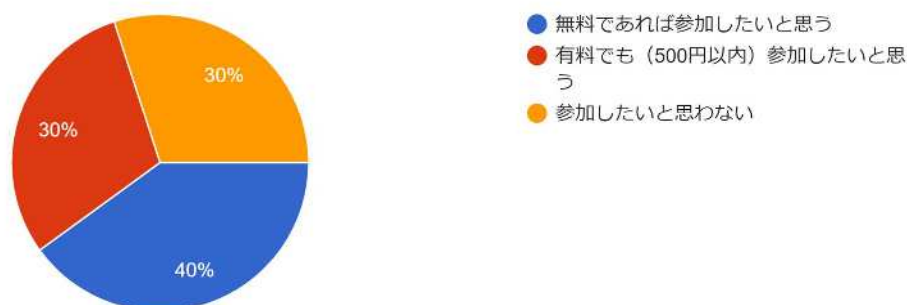
博士前期課程を卒業（修了）するにあたり、カリキュラムに対する評価をお教えてください。



⑮修士論文発表会後に他分野の大学院生や教員との...交換を行うような懇談会が必要だと思いますか。  
10件の回答



⑯修士論文発表会後に他分野の大学院生や教員との...会が開催された場合、参加したいと思いますか。  
10件の回答



ディプロマポリシーの3項目のうち、「保健学に関する優れた専門的知識と技術を獲得できた」、「地域の保健・医療において、高度専門職業人として果たすべき役割を実践する能力を獲得できた」、「不可（獲得できたが修士として不十分）」については、10名全員が可（修士として必要な程度は獲得できた）以上の自己評価であり、良好な結果であった。

大学院での講義や研究指導、事務手続きなどに関する満足度の調査では、1名（7.1%）が事務手続きの満足度が低いとする評価であり、それ以外は5段階中の3以上の満足度の評価であった。

## 2. 修了生の就職先からの情報収集のためのインタビュー企画の検討と実施

大学院を修了した学生が、大学院での経験や学びを修了後の臨床および研究活動に反映できているか、また社会での高度専門医療人としての貢献度を把握するために、修了生の就職先からの情報収集のための半構造的インタビュー内容を検討した。令和3年度は、パイロットとして理学療法学の博士前期課程を修了した学生の就職先の上司にインタビューを実施した。具体的には令和4年度以降は、各専攻（看護学、理学療法学、作業療法学）から1名ずつの修了生の就職先の上司や指導者などからのインタビューを予定している。

質問内容	回答選択肢
① 2019年度(2020年3月)の本学大学院修了生との職場でのご関係を教えてください。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・直接的な上長・先輩</li> <li>・間接的な(たとえば、他部署など)上長・先輩</li> <li>・その他</li> </ul>
② 2019年(2020年3月)の本学大学院修了生との職場での関わりについて、該当するものを教えてください。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本学大学院に進学前から関わりがある</li> <li>・本学大学院在学中に関わるようになった</li> <li>・本学大学院修了後に関わるようになった</li> <li>・その他</li> </ul>
次の項目について、本学大学院修了生において、大学院修了による学習成果を感じる点がありますか。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「ほとんど学習成果を感じない」</li> <li>・「あまり学習成果を感じない」</li> <li>・「ときどき学習成果を感じる」</li> <li>・「よく学習成果を感じる」</li> <li>・「非常に学習成果を感じる」</li> </ul>
③ 保健学に関する優れた専門的知識と技術	
④ 地域の保健・医療において、高度専門職業人として果たすべき役割を実践する能力	
⑤ 研究を行うための基礎的な能力	
③～⑤について、その理由をお教えてください。	自由回答
⑥その他、本学大学院修了による学習成果を感じる点があれば、お聞かせください。	自由回答
⑦ 現在の職場の状況において、進学希望者がいた場合、どのような検討が可能ですか。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・勤務体制や雇用条件を大きく変更することなく、進学の検討が可能</li> <li>・勤務体制や雇用条件を見直すことで、進学の検討が可能</li> <li>・進学の検討は難しい</li> <li>・わからない</li> </ul>
⑧ 現在の職場に本学大学院修了生が就職を希望する場合、どのようにお考えになりますか。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学院修了生を積極的に採用したい</li> <li>・大学院修了の有無はあまり関係しない</li> <li>・大学院修了生を採用することは控えたい</li> <li>・その他</li> </ul>
⑨本学大学院への意見や要望がありましたら、お寄せください。	自由回答

## 終わりに

保健学研究科博士前期課程在学中における自身の達成度の高さは、本大学院で定めるディプロマポリシーの到達度に直結しており、講義の満足度の高さは専門的知識と技術や実践能力の獲得に対する到達度に寄与すると考えられた。しかしながら、コロナ禍で計画通りの研究遂行が困難な学生もいたことが想定される。また、コロナ禍における大学院での修学環境について、手続き方法や講義形式、研究指導方法など様々な変更が余儀なくされ、学生自身にとっても不安や混乱が生じたことも推察される。

このような状況においても、学生自身の達成度を高める教育体制の充実を図るとともに、ディプロマポリシーに準じた学修成果を客観評価できるアセスメントポリシーの整備が重要であろうと考えられ、引き続きの検討が必要であるものと考えられた。

(文責 令和3年度医学部 FD 委員会保健学科部会長 宮田昌明)

## 大学 IR コンソーシアム学生調査結果（令和2 年度実施分）の分析について

（ 医学・保健 ） 学部

評価する点	<p><b>1 年生調査</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ 回答率が 96.7%と全学で最も高かった。</li></ul> <p>&lt; 知見に対する解釈 &gt;</p> <p>一斉メールでのお願いのみならず、3専攻合同の講義でアンケートへの回答を呼びかけたことが高い回答率に繋がったと考える。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ 授業を通じた学習経験の「仕事に役立つ知識やスキルを学ぶ」が 78.2%で、全学平均の 61%より 15 ポイント以上高く、入学後の能力の変化で「専門分野や学科の知識」が 90.8%、「異文化の人々に関する知識」が 87.4%とどちらも学内で最も高く、大学教育の満足度で「授業の全体的な質」が 59.7%と学内で2番目、「将来の仕事と授業内容の結びつき」が 64.7%、大学への適応感で「効果的に学習する技術を習得する」が 68.1%と学内で最も高かった。</li></ul> <p>&lt; 知見に対する解釈 &gt;</p> <p>1 年生に対しても将来の専門職を見据えた教育を行っていることが専門性の高い教育と評価され、教員の講義に対する取り組みも熱心に行っているため、講義の質も高く保たれていると考える。また、韓国や米国の学生との交流を通じた国際的な視点に立った教育も評価を受けていると推察する。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ 授業内外の学習状況で「教員に近親感を感じた」が 37.8%、「授業中、教員の考え方や意見に異議を唱えた」が 17.8%と学内で最も高かった。</li></ul> <p>&lt; 知見に対する解釈 &gt;</p> <p>教員が学生との垣根を低くして学生と話をするように努めており、講義に対する学生の些細な疑問にも対応するようにし、さらに、担任制度がうまく運用されて、学生が困った時に親身になって対応するようにしている結果と推察する。また、教員に近親感を感じているため、教員に対して意見や意義を唱える雰囲気醸成されていると考える。</p> <p><b>上級生（3 年生）調査</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ 授業を通じた学習経験の「実験、実習、フィールドワークなどを実施し、学生が体験的に学ぶ」が 93.7%、「学生が自分の考えや研究を発表する」が 92.1%、「授業中に学生同士が異論する」が 93.7%、「教員が提出物に添削やコメントを付けて返却する」が 84.1%と学内で最も高かった。</li></ul> <p>&lt; 知見に対する解釈 &gt;</p> <p>実習や演習を多く取り入れ、また、講義においてもアクティブラーニングが実践されている結果が高い評価に反映されたと推察する。</p>
-------	--

	<p>・授業内外の学習状況で「授業時間外に、他の学生と一緒に勉強したり、授業内容を話したりした」が 88.9%、「教員に近親感を感じた」が 63.5%、大学への適応感で「教員と顔見知りになる」が 81.0%、大学教育への満足度で「将来の仕事と授業の内容の結びつき」が 81.0%、「教員と話をする機会」が 61.9%、学習支援や個別の学習指導」が 54.0%、「他の学生と話をする機会」が 79.1%、「大学の中での学生同士の一体感」が 69.5%、入学後の能力の変化で「他の人と協力して物事を遂行する能力」が 92.1%、「人間関係を構築する能力」が 74.6%と学内で最も高かった。</p> <p>&lt;知見に対する解釈&gt;</p> <p>講義や演習の中でグループワークを取り入れており、医療施設での実習はグループ単位で行い、更に担任グループでの学生同士の繋がりもあり、また、教員が演習や実習で熱心にかつ丁寧に指導しており、このような結果になったと考える。</p> <p>・入学後の能力の変化で「専門分野や学科の知識」が 90.5%、授業を通じた学習経験の「仕事に役立つ知識やスキルを学ぶ」が 95.2%、大学への適応感で「大学が求める水準に答えて学習する」が 81.0%と学内で最も高かった。</p> <p>&lt;知見に対する解釈&gt;</p> <p>それぞれの専門職に対しての専門教育に加え、国家試験も意識した教育を行っており、学生もそれに応えて将来を見据えて熱心に学習に取り組んでいる結果と推察する。</p>
<p>課題と考える点 (3点以上)</p>	<p><b>1年生調査</b></p> <p>①授業を通じた学習経験で「取りたい授業を履修登録できなかった」が 63.0%と高率であり、学生の学修意欲に応えることが出来ていない。</p> <p>&lt;知見に対する解釈&gt;</p> <p>1年次の専門科目が多く、興味のある共通教育の選択科目を選択する余裕がないためと考える。また、専門科目が桜ヶ丘キャンパスで実施される場合に、共通教育科目の実施される郡元キャンパスへの移動時間があるために共通教育の選択に影響があると推察する。</p> <p>②入学後の能力の変化で「数理的な能力」が 11.8%と全学で2番目に低かった。</p> <p>&lt;知見に対する解釈&gt;</p> <p>医療系の専門職として学習すべき知識量が多いため、暗記することが多く、数理的な学習が行われていないと考える。</p> <p>③「オフィスアワーなど、授業時間以外に教員と面談する時間」が「全くない」が 93.3%と学内で最も高かった。</p> <p>&lt;知見に対する解釈&gt;</p> <p>保健学科の教員がいる桜ヶ丘キャンパスへの登校が週1～2回と限られてお</p>



り、かつ、教員も講義や実習などで研究室に居ることが少ないことが影響していると思われる。

### 上級生（3年生）調査

①回答率が1年生の96.7%と比較して3年生は51.2%と低かった。

<知見に対する解釈>

アンケート回答時期中は、3年生が病院実習に加え、毎日の実習後のレポート作成などで非常に忙しく、アンケートに答える余裕がなかったと思われる。アンケートの回答率が半分程度では、上級生の全体的な結果ではなく、アンケートに回答する真面目な学生の結果に偏ることが危惧される。

②授業を通じた学習経験の「TA・SAなどの授業補助者から補助を受ける」が15.9%と学内で2番目に低かった。

<知見に対する解釈>

保健学科では、教員が教育に熱心であるもののTA・SAなどの授業補助者の活用が不十分であるためと考える。

③入学後の能力の変化で「数理的な能力」が15.9%と全学で最も低く、「異文化の人々に関する知識」が52.4%、「グローバルな問題の理解」が31.7%とともに全学で2番目に低かった。

<知見に対する解釈>

医療系の専門職として学習すべき知識量が多いため、暗記することが多く、数理的な学習やグローバルな観点からの教育が疎かになっている可能性が推察される。

④大学設備に対する満足度で「レクリエーション施設」と回答したものが保健学科で20.6%であり、歯学部の14.3%に次いで2番目に低く、医学科が22.0%と3番目に低かった。

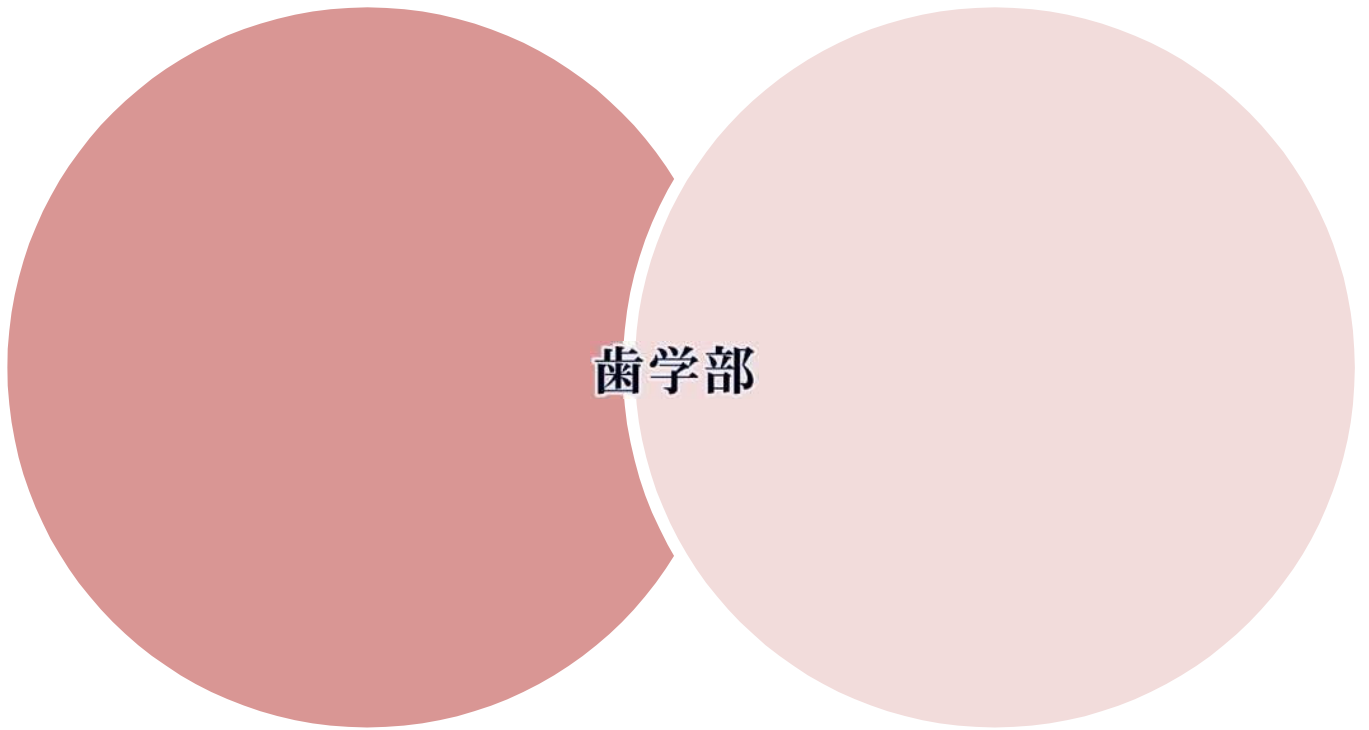
<知見に対する解釈>

桜ヶ丘キャンパスは、郡元キャンパスに比べ、学生に対する「レクリエーション施設」など福利厚生施設の充実度が低い可能性がある。

<p>課題への 具体的な対応案</p>	<p><b>1年生調査</b></p> <p>①共通教育科目が遠隔授業も併用した授業形態になれば、桜ヶ丘キャンパスでの専門科目の前後の空いた時間に共通教育を聴講できるようになり、共通教育の選択を増やすことが可能になると考える。</p> <p>②共通教育で「数理的な能力」を高める科目を選択することの重要性についても説明する。また、1年時の専門科目においても「数理的な能力」を高めるアクティブラーニングの取り組みを行う。</p> <p>③本アンケート結果を所属教員で共有し、1年生が桜ヶ丘キャンパスに登校する日は、オフィスアワー以外にも研究室に居るように努め、学生が教員と面談する時間を積極的に設けるように教員に働きかける。</p> <p><b>上級生（3年生）調査</b></p> <p>①3年生の回答率が低いことを所属教員で共有し、3年生が病院実習期間でもアンケートに回答するように積極的に学生に声掛けをする。また、アンケート回答〆切を年始明けまでにすると年末と年始の休みの余裕のある時にアンケートを回答できるかもしれない。</p> <p>②保健学科における TA・SA などの授業補助者を活用するように教員に働きかけ、学科として TA・SA を活用する方策を検討する必要がある。</p> <p>③専門科目においても医学統計など単なる知識を教えるだけでなく、演習を増やして「数理的な能力」を高める努力をする。</p> <p>④桜ヶ丘キャンパス改修計画の中において、学生の意見も聞きながら、桜ヶ丘キャンパスにおける学生に対する福利厚生施設を充実するように取り組む必要がある。</p>
<p>昨年度挙げた 改善・対応策の 進捗状況</p>	<p><b>【昨年度挙げた改善・対応策】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・本アンケート結果を所属教員で共有し、関連科目内での課題の検討やカリキュラムの改訂を検討する。</li> <li>→看護学専攻では令和4年度からのカリキュラム改定に向けて、アクティブラーニングの積極的な導入を促進し、1年生での本学科所属教員との接触の機会が増えるように科目や演習を増やした。</li> <li>・1年生での本学科所属教員との接触の機会は制限される。</li> <li>→上記の科目や演習の増加に加え、保健学科では担任制度での担任の関りを強化</li> </ul>

	<p>し、特に1年生との関りを作るように努力した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・外国語の運用に接する頻度を授業の内外で検討する必要がある。</li> </ul> <p>→韓国の学生とインターネットを利用した英語での演習を実施し、英語能力の向上に努めた。更に、外国語運用能力の向上を目指した教員向けのFD研修会を実施した。</p>
<p>コロナウイルス感染症対応に関する本学・各部署の取組との関連に影響すると思われる回答と その内容</p>	<p>授業を通じた学習経験で「実験、実習、フィールドワークなどを実施し、学生が体験的に学ぶ」が、1年生で低かったのは、コロナウイルス感染症のため、実習やフィールド活動が制限された影響があったかもしれない。</p>





歯学部

## 歯学部FD活動報告

### 1. はじめに

歯学部のFD活動の特徴として、純粋な教育技法に関するFD活動のみならず、大規模災害における歯科救済活動や科学研究費獲得向上のポイント、共用試験歯学系 CBT 作問など、教育に関わる幅広い事項について、他の委員会と連携協力しながらFD講演会等を実施してきたことが挙げられる。

令和3年度は、これまでのFD活動を踏まえ、5回のFD講演会などを企画、開催した。本学では、年間の合計参加率（1回でもFD活動に参加した専任教員数で計算）が75%以上となるよう各部局に求めているが、歯学部の令和3年度の参加率は88.9%（全教員135名中120名参加）であり、目標値を上回った。FD活動の効果は参加率のみで測れるものではないが、今後も歯学部FD活動への積極的参加を促し、教員の教育能力の向上に継続的に取り組んでいくことが重要と考えられる。

令和3年度の主な歯学部FD活動は、次のとおりである。

- (1) 第1回FD講演会「CBTの作問に関するFD講習会」及び「共用試験CPX・共用試験CSXに関するFD講演会」のオンデマンド配信
- (2) 第2回FD講演会「臨床実習期間から試みる国家試験対策－岡山大学での取り組み－」の開催
- (3) 第3回FD講演会「アクティブラーニング 何のために・誰のために を考える」の開催
- (4) 第4回FD講演会「ベストライター賞受賞者による学部学生の実習指導講習会」の開催
- (5) 第5回FD講演会「歯学教育分野別評価受審に向けて」の開催
- (6) 学生による授業評価の実施
- (7) 教員相互による授業参観・授業評価の実施
- (8) ベストティーチャー賞の選考

### 2. 令和3年度歯学部「ファカルティ・ディベロップメント委員会」（以下、歯学部FD委員会）委員

委員長：菊地聖史（歯科生体材料学分野 教授）

委員：田松裕一（解剖法歯学分野 教授）

西谷佳浩（歯科保存学分野 教授）

中村典史（口腔顎顔面外科学分野 教授）

杉村光隆（歯科麻酔全身管理学分野 教授）

中田匡宣（口腔微生物学分野 教授）

所掌事務：学務課歯学教務係

### 3. 令和3年度歯学部FD委員会開催状況

- (1) 第1回歯学部FD委員会（令和3年4月23日（金）Web開催）

議題：

1. 鹿児島大学歯学部ファカルティ・ディベロップメント委員会規則の改正について

- (2) 第2回歯学部FD委員会（令和3年6月15日（火）Web開催）

議題：

1. 令和3年度第1回FD講演会の開催について
2. 大学IRコンソーシアムアンケート調査の5年生追加について

(3) 第3回歯学部FD委員会（令和3年10月28日（木）Web開催）

議題：

1. 令和3年度FD講演会について
2. 令和2年度大学IRコンソーシアム学生調査結果の調査・分析について
3. 令和3年度教員による授業参観について
4. 令和3年度後期授業評価アンケートについて
5. 大学IRコンソーシアム学生調査2021の実施について

(4) 第4回歯学部FD委員会（令和4年1月25日（火）Web開催）

議題：

1. 令和3年度第3回、第4回、第5回FD講演会について
2. 令和2年度大学IRコンソーシアム学生調査結果の調査・分析について
3. 歯学部会議室プロジェクター設置について

(5) 第5回歯学部FD委員会（令和4年3月30日（水）Web開催）

議題：

1. 歯学部ベストティーチャー賞の選定と鹿児島大学ベストティーチャー賞候補者の推薦について
2. 令和3年度FD経費予算執行状況について
3. 令和4年度活動計画書について
4. 令和3年度活動報告書について

4. 令和3年度歯学部FD活動の概要

(1) 第1回歯学部FD講演会

講師1：田口則宏教授（歯科医学教育実践学分野）、松本祐子助教（歯科総合診療部）、岩下洋一朗助教（歯科医学教育実践学分野）、川島雄介講師（顎顔面放射線学分野）、後藤哲哉教授（歯科機能形態学分野）、田松裕一教授（解剖法歯学分野）

演題1：「CBTの作問に関するFD講習会」（令和3年1月19日開催）

講師2：田口則宏教授（歯科医学教育実践学分野）、南 弘之教授（咬合機能補綴学分野）

演題2：「共用試験CPX・共用試験CSXに関するFD講演会」（令和3年3月23日開催）

日 時：令和3年11月16日（火）～12月31日（金）

場 所：Web

対象者：歯学部教員のうち当該講演会の欠席者及び希望者

参加者：29名（オンデマンド配信）

概 要：令和2年度に開催した上記2つのFD講演会について、教員に対し周知徹底を図る

ため、欠席者及び希望者を対象として、収録動画のオンデマンド配信と事後アンケートを実施した。

(2) 第2回歯学部FD講演会

講師：岡山大学大学院医歯薬学総合研究科顎口腔再建外科学分野教授 飯田征二先生

演題：「臨床実習期間から試みる国家試験対策－岡山大学での取り組み－」

日時：令和3年12月17日（金）16:30～18:00

場所：歯学部第4講義室

対象者：歯学部教員

参加者：83名

概要：歯科医師国家試験の合格率の低下傾向が続いている中、合格率の向上は、全国の歯学部において喫緊の課題である。教員や学生の意識改革、学生による作問や解説動画制作など、歯科医師国家試験合格率向上のための岡山大学における様々な組織的取り組みについてご講演いただいた。

(3) 第3回歯学部FD講演会

講師：鹿児島大学高等教育研究開発センター助教 森 裕生先生

演題：「アクティブラーニング 何のために・誰のために を考える」

日時：令和4年1月31日（月）17:00～18:30

場所：Web

対象者：歯学部教員

参加者：92名（リアルタイム配信及びオンデマンド配信）

概要：令和2年度に引き続きアクティブラーニングに関する講演会を企画・開催した。今年度は、アクティブラーニングに関する疑問や悩みなどに関する事前アンケートの内容を中心に、「何のために」、「誰のために」といった点に立ち戻りながらアクティブラーニングについてご講演いただいた。

(4) 令和3年度第4回歯学部FD講演会

講師：令和元～2年度ベストライター受賞者

発達系 小児歯科学分野 伴 祐輔助教

外科系 口腔外科学分野 後藤雄一助教

成人系 歯周病学分野 川上克子助教

演題：「ベストライター賞受賞者による学部学生の実習指導講習会」

日時：令和4年2月9日（水）16:30～18:00

場所：Web

対象者：歯学部教員

参加者：56名（リアルタイム配信）

概要：臨床実習終了直後の学生に対するアンケートに基づきベストライターに選出され



た臨床実習担当教員3名に講演していただき、指導のノウハウの共有を図った。

(5) 第5回歯学部FD講演会

講師：西村正宏教授（学部長）、田口則宏教授（副学部長）、松口徹也教授（副学部長）、  
田松裕一教授（教育委員会委員長）、南 弘之教授（教育委員会臨床教育部会長）、  
齋藤 充教授（入試諮問委員会副委員長）、菊地聖史教授（FD委員会委員長）

演 題：「歯学教育分野別評価受審に向けて」

日 時：令和4年2月28日（月）16:30～18:00

場 所：Web

対象者：歯学部教員

参加者：88名（リアルタイム配信及びオンデマンド配信）

概 要：大学基準協会による歯学教育評価の令和4年度受審に向け、歯学部構成員に知っておいてもらいたい内容について、各自己評価委員会委員に担当領域毎に解説していただいた。

(6) 学生による授業評価

歯学部FD委員会では、令和3年度も例年どおり歯学部FD委員会から教員に対し「学生による授業評価」の実施を依頼し、その結果を歯学部教育委員会から教員にフィードバックすることで授業改善につなげることを図った。具体的には、学生に対する科目毎の授業評価アンケートを前期科目については前期授業の最終回に、後期科目及び通年科目については後期授業の最終回に鹿児島大学manabaを利用して実施した。評価項目（アンケートの質問事項）は、従来、「積極的に学習した（質問、予習、復習）」、「シラバスには必要な情報がわかりやすく記載されていた」、「講義・実習等はよく準備されていた」など全19項目で、自由記述欄も設けられていた。令和2年度からは、コロナ禍による遠隔授業に対応すべく、「配布資料による学習（manabaに資料のみ掲載等）」、「オンデマンド動画配信」、「リアルタイム配信（Zoom等）」の3項目が新たに加えられ、全22項目となった。自由記述欄も従来どおり設け、評価項目以外の評価や感想などが記入できるようにした。

授業担当者には、アンケートを実施した翌年度に当該科目及びすべての科目の評価項目別平均や自由記述欄のコメントが匿名化した上で伝えられる。それを受けて、授業担当者は、「授業改善シート」の項目毎にアンケートの結果に対する感想と今後の改善点を記入し、歯学部教育委員会へ提出することが求められている。

令和3年度は、同年度に開講された授業についてアンケートを実施するとともに、令和2年度に実施したアンケートの結果に対して担当教員に授業改善シートの提出を依頼した。なお、アンケート結果（自由記述欄を除く）は、学内専用ウェブサイト（<http://w3.hal.kagoshima-u.ac.jp/limit/committee/committee08/43-2016-10-26-05-00-27.html>）に掲載されている。

授業評価アンケートの結果に基づいた授業改善シートの作成は、各教員が自分の授業を見つめ直し、授業改善のPDCAサイクルにつなげる良い機会となっている。しかし、現状では、授業担当教員によるセルフチェックと、歯学部で開講されている授業に対する学生評価を歯学部教育委員会として把握するにとどまっている。集積された授業評価結果や授業改善シートの組織的な活用や組織的なPDCAサイクルの構築については、学生による授業評価の限界や各科目の特性も踏まえ

た上で継続的な検討が必要と考えられる。

#### (7) 教員相互による授業参観・授業評価の実施

教員の授業公開・授業参観は、全学的な取り組みの一環として歯学部において例年実施されてきたが、令和2年度は、コロナ禍により中止を余儀なくされた。令和3年度に入ってもコロナ禍の終息が見えず、実施が危ぶまれたが、ワクチン接種や教室の環境整備などが進んだことなどに鑑みて実施可能と判断し、後期授業を対象に実施した。以前は歯学部自己評価委員会の教授が参観者（評価者）となっていたが、令和3年度は、各歯系分野から1名の参観者を推薦してもらった（計17名）。参観者には、歯学部で開講されている後期授業の中から希望する授業（自身が所属する分野以外）について、授業参観とmanabaのアンケート機能を利用した参観レポートの提出を求めた。授業担当教員には、従来どおり、同レポートをフィードバックするとともに授業改善シートの歯学部教育委員会への提出を依頼する予定である。これにより、学生による評価とは異なった視点での評価と授業改善に繋がることが期待される。なお、集積された授業評価結果や授業改善シートの組織的な活用や組織的なPDCAサイクルの構築については、学生の授業評価の場合と同様に継続的な検討が必要である。

#### (8) 歯学部ベストティーチャー賞の選考

平成30年度に「鹿児島大学ベストティーチャー賞」表彰制度が制定されたことにより歯学部から候補者1名を推薦する必要が生じたことがきっかけとなり、「歯学部ベストティーチャー賞」の選考が行われるようになった。同賞の選考は、「ベストティーチャー賞選定のための教員授業評価実施要綱」に基づいて実施される。具体的には、2年次生から4年生次生の学生に対してアンケートを実施し、「授業方法や学びへの工夫がなされているか（技法）」、「教育に対する姿勢や取り組みが優れているか（熱意）」、「授業を受けることによってその科目に対する関心が深まったか（理解）」の3項目を選考基準として総合的に優れていると思う教員1名を選んでもらって、学年ごとに得票率の最も高い教員に「歯学部ベストティーチャー賞」を授与している。さらに、「歯学部ベストティーチャー賞」受賞者の中から最も得票率の高かった者1名を「鹿児島大学ベストティーチャー賞」の候補者として歯学部から推薦している。令和2年度からは、大学院と一緒の「歯学部・医学総合研究科（歯学系）」カテゴリとなり、学部と大学院合わせて1名を推薦することとなった。これを受け、歯学部FD委員会と研究科FD委員会（歯系）で協議の上、上記カテゴリへ推薦する1名を決定しており、令和3年度も同様に実施する予定である。「鹿児島大学ベストティーチャー賞」や「歯学部ベストティーチャー賞」の荣誉は、教員の教育に対するモチベーション向上に寄与すると考えられるが、その選考方法については、チームで授業を担当している科目に対する対応も含めて継続的な議論が必要と思われる。

### 5. 特筆すべき事項と改善例

令和3年度の特筆すべき事項としては、令和2年度に引き続きコロナ禍を踏まえてのFD活動となったことと、歯学部におけるFD活動を見直し、改善を試みたことが挙げられる。前者については、令和2年度同様、FD委員会やFD講演会のほとんどがZoomやmanaba等を利用したWeb（オンライン）

開催となった。今や Web 形式が日常的なものとなり、主催者や参加者が慣れてきたこともあって、毎回大きなトラブルもなく実施することができた。Web 形式は、対面形式と異なり、お互いの表情が分かりにくいことや、自由な環境で参加が可能な反面、集中力が続きにくいことなどの問題点が指摘されているが、コロナ禍が終息するまでの間は、第一選択肢とせざるを得ないところである。

FD 活動の見直しについては、従来、一部の参加者から寄せられていた①FD 講演会の回数が多すぎる、②FD 講演会の終了時刻が遅すぎる、③FD 講演会の内容が期待していたものとは異なっていたといった声に対応すべく、FD 講演会の開催方法等について改善を試みたものである。

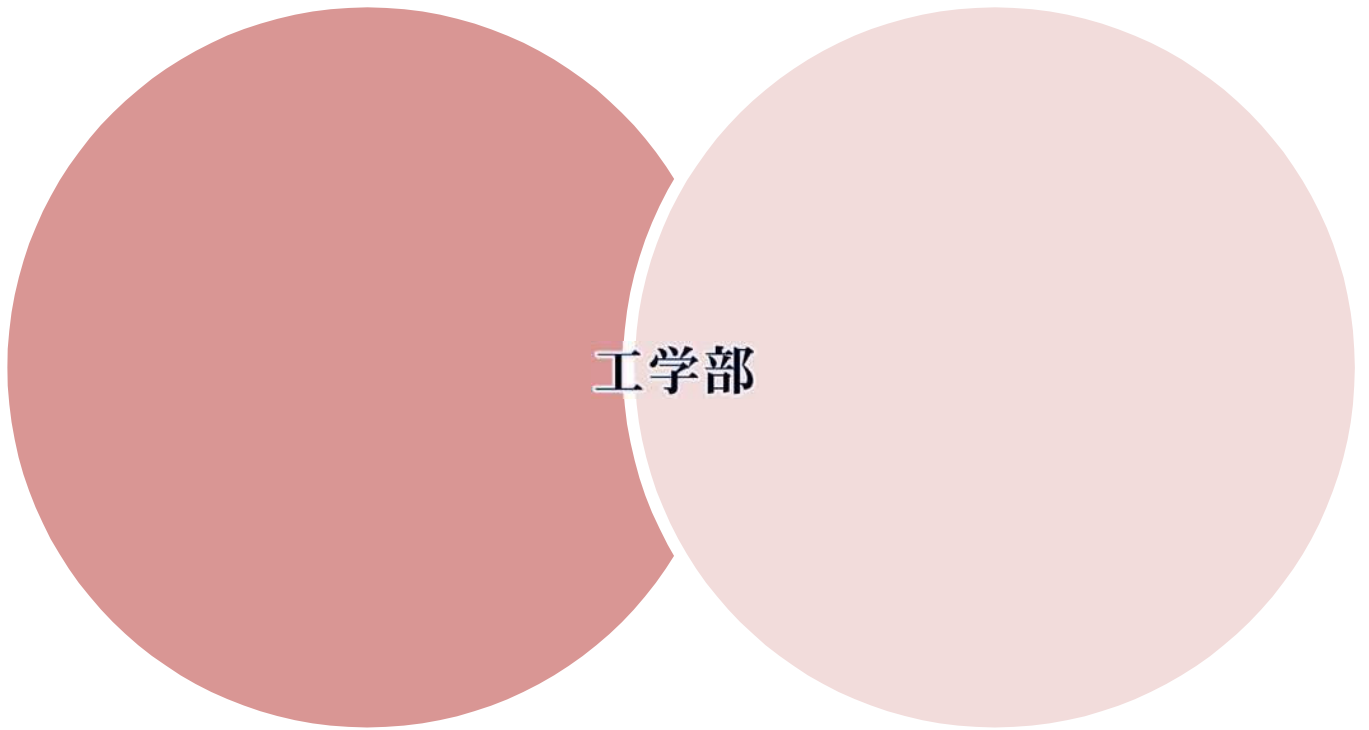
①に関して、教員が FD 活動へ参加することの重要性については、議論の余地がない。一方で、教員は、研究や教育に加えて、臨床、管理運営、地域貢献などで年々忙しくなっている。そのため、FD 講演会等への参加を負担に感じている教員がいるのも事実である。歯学部の FD 講演会の年間開催回数は、多い年度（平成 27 年度及び 28 年度）で 8 回を数えた。最近は、多い年度でも 6 回であり、平均すると 2 ヶ月に 1 回のペースとなることから、これが FD 講演会を企画する際の年間開催回数の目安になると思われる。令和 3 年度は、参加者の負担を考慮して FD 講演会を 5 回に厳選し、さらに、5 回の中の 1 回は、令和 2 年度に収録した FD 講演会のオンデマンド視聴であり、対象者を欠席者と希望者に限定した。反省点として、企画の具体化が遅れたため、開催が後期に集中してしまったことが挙げられる。このことを踏まえ、令和 4 年度は、時期をなるべく分散して開催する予定である。

②に関して、これは医療系学部ならではの問題である。従来は、17:00 まで診療に従事している教員も FD 講演会に参加できるようにとの配慮から、17:00～18:30 や 17:30～19:00 といった遅い時間帯で開催されることが多かった。しかし、実際の終了時刻が 19:00 を過ぎることもあり、働き方改革が叫ばれる昨今、改善を迫られていた。そこで、令和 3 年度は、すべて 16:30～18:00 の時間帯で開催した。早い時間帯に変更することで参加できなくなる人が出てくることが予想されたため、後日、できる限りオンデマンドでの参加（視聴）ができるようにすることで参加率低下の抑制を図った。なお、Zoom 等を用いると講演会の収録が簡単にできるが、事前に講演者の承諾を得ることや参加者にアナウンスすることなどの配慮が必要である。また、リアルタイムでの参加とオンデマンドでの参加で差異が全くないとは言えないので、原則当日参加とし、診療や出張等、やむを得ない理由により当日参加ができない場合のみオンデマンドでの参加を認めるべきと思われる。

③に関して、歯学部 FD 委員会では、例年、その時々に応じて重要と思われるテーマについて FD 講演会等を企画しているが、すべての教員のニーズにきめ細やかに応えることは難しい。そこで、令和 3 年度は、改善のための 1 つの試みとして、事前に講演のテーマに関するアンケートを実施し、その結果を講演内容に反映してもらうことで参加者が知りたいことが多く盛り込まれた講演となるよう講師の先生にご協力いただいた。具体的には、第 3 回歯学部 FD 講演会「アクティブラーニング 何のために・誰のために を考える」において、事前の教員に対するアンケートでアクティブラーニングに関する疑問や悩み、実践していることや実践したいことなどを自由に書いてもらい、それを講師の森先生にお伝えし、講演内容に取り入れていただいた。同講演会は、歯学部におけるアクティブラーニングに関する FD 講演会の第 2 弾であり、より実践的な内容を求める声に応じて企画したものである。その結果、事後アンケートで「参考になった」や「有用だった」、「理解が深まった」等の好意的な感想が多く寄せられた。このことから、上記の方法は、参加者の満足度の高い FD 講演会とする方略として一定の効果があったものと思われる。

## 大学 IR コンソーシアム学生調査結果（令和2年度実施分）の分析（歯学部）

評価する点	<ul style="list-style-type: none"> <li>多くの学生は、実習や実験を介して、将来の仕事に役立つ知識や技術を体験的に学んでいると実感している。</li> <li>学部卒業後の進路に大学院進学を予定する学生が3年生で増えている。</li> <li>学部卒業後に留学を希望する学生が3年生で増えている。</li> </ul>
課題と考える点	<ul style="list-style-type: none"> <li>3年生では、授業時間外に予習と復習を行う時間や授業に関連しない勉強をする時間が減少する傾向にある。また、将来に備えてプレゼンテーションや文書作成の能力を高めるといった自己研鑽の意識が低い。一方、クラブや同好会に参加する時間および大学外でのアルバイト・仕事を行う時間は上級生で増加する傾向であった。したがって、3年生の勉学に対する意欲の低下が推察される。</li> <li>3年生において、授業内容が将来の仕事と関連するという点に関する満足度は高い一方で、授業の質に対する満足度が低い。</li> <li>過半数の3年生が大学設備に対する満足度が低いと回答している。</li> </ul>
課題への具体的な対応案	<ul style="list-style-type: none"> <li>授業と実習の質を高めるとともに、学生の勉学に対する意欲と知的好奇心を促すため、教員の教育能力の向上が必要になる。対応として、これまでに行ってきた取り組みを精力的に継続する。具体的には、学生による授業評価アンケートを積極的に実施し、集計結果を各科目担当分野へ配布する。そして、各科目の責任者は授業改善シートを提出し、学生からの意見をもとに授業・実習内容と教育方法等の改善を図る。</li> <li>新型コロナウイルス感染症の蔓延により実施されなかった授業公開・授業参観による教員相互の評価を行う予定である。</li> </ul>
昨年度挙げた改善・対応策の進捗状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>昨年度に挙げた具体的な対応策は、教員の教育能力の向上と魅力のある授業・実習の展開を目的とした FD 関連活動の実質化であった。教員の教育能力の向上を図るため、継続して FD 関連活動を行ってきた。アクティブラーニングに関する講習会（タイトル：遠隔授業主体のコロナ禍におけるアクティブラーニングの実施方法ー考え方と具体例についてー）やベストライター賞を受賞した複数の教員による実習指導講習会を行った。</li> </ul>
新型コロナウイルス感染症対応に関する本学・各部署の取組との関連に影響すると思われる回答とその内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>FD 活動の1つとして、授業公開と授業参観による教員相互の評価を予定していたが、新型コロナウイルス感染症に対応するため、中止せざるを得なかった。</li> </ul>



# 令和3年度 鹿児島大学工学部FD委員会活動報告書

## はじめに

工学部FD委員会は、個々の教員の教育改善の試みを支援するとともに、各学科(プログラム)の教育および学部教育全体の質を向上させるための活動を継続的に実施している。

本報告書は、令和3年度の活動報告である。委員と学生係職員が協力して作成した。評価アンケートのデータ処理等は学科事務支援室の皆さんに作業していただいた。これらさまざまな協力に感謝を申し上げる。本報告書を読んでいただき、FD委員会自体の改善のために委員会活動に関する忌憚のない意見をお寄せいただければ幸いである。

令和3年度鹿児島大学工学部ファカルティ・ディベロップメント委員会  
委員長 川畑 秋馬

## 令和3年度 鹿児島大学工学部ファカルティ・ディベロップメント委員会委員

委員長	川畑 秋馬	(工学部副学部長, 第1号委員)
委員	小金丸正明	(機械工学プログラム, 第2号委員)
委員	甲斐祐一郎	(電気電子工学プログラム, 第2号委員)
委員	横須賀洋平	(建築学プログラム, 第2号委員)
委員	甲斐 敬美	(化学工学プログラム, 第2号委員)
委員	木村 至伸	(海洋土木工学プログラム, 第2号委員)
委員	大橋 勝文	(情報・生体工学プログラム, 第2号委員)
委員	高梨 啓和	(化学生命工学プログラム, 第2号委員)
委員	原田 隆	(理工学研究科等事務部長, 第4号委員)
事務	有村美樹子	(理工学研究科等研究科・工学系学務課学生係長)
事務	三原なつか	(理工学研究科等研究科・工学系学務課学生係)

## 第1章 鹿児島大学の中期目標と工学部のFD活動

鹿児島大学の中期目標には、【A1】「進取の精神」を発揮して課題の解決に取り組むことのできる多様な人材を育成する。【A3】教育目標の達成に向け、体系的カリキュラムを整備するとともに、学修成果を可視化し、教育内容・方法の改善サイクルを確立し、全学的な教育の内部質保証システムを整備する。といったことが掲げられており、充実したFD活動の実施が求められている。工学部FD委員会では令和3年度もこの中期目標の達成を目指して活動を行った。工学部では、全7プログラムのうち5プログラムが日本技術者教育認定機構(JABEE)の認定プログラムであり、他の2プログラムもJABEEに準拠した教育を行っている。これまで継続的に実施してきた授業アンケートによる授業改善などのFD活動は、JABEEの求める教育改善のためのPDCAサイクルに取り込まれた形で実施されている。令和3年度の第1回工学部FD委員会においては、年度内に、1) 授業アンケートの実施と授業計画改善書の作成、2) 授業公開と授業参観の実施、3) FD講演会の実施、4) 学外FD研修会への学部教員の派遣、5) 授業評価アンケートの分析、6) 報告書の作成の6つの活動を実施することが決定された。本報告書ではこれらの項目について報告を行う。

## 第2章 工学部FD講演会および鹿児島大学FDワークショップ

### 2.1 工学部FD講演会

令和3年度の第1回工学部FD講演会は、令和4年2月16日(水)15時から16時まで工学部教授会を一次中断してZoomを使用したオンライン形式で行った。講師はプレゼンテーションルーム(理工系総合研究棟2階)において講演を行い、一部の教員(執行部役員、教授会の議題・報告等で説明を行う教員)は同室で聴講した。今回の講師は令和2年度の工学部エクセレント・レクチャー受賞者の7名の先生方で、リレー方式でお話いただいた。講演テーマは「受賞対象の授業において工夫している点、教育活動に対する考え方や自己評価」であり、講演内容には、自身の授業におけるアクティブ・ラーニングの実施内容及びその効果や課題などについても含めていただいた。本講演会への工学部教員の参加者数は101名で参加率は95.3%であった。

講演者(所属プログラム)

松崎健一郎 教授(機械工学)	大畠 賢一 准教授(電気電子工学)
木村 至伸 准教授(海洋土木工学)	五島 崇 助教(化学工学)
満塩 勝 助教(化学生命工学)	鹿嶋 雅之 准教授(情報・生体工学)
横須賀洋平 准教授(建築学)	

### 2.2 新任教員FD研修会(若手教員研修会)

若手教員研修会が令和4年2月18日(金)13時から15時にリアルタイム配信で開催された。この時期は卒論修論発表の時期で教員は大変忙しく、参加したくても出来ない教員がいることも想定されてか、オンデマンド配信でも視聴できるように配慮されていた。私は若手教員には入ら

ない年齢になっているが、教育方法について興味があったことから3月になってから視聴した。

今回の研修会では「学習者中心の学習環境デザインを考える」をテーマに、学生の持つ知識やスキル、モチベーション、信念などを踏まえていかに授業をデザインするかを考える研修会であった。最初に医学部保健学科の清水佐智子先生と共通教育センターの日高佑郁先生により「遠隔授業でのグループワークデザイン」と「学生のモチベーションを考えた英語授業の実践」についてそれぞれ事例紹介があった。次に、高等教育研究開発センターの森裕生先生より「学習者中心の学習環境デザインとは？」と題して講演があった。

この研修会を通じて学生のモチベーションを維持させるにはどのようにするのか、学生にわかりやすくするにはどうすればいいのかについてのヒントが得られた。特になぜこういう勉強をする必要があるのかその意義をわかりやすく説明することが重要だと感じた。今後、この研修会で得た方法やアイデアを講義や研究指導等に生かしたいと思う。（松元隆博、情報・生体工学プログラム）

## 2. 3 学外FD研修

令和3年11月21日の14時から16時までにELPAセミナー実行委員会が主催する「GIGAスクール、次のステップへ」にZoomにて参加した。

まず、教育の情報化について説明を受け、2000年のマルチメディアの活用から始まり、2001年にはインターネットの導入、2008年に児童への情報端末の支給が始まり、2009年に電子黒板の導入、2019年にGIGAスクールが提唱され、現在に至るまでの教育現場への情報技術導入が説明された。

次に清泉女学院短期大学 中村洋一先生から、GIGAスクールを導入にあたり、教育現場に情報技術を導入する前に、どのような内容を教えて学生の学力等を測定・評価するか、どのくらい到達しているかを、どのように測定・評価するか、事業の内容と目標に明確化などの教育現場への情報技術導入の設計がいかに重要であることを説明していただいた。その説明に管理がしやすいChromebook、様々なサービスがあるGoogle、同時共同編集に使用されるWorkspaceを千曲市の教育現場に導入した事例を説明していた。また、AIドリルで学力向上により2021年プラチナ賞を受賞した坂城高校&長野県教育委員会の事例として、個別学習支援システムの導入により指導の個別化が可能であるが述べられた。

その後、AI導入時の問題点として、学生の間違った答案（誤答）をいかに収集して電子化するかについて挙げられた。AIで使用されているディープラーニングには膨大な学習データは必要であるが、学生のプライバシーの問題もあるため、誤答収集には担当する教員への負担が非常に大きいことが現在の大きな課題となっていることが示された。

この研修から、教育現場にAI技術を導入して個別教育を実施することが理想だが、そのコンテンツ作成、常に更新する試験問題および解答、学生の誤答を分析して数値化する部分は教員の負担になってしまうため、授業担当者に加え、コンテンツ作成、誤答の分析等を担当する者を教員や補助職員を増やせない状況で用意するかが今後考えなければならないと感じた。（大橋勝文、情報・生体工学プログラム）



### 第3章 学生による授業評価とそれを生かした授業

#### 3. 1 学部授業評価アンケート分析結果

##### 3. 1. 1 学部平均値の推移とその分析結果

図 3. 1. 1(1)に、講義・演習科目の授業評価アンケート結果の工学部全体の平均値に関して、平成 29～令和 3 年度までの 5 年分の授業評価の推移を示す。平均値は、科目数で重みづけて求めた値である。令和 2 年度より、講義・演習科目に関するアンケートの質問項目に④授業の難易度が追加された。ほとんどの項目で顕著な改善傾向にあることが分かる。⑮予習・復習に関しては、ばらつきはあるが変化してないと考えられ、依然として他の質問項目よりも低い値を取っており、授業時間外学習が不足しないよう注視し対策を講じる必要がある。また、⑫教員の対応についても、ほとんど変化が無く他の項目に比べやや低いことから、特に改善することが望まれる。

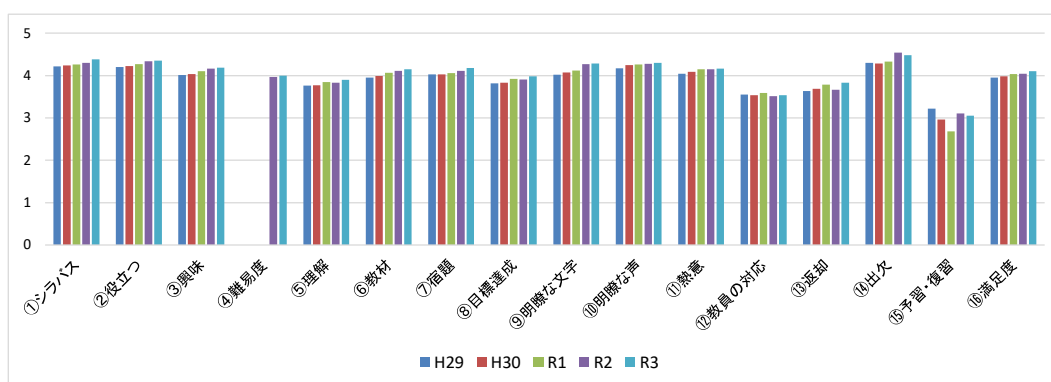


図 3. 1. 1(1) 講義・演習科目の結果 (工学部全体の平均) (平成 29～令和 3 年度)

次に、平成 29～令和 3 年度の実験系科目に関する授業評価アンケート結果を図 3. 1. 1(2)に示す。ほとんどの項目が変化してないか減少傾向にあり、特に令和 2 年度はコロナ禍のため、実験科目の多くが遠隔やオンデマンド授業により十分に実施出来なかったため、この年度は特に低い値となったが、令和 3 年度は本来の対面での授業も実施されたこともあり、すべての項目で前年度より評点の改善が見られた。⑬予習の項目だけは継続的に改善していることから、講義・演習科目とは異なり、授業時間外学習は十分に確保されていると思われる。⑪教員の対応については、他の項目に比べ低く、特に改善することが望まれる。

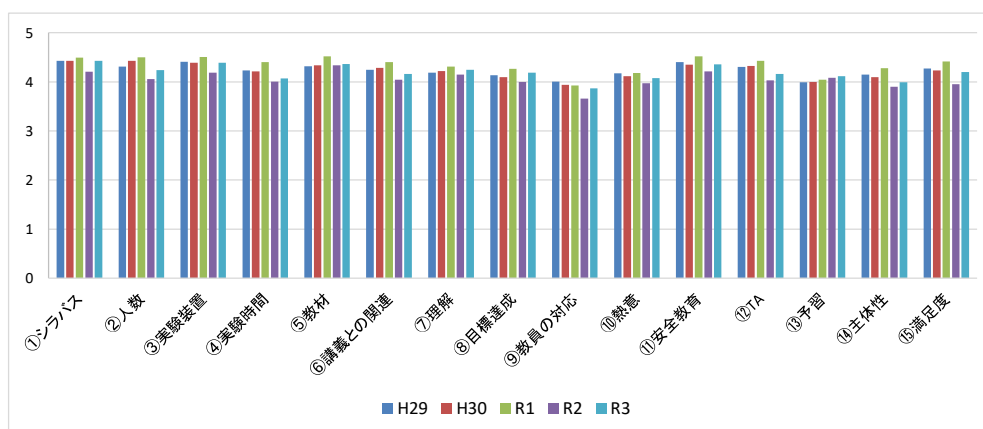


図 3. 1. 1(2) 実験系科目の結果 (工学部全体の平均) (平成 29～令和 3 年度)

### 3. 1. 2 機械工学科 (PGM) の推移とその分析結果

図 3.1.2 には、機械工学科 (PGM) の講義科目に対して実施された授業評価アンケートの評価結果を示す。図 3.1.2 は、前期および後期 (1 年間) に関講された科目に対する各アンケート項目の評点の平均点について、平成 29 年度から令和 3 年度 (5 年間) までの推移を示している。評点は、「そう思う : 5」、「どちらかと言えばそう思う : 4」、「どちらとも言えない : 3」、「どちらかと言えばそう思わない : 2」、「そうは思わない : 1」の 5 段階評価である。また、「④難易度」は、令和 2 年度から追加された項目である。

図 3.1.2 から、ほとんどの項目は評点 4 前後で推移しており、各教員による継続的な授業改善によって、高評点が維持されていると考えられる。このなかで、「⑫教員の対応」、「⑬返却」、および「⑮予習・復習」が、比較的評点が低い項目として挙げられる。「⑫教員の対応」は昨年度よりも微増したが、引き続きオフィスアワーの有効活用など、学生が教員に質問しやすい環境づくりが必要と考えられる。「⑬返却」は、「⑫教員の対応」にもリンクしていると考えられる。特に受講生が多い科目において、限られた授業時間中にレポートや試験の返却・解説を実施するのは難しい面もあるが、学習管理システム (manaba) を効果的に活用するなどして、対応する必要があると考えられる。「⑮予習・復習」は、例年もっとも評点が低い項目である。予習・復習と直結するようなレポート課題の内容・回数を再検討する等、学生が率先して予習・復習を行うようなさらなる取り組みが必要と思われる。今後も授業評価アンケートの推移を確認しながら、授業改善を継続することが重要である。

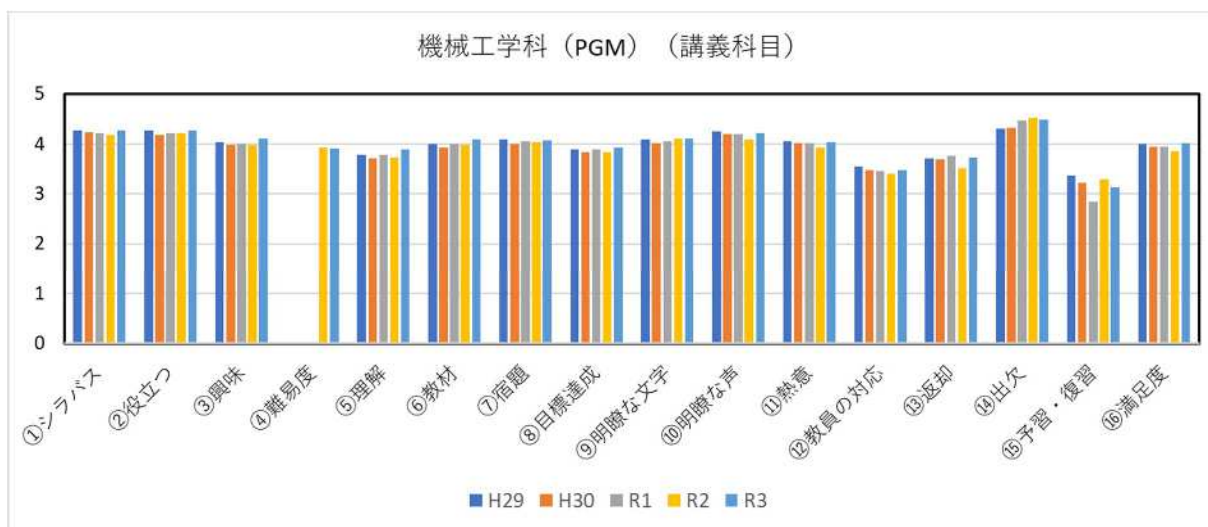


図 3.1.2 機械工学科 (PGM) の講義科目のアンケート結果の推移 (平成 29~令和 3 年度)

### 3. 1. 3 電気電子工学科 (PGM) の推移とその分析結果

図 3.1.3(1)および図 3.1.3(2)に、電気電子工学科 (PGM) の過去 5 年分 (平成 29 年度から令和 3 年度) の授業評価アンケート結果の推移を示す。図 3.1.3(1)が講義科目を、図 3.1.3(2)が実験科目を示している。講義科目に関しては、①シラバス、②役立つ、⑨明瞭な文字、⑩明瞭な声、⑭出欠は高い評価を維持し、③興味、⑥教材等は上昇傾向を示し、⑦宿題等、⑪熱意は昨年度から変化はほとんどなく、⑤理解、⑧目標達成、⑫教員の対応、⑬返却、⑮予習・復習は低水準のまま

である。⑤理解と⑧目標達成に関しては、増加傾向にあるものの、⑫教員の対応と⑬返却に関しては、教員の改善の努力が望まれる。⑮予習・復習は、昨年度より0.12ポイント減少しているが、今年度は対面授業が増えたため、遠隔授業による自宅学習が減少したことが要因の一つと考えられる。学力の低下や学生の興味の変化以外に、学生の生活スタイルの変化が強く影響していると考えられるため、入学時の早い段階で、自宅学習を習慣付けるような指導をしっかりと行っていく必要がある。昨年度から④難易度の設問が追加されたが、昨年度とほぼ同じであった。実験科目については、ほとんどの項目においても高い評価が得られており改善傾向である。昨年度から遠隔を利用した実験指導が追加されており、⑦理解や⑧目標達成の改善に良い影響を与えたと思われる。今後も高い評価が得られるように改善を続けていく必要がある。

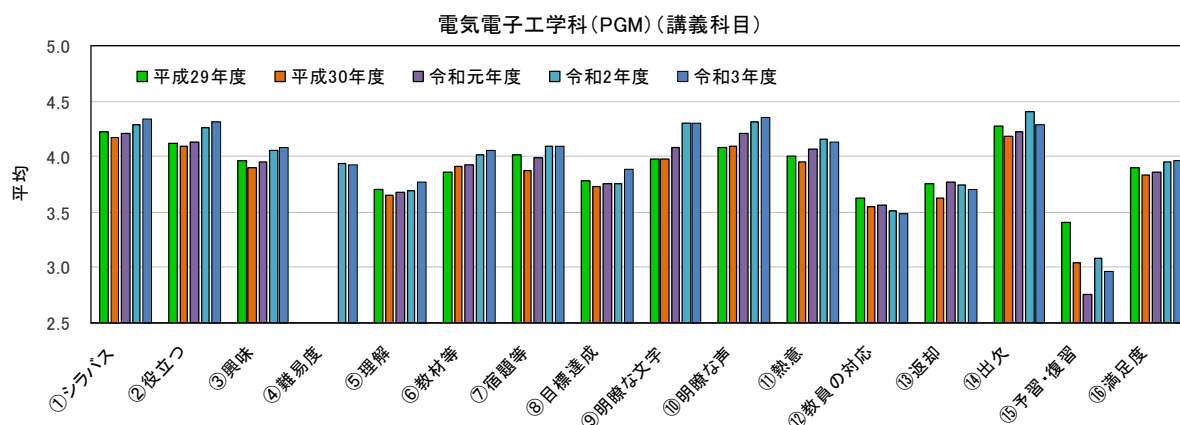


図 3.1.3(1) 電気電子工学科(PGM)の講義科目のアンケート結果の推移(平成29～令和3年度)

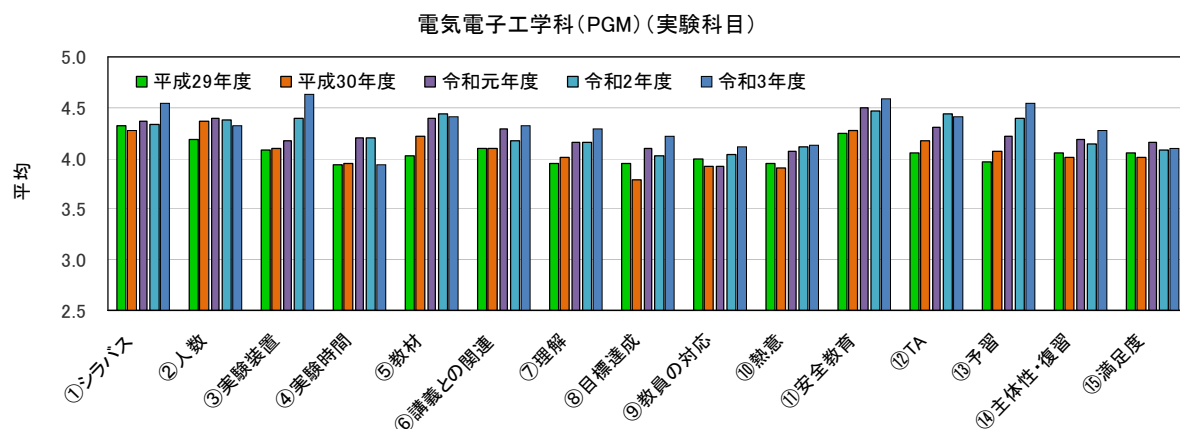


図 3.1.3(2) 電気電子工学科(PGM)の実験科目のアンケート結果の推移(平成29～令和3年度)

### 3. 1. 4 建築学科(PGM)の推移とその分析結果

前年度報告と同様に、建築学科では、建築設計演習の科目が全学年にあり、講義形態は、講義とも実験とも異なるが、アンケートでは、これを講義科目に含めている。また、実験科目は、1科目だけで比較しにくいので、講義科目についての授業アンケート結果を分析することとする。

図 3.1.4 は、建築学科の講義科目の授業評価アンケート(前期および後期)で過去5年間の年度

ごとの結果を示している。⑫教員の対応、⑬返却、⑮予習・復習を除き、評点が4前後の高い水準を推移している。前年度まで多くの項目で増加傾向にあったが、今年度に減少へ転じた項目が、⑦宿題、⑩明瞭な声、⑭出欠、⑮予習・復習である。⑫教員の対応、⑬返却は3年間減少している。遠隔授業による理解度の把握が対面授業時より難しくなり、課題の量を調整していたことが考えられ、遠隔授業と対面授業の混在により、出欠や返却の項目が減少したと考えられる。教員側の更なる改善が望まれる。一方で、①シラバス、⑤理解、⑨明瞭な文字、⑪熱意、⑯満足度は増加傾向にある。授業の質を保ちつつ、遠隔授業に対応していたことが考えられる。令和3年度の設計演習科目6科目の予習・復習の項目の平均値は4.62であり、その他講義科目の学習時間とバランスよく配分することが望まれる。

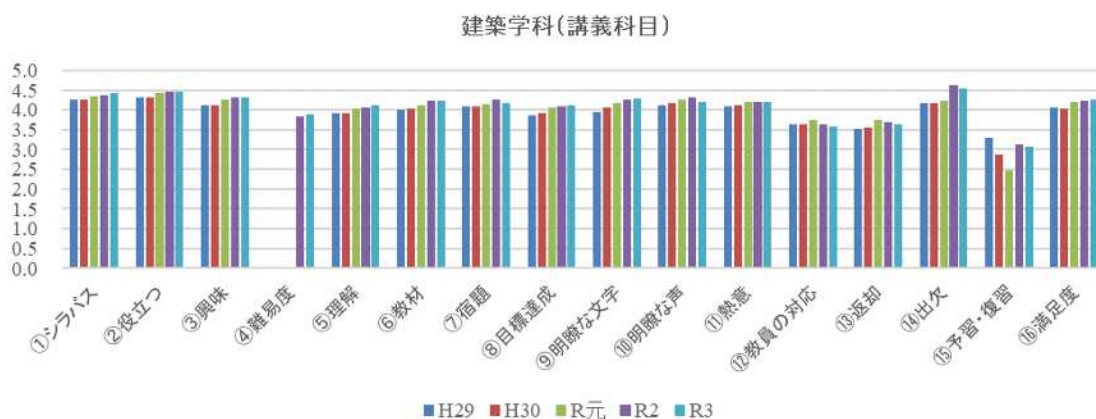


図 3.1.4 建築学科の講義科目の授業評価アンケートの結果 (平成29～令和3年度)

### 3. 1. 5 環境化学プロセス工学科 (化学工学 PGM) の推移とその分析結果

最近5年間(平成29年～令和3年度)の講義科目の授業評価アンケート結果を図3.1.5(1)に示す。前期と後期の平均値をそれぞれの期での実施科目数で重み付けして平均をとった値である。ほぼすべての項目であきらかに上昇傾向が見られ、これは継続的なFD活動の成果によるものと考えられる。「⑮予習・復習」の項目は平成29年から3年間、減少していたが、この2年間は回復した。遠隔講義が実施された影響の可能性も考えられる。ただし、令和3年度と比較してもこの項目は他学科の平均値3.07に対して2.93とかなり低く、今後のさらなる工夫が必要である。

実験科目のアンケート結果は図3.1.5(2)に示す。年度によるばらつきも大きいように思えるが、この2年間は対面での指導が難しい時期も多くあり、なんらかの影響もあるに違いない。また、令和2年度後期からは実験科目の実施体制を変更した。従来は研究室毎に実験テーマを用意して受講学生はグループで順番に各研究室のテーマについて実験を行っていた。変更後は学生実験担当の教員を決めて、その指導のもとで実験を実施するようにした。このように従来とは異なった方式となった影響もあるかもしれないが明確ではない。令和3年度において他学科の平均に比べて5%以上高かった項目は「②人数」と「③実験装置」である。一方、5%以上低かった項目は「⑪安全教育」であり、来年度には改善が望まれる。

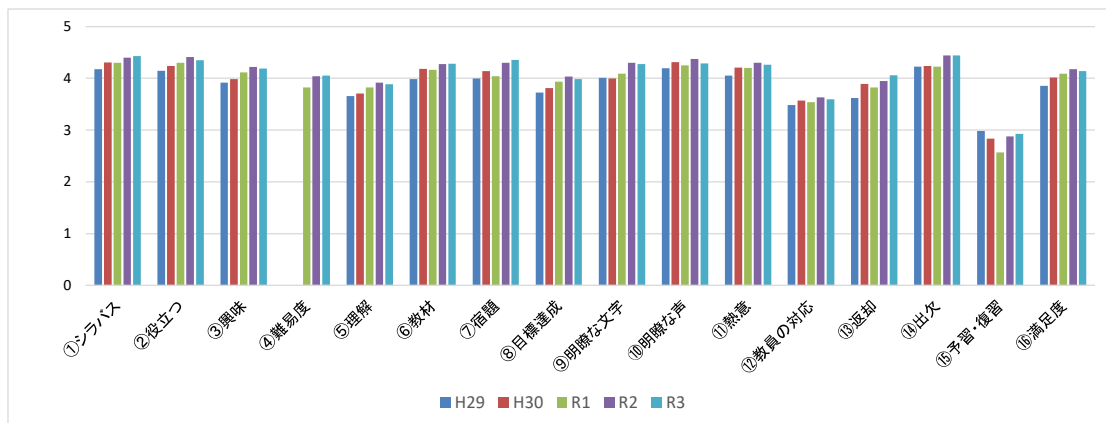


図 3.1.5(1) 環境化学プロセス工学科（化学工学 PGM）における講義科目アンケート結果

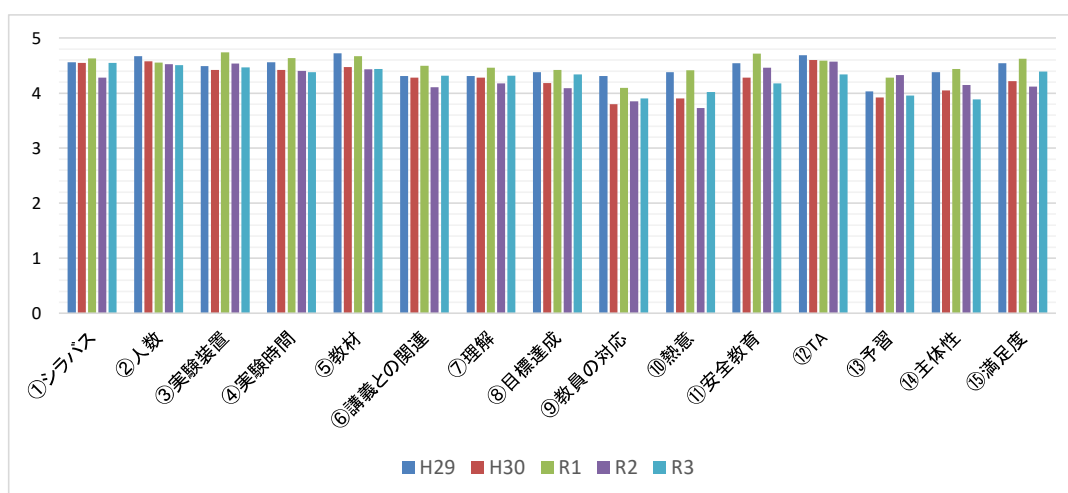


図 3.1.5(2) 環境化学プロセス工学科（化学工学 PGM）における実験科目アンケート結果

### 3. 1. 6 海洋土木工学科（PGM）の推移とその分析結果

図 3.1.6(1)は、本学科（PGM）において、平成 29～令和 3 年度の 5 年間に実施した講義・演習科目の授業評価アンケートの結果を示す。本学科（PGM）における令和 3 年度の評価は、「⑭出欠」と「⑮予習・復習」を除くすべての項目において令和 2 年度の評価を上回った。令和 2 年度はコロナ禍における不慣れな遠隔授業に対する評価のため、直接的な比較対象にはならないが、全体的に右肩上がりの傾向が認められ、授業改善の継続的な効果が表れている結果であると考えられる。また、令和 3 年度前期・後期における本学科（PGM）の評価は、「⑮予習・復習」を除くすべての項目において工学部の平均値を上回った。本学科（PGM）における「⑮予習・復習」の評価は 3.02 ポイントであり、1 コマ（90 分）の授業に対する予習と復習の時間（レポート作成時間を含む）が 2 時間以下であることを意味している。「⑦宿題」の評価が 4.25 ポイントであることから、予習と復習の時間は少ないものの、レポート内容は授業の理解に役立っているとも判断できる。しかし、学生の予習と復習に対する姿勢は十分であるとは言えず、“単位の実質化”の観点からも改善に向けた努力が必要である。令和 2 年度は遠隔授業へ対応するため、教材作成などで多くの教員が負担を強いられた。その経験を生かした教育の実践が学生にも受け入れられ、高い評価結果につながったと考えられる。

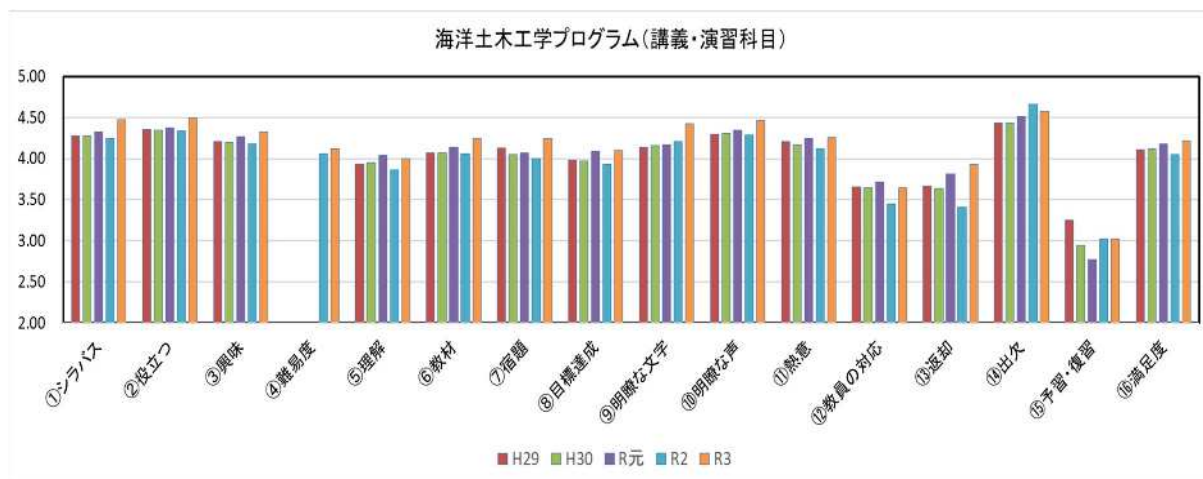


図 3.1.6(1) 海洋土木工学科 (PGM) の講義・演習科目のアンケート結果 (平成 29 年度～令和 3 年度)

図 3.1.6(2)は、本学科 (PGM) において、平成 29～令和 3 年度の 5 年間に実施した実験科目の授業評価アンケートの結果を示す。ここでのアンケート実施科目数は 4 科目である。本学科 (PGM) における令和 3 年度の評価は、「①シラバス」、「②人数」、「⑦理解」、「⑧目標達成」、「⑨教員の対応」、「⑩熱意」で令和 2 年度の評価を上回っているが、他の項目では同程度もしくは若干低くなっている。多くの項目において 4 ポイント以上の高い水準を維持しているものの、令和元年度をピークに減少傾向にあるため、今後も注視しておく必要がある。令和 3 年度は対面形式によって実験を実施することが可能となったが、3密回避や後期開講の実験では日程の一部で遠隔形式での対応を迫られた。このような制限があった中でも、4 ポイント以上の高い水準を維持できているのは、実験講義を担当した教員の努力の賜物と言える。このことは、「⑨教員の対応」、「⑩熱意」の評価からも判断できる。ただし、「⑬予習」については評価が低い傾向にあるので、改善できるよう努力をする必要がある。

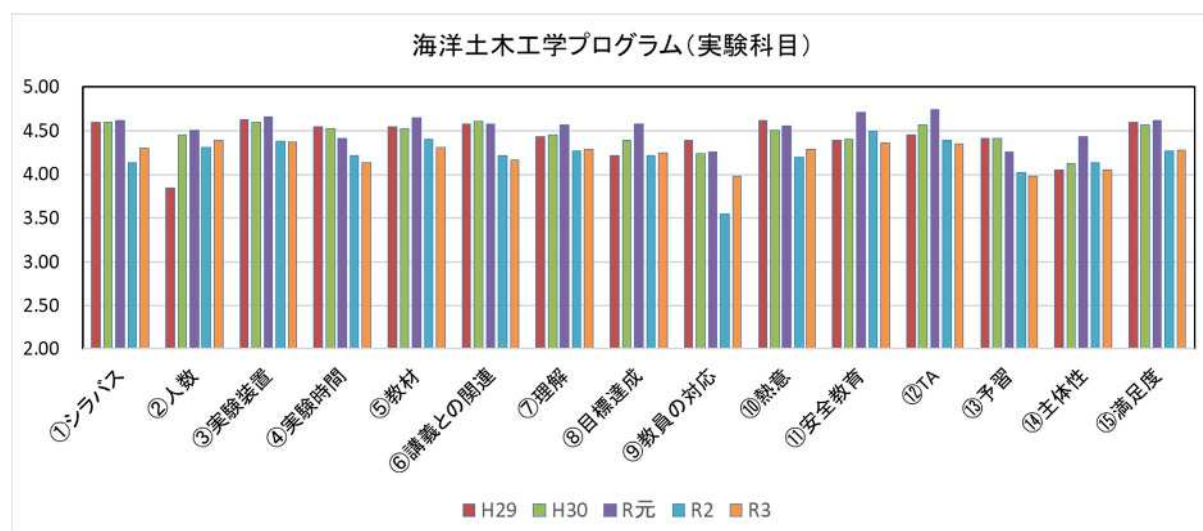


図 3.1.6(2) 海洋土木工学科 (PGM) の実験科目のアンケート結果 (平成 29 年度～令和 3 年度)

### 3.1.7 情報生体システム工学科(情報・生体工学 PGM)の推移とその分析結果

平成21年度の改組により情報工学科と生体工学科・生体電子工学コースが統合され誕生した情報生体システム工学科が、卒業生を送り出したのは今年度で10回目となる。令和2年度から先進工学科情報・生体工学プログラムに改組したため、1,2年生が情報・生体工学プログラム、3,4年生は情報生体システム工学科のシラバスで教育を受けている。

FD 授業評価アンケートは、平成21～令和3年度の13年間収集されており、これらのデータから経年変化の分析(平成30年,令和元,2,3年度)と今年度の工学部平均値との比較分析を行うこととする。講義系科目に関するアンケートの質問項目は、①シラバスの内容と実際の授業との一致性,②授業の今後の有用性,③授業の興味深さ,④授業の理解度,⑤教材等の適切性,⑥レポート等の理解への効果度,⑦授業目標の達成感,⑧文字の明瞭性,⑨声の明瞭さ,⑩教員の熱意度,⑪質問等に対する教員の対応度,⑫レポート等の評価への満足度,⑬出席回数,⑭予習・復習の時間数,⑮総合的満足度であった。講義系科目の集計結果を図3.1.7(1)に示す。

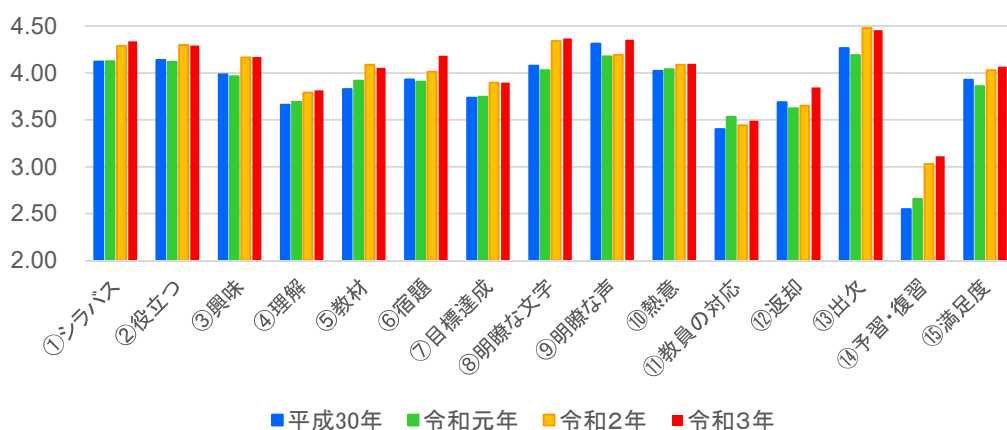


図 3.1.7(1) 情報・生体工学プログラムの講義科目授業評価アンケート結果の推移 (H30～R3)

令和3年度は、令和2年度から始まったZoomを用いたオンライン講義(リアルタイム遠隔講義)や講義を動画にしていつでも講義を受講できる(オムニバス形式)により、従来の講義形式である平成30年,令和元年では、いくつかの質問項目で違いが見られた。Zoomを用いたオンライン講義や講義を動画にした画像をアップデートすることでいつでも講義を受けられ、さらに繰り返し受講できるなど今までにない手法を取り入れらことで、「①シラバス」から「⑧明瞭な文字」と「⑬出欠」「⑮満足度」が上がった。しかし、対面での対応ができなくなったため⑪の教員の対応が昨年度は低下したが、遠隔の手法で学生への対応をするなどの工夫をした結果、若干上昇した。特に、リアルタイム遠隔講義やオムニバス形式の講義資料を事前に配布する教員が多くなったため、予習・復習を行う学生が増えたと考えられる。また、今年度の工学部平均値と比較すると、「⑭予習・復習の時間数」を除く項目の評価は工学部平均に拮抗する値であった。「⑭予習・復習の時間数」は年々上昇し3.0を超えているので、「⑭予習・復習の時間数」の低い科目の数値を改善する必要がある。

実験系科目の質問項目は、①シラバスの内容と実際の実験との一致性、②実験グループの人数の適切さ、③実験装置の適切さ、④実験時間の適切さ、⑤教材の理解への貢献、⑥講義との関連、⑦理解度、⑧目標達成、⑨教員の対応、⑩教員の熱意、⑪安全教育の実施、⑫TAの熱意、⑬予習の度合い、⑭主体的に実験に取り組めたか、⑮総合的満足度であった。実験系科目の集計結果を図3.1.7(2)に示す。今年度の実験は各学生が持つPCなどで実習をしてもらいZoomによりTAや教員が対応する手法を行ったが、実験準備に十分な時間がとれなかったため、多くの項目でアンケートの評価を落としてしまった。今年度の実験は助教と准教授が分担で作成したが、助教と准教授が担当している講義を遠隔講義にする作業を進めながら行っているため、実験の準備等に十分な時間をかけられないなどの問題が生じていると思われる。そのため、各教員の授業負担を考慮した改善を行う必要がある。

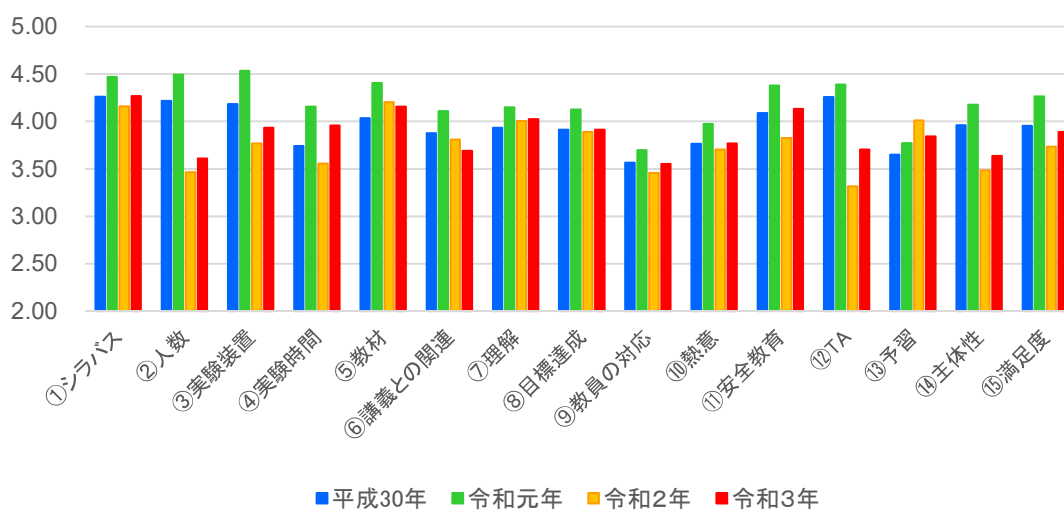


図 3.1.7(2) 情報・生体工学プログラムの実験科目授業評価アンケート結果の推移 (H30~R3)

以上のように、講義系科目及び実験科目のアンケート結果の推移及び分析から、情報・生体工学プログラムの授業は、アンケート点数の評価としては今年度も昨年度と同様に、教員及びTAの努力により十分な水準を保っていることが分かった。しかし、情報・生体工学プログラムの授業の教員が減る一方で補充が行われていないため、学生数が同規模の電気電子工学プログラムに比べ教員数が59%と少なくなっている。このような状況で、十分な教育を行うためには、各教員により一層の改善が求められるが、同時に教員補充等の対策を期待する。

### 3. 1. 8 化学生命工学科 (PGM) の推移とその分析結果

令和3 (2021) 年度の集計結果を令和元~2 (2019~2020) 年度分と合わせて、図 3.1.8(1)に示す。令和2年度より④難易度という項目が追加された。項目⑫、⑮を除き評価は概ね4前後を推移しており、工学部・他学科と比較しても遜色のない結果であった。評価の低い項目のうち、まず項目⑮予習・復習の評点については、3.16と昨年度の3.03より高く、2年連続して改善傾向であった。本年度は、昨年度と同様にオンデマンド配信やmanabaを活用した電子的な資料の配布など遠隔授業の形態で実施された授業が一定数あり、受講生の時間的な都合に合わせて予習・復習を行うことができた結果と考察する。一方で、⑦宿題や⑮満足度は2年連続して低下している



が、例年よりも取り組むべき宿題が多く、また教員と直接対面して指導を受ける機会が少なかったためこのような評価につながったと推察する。遠隔授業の場合に、manabaなどのツールを十分活用して、提出された課題に対する丁寧なフィードバックを実践していくことが改善に繋がると考える。次に、項目⑫教員の対応の評価が低く、各教員の対応に学生が満足していないことがわかる。上述したように、遠隔授業が増えたことにより、教員が授業の準備に費やす時間が増え、授業後の細やかな対応がおろそかになった可能性がある。また、財政の劣悪化や諸業務の肥大化が教員の本業である教育を侵食し始めていることが危惧される。学生から提出されたレポート等は、JABEE用のエビデンスとしても重要な資料であり、各教員がmanaba等の教育支援ツールを使いこなし、効率的に保管することが望まれ、教育活動に費やす時間を十分に確保することが重要である。

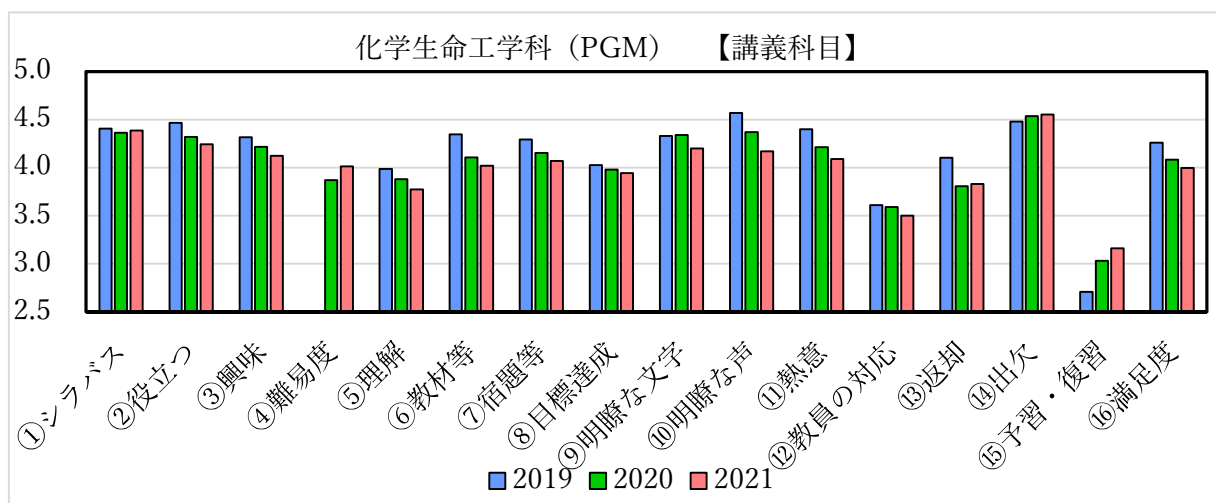


図 3.1.8(1) 化学生命工学科におけるアンケート結果

次に、項目②、④、⑤、⑧、⑪、⑯について、平成 23 (2011) 年度から令和 3 (2021) 年度までの経年変化を図 3.1.8(2) に示す。平成 28 (2016) 年度においてポイントが下がる傾向が見られたが、平成 29 (2017) 年度から令和元 (2019) 年度にかけてはすべての項目で改善され、FD活動の成果が表れていると考えていたが、直近の 2 年間は難易度を除くすべての項目で前年度よりも低評価となった。とくに、⑤理解と⑯満足度の項目が減少していることに注目しており、受講

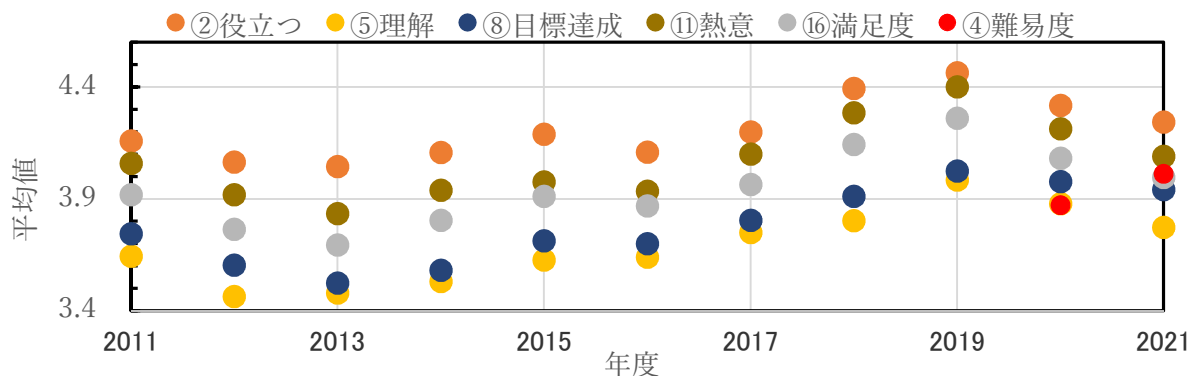


図 3.1.8(2) 化学生命工学科における主要アンケート結果の経年変化

生の視点では、manaba や電子メールを介した質問事項への対応では、十分に満足のいく指導が受けられていないと感じていると思われる。これに呼応するように、④難易度が高くなっている。科目によってはとくに成績下位の受講生の習熟度が例年よりも低下していると感じられる場合があり。今後対面形式での授業が再開された後は、オンデマンド配信などの長所を取り入れながら学生と直接対話して指導するということの重要性を再確認して授業を行うことが重要と考える。

### 3. 2 授業計画改善書の各学科の活用状況

#### 3. 2. 1 機械工学科 (PGM) の活用状況

学科 (PGM) のFD委員が収集した授業計画改善書は、授業評価アンケートの評価点や科目GPAとともに学科 (PGM) の教育評価委員会が整理して分析を行っている。学科 (PGM) の教育評価委員会は、整理した内容と分析した結果を「教育評価委員会報告書」としてまとめている。この報告書は、JABEE活動の一環としても活用されている。授業計画改善書は、学科事務室にPDFファイルで保管され、全教員が必要に応じて閲覧できる。また、教育評価委員会報告書は学科のサーバに電子ファイルで保管され、授業改善を実施する際の資料として利用できるように全教員に公開されている。

#### 3. 2. 2 電気電子工学科 (PGM) の活用状況

授業計画改善書は、各科目の授業評価アンケート評点とそのレーダーチャート、および授業評価アンケートの結果と共にプログラム事務室や会議室の JABEE 用保管庫にて保管され、教員はいつでも閲覧できる。主として工学部FD委員が管理し、JABEE 活動の一環として、プログラムFD委員会において授業改善に取り組む資料として活用している。

#### 3. 2. 3 建築学科 (PGM) の活用状況

教員は、授業評価アンケートの集計結果に基づいて、授業計画改善書を作成し、次年度以降の授業に反映させることとなっている。また、授業アンケートの全科目の評点は学科内で閲覧可能であり、問題点を共有することとしている。本学科では、平成19年度より授業満足度の評点と授業担当時間を用いて、教員の教育貢献度を評価するシステムを導入している。この結果も学科内で閲覧可能にしている。

#### 3. 2. 4 環境化学プロセス工学科 (化学工学 PGM) の活用状況

本学科 (PGM) では、前期末および後期末に教員間ネットワークを開催し、成績評価の分布や授業改善計画書および次期の開講科目のシラバスの確認を実施している。シラバス、授業改善計画書、試験問題および講義資料等は科目毎にファイルボックスに収納して専用の部屋に保管しており、プログラム教員がいつでも閲覧できる仕組みが整備されている。カリキュラムについては、カリキュラムWGで年に数回の検討・精査を実施している。今後もこのような継続的な取り組みにより、評価の再確認と改善を図っていく。

#### 3. 2. 5 海洋土木工学科 (PGM) の活用状況

工学部FD委員会が実施している授業評価アンケートの集計結果を基に、授業担当教員は「授業計画改善書」を作成することが義務付けられており、シラバスに記載した評価基準との整合性を

自己評価した上で、学科(PGM)教育システム評価委員会に提出している。提出された評価資料に基づき、学科(PGM)教育システム評価委員会では成績評価分布や受講生の合格率などの分析を行い、その結果を学科(PGM)会議で報告することになっている。また、授業担当教員は、「専門科目の学習・教育目標達成度の評価」の作成も義務付けられており、専門科目の学習目標の達成度評価を自己評価した上で、学科(PGM)教育システム評価委員会に提出している。これらの結果より、学科(PGM)会議で提起された教育上の問題点等に関して、学科(PGM)内の各委員会で議論し、改善計画を策定している。このようなPDCAサイクルを構築し、授業計画改善書と学習目標の達成度評価の両者を活用しながら、教育の点検および改善を継続的に実施している。また、授業アンケート評価結果を利用して、エクセレント・レクチャー賞教員も推薦している。

### 3. 2. 6 情報生体システム工学科(情報・生体工学 PGM)の活用状況

情報生体システム工学科では平成22年度より、授業計画改善書を学科事務室に保管し、全ての教員が閲覧可能な状態で管理を行っている。各教員による授業改善への取り組みおよび結果を教員全員で共有することで、学科全体の教育内容の継続的な改善に貢献している。また、学科としてのJABEE申請は行わないことにし、その代わりに学科内で組織している教科グループWGにおいて、半期に1度、全開講科目について担当教員による報告と振り返りを実施し、科目の内容の見直しなどの検討の際に、資料として活用している。

### 3. 2. 7 化学生命工学科(PGM)の活用状況

授業計画改善書は応用化学工学科応用化学コースの時代から引き続き同一の理念の下で活用を図っている。すなわち、授業計画改善書を、卒業生アンケート集計結果、授業参観報告書およびそれに対する回答書等とともに、各教員が分析、評価し、必要に応じて互いに連携する科目の担当教員グループで作るカリキュラム小委員会において、十分な教育効果が達成されているかどうか討論されている。検討した結果や問題に対する対策はプログラム内の教育プログラム改善検討委員会において報告され、全体カリキュラムとの整合性も考慮しつつ、最も効率の良い方法で運用できるよう検討され、必要な改善がなされている。このように、授業計画改善書等のFD活動書類を資料として、教員間で協力・連携そして切磋琢磨するシステムが構築され、その中で授業内容・方法の改善もなされている。

## 第4章 学科(PGM)におけるFDとJABEEへの取り組み

### 4. 1 JABEE認定プログラムを実施している学科(PGM)での取り組み

#### 4. 1. 1 機械工学科(PGM)

機械工学科(PGM)は、平成16年度にJABEE認定の審査を受審した。ここで評価Wの指摘を受けていた評価項目に対しては、平成18年度のJABEE中間審査において全て改善している。平成21年度実施のJABEE認定継続審査では、評価Cを受けた項目が10箇所あったが、評価W以下の評価を受けた項目は無く、6年間のJABEE認定継続が認められた。平成27年度実施のJABEE認定継続審査では、評価Cを受けた項目が11箇所あったが、評価W以下の評価を受けた項目は無く、さらに6年間のJABEE認定継続が認められた。令和3年度に再びJABEE認定継続審査を受審予定であ

ったが、新型コロナウイルス感染症の影響により令和4年度秋に延期された。

本学科(PGM)は、平成22年度から広範囲にわたる機械工学領域の教育・研究を、生産工学、エネルギー工学、機械システム工学の3つのコース(分野)で分担実施している。各コース(分野)は、複数の研究室により構成され、それぞれのコース(分野)にコース長(分野長)をおいている。この3名のコース長(分野長)と副専攻長(副PG長)から組織される「専攻教育委員会」において、学科の教育プログラムを点検していたが、平成25年度からその役割は「コース長(分野長)会議」に移管された。この「コース長(分野長)会議」での議論と各教員への提案・指摘をもとに、学科(PGM)の教育環境のさらなる改善と実施体制の強化が図られている。さらに学科(PGM)内には、教務委員会委員、FD委員会委員、JABEE委員会委員等からなる教育の現状を分析する委員会としての「教育評価委員会」と、JABEE認定のための審査資料作成を行う「JABEEワーキンググループ」がある。令和3年度は、JABEE認定継続審査を受審(令和4年度に延期)するための審査項目や評価項目の確認などを行い、審査資料の作成を行った(継続中)。また、「教育評価委員会」において、教育環境に関するアンケートを実施した。さらに、「JABEEワーキンググループ」では、4年生の卒業時におけるJABEE修了判定の評価を行った。平成27年度より、1年生から4年生まで成績の自己点検として「学習・教育達成目標(教育目標)の達成度の自己点検」を続けている。また、卒業論文発表時に複数教員による発表評価を「卒業論文発表評価表」により実施しており、評価結果をすべての発表学生にフィードバックしている。これらの委員会・ワーキンググループによって、教育の改善に関する実質的・継続的な活動が実施されている。

#### 4. 1. 2 電気電子工学科(PGM)

電気電子工学科(PGM)では、平成28年10~11月に、JABEE継続審査を受審し、6年間の継続認定が認められた。今年度は、プログラムFD委員会を計2回開催し、その他プログラム会議や電子メールでの議論、シラバス点検、各種アンケートの実施などでプログラムの教育改善に取り組んできた。今年度のプログラムFD委員会を含むプログラムの教育改善活動は以下の通りである。

- (1) シラバスの点検：プログラムFD委員会において、専門教育科目の全シラバスを点検し、シラバスの整備を行っている。
- (2) 授業評価アンケート結果等を活用した授業改善：プログラムFD委員会において、科目の成績評価と授業評価アンケート結果、授業計画改善書等をもとに授業の検証を行ない、必要に応じて担当教員と連絡を取っている。
- (3) 新入生アンケートと追跡アンケートの実施：新入時とその1年後にアンケートを行い、学生の実態を把握し、改善のための資料としている。
- (4) 学生定期面談の実施：各期末の指導教員による学生定期面談を義務化し、指導・助言する体制を整えている。
- (5) 教員間連絡ネットワークの構築：科目間連携会議を基礎科目と各コース専門科目で行い、プログラムFD委員会で結果を議論している。
- (6) 社会からの要望調査の実施：来学された企業採用担当者に「求める学生像」や「電気電子工学科(PGM)に期待する教育内容」などについてのアンケートを実施し、教育改善に役立てている。

#### 4. 1. 3 建築学科 (PGM)

建築学科では、平成 29 年度に JABEE の継続審査を受審し、6 年間の継続認定が認められた。建築学科における最近の FD 活動と JABEE 関連の主な取組は以下のとおりである。

- (1) 認定継続審査に向けた JABEE 学科組織の編成：2023 年度予定の認定継続審査に向けて JABEE 学科組織を編成し、受審の準備を進めている。今年度は、国際基準の建築系 6 年一貫教育プログラムを視野に入れた経営戦略経費や概算要求の要求書を提出した。
- (2) 公開ホームページの更新：ホームページでは SNS との連携を図っており、建築学科関係のイベント告知やニュースなど情報発信を随時実施した。今年度はサーバを学術情報基盤センターに移設し、より堅牢な情報セキュリティ体制を整えた。
- (3) 改正建築士法に伴う建築士試験への対応科目の実施：建築士法の改正による一級建築士試験の受験資格変更の対応科目を実施し、昨年度に引き続き今年度も在大学生の合格が達成されている。
- (4) 教員の教育負担と教育貢献度の評価：教員の教育負担を調べて教育貢献度を評価し、資料に基づいて授業の分担を再検討した。
- (5) 期末および中間授業アンケートの実施：期末授業アンケートだけでなく、中間授業アンケートも実施した。中間授業アンケート結果により、進行中の授業の改善を促した。

#### 4. 1. 4 海洋土木工学科 (PGM)

海洋土木工学科 (PGM) の教育プログラムは、平成 16 年度に JABEE 認定を受け、その後も技術士資格を有する外部評価委員と教育カリキュラムに関する意見交換を行うなど、継続した教育改善を実施している。令和 3 年度は認定継続審査に向けた自己点検を実施し、令和 4 年度に受審する予定である。JABEE に関する情報は本学科 (PGM) ホームページを通じて広く公開されており、学習・教育到達目標と JABEE 基準との対応、各学習・教育到達目標の学習保証時間（目標時間）、学習・教育到達目標を達成するための授業課題の流れ、各科目の学習保証時間などの情報を閲覧することが可能である。

本学科 (PGM) における FD 活動は、JABEE プログラムの実施・点検に沿った教育改善の一環として、次のような確立した手順で行われている。工学部 FD 委員会が実施している授業評価アンケートの集計結果を基に、授業担当教員は「授業計画改善書」を作成することが義務付けられており、シラバスに記載した評価基準との整合性を自己評価した上で、学科 (PGM) 教育システム評価委員会に提出している。提出された評価資料に基づき、学科 (PGM) 教育システム評価委員会では成績評価分布や受講生の合格率などの分析を行い、その結果を学科 (PGM) 会議で報告することになっている。また、授業担当教員は、「専門科目の学習・教育目標達成度の評価」の作成も義務付けられており、専門科目の学習目標の達成度評価を自己評価した上で、学科 (PGM) 教育システム評価委員会に提出している。これらの結果より、学科 (PGM) 会議で提起された教育上の問題点等に関して、学科 (PGM) 内の各委員会で議論し、改善計画を策定している。

なお、本学科 (PGM) における教育内容の特徴として、エンジニアリング・デザイン教育の充実が挙げられる。3 年次後期に開講されている「海洋土木デザイン工学 I」において、エンジニアリング・デザインの実例を学ぶ。そして、実際のプロジェクトの調査方法や代替案を立案し、レポー

トを提出して発表を行う。次に、4年次前期には、「海洋土木デザイン工学 II」において、3~4人程度のグループで、知識、情報や技術を駆使して、社会的・技術的な問題点を自ら発見して解決することを体験する。その成果をポスタ・セッション形式で発表を行う。こうして学生自身のチームワーク力を養いながら、課題発見能力や問題解決能力の高い技術者の養成を試みている。さらに、本学科(PGM)では、以前より、アクティブ・ラーニングを幾つかの科目で採り入れている。例えば、「土木技術者倫理」では、技術者に要求される倫理に関して、グループによる調査・発表や、ディベートを行っている。「海岸防災工学」では、防災に関して、グループによる調査・発表や、避難ワークショップを、「海洋土木工学総合演習 II」では、技術士による講演会と意見交換などのアクティブ・ラーニングを1コマ実施している。近年における発表は、コロナウイルス感染症の影響により、Zoomを用いた遠隔発表によって実施している。

#### 4. 1. 5 化学生命工学科 (PGM)

化学生命工学科の前身である応用化学工学科応用化学コースが、平成 18 年度の審査により JABEE 認定を受け、平成 29 年度に認定継続審査を受審し、6年間の追加認定を受けた。JABEE に関する情報は当プログラムのホームページを通じて広く公開されており、学習・教育目標と JABEE 基準との対応、学習・教育目標を達成するための授業課題の流れ、授業時間などの情報を閲覧することが可能になっている。また、教育改善のためのアンケート調査が、化学工学プログラムおよび同窓会との共催による講演会開催の際に既卒業・修了生を対象に1回、年度末に新卒業・修了生を対象に1回、計2回継続的に実施され、結果はプログラム会議およびプログラムホームページを通じて情報共有、公表されている。アンケート項目中の共同利用施設に対する評価結果はプログラム長名で各施設長等へ送付され、改善等の一助としてもらうとともに、プログラムと施設等との連絡網の構築を図っている。さらに、工学部統一書式の自己点検表(ポートフォリオ)を活用し、学生自らが自己点検を行い継続して改善する仕組みを導入している。新入生については初年度に重点的なケアが必要であるとの考えから、後期が開始される時期に全学生の面談を担当教員が行い、単位の取得状況、サークル活動やアルバイトと勉学との両立状況、進路の検討状況についてインタビューを実施、指導している。同様に、成績不調者に対しても、インタビューを実施している。これらのインタビューでは、報告の書式を学科独自に作成し、重要なインタビュー項目が欠落しないように工夫している。さらに、インタビューの結果を書面として保管し、必要に応じて、当該学生の過去のインタビュー結果を参照しながらインタビューを実施できるようにしている。これらの活動は平成 26 年度に工学部で新入生に対して導入されたアドバイザー制度・学生相談員制度に先んじて行ってきたものであり、これらの新制度発足後もそれらと矛盾の無いように自己点検表制度等を継続的に運用している。昨年度に引き続き、令和3年度もコロナ禍の影響で実際に対面形式でのインタビューが困難なケースも見られたが、これまでのノウハウも活用して、学生相談員の協力のもと WEB 上でのリモート会議ツールや電子メールなどを活用して、学生の指導を行った。また、授業公開・参観についても積極的に取り組んでいる。各教員が年間1科目は必ず授業を公開し、どの科目に誰が参観するかを予め定め、全教員が必ず1回は他の教員の授業参観を受ける仕組みを導入している。また、今年度は、コロナ禍の長期化に伴って講義の在り方(各講義を遠隔講義で行うのが効果的か、対面講義の方が効果的か)の見直しを各講義担

当者が行い、より教育効果が高いと期待される講義形態を模索した。また、令和2年度に試行的に行われた成績評価分布等の確認を今年度も継続して実施し、単位の認定状況に問題がないことを確認した。

以上のような取り組みを継続的に実施しているが、更なる改善を目指しプログラム内に教育プログラム改善検討委員会を設置して検討を重ねており、PDCAサイクルを構築している。

## 4. 2 JABEE を受審していない学科 (PGM) での取り組み

### 4. 2. 1 環境化学プロセス工学科 (化学工学 PGM)

本学科 (PGM) では平成 16 年度より継続してきた JABEE 認定を平成 26 年度に終了し、これに代わる取り組みとして、平成 26 年度入学生より公益社団法人化学工学会の認定資格である「化学工学技士 (基礎)」の取得を意識したカリキュラムを実施し、本学を試験会場とした団体受験も実施している。合格率アップに向けて補習内容の見直しや講義内容の修正などの対策も継続して実施している。令和 3 年度は新型コロナウイルス感染症の流行のため、試験日が 9 月 11 日から 11 月 20 日に延期された。受験者は 39 名 (学部学生は 31 名) で、合格者は 10 名 (学部学生は 7 名) であった。

学科 (PGM) の F D 活動においては、学期末および学期中間に行われる学生授業アンケートやその結果に対する授業改善計画書の作成、FD 講演会への参加などに取り組んでいる。さらに、本学科教職員は、原則として前期末および後期末に開催される教員間ネットワークに参加している。教員間ネットワークは開講期の直前に開催されるもので、各教員がどのような講義を行うのかシラバスを公開して教員間の相互理解を深めている。また、令和 2 年度からは成績評価の分布についての点検も追加した。シラバス、授業改善計画書、試験問題および講義資料等は科目毎にファイルボックスに収納して専用の部屋に保管しており、プログラム教員がいつでも閲覧できる仕組みが整備されている。

将来のカリキュラムについては年に数回のカリキュラム検討ワーキングを開催し、学科 (PGM) としてどのような科目をどのような順番で開講するか、誰が担当するかなどについて、綿密に検討を行い、新入生に配布される履修要項の更新を毎年度行っている。

学生は毎期ごとに個人の学習達成目標の到達度を再確認・自己評価させる意味で、ポートフォリオを作成している。なお、ポートフォリオを印刷できるコーナーを学科図書文献室に設置している。学部 1, 2 年生には年 2 回、全教員が面談員となり定期個別指導 (学生面談) をチーフアドバイザーの教員が企画し実施することで、学修指導ならびに生活指導を行い学生と教員との間のコミュニケーションをとっている。3 年生は後期の研究室仮配属後に研究室で面談を実施しているほか、4 年生には卒業研究の従事記録を記録させている。また、学生相談員による相談会を実施し、学修、生活について気軽に相談できる機会を設けている。

### 4. 2. 2 情報生体システム工学科 (情報・生体工学 PGM)

情報生体システム工学科は、平成 21 年度に情報工学科と生体工学科・生体電子工学コースが統合されて新学科となり 13 年間に経過した。今年度は、新学科の卒業生を送り出して 9 年目となる。令和 2 年度から先進工学科情報・生体工学プログラムに改組したため、1, 2 年生が情報・生体工

学プログラム，3，4年生は情報生体システム工学科のシラバスで教育を受けている。

情報・生体工学プログラムは，JABEEへの申請は行わないことに決定し，その代わりにプログラム内の教科グループWGを組織し，開講科目とカリキュラムの改善に取り組んでいる。情報・生体工学プログラムでは，教育企画委員会と，FD推進委員会により，学科の教育改善などのFD活動を担っている。FD推進委員会の下には，教科グループWG（情報基礎科目，ソフトウェア科目，工学基礎・教養科目，語学科目，実験科目）が設置されており，前期と後期の終わりに全教員による科目ワーキングを開催し，各科目の履修状況，単位取得状況，講義内容，成績評価基準などを報告し，学科の教育内容についての評価・検討を行っている。ここ数年，学生の数学の学力低下が懸念されており，工学基礎・教養科目WGでは，数学に関する授業の内容を科目間で調整している。また，ソフトウェア科目WGでも同様に，プログラミング言語に関する講義や演習の内容を検討し，科目間での調整を行っており，昨年度は開講期の変更を決定した。さらに，実験科目WGでは，昨年度末の計算機システムの導入に伴い，実験機器の更新や内容の見直しを検討している。情報生体システム工学科では，授業計画改善書を教員間で互いに閲覧し，各教科グループWGで積極的に活用できるように学科事務室に保管・管理している。また，1年生には，高校における数学・理科の詳細な履修状況，志望動機，進路希望などを調査する新入生アンケートを実施して，学生への指導の参考にするとともに，カリキュラム改善に役立てている。

## 第5章 GPA 制度の現状と学習成果

平成 18（2006）年度のFD報告書において，GPA 制度の現状と問題点の整理がなされ，GPA の推移，分布，GPA 制度と JABEE との関係，授業アンケート調査結果との関係について調査・検討がなされた。平成 19（2007）年度と平成 20（2008）年度は年間 GPA の推移，年間修得単位数の推移，入学者数に対する卒業生数の割合の推移が調査された。平成 21（2009）～平成 27（2015）年度も平成 20（2008）年度の調査を継続し，GPA と授業アンケートデータの関係が調査され，学習成果と学習の質の関連性についての分析が試みられた。本年度も継続してこれらの調査・分析を試みた。

### 5. 1 年間 GPA の推移

平成 29（2017）年度報告書までは，平成 15（2003）～平成 29（2017）年度入学生の年間 GPA の平均値（以下，年間 GPA 平均と記す）を経過年数別のデータを取りまとめ，入学年度による年間 GPA 平均の推移について報告してきた。ここでは概ね次のような傾向が見られた。1) 在学 1 年目の年間 GPA 平均に対し在学 2 年目の年間 GPA 平均が低くなる。2) 在学 2 年目の年間 GPA 平均に対し在学 3 年目の年間 GPA 平均が高くなり，在学 1 年目の年間 GPA 平均と同程度まで回復する。詳細は平成 29（2017）年度のFD報告書を参照していただきたい。

平成 28（2016）年度に共通教育改革が行われた。初年次教育プログラムが設定され，「初年次セミナーI」，「初年次セミナーII」が開講された。また，グローバル教育プログラムとして，「英語」の他，「異文化理解」が新設された。さらに，これまで基礎教育科目として共通教育で開講されていた数学および物理科目は，共通教育では開講せず工学部で専門教育の一環として位置づけられた。そこで，本項では平成 27（2015）年度入学生以降の年間 GPA 平均の推移について報告する。



図 5.1 に、平成 27（2015）年入学年度～令和 3（2021）年入学年度の年間 GPA 平均を示す。入手データの都合上、年間 GPA 平均は GPA が 1.5 以上の学生の平均値を用いて算出している。

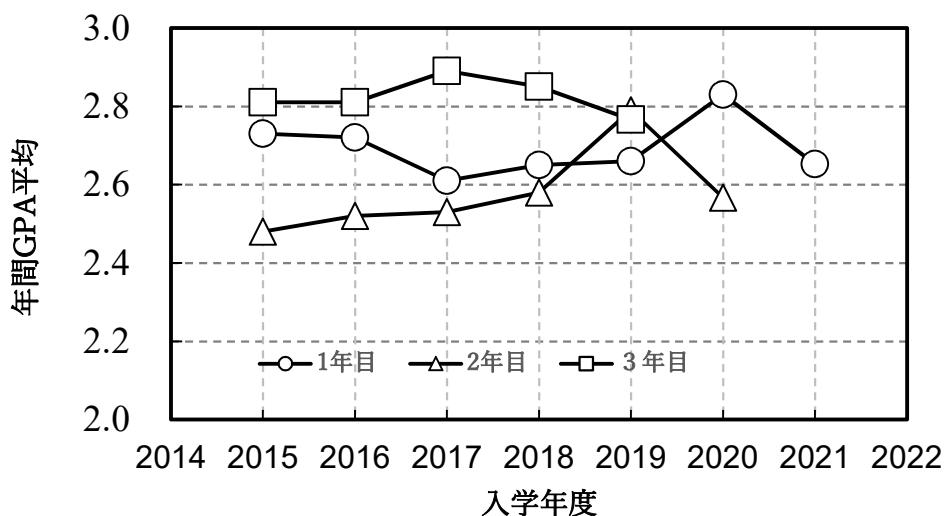


図 5.1 入学年度による年間 GPA 平均の推移

この 7 年間の 1 年目の年間 GPA 平均は、2.61～2.83 であった。共通教育改革の初年次は 2.72 であったが、それ以降の 3 年間は 2.6 台に低下していた。ところが、令和 2（2020）年度は 2.83 と値が急上昇した。これは工学部の改組に伴い工学系概論科目の「工学概論」と分野融合科目の「工学分野実験・演習」（工学系共通クラスの学生のみ履修）の新設科目が開講され、教員の熱意と 1 年生のやる気（競争心）が増したためだと考えられる。また、コロナ禍のために遠隔授業が実施され自宅やアパートから出られず、勉強する時間が増えたことも年間 GPA 平均の急上昇に繋がったものと考えられる。しかし、令和 3（2021）年度は 2.65 と急に減少した。これは、A 評価の割合を約 20%とするように成績評価基準が変更されたことが要因の一つとして考えられる。他の要因として学生側が遠隔授業に慣れたことで、遠隔授業のさぼり方を見出したのではないかとの推測もできるが、成績評価基準の変更が大きな要因と予想される。この仮説は、変更した成績評価基準は令和 4（2021）年度も継続しているため、令和 4（2021）年度の結果によりはつきりすると思われる。

この 6 年間の 2 年目の年間 GPA 平均は 2.48～2.79 であった。従来 2 年目は大学生生活に慣れて勉強意欲が希薄になるため 1 年目に比べて年間 GPA 平均は低下してきたのだが、平成 31（2019）年度入学生の 2 年目は 1 年目を 0.13 ポイント上回った。これもコロナ禍のために遠隔授業が実施され外出できず勉強時間が増えたこと、教員も学生も不慣れな遠隔授業に慎重に対処したことなどが原因であると考えられる。また、平成 27（2015）年度入学生から令和元（2019）年度入学生まで 2 年目の年間 GPA 平均は年々上昇してきており、教員の FD 活動が功を奏してきたとも考えることができる。しかし、2 年目の年間 GPA 平均は、1 年目の年間 GPA 平均同様に令和 3（2021）年度は 2.57 と急に減少した。この原因も 1 年目の年間 GPA 平均の推移の原因と同様に、成績評価基準の変更が大きな要因と予想される。この予想は、令和 4（2021）年度の結果を加え分析することで明確化されると思われる。

この5年間の3年目の GPA は従来と同様に回復傾向が見て取れる。平成 29（2017）年度入学生は 0.28 ポイント、平成 30（2018）年度入学生は 0.20 ポイント上昇している。3年目は講座配属や就職を控え、より専門性の高い選択科目に接することでやる気が出たりして、年間 GPA 平均が回復したものと考えられる。しかし、平成 30（2018）年度、令和元（2019）年度と少しずつ年間 GPA 平均の値が減少している。この原因は、コロナ禍による遠隔の講義では受講者間で相談する機会が減っているためと思われる。

4年目は取得単位数が少ないため、比較は行っていない。

## 5. 2 年間修得単位数の推移

図 5.2 には、年間修得単位数の平均値を年度ごとに比較した結果を示す。データが欠落している年度があるが、令和 4（2022）年 3 月におけるデータを過去のデータに追加して示している。すなわち、令和 3（2021）年度における在学 1 年目の 1～2 期生、在学 2 年目の 3～4 期生、在学 3 年目の 5～6 期生が、令和 3（2021）年度に取得した単位数の平均値データを追加して示している。ただし、確定 GPA が 1.5 未満の学生のデータは除いている。

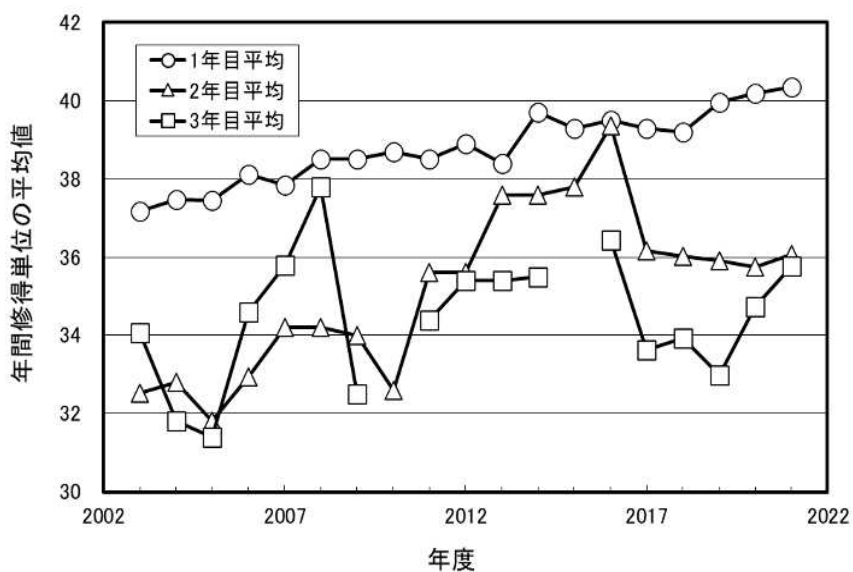


図 5.2 年間修得単位数の平均値

在学 1 年目の 1～2 期生が取得した単位数は、途中多少の増減はあるが、統計を取り始めてからおおむね微増の傾向のように見られる。令和 2（2020）年度および令和 3（2021）年度では 40 を超えており、学生にとって高校の延長と捉えられる共通教育科目や基礎的な専門科目が主であるため、好成績であると考えられる。一方、在学 2 年目の 3～4 期生および在学 3 年目の 5～6 期生が取得した単位数は、年度によって大きく変動しているが、いずれの年度も在学 1 年目の 1～2 期生と比較すると低い。平成 15（2003）年度から令和 3（2021）年度の平均が在学 1 年目の 1～2 期生で 38.8 であるのに対し、在学 2 年目の 3～4 期生は 35.2、在学 3 年目の 5～6 期生は 34.5 と学年が上がるごとに低下している。在学 2 年目以降は高度な専門科目が入ってくるとともに、レポート等の課題も多くなり、学生の息切れが懸念される。また、入学前のイメージと実際の工

学部で学ぶ内容の乖離から、学習意欲の低下、もしくは単位取得の動機付け低下に繋がっている可能性がある。ここ数年は、全国的な学生数の低下により求人数が増加して就職が売り手市場になっているが、コロナ禍および昨今の世界情勢に鑑みると、急激な景気低迷も想定されるため、学生の意識改革を行い、就職率低下を防ぐための対策が必要と考えられる。また、令和2（2020）年度より、コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、多くの科目で遠隔授業が導入された。これにより、学生の理解度が低下して単位取得状況にも影響が出ることが懸念されたが、現時点での解析結果では顕著な落ち込みなどは見られていない。令和3（2021）年度は、前年度と比較して単位取得数が微増している。これは、学生及び教職員がオンデマンド・リアルタイム配信授業や学習管理システム（manaba）を使った授業スタイルに慣れて、プラスの要因として作用したのではないかと考えられる。

### 5. 3 卒業者数と卒業延期者数の割合の推移

図5.3には、卒業者数と卒業延期者数の合計に対する卒業者数の占める割合を示す。平成14（2002）年度から、令和3（2021）年度までの経年変化を示している。

統計を取り始めた平成14（2002）年度以降、この割合は凡そ0.92～0.98の間で推移している。平成21（2009）年度～平成24（2012）年度の割合が低いが、これはリーマンショックに伴う景気低迷の影響によると推察される。その後、平成25（2013）年度及び平成26（2014）年度には0.96強に回復した。ところが、平成27（2015）年度及び平成28（2016）年度には、再び0.94前後まで低下した。これは、平成27（2015）年度に選考解禁が8月1日に後ろ倒しになったことが大きな原因と考えられる。前年度までの4月選考開始からスケジュールが大きく変更され、期間短縮により学生の就職実績に影響を与えたと考えられる。平成28（2016）年度には、面接解禁が6月1日に2箇月前倒しとなったが、実績の好転は見られなかった。平成29（2017）年度には、一転して値が上昇した。この背景として、株価が上昇傾向など景気高揚感と、労働者人口減による企業の求

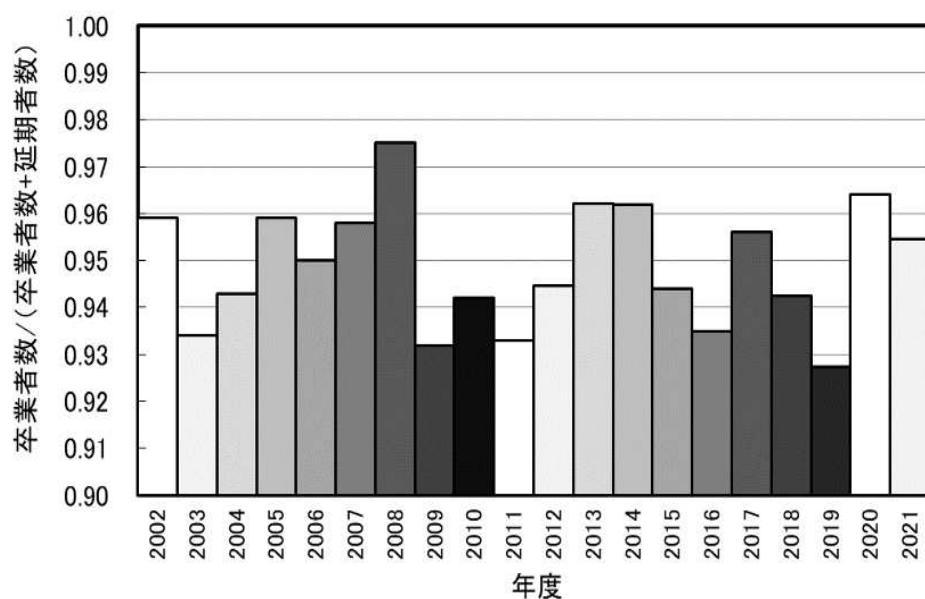


図 5.3 卒業者数と卒業延期者数の合計に対する卒業者数の占める割合の経年変化

人数が増加したことなどが考えられる。しかし、平成30（2018）年度から2年連続で低下し、令和元（2019）年度は約0.93にまで至った。前年度まで容易に就職できたことから、勉学をおろそかにしているため卒業者数が低下したと分析する。令和2（2020）年度から始まったコロナ禍により、景気の急激な低下により卒業者数の割合もさらに低下すると思われたが、予想に反して0.96と増加した。令和3（2021）年度は前年度から減少したが、0.95であり微減である。これは、オンラインによる説明会や面接の形態が増加し、就職活動にかかる経済的負担が軽減されたため、これまで経済的理由によりエントリーする企業数を絞っていた学生が多くの企業へチャレンジすることができたことが考えられる。また、自宅待機期間中に希望する企業の研究に多くの時間を割くことが可能であったなど、ポジティブな要因があったのではないかと考察する。さらに、コロナ禍による就職活動の形態変化が2年目となり、学生側に変化後のスタイルへの慣れもあったのではないかと考えられる。一方で、コロナ禍が長引いており、今後の景気の冷え込みが懸念される。オンラインでの面接対策など、就職活動に対する適切な指導・支援が必要になると思われる。

#### 5. 4 学習成果と質の向上

昨年度に引き続き、これまで蓄積されてきた講義・演習科目の授業評価アンケートから、学生の学習の質と関連があると考えられる「⑤理解」、「⑧学習目標の達成」、「⑮予習・復習」及び「⑯満足度」の4項目に着目し、これらとGPの科目平均値の関係を調べ、学習成果と質の向上に関して検討する。

##### 5. 4. 1 学習成果と質の向上の経年変化

平成16（2004）年度～令和3（2021）年度における、講義・演習科目の授業評価アンケートのうち、「⑤理解」、「⑧目標達成」、「⑮予習・復習」及び「⑯満足度」の4項目の各評価の工学部平均値と、GPの科目毎の平均値（科目GPA）の工学部平均値の推移を図5.4.1に示す。

「⑤理解」、「⑧目標達成」、「⑯満足度」は、少しずつ上昇する傾向を示しており、授業改善への取り組みの効果が現れている。また、これらの3項目は変化傾向が類似しており、学生は、理解度に応じて達成感及び満足感を得ると考えられる。「⑮予習・復習」は、平成17（2005）年度～

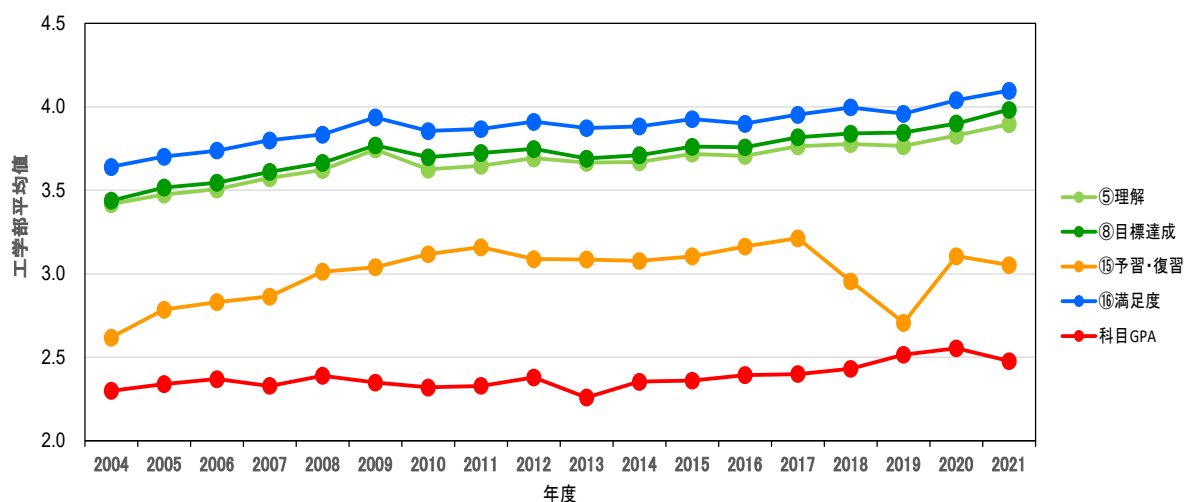


図 5. 4. 1 授業評価アンケートのうちの4項目の評価及び科目GPAの工学部平均値の推移

平成 23 (2011) 年度では緩やかな増加傾向、その後は平成 29 (2017) 年度までほぼ横ばいであったが、ここ数年は大きく変動している。この変動はアンケート実施を manaba システムに変更した後に見られているが、manaba システム導入が直接的に予習・復習の時間に影響を及ぼすとは考えにくく、回答率の変化などアンケートの実施方法との因果関係を詳しく分析していく必要があると思われる。

さらに、科目 GPA と、「⑧目標達成」及び「⑩満足度」の 2 項目の評価の工学部平均値を比較すると、平成 21 年 (2009 年) 度を除いて、変化傾向が類似している。すなわち、受講生の達成感と満足度が得られるような授業を心掛けることが、学生の成績 (GPA) の向上につながるということが読み取れる。一方、平成 30 年 (2018 年) より予習・復習時間が大きく変動しているにもかかわらず、科目 GPA への影響は見られない。manaba システムの導入により予習・復習が効率よく効果的に行えるようになったのか、あるいは、単にアンケート回収方法に問題があり正確な学生の動向をキャッチできていないのか、経年的に注目し考察する必要がある。また、令和元 (2020) 年度以降は改組によって時間割や科目が変わったことや、遠隔授業が導入されたこともアンケート結果や科目 GPA に影響すると考えられるため、これらの点についても注視していく必要がある。

#### 5. 4. 2 令和 3 年度の学習成果と質の向上

令和 3 (2021) 年度の前期および後期の科目 GPA と授業評価アンケート 4 項目の科目平均の相関関係を図 5. 4. 2 (1)、図 5. 4. 2 (2) に示す。

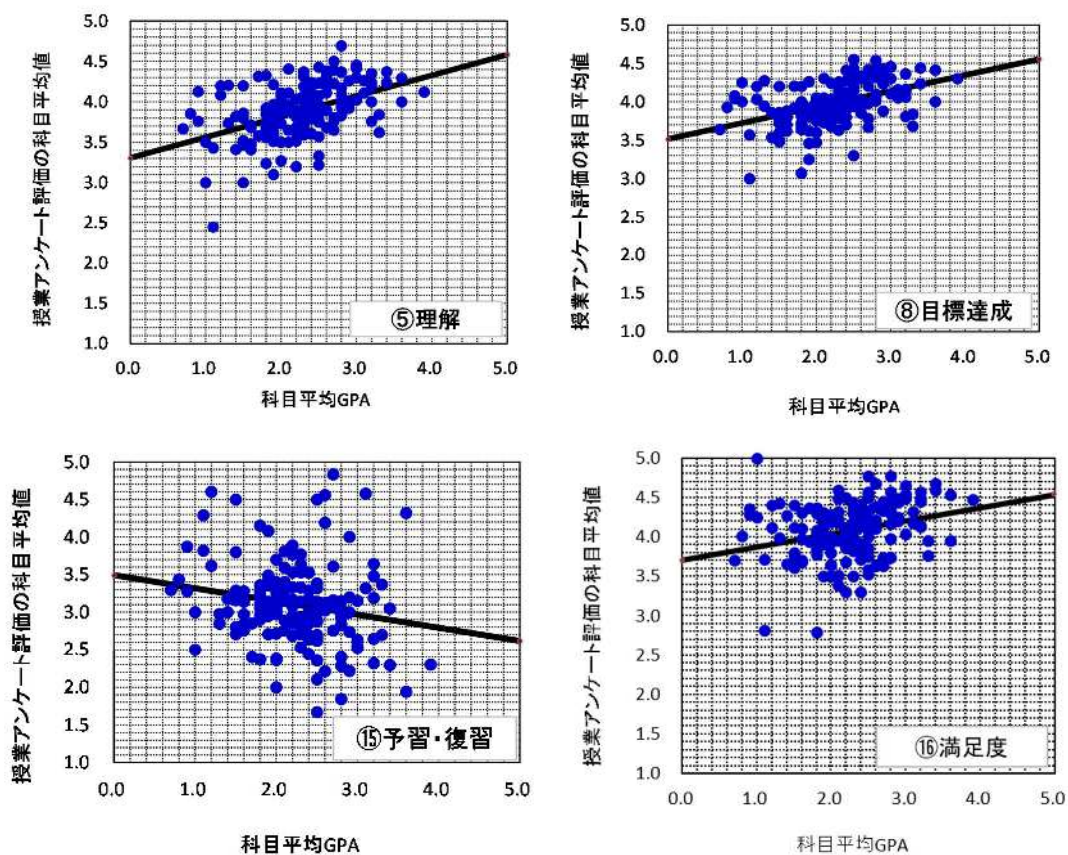


図 5. 4. 2(1) 令和 3 年度前期の科目 GPA と授業評価アンケートの科目平均の相関

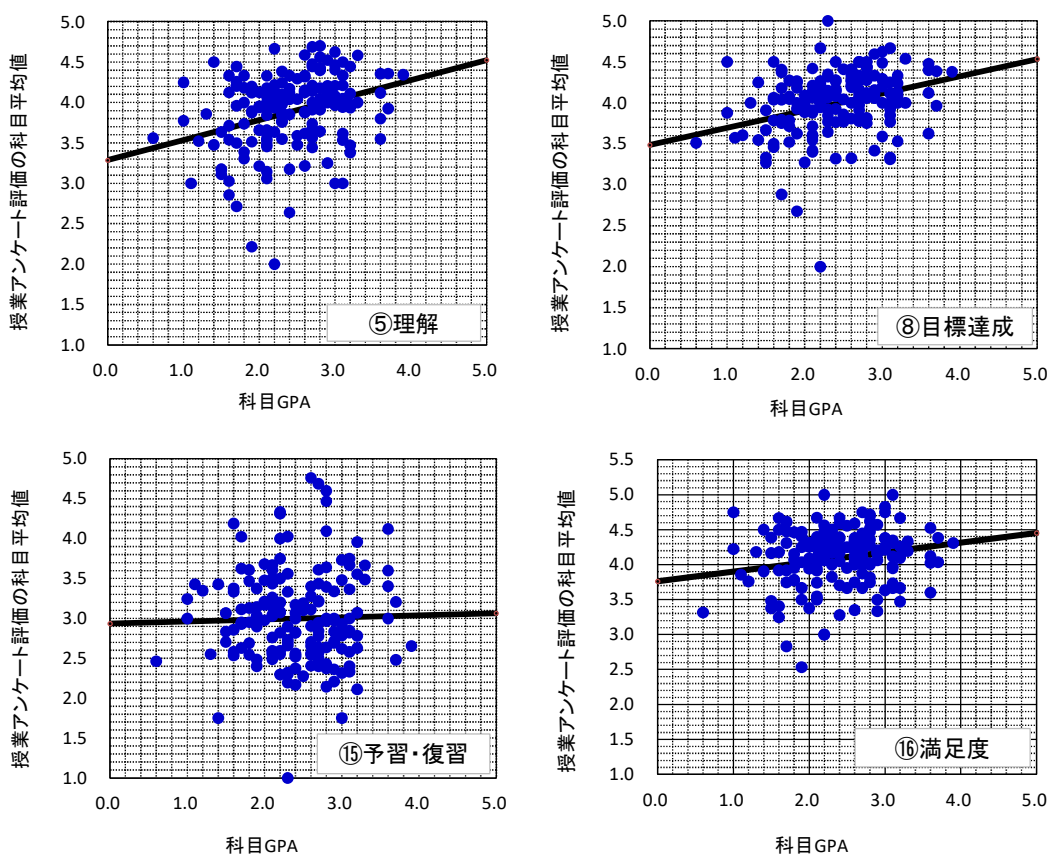


図 5.4.2(2) 令和3年度後期の科目 GPA と授業評価アンケートの科目平均の相関

## 第6章 特筆すべき取り組みや改善事例

前年度から引き続き、今年度の前・後期の授業科目に対して成績評価が厳格かつ客観的に評価しているかどうかの点検を実施するとともに、各教員が作成する授業計画改善書に該当科目の成績評価分布（各評価の人数）を記載した。各プログラムのFD委員がプログラム教員から提出された授業計画改善書をまとめ、それらの資料と成績評価分布一覧表に基づいて、各プログラムにおいて授業評価の点検を実施した。さらにその結果は工学部FD委員会にて確認し、教授会において報告した。この取組は今後も継続して実施する予定である。

## 第7章 令和3年度の工学部FD活動の総括と今後のFD活動

### 7.1 令和3年度のFD活動の総括

第1章で述べたように、工学部では令和3年度の第1回工学部FD委員会において、従来のFD活動を本年度も継続して遂行することが決定され、外部講師によるFD講演会以外はすべての活動が実施された。前年度は新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行のため授業科目で遠隔授業を実施せざるを得ない状況であったが、令和3年度は本来の対面での授業も数多く実施されたこともあり、授業評価アンケートの結果を見ると、工学部の平均として講義科目および実験

科目でほとんどの項目で向上が見られた。

講義科目においては、前年度において向上幅の大きかった明瞭な文字の項目が、令和3年度も高い値となったが、これは前年度からのパワーポイント等の利用割合が本年度も高い値に維持されていることと遠隔授業まで考慮した明確な文字への教員の配慮の結果によると考えられる。一方、実験科目においては、対面での実験の実施が困難であったためほとんどの項目で評価が低下した前年度に対して、令和3年度は本来の対面での実験の実施も増えたことにより、すべての項目で評点が向上した。令和4年度はより平常時に近い状況に向かうものと思われるため、令和3年度よりさらなる改善がなされることが期待される。

毎年度、各部局において全専任教員の75%以上がFD活動に参加することが求められている。令和3年度に工学部主催および学内で実施されたFD関連の企画への参加状況を表7.1に示す。いずれかの活動に参加した教員は106名中104名で、参加率は98.1%であった。

表 7.1 令和3年度専任教員のFD活動参加の状況

合計参加率		98.1 % (専任教員 106 名中 104 名 参加)			
企画別 参加率	第1回工学部FD講演会	95.3 %	(専任教員	106 名中	101 名 参加)
	前期授業公開 参観報告書	9.4 %	(専任教員	106 名中	10 名 参加)
	後期授業公開 参観報告書	1.9 %	(専任教員	106 名中	2 名 参加)
	前期授業改善報告書	63.2 %	(専任教員	106 名中	67 名 参加)
	後期授業改善報告書	68.9 %	(専任教員	106 名中	73 名 参加)
	全学FDセミナー、FD講演会	1.9 %	(専任教員	106 名中	2 名 参加)
	若手教員FD研修会	0.9 %	(専任教員	106 名中	1 名 参加)
	令和3年度教員ワークショップ	1.9 %	(専任教員	106 名中	2 名 参加)

## 7. 2 今後のFD活動

工学部は平成16年度から授業アンケートを行い、その結果を受けて各教員が授業改善のための計画を策定しながら、分かりやすい授業の実施を目指してきた。10年間のトレンドで見ると改善はされているが、この数年は変化がなくなっていることや、各科目単位で見るとアンケートの評価には大きな分布が存在する。また、予習や復習などの自宅学習の時間は依然低いままである。このことはまだ改善の余地が残されていることを示している。平成28年度から工学部ではエクセレント・レクチャー表彰制度が実施された。毎年度、表彰された教員による講演会を実施しており、これを参考に授業の質の向上と、その結果として学生の講義の理解度が深まり、授業に対する満足度も向上することが期待される。工学部は令和2年度の新入生より改組された組織による教育が始まり、来年度は3年目の年度となる。基本的には従来の7学科の教育を新しい7プログラムがそれぞれ踏襲しているが、これまでのFD活動を継続するとともに、改組に伴う改善すべき点も見出し、さらに充実を図っていくことが肝要である。

大学 IR コンソーシアム学生調査結果（令和 2 年度実施分）の分析（工学部）

<p>評価する点</p>	<p><b>【1年生】</b>                  ①入学後の能力の変化として「数理的な能力」の向上を挙げた割合が 54%と大学平均の 29%を大きく上回る。また、同じ理系である理学部の 46%よりも高い。専門科目や基礎科目としての数学や物理は数科目の開講であり、数は少ないがそれらの科目を受講した結果とすれば大きな成果が上がっている。                  ②英語運用能力「聞く力」「読む力」「会話力」「表現力」「書く力」の熟達度のいずれも入学時より向上している。特に入学時に大学平均より 10 ポイント以上低かった「聞く力」と「表現力」の改善の程度が大きい。</p> <p><b>【3年生】</b>                  ①「TA・SA から補助を受ける」という項目は 76%で、大学平均の 52%よりもかなり高い。この制度はかなり定着し機能しており、今後も実施していく。                  ②「数理的な能力」の向上を挙げた割合が 71%と大学平均の 47%を大きく上回る。また、前年度に続き「時間を効果的に利用する能力」の向上も上位学年には見られる。これはエンジニアには必須の能力であり、教育効果が上がっていることを示す。</p>
<p>課題と考える点（3点以上）</p>	<p><b>【1年生】</b>                  ①授業を通じた学習経験において、「提出物に添削物やコメントをつけて返却する」「授業中に学生同士が議論する」の項目の割合が、大学平均よりも 10 ポイント以上低い。オンライン講義による影響が回答に表れているものと考えられる。                  ②読書をまったくしない学生は、前年度より若干割合は下がったが、47%であり、依然として問題である。                  ③入学後の能力変化において、「グローバルな問題の理解」の項目が 26%で、大学平均の 39%より低い。なお、「異文化の人々に関する理解」の項目が 34%で、大学平均の 71%より極端に低くなっているが、これは共通教育必修科目の「異文化理解入門」が工学部だけ 2 年次に開講されることに起因しており、上位学年では大学平均より上回っていることも考慮すると、問題にはならないと考えられる。</p> <p><b>【3年生】</b>                  ①「大学教員と顔見知りになる」という項目が 37%で前年度より 10 ポイント程度下がり、大学平均の 54%よりもかなり低い。大人数の講義が多いことや学生実験では TA を活用するためにこのような結果となったと思われる。                  ②大学教育への満足度において、「基礎ゼミ／専門ゼミ」「授業の全体的な質」の項目の割合が、大学平均よりも 10 ポイント以上低い。担当教員が十分準備した授業内容が学生にうまく伝わっていない現状は問題である。                  ③将来展望の見通しについて、見通しがあってすべきことを実行している学生が 16%と大学平均の 25%よりも低い。また、見通しを持っていない学生が 19%と大学平均の 13%よりも高い。工学部の場合、入学した学科・プログラムによって将来の専門性はかなりはっきりしており、就職状況も極めて良好であるので、この結果は問題である。</p>



<p>課題への 具体的な対 応案</p>	<p><b>【1年生】</b> 授業を通じた学習経験における「提出物に添削物やコメントをつけて返却する」「授業中に学生同士が議論する」の項目の割合が、大学平均よりも10ポイント以上低いことを、各プログラムFD委員を通じて全教員に周知し、改善を図る。 ②低学年での読書の推進については、フレッシュマンセミナーなどでその重要性について説明することに加え、アドバイザー制や学生相談員制も活用して、その重要性の説明の機会を増やす。 ③低学年での「グローバルな問題の理解」についても、フレッシュマンセミナーならびにアドバイザーや学生相談員との面談の際に、関連事項について話題提供を行う。</p> <p><b>【3年生】</b> ①大人数講義のクラスを分けて少人数講義が望まれるが、現状では、その実施は困難なため、工学部で実施しているアドバイザー制度における教員の学生対応の充実を図ることにより対応する。 ②大学教育への満足度において、「基礎ゼミ／専門ゼミ」「授業の全体的な質」の項目の割合が、大学平均よりも10ポイント以上低いことを、各プログラムFD委員を通じて全教員に周知し、改善を図る。 ③各プログラムにおいてキャリア関連科目や説明会など将来の仕事に対する意識を持てるような取組を強化していく。</p>
<p>昨年度挙げ た改善・対 応策の進捗 状況</p>	<p><b>【1年生】</b> ①工学部への第一志望の合格者割合を向上させるために、各教員の教育研究の特色を工学部案内・要覧や工学部HPなどの内容を充実させて公開している。 ②低学年での読書の推進の対応策として、フレッシュマンセミナーなどでその重要性について説明した。 ③「オフィスアワーなど、授業時間外に教員と面談する」項目の割合向上のために、各プログラムで半期毎の定期面談を推進している。</p> <p><b>【3年生】</b> ①大人数講義を少人数のクラス分けでの講義について検討されたが、数学や物理学などの自然科学科目の担当増に加え、新型コロナウイルス感染症対応のため、その実施は困難な状況となっている。 ②学生の時間外学習（予習・復習）の増やすための効果的な対応策を検討・実施するために、工学部エクセレント・レクチャー賞を受賞した教員による講演会を実施した。</p>
<p>コロナウイ ルス感染症対 応に関する本 学・各部局の 取組との関連 に影響すると 思われる回答 とその内容</p>	<p>部局の取り組みとは関連しないが、上欄の①に関連して、前年度の工学部第一志望の学生の割合が33%であったのに対し、今年度は45%に上がっている理由は、上欄①の対応結果というよりは、新型コロナウイルス感染症対応として、県外を避けて本部局を受験した県内の受験生の割合が増加したことが影響しているのではないかと推察される。</p>





農学部・  
農林水産学研究科

## 令和3年度 農学部及び農林水産学研究科 FD 活動報告書

令和3年度の農学部FD委員会は、委員長を含む教員5名と教務係長で構成され、教務系の支援を得て運営された。委員会は年間計画に基づきコロナ禍における感染防止を図る目的でメール会議を主体として行われた。

今年度の農学部FD委員会が担当・実施した事項としては、授業アンケート、前期と後期に設定されたFD月間(授業参観)、11月に実施された第一回FD講習会「キャリアカウンセリングについて」、3月に実施された第二回FD講習会「授業評価アンケート分析結果について」第四回農学部ベストティーチャー賞の選考が挙げられる。

### 農学部委員名簿

委員長 藤田 清貴 (食料生命科学科)

副委員長 石橋 松二郎 (農業生産科学科)

委員 神田 英司 (農林環境科学科)

委員 濱中 大介 (食料生命科学科)

委員 大住 あづさ (農業生産科学科)

事務担当者 橋元 浩幸 (学務課長)

〃 吉村 学 (教務係長)

### 1. 農学部FD委員会による実施事項(特筆すべき取り組みは下線で表した)

・授業参観: オンデマンド型やオンライン型、ハイブリッド型など、授業形態をアナウンスした上で授業参加者を募集した。本年度は38名(54.3%)の教員が参加した。

・FD講習会: 農学部FD講習会を2回行った。1回目は11月17日(水)であり、農学部学生相談室のキャリアカウンセラーの通山裕樹先生による「キャリアカウンセリングについて」の講習会であった。当日の対面開催に加え、講演内容を録画したオンデマンドでの視聴も可能にした。2回目は、3月19日(土)に行い、R3前期後期の授業評価アンケートに基づいた学科別のデータや昨年との比較などの説明がなされた。70名(85.7%)の教員の参加を得て授業評価アンケートの解析結果を説明することで農学部の課題を共有できた。

・ベストティーチャー賞: 授業参観やアンケートを利用して4回目の選考を実施した結果、坂尾こず枝先生を候補者として推薦することに決定した。

令和元年度に発足した農林水産学研究科は農学部FD委員と水産学部FD委員が兼務する形で行われた。農林水産学研究科の所属教員は必ず農学部もしくは水産学部に所属しているため、教員に対するFD教育は実質的に各学部で行われ、FD講習会はそれぞれの学部の講習会の共催という形で開催された。

大学 IR コンソーシアム学生調査結果(令和2年度実施分)の分析について

( 農 )学部

<p>評価する点</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・TA・SA などの授業補助者から補助を受ける項目が1年生と3年生共に平均より高い。</li> <li>・異文化の人々に関する知識の項目が1年生と3年生共に平均より高い。</li> </ul>
<p>課題と考える点 (3点以上)</p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1.理工学部に比べて大学院を希望する割合が1年生と3年生共に低い傾向(理学部:38%→30%台、農学部:8.5%→22.8%)。</li> <li>2.文章表現能力が一年生では平均以上であるのに対して3年生では平均以下になっている。</li> <li>3.インターネットの使いやすさの項目が3年生では平均より低い。</li> <li>4. 第1志望として入学した者の割合が少ない</li> </ol>
<p>課題への 具体的な対応案</p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 研究室紹介や大学院説明の機会の拡充により、将来の選択肢を広く考える機会の拡充を図る。</li> <li>2. 卒論などでは文章表現能力が重要になるため、その知識向上の重要性をアピールする必要がある。ただし、オンライン授業の浸透によりレポート課題が増えている傾向があるため、今後は文章表現の能力の向上が期待される。</li> <li>3. 以前は農学部教室 WI-FI 環境が一部弱いところがあったが、現在はかなり改善されているため今後の評価は上がることが予想される。</li> <li>4. HP の充実や高校への進学説明会に力を入れている。来年度から高校生向け体験授業を実施する。</li> </ol>
<p>昨年度挙げた 改善・対応策の 進捗状況</p>	<p>研究室紹介や大学院説明の機会の拡充対応策に関しては、研究室紹介の youtube 動画配信の充実がかなり進展しており改善が見られる。</p> <p>教員に対する manaba・zoom・オンデマンド等のオンラインツールの利用促進に関しては、オンライン授業の浸透により改善している。</p>

## 2. 令和3年度農学部授業参観・授業公開

授業参観・授業公開は農学部では「FD ウィーク」として授業アンケートとともに農学部におけるFD活動の基幹として位置付けられてきた。今年度も、オンデマンド型やオンライン型、ハイブリッド型など、授業形態をアナウンスした上で授業参加者を募集した。期間は昨年同様「FD 月間」として実施した。授業参観の参加者は38名で専任教員70名の54.3%となった。

### 授業参観関連日程

#### (前期)

5月29日(土)～6月30日(水):授業参観予約

6月3日(木)～6月30日(水):授業公開(農学部FD月間)

6月3日(木)～7月2日(金):授業参観報告書作成・提出

#### (後期)

11月8日(月)～12月17日(金):授業参観予約

11月15日(月)～12月17日(金):授業公開(農学部FD月間)

11月15日(月)～12月24日(金):授業参観報告書作成・提出

### 3. 農学部各 FD 委員による今年度の FD 活動

農学部 FD 副委員長 石橋 松二郎

2021 年度も新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受けて、かなりの講義がオンラインとなった。対面講義を行う場合でも、受講生の 2 倍以上の座席数を持つ教室を使うなど、コロナ対策規則が導入された講義形式となった。対面講義は、学生のリアクションを見ながら進められて、学生は理解しやすいと思われるが、講義室の後ろの方ではスクリーンの文字が見にくいなどの欠点がある。オンライン講義は、それとは逆に教員の熱意が伝わりにくいと思われる反面、PC を通した画面なので見やすく、声も聴きやすいなどの利点があると考えられる。新型コロナウイルスの感染が収束しても、オンライン講義を廃止するのではなく、対面講義と上手く併用することにより、より質の高い講義が出来るのではないかと感じた。

今年度の FD 活動は、前期授業参観を 6 月 3 日(木)～ 6 月 30 日(水)、後期授業参観を 11 月 15 日(月)～ 12 月 17 日(金)で行い、合計 33 名(内 5 名の教員は 2 回参観)の教員が参観した。参加率は 47% であり、さらなる参加率の改善が必要である。

その他、農学部 FD 講習会を 2 回行った。1 回目は 11 月 17 日(水)にキャリアカウンセラー通山裕樹先生をお招きして、「キャリアカウンセリングについて」の講義を受講した。これは、令和 3 年 10 月 1 日から農学部学生相談室を設置することとなり、学生相談室の利用にあたり、そもそもキャリアカウンセリングとはどのようなものなのか、学生の指導にどのように役に立つのかなどの質問があったため、農学部学生相談室のキャリアカウンセラーを講師としてお招きし、キャリアカウンセリングについてご講演いただいた。また、都合により参加できない場合を考慮し、講演内容を録画したオンデマンドでの視聴も可能にした。2 回目は、3 月 19 日(土)に行い、農学部 FD 委員長の藤田清貴先生から授業アンケートに基づいた学科別のデータや昨年との比較などの説明があり、来年度に向けた改善が行われた。

農業生産科学科 FD 委員 大住あづさ

本年度、FD 活動としては、複数の講義の参観を行った。コロナウイルス下ではあったが、FD の参観期間には講義室での授業が行われており、それらを参観することができた。参観した講義は全て理系の講義であったが、参考になることが多くあった。まとめると以下の通りである。

①重要な概念、テーマについて話すときに、同じことを繰り返し説明したり、次の話題に進む前に少し時間の余白を取るなどの話し方の工夫がなされていた。学生の理解を助ける聞きやすい講義の工夫が重要だと感じた。

②実際の図表等についてグループで学生が考える時間を取ることで、学生が授業への集中を失うことなく、またより学習内容が定着するような工夫がなされていた。これまで、私の担当授業では、大人数の講義のため、講義後のミニレポートとしては考える課題を出していたが、講義中にはグループワーク等を実施していなかった。担当講義も 3 年目となり、これからはこういった工夫も取り入れていきたい。

③学年の違う他の授業も担当している場合の、初歩的な授業と、より応用的な授業といった役割分担と授業内容の仕分けが工夫されていた。

④自分が大学生の頃に経験した授業よりも、一コマあたりの情報量が少ないことに気づいた。私が担当する授業でも、アンケートなどから情報が過多ではないかと感じており、もう少し重要な情報のみを取捨選択することで、理解が深まるのではないかと感じた。

⑤学習内容がイメージしやすいよう、写真などが効果的に活用されていた。

以上であるが、FD 委員として行った講義の参観は、より良い授業の実施方法について考える大変良い機会となった。

#### 農林環境科学 FD 委員 神田英司

今年度も新型コロナのため、対面講義とオンライン講義の双方を行ったが、メリットとデメリットが明らかになってきた。対面講義では学生の聴講態度から理解度が想定できるため、説明を繰り返したり、例示を変えたりして講義の進展を調整し、理解を促すことができるが、講義途中で時間を設けても、学生から質問が出るのが少ない。これに対し、オンライン講義では学生の聴講態度が不明なため、一定速度での講義になりがちであるが、チャットでの質問コーナーは周りの目を気にせず講師だけに質問を送れるため、活発な質疑応答となるが多かった。このため、今後は対面講義の途中の質問時間も manaba などを活用して質問を促すなど学生の講義参加へのためらいを減らしていきたい。

授業参観は毎年ほぼ同じ時期に1か月という短期間のみ開催されるため、オムニバス講義の担当が集中する時期と重なり、現況では参加することは難しいと感じた。

#### 食料生命科学 FD 委員 濱中大介

2021 年度は、昨年より続く新型コロナウイルスの影響で、オンライン授業が多かったものの、感染防止対策を徹底した上で対面開催される講義も増えており、それを踏まえて授業を工夫されていた教員も多かったようである。これらコロナ禍で実施された講義の工夫もさることながら、今年度前半で実施したシラバスの再評価と 11 月に開催したキャリアカウンセリングに関するセミナーは、非常に有意義であった。シラバスについては、大学の認証評価に対応するために、全ての教員が、自身が開講する講義のシラバスを再確認し、シラバス通りに講義が進められ、その評価が適正であるかどうか、つまり、過度に秀や不可と評価される割合が高くないように、学生の理解レベルを考慮しながら講義を行い、評価しているかどうか、というポイントについて検証した。学科 FD 委員を担当しなければ、他教員のシラバスの全ての項目を詳しく見返すことは無い。しかし、改めて全員のシラバスを確認すると、綿密な授業計画のうえで講義を行っていること、また逆に、大雑把で一見では理解し難い内容であることといったシラバスも散見され、学生の立場から考えると、困惑することも多々あったと思われる。多少の程度の差は許容範



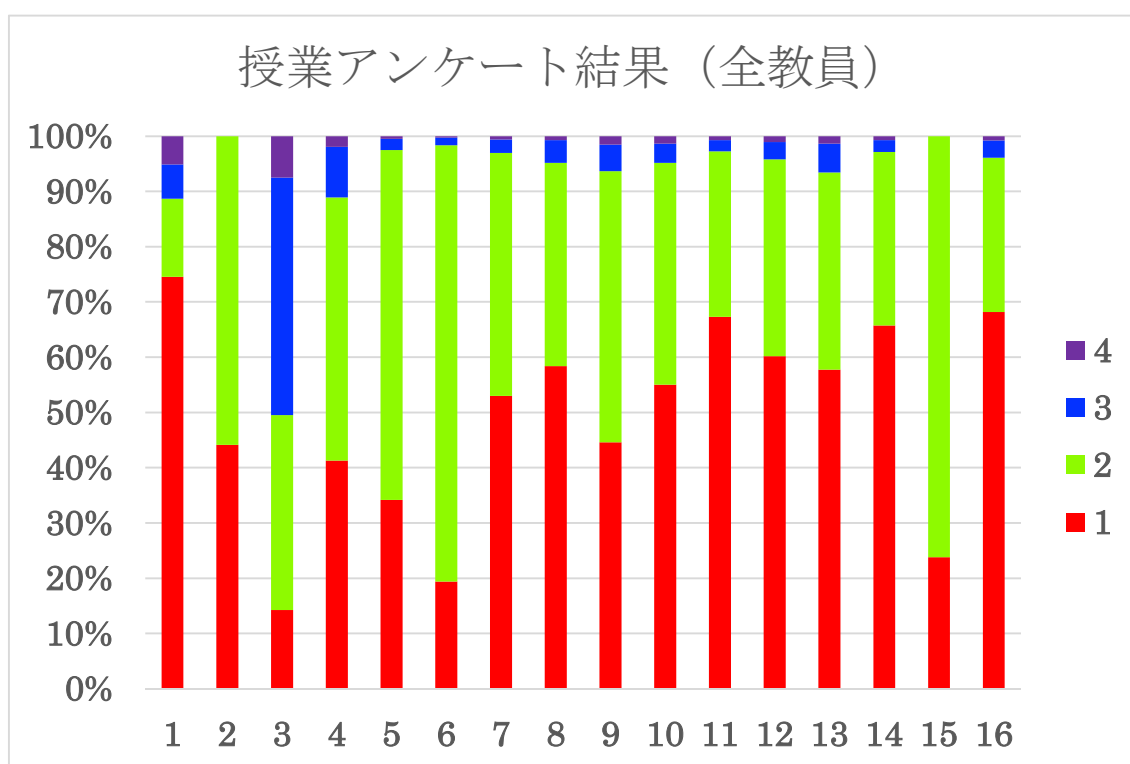
困であるが、学生が就学しやすく、誤解し難い情報を供給することで、予備学習や振り返りし易くすることも重要であると再確認した。キャリアカウンセリングについては、昨今のコロナ禍の影響のみならず、情報過多な現代において、学生がどのように自身が希望する将来に向かうのか、そのためにはどのようなキャリアを築くべきか、教員としても助言に困惑することも多いが、その解決策の一つとして、専門員を農学部配置するものである。入学当初は将来の目標を達成するために、希望を抱いて学習に取り組む学生が、年々と意欲が低下していることは、ほとんどの教員が実感している。コロナ禍中では、アルバイトやサークル活動も制限され、先輩や友人との交流がほとんどできておらず、意欲低下に拍車がかかっている。このような状況で、自分自身を見失いやすい学生も多くいることが推測される。キャリアカウンセリングセミナーは、このような学生とどのように接するべきか、あるいはどのようなアドバイスをすべきか、とくにメンタル面でのサポートに関して助言頂けることとなった。全ての教員、学生には大いに活用してもらいたい。

コロナ禍が明けるであろう2022年度は、2年間で培ったリモート講義の技術的優位性と、対面のメリットを併せながら、さらに有効な講義や実験実習が行われると予想する。常に新しい技術を取り入れながら、高いレベルを維持していくことを期待したい。

#### 4. 授業評価アンケートの分析

R3年度の授業評価アンケートの回答率は38.86%となり、R2年度の回答率39.76%と同水準を維持できた。また、89人の授業担当教員別では回答率3.0%が最低で最高は84.6%であった。

全体的な傾向としては、昨年度と同様、授業そのものの評価を示す問1.5～1.14は全て90%以上が肯定的な評価となっていた(下図参照;授業アンケート(全教員))。授業アンケートに協力的な学生は一定の満足感を授業に感じている可能性が高い。匿名と言われても否定的なコメントは書きづらい、授業全体を良い悪いで単純評価し難い、オムニバス形式や二人の教員で分担など質がバラつくなど、アンケートの限界もあると予想される。



今回、ベストティーチャーの選定を目的として、2022年3月14日農学部FD委員会メール会議で承認された①から④の基準を元に農学部の授業を担当した全教員のアンケートを立体集計した。基準を以下に示す。

① 授業アンケートでFD委員会として意味の大きいと思われた項目を取り上げ、点数化する。

点数化する項目

- 1.9 この授業の学習目標は達成できたと思いますか。(20点)
- 1.10 この授業は総合的にみて満足できるものでしたか。(20点)
- 1.11 この授業はシラバスに沿って進められましたか。(20点)
- 1.13 教員の話し方は明瞭で聞きやすく、説明はわかりやすいと思えましたか。(20点)
- 1.14 教員の準備は十分で、授業に対する熱意が感じられましたか。(20点)

アンケート回答率については100%が10点になるよう比例配分する。(10点)

1.9~1.13については、1が最高、4が最低の4段階評価なので、アンケートから平均値を取り、1が20点、2が10点、3が-10点、4が-20点になるよう平均値を変換し、その合計を点数化。

② ベストティーチャーの被推薦数を基に加点する。4人以上を4点、3人を3点、2人を2点、1人を1点。

③ 受講者数に応じた重みを付けるため、受講者数200人以上に係数1.11をかけ、受講者数150人以上に係数1.05をかけ、受講者数100人以上に係数1.00をかけ、受講者数50人以上に係数0.95をかけ、受講者数50人未満に係数0.90をかける。

④ 授業アンケートの回答率が低いと正当な評価が得られない危険性を考慮して対象者を回答率50%以上の教員に限定する。

その結果、宮田健先生が97.3点、坂尾こず枝先生が95.6点、北原兼文先生が93.3点、高山耕二先生が92.8点であった。一方、最下位は34.0点と大きな差が出る結果となった(図1参照;教員別授業評価)。平均点は78.8点であった。R2年度の平均点は74.9点であり、若干の向上が得られた。これは、教員も学生もコロナ禍の授業に慣れた可能性がある。ただし、全教員のアンケート結果が実態を反映するためには50%以上の回答率が必要である。また、89人の授業担当教員別では回答率3.0%が最低で最高は84.6%であった。教員間の差が大きい理由は、アンケートの回答を授業時間中に時間をとってあげることで、学生のアンケートを促した教員と未対応の教員がいたことを表している。教員別の回答率を上位から並べると40%以上の回答率の教員が30名程度であることがわかる(図2参照;教員別回答率)。これは、働きかけなくても自発的に行う学生は20%から30%程度であり、学生側に時間を取って繰り返しお願いすることが高い回答率を得るためには必要であることを意味する。つまり、アンケート回答率を上げるためには教員側のFDに対する意識向上が必要となる。更に、昨年度との教員別の授業評価アンケートの推移を数値化した。教員別の授業評価の変化(図3参照)は、大きな変動は無く80点付近でほとんどの教員が安定していることが分かる。これは、学生からの評価が大きく変わっていないことを表している。一方、教員別の授業評価アンケートの回答率の変化(図4参照)は、30%台が多いものの、大きく低下する教員と向上する教員、変化無い教員が混在する印象である。回答率については、呼び掛けの有無で大きく変動するため、呼びかけをすれば上がるし、止めれば下がるという結果を反映したものである。何らかのインセンティブがあれば教員側にとっても学生側にとってもアンケートを促すもしくは答える同期付けになる。アンケート結果を学部単位で分析するより、全学で自動的に分析し結果を公表できるシステムの構築など、アンケートを生かす取り組みが必要だと思われる。

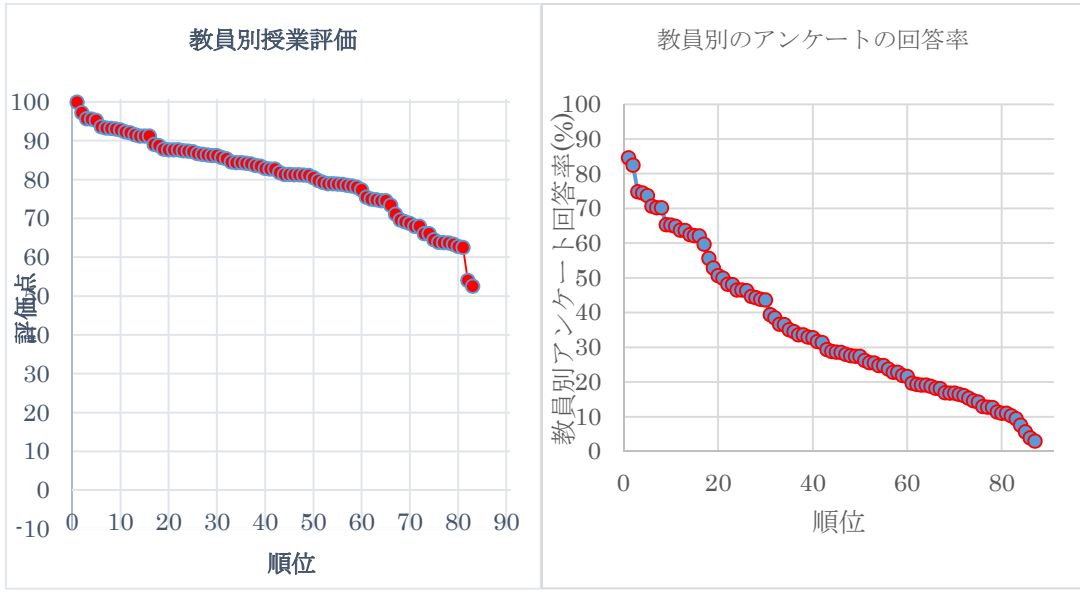


図1 R3年 教員別授業評価

図2 R3年 教員別授業評価アンケート回答率

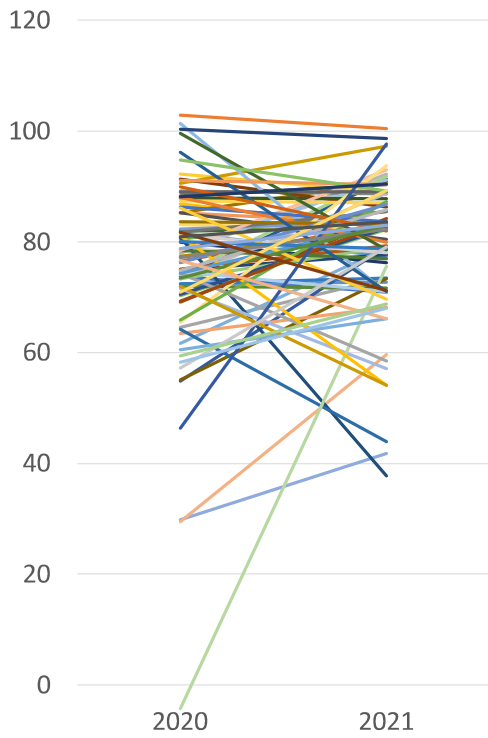


図3 教員別の授業評価の変化

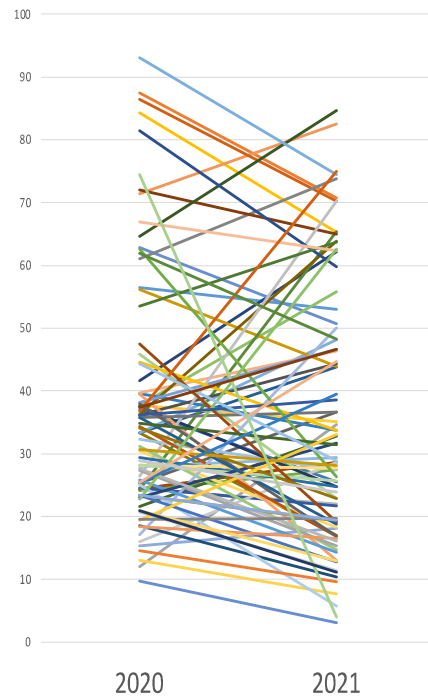


図4 教員別のアンケート回答率の変化

## 5. 令和3年度農学部FD講習会

農学部FD講習会を2回行った。1回目は11月17日(水)であり、農学部学生相談室のキャリアカウンセラーの通山裕樹先生による「キャリアカウンセリングについて」の講習会であった。本講習により、令和3年10月1日から農学部設置された学生相談室で行われるキャリアカウンセリングとはどのようなものなのか、学生の指導にどのように役に立つのかなどについて理解を深めることができた。当日の対面開催で18名の教員の参加を得た。また、都合により参加できない場合を考慮し、講演内容を録画したオンデマンドでの視聴も可能にしたことで17名の教員がオンデマンド視聴を行った。2回目は、3月19日(土)に行い、出来るだけ多くの教員の参加が可能となるよう、教授会の前に実施した。農学部FD委員長からR3前期後期の授業評価アンケートに基づいた学科別のデータや昨年との比較などの説明があり、来年度に向けた改善点などが報告された。特に、授業評価アンケートの分析結果の解析においては、R2とR3の各学科別の回答率や授業評価の比較を行なった。

	<b>R2回答率 (%)</b>	<b>R3回答率 (%)</b>	<b>R2授業評 価平均点</b>	<b>R3授業評 価平均点</b>
<b>農業生産科学科</b>	<b>35.1</b>	<b>41.58</b>	<b>71.22</b>	<b>80.88</b>
<b>食料生命科学科</b>	<b>51.3</b>	<b>44.83</b>	<b>82.18</b>	<b>79.90</b>
<b>農林環境科学科</b>	<b>25.4</b>	<b>26.51</b>	<b>73.15</b>	<b>81.77</b>
<b>全体</b>	<b>39.76</b>	<b>38.86</b>	<b>74.92</b>	<b>78.84</b>

授業評価アンケートの回答率は、食料生命科学科の低下と農業生産科学科の上昇で、結果的に昨年より僅かに低下した38.86%であった。一方、授業評価の平均点は昨年より若干の上昇が確認された。授業評価アンケートの回答率の向上の重要性を説明し、今後の協力を訴えた。

### <FD活動参加状況>

本講習会の参加者は56名で、これは専任教員73名の76.7%となった。なお、授業参観の参加者は43名で専任教員73名の58.9%となった。両方を合わせると、FD活動への参加は63名(のべ99名)となり、これは専任教員の86.3%となった。全体の内訳は教授(25名)+准教授(29名)+講師等(9名)/73名(専任教員)。不参加の専任教員は10名。昨年度の参加率は91%であり同等の参加率と言える。

## 6. ベストティーチャー賞の選考

授業評価アンケートの点数は、宮田健先生が97.3点、坂尾こず枝先生が95.6点、北原兼文先生が93.3点、高山耕二先生が92.8点であった。宮田先生と北原先生が既にベストティーチャーを獲得済みであり、推薦対象者から外れるため、北原先生と坂尾先生と高山先生の授業アンケート回答結果を基にFD委員会において協議した結果、全会一致で坂尾こず枝先生を候補者として選考した。

(1)授業において、卓越した指導力で教育効果の高い授業を実践した者と考えられる理由は、「8 この授業は将来役立つと思いますか」というアンケートで1番の「そう思う」を選んだ割合は、坂尾先生が86.96%で全体58.40%より非常に高い数字であったためである。(2)教育方法の工夫又は改善に取り組み、顕著な教育成果をあげた者と考えられる理由は、「14 教員の準備は十分で、授業に対する熱意が感じられましたか。というアンケートで1番の「そう思う」を選んだ割合」というアンケートでは、坂尾先生が93.48%で全体65.74%より非常に高い数字であったためである。また、教員の授業参観の感想でも「学生との距離を縮め、学生が主体的に授業に参加できるようにする工夫に感心した。スライドも非常に整理されており、理解しやすかった。」「興味や実感を持たせ、授業の退屈さをなくすように工夫されていました。」など、ポジティブな意見が多くあった。さらに、学生の授業アンケートも大多数が満足というものであった。また、「テスト前に質問に伺った際、丁寧に対応していただけて嬉しかったです。」「毎時間のように質問に行って、丁寧に答えてくださって、少しの疑問も大事にしてくださる姿勢がとてうれしかったです」とアンケートに書かれているように学生の質問に真摯に対応している点と、「プレゼンテーションも先生の説明の仕方もとてもわかりやすかったです」「研究室に配属してから必要になる知識をわかりやすく学ぶことが出来ました」など、満足度の高い授業を行っていたことがうかがえる。

## 7. 全学 FD 活動への参加

全学 FD 委員会へは、一度副委員長に代理出席をお願いした以外は農学部 FD 委員長が全て出席するとともに、メーリングリストの形で情報を農学部教員に伝えた。また、全学で FD 研修会・講習会の開催情報を周知し、参加を促した。



水産学部

## 1. はじめに

鹿児島大学水産学部・FD委員会では、学生に対する指導の充実、主体的な学習を促すための方法の検討、教育・研究の場が抱える今日的課題への対応などを課題として活動に取り組んできました。2021年度に部局で企画・開催したFDイベントとして、アンケート調査等以外にも、FD講習会「水産学部生の2016～2020年度大学IRコンソーシアムアンケート1年生調査および上級生調査結果」、FDワークショップ「水産学部の入試実施状況の分析とそこから見える課題」を開催しました。

この1年間のFD委員会の活動を振り返り、以下のようにまとめました。なお、2021年度に水産学部や大学全体で企画したFD活動への参加者は、部局FD講習会に37人（専任教員の80%）、部局FDワークショップに33人（72%）、公開科目に対する授業参観科目4科目に5人（11%）、授業改善報告の作製が31科目で26人（57%）であり、水産学部の専任教員の98%がいずれかのFD活動に参加しました。

## 2. 授業アンケート

水産学部FD委員会では、各期の授業が終了する毎に受講した学生に対して授業アンケート（表1）を行っています。アンケートはmanabaを利用して行われ、受講生の授業を選択した動機や予習及び復習時間などの調査、授業に対する満足度を計ることを中心に据えた質問を設定し、回答の集計結果から各科目の評価を行いました。ここでは、2021年度前期と後期までのアンケートを分析結果の概要について報告します。

表1 manabaを用いた水産学部授業アンケートの質問項目

1. この授業を選んだ動機は何ですか？（複数回答可） 授業内容に興味・関心を持ったから・専攻分野との関連性を考えて・履修しやすい曜日や時間帯 だったから・必修科目だから・単位修得のため
2. この授業について、毎週平均でどのくらい自宅学習（予習、復習、宿題など）をしましたか。週あたりのおよその平均時間を記入してください。
3. 授業はシラバスどおりに進められましたか？（はい・いいえ）
4. シラバスに示された学習目標を達成できましたか？（はい・いいえ） ⇒いいえを選択した理由を以下に記入してください。
5. 授業は分かりやすかったですか？（はい・いいえ） ⇒いいえを選択した理由を以下に記入してください。
6. 授業中や授業時間外に発言や質問しやすいような配慮が感じられましたか？（はい・いいえ） ⇒いいえを選択した理由を以下に記入してください。
7. 第1回から最終回までの授業の構成や進め方は適切だと思いましたか？（はい・いいえ） ⇒いいえを選択した理由を以下に記入してください。
8. 他の科目と重複あるいは類似している内容がありましたか？（はい・いいえ） ⇒いいえを選択した理由を以下に記入してください。
9. 授業の内容は全般的にみて満足するものでしたか？（はい・いいえ） ⇒いいえを選択した理由を以下に記入してください。
10. 担当教員が次年度の授業改善に役立てますので、この授業に対する意見・要望などを自由に記述してください。



## 2-1. 授業アンケート内容

2021年度前期および後期の授業アンケートは manaba で行い、アンケート内容も 2018年度後期から 2020年度後期までの内容を継続して実施しました。manaba では表 1 の通り、受講生の満足度を「はい」か「いいえ」で回答した後、満足できた点あるいは、満足できなかった点について具体的な記述ができる様式になっており、より学生の講義への期待や理解を把握する結果を得られるアンケートとなっています。

## 2-2. 授業アンケート提出率と回答率

図 1 に 2021 年前期及び後期のアンケート提出率を図 1 に示しました。2021 年度前期のアンケート提出科目は 91 科目あったが、回答率は 34.8%であった。後期のアンケート提出科目は 88 科目で回答率は 26.5%であった。前後期ともに科目によって受講人数に対する回答率の差がみられた。2019 年から 2021 年にかけてのアンケート結果をみると、2020 年度は

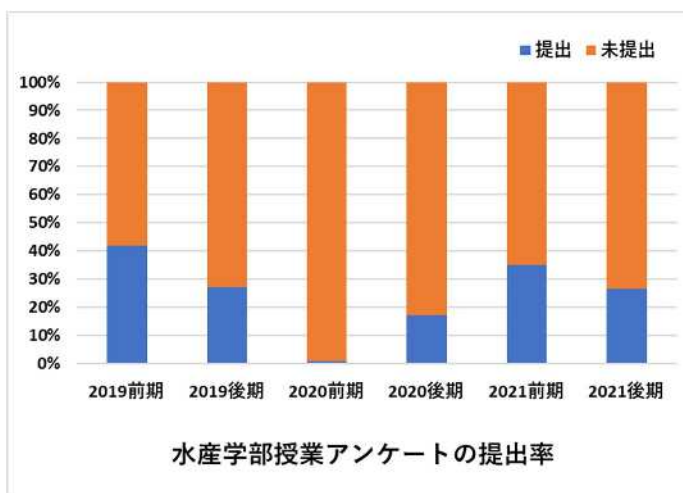


図 1 2019-2021年度の水産学部授業アンケートの提出率

コロナ禍の影響があり、多くの科目で感染症対策や講義形態の変更などの対応におわれるために、アンケート実施の呼びかけや学生もアンケートへの対応が難しく、提出率も前期では著しく低く、後期も 2019 年に比べると低い結果となった。しかし、2021 年度ではコロナ禍での講義体制も整ったため、アンケート回答も 2019 年度と同様の回復がみられた。しかし、依然として回答率は 3 割程度であり、オンライン対応が慣れてきているので、もう少し回答率が改善されるような工夫が必要であることが示唆される結果となった。

## 2-3. アンケートの各項目集計結果および総評

表 2 に基づき、各アンケート項目の集計結果について概要を報告します。

自宅学習時間平均は、2021 年度前期は 3.8 時間、後期は 4.1 時間でした。2019 年度までは自宅学習平均時間は前後期ともに 1.1 時間、2020 年は前期 1.8 時間、後期 1.3 時間であったのに対して、自宅学習時間が伸びており、在宅時間が増えていることや、講義でのレポート対応により自宅学習時間がふえていることが読み取れました。各科目別にみると、自宅学習時間には差があり、自由記述欄には事前配布資料があると予習ができ、講義スラ

イドを配布されると講義をうけているときにメモをとることや、復習ができるという意見があり、自宅学習を促す結果とが読み取れました。

「シラバス通りの授業だったか」、という質問にたいしては、「はい」と答えた割合が前期は95%、後期は96%であり、コロナ禍での学習形態に教員側も対応が整ったため、シラバス変更や講義形態の変更がなかったものと考えられました。

「シラバスの学習目標は達成できたか」、という問いに対しては、前期97%、後期99%といずれも高い満足度であり、肯定的な意見が多い結果となりました。

「授業がわかりやすかったか」、の質問に対しては前期が93%、後期が93%が肯定的な意見であり、自由記述には「zoom 動画を残してくれていたため、復習しやすかった」、「スライドに図や写真が多く理解しやすかった」、「オンデマンド配信があり、自分のペースで学習できた」などの肯定的な意見がありました。一方、「リアルタイム配信のみでスライドが早いため聞き取れない」、「講義に関係ない話が多い」など、講義の進め方を改善する際の参考となる意見もありました。

「質問や発言がしやすい配慮があったか」、の質問に関しては、前期は88%であり後期は90%であった。理由としては、「講義後に質疑応答時間を設けてくれた」、「チャット機能を活用してくれた」など対面講義の時よりも教員への質問への敷居が低くなっているという肯定的な意見があった。

「授業構成や進め方は最適だったか」、の質問に関しては、「はい」と答えた割合は前期と後期ともに95%であり、いずれも肯定的な意見が多い結果となりました。自由記述欄には、「manabaなどで講義の連絡が事前にあった」などの意見や、「シラバス通りであった」という意見がある一方、「教員ごとに講義形態が違うため、戸惑った」などの意見や、「各講義で多くの課題が生じたため、対応が大変だった」などのオムニバス講義への対応などで戸惑いや負担を感じる学生が多くいることがわかりました。

「他の科目との重複や類似」に関しては、前期が30%、後期は23%が重複や類似性があると答えているものの、否定的な意見ではなく、「重要な部分を復習できる」という意見や、「関連した講義により理解が深まる」といった意見が多くを占めており、専門分野の内容の理解を深めることになっていると感じられました。

授業全体の満足度を問う質問に対しては、「はい」と答えた割合は前期で94%、後期で95%と高い満足率を示しました。自由記述欄には、「遠隔ではなく実際に自分で手を動かして実験できたので、実験内容を理解しやすかったし、様々な器具の使い方を知ることができたから」という意見もあり、昨年度と比べてコロナ禍での実験実習を行う体制が整ったこともあり、実験実習を行えた学生からの満足度は高いものでした。また、「研究室配属に活かそうだった」など、講義内容でその後の研究室配属を意識する学生も多く存在することが確認できました。一方、「オンデマンド配信の授業は授業を受けるときのモチベーションを保つのが難しい」という意見や「動画をみるだけだと退屈」など、オンライン講義への馴化したことによりオンライン配信の場合は工夫が必要であることが読み取れ

ました。また、自由記述欄は学生の率直な意見や、教員に対する要望が多く書かれているため、担当科目教員は授業アンケート結果を今後の講義への改善方法として役立てていくことが必要であると考えられます。

表2 各アンケート項目の集計結果（2021年度）

	前期	後期
1. 自宅学習時間（平均）	3.8	4.1
2. シラバスどおりの授業だったか。	95	96
3. シラバスの学習目標を達成できたか。	97	99
4. 授業はわかりやすかったか。	93	93
5. 質問や発言がしやすい配慮があったか。	88	90
6. 授業構成や進め方は適切だったか。	95	95
7. 授業に重複あるいは類似している内容があったか。	30	23
8. 全体的に内容に満足しているか。	94	95

項目 2-8 の表中の数字はアンケートに「はい」と答えた割合（%）

### 3. 授業公開・参観と授業改善

#### 3-1. 授業公開・参観

授業公開については昨年度と同様に、授業公開科目を募った後に授業公開科目リストを作成、周知して授業公開を実施しました。2021年度は、下記に示す座学、実験、実習の多岐にわたる合計 28 科目で授業公開が行われました。2020 年度の授業公開・参観は、新型コロナウイルス感染症対策により、前期は実施せず、後期は遠隔授業の科目のみとしました。昨年度の公開数 7 科目に比べると大幅に増え、平年並の科目が公開科目として提供されました。

#### 前期（計 16 科目）

食品衛生学、プランクトン学、水産海洋学、海洋学、種苗生産学、環境変動に対応した防災と持続的・一次産業（大学院/共通必修科目）、水産流通論、基礎水産資源学、水産資源生物学、資源生産管理学、魚類学、海洋生態学、水産食品加工・保蔵学、水産業と倫理、微生物学、応用微生物学

#### 後期（計 12 科目）

海洋観測乗船実習 2、生体防御学、分子生物学、魚類生理学、水産商品学、フードビジネス論、水圏生物学実験 2、水産経済学、水産資源解析学、無脊椎動物学、先進生命科学基礎実験、水産制度論

上記の 29 科目のうち、授業参観報告が提出されたのは前期 3 科目、後期 1 科目の計 4 科目でした。

前期 環境変動に対応した防災と持続的一次産業、基礎水産資源学、水産流通論  
後期 無脊椎動物学

参観者が作成した授業参観報告書は、FD 委員会を通じて担当教員へのフィードバックが行われました。授業参観者の意見には各教員の授業方法の工夫について参考になったとの意見が多く、まだまだ参観科目数は低い現状ですが、今後も授業公開・参観を継続することには大きな意義があると言えます。

### 3-2. 授業改善報告書

授業内容をより良いものにするため、学生アンケートに基づいた「授業改善報告書」を開講者が作成しており、2021 年度は下記に示す合計 32 科目で報告書の作成が行われました。前年度と比較すると 1 科目のみ提出科目が増加しました。それぞれの科目の担当教員（群）が授業アンケート結果を見つつ報告書を作成することで、授業における教授手法として継続すべき点、改善すべき点について振り返る機会となっています。水産学部では提出された授業改善報告書を HP に掲載し他教員にも閲覧可能としています。

前期（合計 15 科目）

日本水産業概論、基礎生化学、プランクトン学、海洋学、水圏科学実験基礎、水圏生物学実験 2、水産生物学、漁具漁法学、水産企業論、海洋生態学、基礎水産資源学、魚類学、資源生産管理学、食品化学、水産動物行動学

後期（合計 17 科目）

Fisheries Products Utilization、食品生命科学演習、水産食品加工・保蔵学、水産食品製造学実習、資源生物学実験、水産科学英語（水産経済学分野）、水産制度論、Elements of Fisheries Science、水圏環境保全科学、水産科学英語（水圏環境保全学分野）、水産資源解析学、微生物学実験、海洋観測乗船実習Ⅱ、水圏生物学実験 1、先進資源利用科学、代謝生化学、無脊椎動物学

## 4. FD ワークショップ

水産学部では平成 27 年度入試より学科入試から領域入試に選抜方法を変更し、令和 3 年度入試で 7 年間を経ました。今回のワークショップでは、前年度・今年度の入試実施責任者

に入試改革前から昨年度実施した令和3年度入試までの10年間のデータを対象として行った分析を依頼し、結果概要とそこからピックアップした課題についてご説明を依頼しました。本ワークショップは、7月21日12:50~13:30の間にオンライン講演会「水産学部の入試実施状況の分析とそこから見える課題」を実施し、その内容を踏まえて、各分野等で今後の対応についての意見交換を行いました。

講演会資料は水産学部教職員のみ共有可能資料を含むため、本報告書では、その概要のみを記載します。

---

H27の改組による領域の新設、教員養成課程廃止後の国際食料資源学特別コース（水サブ）の新設により新たな入試が開始されている。改組にともなう入試制度改革の際には、入試データ分析に基づき、入学者の成績向上をより重視し前期日程と後期日程の募集人員比を1:1とし、かつ入学後の分野分け時に生じる不本意進級の発生を軽減・解消するために複数領域等の志望を可とする3領域+1コース入試を開始した。新たな入試開始から6年度を経過するが、近年の入試状況を理解することを目的に、改組前のH24年度からH26年度の入試データも含め改組後のR3年度入試までのデータを分析した結果を本報告書にまとめる。優秀な学生の獲得実現に向けての今後の広報活動等の工夫を検討する資料としたい。なお、入試年度ごとに繰り返す基本的分析を行う専用のエクセルワークシートを設計し、次年度以降、入試委員による分析を継続的に進めるように配慮した。

---

講演会終了後、各分野等で意見交換がなされ、入試のあり方や広報に関する意見交換結果がFD委員会に報告されました。

## 水産経済学分野

### 1. 入試制度について

1) 入学した後ですら、領域と分野の区別がついていない学生が多く、現行入試制度は全く理解されていない。水産学の学問体系は高校生や高校教員には理解しにくく、彼らが理解できる範囲内での受け止めとなっている。大学での水産学が「理科」の延長線上にあるものと考えられがち。しかし水産学部の各分野は人材養成目標すなわち目指すべき就職実現に有効となるようなカリキュラムの単位として形成されており、入学してからでないと理解されにくい。受験生や進路指導の先生方に理解されにくい現行入試制度は学部自体のわかりにくさ、あるいは入学してからの理想と現実とのギャップとなっている。複雑すぎる受験制度や分野制度は受験倍率向上や学生満足度向上に貢献しないのではないか。

2) 2年生前期になってから、分野変更したいという学生からの問い合わせが多い。欠員がなければ移動できない現制度（欠員がほぼ発生しない仕組み）は、水産学をきちんと学んでから新しく沸き起こる学生の学びへのニーズや就職に向けた準備活動としてのニーズに応えられていない。水産学を理解していない高校時点での判断で、専門分野まで決まってしまう

うのは不自由であり、可哀想。

- 3) 現入試制度は学生のドロップアウトを防ぐことが主眼の妥協的制度であった。分野体制も変わり、そういう心配がない現状において、高校生にもわかりやすく、水産学の全貌を理解してから将来を見据えた自由な分野選択ができる大括り入試に早急に戻すべきではないか。1年生時点での学習の励みにもなり緊張感が継続するだろう。
- 4) 今期中に入試制度改革の議論を進める計画であったと思われる。早期に大括り入試に戻す検討を開始すべきではないか。

## 2. 前期後期の定員について

- 1) 後期の実質倍率が大きく低下しているため、前期・後期が5:5という現状は是正する方向で検討すべき。正解はないが、2:1程度でもよいのではないだろうか。

## 3. 学部の広報について

- 1) 学部公式インスタグラム、YouTubeなど高校生の利用頻度が高いSNSでの発信が大事だろう。各分野で整備していくこともあり得るだろう。
- 2) 高校への働きかけは、まずは県内ついで九州内を重視すべきではないか。受験生や保護者において大都市へ出ることのリスクも、コロナ禍において再認識されているのではないか。

## 水産資源学部分野

広報活動は、内容により所掌が教育委員会と広報委員会が分かれる。分野の研究・教育についてアピールする場合は、分野からどちらかの委員会にはたらきかける必要があることが確認された。一方、教育委員会から新たに入試委員会を独立させる計画があることが、2021年度当初に学部長より明らかにされた。これを機に、入試、教育、広報の所掌を明確化し、例えば、入試委員会は入試のあり方を検討する、教育委員会は入学後の学籍の成績を分析するというように、役割を分け、負担を軽減する必要があるのではないか。

今回の分析結果をせっかくの解析結果は、大いに活用すべきである。受験生、入学者には、鹿児島県内の特定の高校からのリピーターが多いことから、県内高校への高校訪問が重要である。しかし、予算の削減やコロナの影響により、高校への直接訪問、夢ナビ参加の廃止、学部概要以外の冊子の作成ができなくなっている。コロナ禍で、中止、オンラインになっているが出前授業の機会を活用して、学部、分野のアピール、学部概要の配布を行っていく必要がある。

水産学部の特色として県外からの受験生の割合も他学部に比べ多い。現在、学部概要は学部ウェブサイトからダウンロードするよう案内しているが、卒業生が勤務する高校への配布などは行ってものよいのではないか。

## 食品生命科学分野

志望者、入学者ともに鹿児島県内出身者が多いことが明らかとなり、県内あるいは九州内の入学実績のある高校への入試広報が重要であることを確認しました。

## 5. FD 講習会

2016 年から実施されている大学 IR コンソーシアムアンケートの水産学部生の結果について、2020 年度の結果とこれまでの経年変化をまとめた結果を、「水産学部生の 2016～2020 年度大学 IR コンソーシアムアンケート 1 年生調査および上級生調査結果」という題目で水産学部 FD 委員長が 12 月 15 日 12:50～13:20 にオンラインで発表しました。発表資料には公表できないものも含まれるため、ここでは概要のみを示します。

- コロナ禍の負の影響は、2020 年度一年生（現二年生）の学生間および教員とのコミュニケーション、施設利用、満足度の悪化・低下として認められる。
- 現二年生については、これからコミュニケーションの機会提供が必要。
- 一年生から三年生にかけて専門知識、数理、コンピュータ利用能力の定着は認められるが、英語の運用能力や非言語能力は変化なしか低下と認識。
- 専門教育への満足度は高いと思われるが、初年次教育・授業履修には一定の不満がある。
- 進路について、三年生の約 4 割が「どうしたらよいかわからない」、「教員に相談したことがない」と回答。

## 6. 卒業時アンケート

水産学部では、教育 PDM の中で掲げられている学部教育目標および各分野のカリキュラム目標に対する達成度の調査として、卒業時アンケートを卒業式直前に実施してきました。アンケートでは、学部教育目標および各分野のカリキュラム目標に基づく質問、および卒業後の進路決定に関する質問を設定しました。ここでは、2020 年度（令和 2 年度）の卒業時アンケートについてまとめます。回答率 33%（144 名中 47 名）でした。修了者 1 名については省略します。

卒業時アンケートの設問項目を下記に示します。各質問は「①十分にそう思う」「②ある程度思う」「③少し思う」「④全く思わない」の 4 段階、または「①はい」「②いいえ」の 2 段階で評価してもらいました。項目 A では学部の教育目標に対する満足度を測るための質問、項目 B では国際化に関する質問、項目 C では就職・進学に関する質問に答えてもらいました。卒業時アンケートの分析結果を図 2 に示します。

教育目標に関する質問（項目 A）については、卒業生では、教育目標にかかげた各能力を習得できたと思う学生がほとんどで、「①そう思う」「②ある程度そう思う」の割合が全体

として前年度より増加しており、いくらか満足度が高くなったと考えられます。しかし、前年度と同様に A4（水産技術者として必要な英語能力が向上した）ならびに A7（水産技術者として必要なレベルの現場対応能力が備わった）の項目について「まったく思わない」が目立ち、英語や現場対応能力に関する教育への満足度が低いようです。

国際化に関する質問（項目 B）については、卒業生では「①十分にそう思う」「②ある程度思う」「③少し思う」の割合が高く、学部教育の目標を達成できたと考えられます。海外研修に参加した学生は回答者の 20%ほどで、うち 80%が大学として開講している研修を受けたことから、大学が与えた機会を活用できていると思われます。B12～B20 の項目については前年度と似たような傾向となりましたが、B13（入学前と比較して、英語の力は向上したと思いませんか？）、B14（これから、英語の力（語学力）を伸ばしていこうと思いませんか？）、B19（これからの就職先等では、国際的に活躍すること、また国際的な知識や理解が期待されますか？）、B20（これから、国際的に活躍していきたいと思いませんか？）の項目については、前年度より「④そう思わない」の割合が高く、特に B19、B20 の回答から、国際的に活躍することに興味をもてない学生も一定数いたようです。

就職・進学に関する質問（項目 C）については、卒業生では、「①十分にそう思う」「②ある程度思う」の割合が 60%程度で、「③少し思う」を含めると約 90%となり、希望する職種かそれに近い職種に就くことができた学生が多かったと考えられます。その一方、4 年度連続で未決定という回答が同程度の割合みられました。令和 2 年度に関しては、新型コロナウイルス感染症が流行し始め、就職活動の方法が多様になったことの影響がいくらかあると考えられますが、引き続き就職支援が必要となるかもしれません。

水産学部に対する意見（項目 D）については、乗船実習に対して好評なようでしたが、「領域の縛りに関してもう少し柔軟性が欲しい」「連絡を早めにしてほしい」「もう少し国際色の豊かな授業が欲しい」といった意見がありました。

以上、全体としてみると肯定的な回答の割合が高い項目が多く、学部の教育目標は概ね達成できたと考えられます。しかし、今年度のアンケートの回答率は前年度ほどではないものあまり芳しくなく、学生の回答を促す取り組みを継続する必要があると考えられます。

---

#### 令和 2 年度 卒業時アンケート（学部生用）

A. 水産学部が掲げる下記の教育目標について、あなた自身が修得できたかどうかを総合的な観点から評価してください。

1. 地域・国際両面で、資源・環境・食料分野に強い水産技術者に必要な教養と基本的な知識を体系的に修得した（必須）

①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない

2. 水産学の各専門分野で、実践的で高いレベルの知識・技術を修得した（必須）



- ①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない
3. 水産技術者として十分な基礎学力が身につき、生涯学べる能力を習得した (必須)
- ①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない
4. 水産技術者として必要な英語能力が向上した (必須)
- ①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない
5. 水産技術者として実務に必要な情報処理能力が身に付いた (必須)
- ①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない
6. 水産技術者として必要な報告書作成、プレゼンテーション能力、問題解決型の能力が身に付いた (必須)
- ①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない
7. 水産技術者として必要なレベルの現場対応能力が備わった (必須)
- ①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない
8. 水産技術者として適切な協働 (チームワーク) 能力や倫理観、判断力及び職業観が身に付いた (必須)
- ①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない
9. 水産技術者として国際社会や地域社会の課題に果敢に取り組む意識と思考力が身についた (必須)
- ①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない

B.グローバル化に関する考え、取り組みについて、ご回答ください。

10. 在学中に海外研修に参加しましたか? (必須)

- ①はい ②いいえ

11. その海外研修は共通教育や学部など大学として開講されているものですか? (10で「はい」と答えた方のみ)

- ①はい ②いいえ

12. 在学中に英語の力を伸ばすための取り組みを何かしましたか? (必須)

- ①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない

13. 在学中に、異文化理解を深めるための取り組みを何かしましたか? (必須)

- ①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない

14. 在学中に、他民族について理解を深めるための取り組みを何かしましたか? (必須)

- ①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない

15. 入学前と比較して、英語の力は向上したと思いますか? (必須)

- ①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない

16. これから、英語の力 (語学力) を伸ばしていこうと思いますか? (必須)

- ①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない

17. これから、異文化理解を深めていきたいと思いますか? (必須)

①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない

18. これから、他民族について理解を深めていきたいと思いませんか？（必須）

①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない

19. これからの就職先等では、国際的に活躍すること、または国際的な知識や理解が期待されますか？（必須）

①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない

20. これから、国際的に活躍していきたいと思いませんか？（必須）

①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない

21. 在学中に取得した英語資格の種類及びスコア等をお教えてください。（任意）

C. 就職・進学について、ご回答ください。

22. あなたが修得した知識や技術が活かせて、希望する職種等に就職・進学できた（必須）

①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない ⑤未決定

D. 水産学部の教育について評価できる点、改善すべき点がありましたら、ご回答ください（任意）

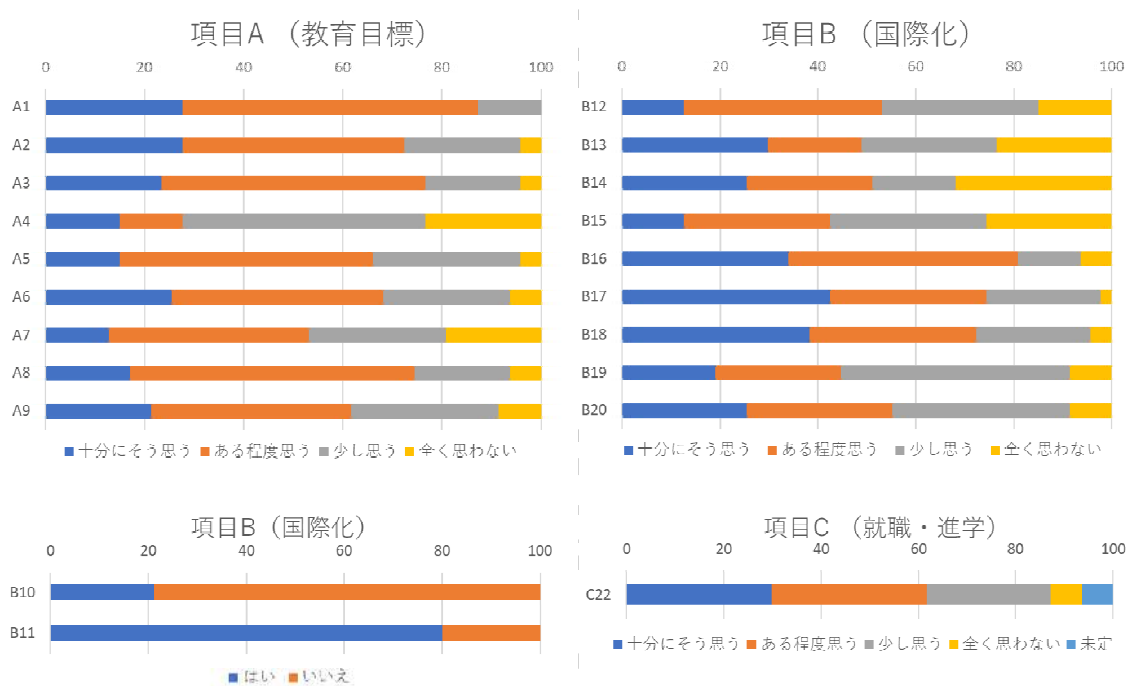


図 2 2020 年度卒業生に関する集計結果

## 7. ベストティーチャー賞被推薦者の選出

2018年度より、優れた講義を行った教員を表彰する「ベストティーチャー賞」制度がはじまりました。本年度においても授業アンケート結果を基にFD委員会で協議しベストティーチャーとしての被推薦者の選考を行いました。水産学部では、2021年度前期および後期に実施した授業アンケートを分析し、特に授業アンケート項目中における授業が計画通りに実施されたか、学習目標を達成できたか、授業が分かりやすかったか、授業中や授業時間外に質問しやすい配慮があったか、授業の進め方は適切であったか、授業に満足できたかに関わる質問を重要視し、アンケート回答を分析しました。その結果、水産学部水産資源科学分野の安樂和彦教授と大富潤教授を被推薦者として選出しました。安樂教授と大富教授の担当科目「資源生産管理学」は、アンケート回答率が受講生148名中93名(62.8%)と高く、上記項目の満足度平均でも98%以上の高い評価となったことより、多くの学生から高い評価が得られていると推察されました。授業アンケートの学生コメントには、「Zoomやresponの機能を有効に使い、質問をしやすい環境であった。」、「シラバス通りに授業が進んだ。それぞれの講義内容の関連性をつかみやすかった。」、「授業の資料がわかりやすかった。受講生が楽しめるような授業を心がけてくださっていることが伝わった。」などの意見が挙げられていました。

水産学部でも多くの科目が開講されていますが、ベストティーチャーの開講する科目の授業参観等を企画し、さらに学部の教育が学生にとってより良いものになるよう工夫していきたいと考えます。

## 8. 大学 IR コンソーシアム学生調査結果（令和2年度実施分）の分析について

<p>評価する点</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 三年生の専門教育への満足度が高く、専門知識が大幅に増えた学生が多い。</li> <li>● 三年生の「教員と顔見知りになる」、「友情を深める」でとてもうまくいったと回答する割合が増加した。</li> <li>● 三年生は、専門知識、PC 操作能力、数理能力は一年生時に比べ増えたと考えている。</li> </ul>
<p>課題と考える点 (3点以上)</p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 一年生の授業での経験、学修に関する経験、大学生活、教育への満足度において、コロナ禍の負の異影響が顕著に現れ、不満を抱えていた。</li> <li>2. 一年生において、取りたい授業を履修登録できなかった学生が一定数いる。</li> <li>3. 英語力は入学時がピークであり、三年生時の自己評価は低下した。</li> <li>4. 過半数が第1志望ではなかった。</li> </ol>
<p>課題への 具体的な対応案</p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 大学生活の前半をコロナ禍で過ごした学生なので、上級学年での実験、実習、フィールドワーク、卒業研究を通して体験的学修の機会を提供し、きめ細かく対応する。このことは、FD 講習会において学部内で共有した。</li> <li>2. 対面・オンラインの併用により教室定員が理由による web 抽選は廃止できないか、準備・議論をすすめる。</li> <li>3. 語学能力の維持・向上は個人の努力も必要だが、グローバル化に対応した授業をさらに充実させることで、留学や海外での就職を志す学生を増やす。</li> <li>4. FD 講習会により県内高校へのリクルート活動の重要性を共有した。SSH の受け入れなど、高大連携を図り、水産学と鹿大水産学部の理解を深める。</li> </ol>
<p>昨年度挙げた 改善・対応策の 進捗状況</p>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 教員が提出物に添削やコメントをつけて返却される経験が少ない。【1年生のみ】・・・オンライン授業の普及にともない manaba の有効的利用が促進され、コメント、添削に使える時間は確保できていると推測される。</li> <li>2. 「学生が自分の考えや研究を発表する」、「授業中に学生同士が議論する」機会が少ない。【3年生のみ】・・・少人数で実施される対面授業では、グループワーク、ディスカッションの時間が確保できている。</li> </ol>

	<p>3. 数理的な能力が低い。・・・数理データサイエンスを専門とする教員の新規採用が予定されており、これにより数理教育の充実が図られると期待される。</p> <p>4. 「授業中に居眠り、遅刻をした」と回答した学生が多い。・・・オンライン授業の普及により、居眠り・遅刻・欠席が少なくなっている。</p>
<p>コロナウイルス感染症対応に関する本学・各部署の取組との関連に影響すると思われる回答とその内容</p>	<p>課題にも挙げたが、一年生の授業での経験、学修に関する経験、大学生活、教育への満足度において、不満が高まっている。充実度、体験的に学ぶ授業、授業時間外の学生同士のコミュニケーション、教員への親近感、教員と顔見知りになる、他学生との友情を深める、話をする機会、一体感、経験全般で顕著である。一方、三年生においてはそのような影響はみられず、教員・学生間でむしろ結束力が高まったと思われる項目があった（Q5N、Q10F・G）。</p> <p>一年生は、設備・制度をそもそも利用できていなかったため、Q.13の多くの項目で、「どちらでもない」の割合が高かった。</p>





共同獣医学部・  
共同獣医学研究科

## 令和3年度共同獣医学部、共同獣医学研究科 FD 活動の記録

### I. 共同獣医学部 FD 活動組織 (FD 委員会の構成と活動状況)

委員長 乙丸 孝之介 准教授

委員 宇野 泰広 准教授

委員 小澤 真 准教授

委員 安藤 貴朗 准教授

---

#### 第1回共同獣医学部 FD 委員会 (メール会議)

日時：令和3年5月27日(木)～6月30日(水)

議題1. 機関別認証のためのFD関連規約改正について

議題2. 授業参観について

議題3. 合同FD研修会日程について

#### 第2回共同獣医学部 FD 委員会 (メール会議)

日時：令和3年6月21日(月)～6月23日(水)

議題1. IR コンソーシアムアンケートの5年生の調査対象への追加について

#### 第3回共同獣医学部 FD 委員会 (メール会議)

日時：令和3年10月26日(火)～11月2日(火)

議題1. 令和2年IRコンソーシアムアンケートのアンケート結果の評価分析について

#### 第3回共同獣医学部 FD 委員会 (メール会議)

日時：令和4年3月23日(水)～3月29日(火)

議題1. 令和4年度以降のベストティチャー候補者の選抜方法について、FD活動全般の改善点について



## II. 授業公開と授業参観の取り組み

共同獣医学部では、農学部所属の平成15年度後期より授業公開・授業参観を実施している。

平成28年度後期より山口大学共同獣医学部も本取り組みに一部参画している。両大学の教員が互いに参観できる仕組みとしており、参加者拡大を図ると共に、本取り組みの内容をより一層充実させている。

実施については、今年度より一部方法を変更した。あらかじめ1名につき2名の参観者を専門分野、職位に関係なく割り振り、年間通して任意の時期に参観を行った。また、参観者には様式の配布を行って、授業参観報告書を作成・提出してもらった。そして、平成26年度からは授業担当者に参観者からの報告書に対する対策書を作成・提出してもらい、本取り組みのPDCAサイクルを確立している。さらに今年度より、参観者には授業担当者の授業について、運営方法や授業の魅力度等に関する2つの観点により数値的に評価してもらい、当年度のベストティーチャーを選出する際の一つの材料としている。

本年度の獣医学科専任教員の授業参観参加者数は、年間通して39名の参加があり、参加率は95.1%となっている。

### III. 学生による授業評価

前後期にそれぞれ学生による授業評価のアンケートをmanabaによって実施した。共同獣医学部では、山口大学と共通の授業評価アンケートを作成し、実施している。質問項目は下記のとおりである。

授業評価アンケート(講義・演習用)					
授業科目番号:	9999			受講者氏名	<small>(氏名の記載は任意です。)</small>
授業科目名:	●●●●	(☑)遠隔授業システム	教員名:	●●●●	
* このアンケートは、授業をより良くするために行うもので、回答者の成績には一切影響ありません。考えを率直に記入してください。					
* この回答用紙は機械(OCR)で読み取り集計しますので、該当する番号の前の○印を塗りつぶしてください。					
1	あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか?(括弧の数字は15回授業の場合の出席回数参考値です)				
	<input type="radio"/> 1. 90%以上(14回以上)	<input type="radio"/> 2. 80~90%(12~13回)	<input type="radio"/> 3. 60~80%(9~11回)	<input type="radio"/> 4. 40~60%(6~8回)	<input type="radio"/> 5. 40%未満(6回未満)
2	あなたはこの授業において、時間外学習(予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強)をどれくらい行いましたか? 総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。				
	<input type="radio"/> 1. 3時間程度または以上	<input type="radio"/> 2. 2時間程度	<input type="radio"/> 3. 1時間程度	<input type="radio"/> 4. 30~50分程度	<input type="radio"/> 5. 30分未満
3	この授業内容の水準はどうでしたか?				
	<input type="radio"/> 1. 高かった	<input type="radio"/> 2. やや高かった	<input type="radio"/> 3. 妥当だった	<input type="radio"/> 4. やや低かった	<input type="radio"/> 5. 低かった
4	この授業の分量はどうでしたか?				
	<input type="radio"/> 1. 多かった	<input type="radio"/> 2. やや多かった	<input type="radio"/> 3. 妥当だった	<input type="radio"/> 4. やや少なかった	<input type="radio"/> 5. 少なかった
5	教員の話し方は明瞭で聞きやすく、専門用語や理論などの説明はわかりやすいと思いませんか?				
	<input type="radio"/> 1. そう思う	<input type="radio"/> 2. ややそう思う	<input type="radio"/> 3. どちらとも言えない	<input type="radio"/> 4. あまりそう思わない	<input type="radio"/> 5. そう思わない
6	板書やビデオ、コンピュータ並びに教科書やプリントなどの教材は、効果的に使われていましたか?				
	<input type="radio"/> 1. そう思う	<input type="radio"/> 2. ややそう思う	<input type="radio"/> 3. どちらとも言えない	<input type="radio"/> 4. あまりそう思わない	<input type="radio"/> 5. そう思わない
	<input type="radio"/> 6. この授業は該当しない				
7	授業中やオフィスアワーでの質問に対する教員の対応に満足しましたか?				
	<input type="radio"/> 1. そう思う	<input type="radio"/> 2. ややそう思う	<input type="radio"/> 3. どちらとも言えない	<input type="radio"/> 4. あまりそう思わない	<input type="radio"/> 5. そう思わない
8	この授業はシラバスに沿って進められましたか?				
	<input type="radio"/> 1. そう思う	<input type="radio"/> 2. ややそう思う	<input type="radio"/> 3. どちらとも言えない	<input type="radio"/> 4. あまりそう思わない	<input type="radio"/> 5. そう思わない
9	あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか?				
	<input type="radio"/> 1. そう思う	<input type="radio"/> 2. ややそう思う	<input type="radio"/> 3. どちらとも言えない	<input type="radio"/> 4. あまりそう思わない	<input type="radio"/> 5. そう思わない
	<input type="radio"/> 6. 答えられない				
10	あなたは、この授業の内容を理解できましたか?				
	<input type="radio"/> 1. そう思う	<input type="radio"/> 2. ややそう思う	<input type="radio"/> 3. どちらとも言えない	<input type="radio"/> 4. あまりそう思わない	<input type="radio"/> 5. そう思わない
11	この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか?				
	<input type="radio"/> 1. そう思う	<input type="radio"/> 2. ややそう思う	<input type="radio"/> 3. どちらとも言えない	<input type="radio"/> 4. あまりそう思わない	<input type="radio"/> 5. そう思わない
* 以下は、遠隔授業システムに関する質問です。該当する場合(授業科目名の横にチェックあり)、送信・受信に関わらず回答してください。					
12	教員の音声は聞き取りやすかったと思いませんか?				
	<input type="radio"/> 1. そう思う	<input type="radio"/> 2. ややそう思う	<input type="radio"/> 3. どちらとも言えない	<input type="radio"/> 4. あまりそう思わない	<input type="radio"/> 5. そう思わない
13	教員やモニター画面の映像は見やすかったと思いませんか?				
	<input type="radio"/> 1. そう思う	<input type="radio"/> 2. ややそう思う	<input type="radio"/> 3. どちらとも言えない	<input type="radio"/> 4. あまりそう思わない	<input type="radio"/> 5. そう思わない
14	教員の授業の進め方はスムーズでしたか?				
	<input type="radio"/> 1. そう思う	<input type="radio"/> 2. ややそう思う	<input type="radio"/> 3. どちらとも言えない	<input type="radio"/> 4. あまりそう思わない	<input type="radio"/> 5. そう思わない
15	授業中は、授業に集中できる環境や雰囲気であったと思いませんか?				
	<input type="radio"/> 1. そう思う	<input type="radio"/> 2. ややそう思う	<input type="radio"/> 3. どちらとも言えない	<input type="radio"/> 4. あまりそう思わない	<input type="radio"/> 5. そう思わない
16	対面式の講義と遜色ない、一体感・臨場感のある授業だったと思いませんか?				
	<input type="radio"/> 1. そう思う	<input type="radio"/> 2. ややそう思う	<input type="radio"/> 3. どちらとも言えない	<input type="radio"/> 4. あまりそう思わない	<input type="radio"/> 5. そう思わない
* 以下は、授業担当教員の各自設定質問です。教員によって異なりますので、指示があれば回答してください。					
17 (自由質問①)					
	<input type="radio"/> 1. 選択肢 1	<input type="radio"/> 2. 選択肢 2	<input type="radio"/> 3. 選択肢 3	<input type="radio"/> 4. 選択肢 4	<input type="radio"/> 5. 選択肢 5
18 (自由質問②)					
	<input type="radio"/> 1. 選択肢 1	<input type="radio"/> 2. 選択肢 2	<input type="radio"/> 3. 選択肢 3	<input type="radio"/> 4. 選択肢 4	<input type="radio"/> 5. 選択肢 5
<b>自由記述</b>					
この授業についての意見・要望・感想などを自由にご記入下さい。スペースが足りない場合、適宜裏面にご記入下さい。					
ご協力ありがとうございました。					
共同獣医学部ファカルティ・ディベロップメント委員会					

平成29年後期の様式より、新たに【教員からの自由質問欄】を設けた。これにより、各授業担当教員個々の質問設定が可能となり、教員が必要とする独自の意見収集が可能となった。

なお、様式に記載している「遠隔授業」とは、遠隔授業システムを使って、教員の映像や音声、授業の資料等をリアルタイムで送信あるいは受信して行う授業である。共同獣医学部では、この「遠隔授業」に関する設問を用意し、学生の授業環境に対する満足度を測っている。

共同獣医学部所属の学生に対して実施し、共同獣医対象の共通教育科目と専門教育科目において、前期83科目(講義・演習:53科目、実験・実習:30科目)、後期44科目(講義・演習:34科目、実験・実習:10科目)の回答を回収した。

次のページより、今年度のアンケート集計結果を紹介する。

●アンケート集計結果(全科目集計)

【講義・演習科目】

## 授業評価アンケート集計(講義・演習)

No.	質問項目	回答	R3前期	% (R3前)	R3後期	% (R3後)
1	この授業にどれくらい出席しましたか。	90%以上	519	91.4%	264	88.6%
		80~90%	34	6.0%	29	9.7%
		60~80%	14	2.5%	2	0.7%
		40~60%	0	0.0%	2	0.7%
		40%未満	1	0.2%	1	0.3%
		計	568	100.0%	298	100.0%
2	この授業において、時間外学習をどれくらい行いましたか。(授業1回あたりの時間)	3時間程度または以上	94	16.5%	41	13.8%
		2時間程度	130	22.9%	66	22.1%
		1時間程度	208	36.6%	142	47.7%
		30~50分程度	96	16.9%	29	9.7%
		30分未満	40	7.0%	20	6.7%
		計	568	100.0%	298	100.0%
3	この授業内容の水準はどうでしたか？	高かった	150	26.4%	111	37.2%
		やや高かった	154	27.1%	76	25.5%
		妥当だった	251	44.2%	104	34.9%
		やや低かった	10	1.8%	6	2.0%
		低かった	3	0.5%	1	0.3%
		計	568	100.0%	298	100.0%
4	この授業の分量はどうでしたか？	多かった	111	19.5%	102	34.2%
		やや多かった	175	30.8%	86	28.9%
		妥当だった	269	47.4%	104	34.9%
		やや少なかった	11	1.9%	6	2.0%
		少なかった	2	0.4%	0	0.0%
		計	568	100.0%	298	100.0%
5	教員の話し方は明瞭で聞きやすく、専門用語や理論などの説明はわかりやすいと思われましたか？	そう思う	302	53.2%	182	61.1%
		ややそう思う	180	31.7%	67	22.5%
		どちらとも言えない	48	8.5%	28	9.4%
		あまりそう思わない	29	5.1%	18	6.0%
		そう思わない	9	1.6%	3	1.0%
		計	568	100.0%	298	100.0%
6	板書やビデオ、コンピュータ並びに教科書やプリントなどの教材は、効果的に使われていましたか？	そう思う	305	53.7%	163	54.9%
		ややそう思う	166	29.2%	60	20.2%
		どちらとも言えない	61	10.7%	59	19.9%
		あまりそう思わない	26	4.6%	12	4.0%
		そう思わない	9	1.6%	3	1.0%
		この授業は該当しない	1	0.2%	0	0.0%
		計	568	100.0%	297	100.0%
7	授業中やオフィスアワーでの質問に対する教員の対応に満足しましたか？	そう思う	269	47.4%	171	57.4%
		ややそう思う	130	22.9%	55	18.5%
		どちらとも言えない	157	27.6%	69	23.2%
		あまりそう思わない	7	1.2%	3	1.0%
		そう思わない	5	0.9%	0	0.0%
		計	568	100.0%	298	100.0%
8	この授業はシラバスに沿って進められましたか？	そう思う	347	61.1%	224	75.2%
		ややそう思う	144	25.4%	60	20.1%
		どちらとも言えない	67	11.8%	12	4.0%
		あまりそう思わない	10	1.8%	2	0.7%
		そう思わない	0	0.0%	0	0.0%
		計	568	100.0%	298	100.0%

9	あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？	そう思う	242	42.6%	146	49.2%
		ややそう思う	224	39.4%	121	40.7%
		どちらとも言えない	88	15.5%	22	7.4%
		あまりそう思わない	9	1.6%	5	1.7%
		そう思わない	3	0.5%	3	1.0%
		答えられない	2	0.4%	0	0.0%
		<b>計</b>	<b>568</b>	<b>100.0%</b>	<b>297</b>	<b>100.0%</b>
10	あなたは、この授業の内容を理解できましたか？	そう思う	238	41.9%	98	32.9%
		ややそう思う	268	47.2%	165	55.4%
		どちらとも言えない	43	7.6%	22	7.4%
		あまりそう思わない	15	2.6%	7	2.3%
		そう思わない	4	0.7%	6	2.0%
				<b>計</b>	<b>568</b>	<b>100.0%</b>
11	この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？	そう思う	307	54.0%	164	55.0%
		ややそう思う	195	34.3%	102	34.2%
		どちらとも言えない	52	9.2%	19	6.4%
		あまりそう思わない	11	1.9%	10	3.4%
		そう思わない	3	0.5%	3	1.0%
				<b>計</b>	<b>568</b>	<b>100.0%</b>
※12	教員の音声は聞き取りやすかったと思いますか？	そう思う	174	52.6%	109	63.0%
		ややそう思う	91	27.5%	43	24.9%
		どちらとも言えない	41	12.4%	14	8.1%
		あまりそう思わない	20	6.0%	5	2.9%
		そう思わない	5	1.5%	2	1.2%
				<b>計</b>	<b>331</b>	<b>100.0%</b>
※13	教員やモニター画面の映像は見やすかったと思いますか？	そう思う	184	57.5%	106	62.0%
		ややそう思う	83	25.9%	44	25.7%
		どちらとも言えない	37	11.6%	13	7.6%
		あまりそう思わない	12	3.8%	6	3.5%
		そう思わない	4	1.3%	2	1.2%
				<b>計</b>	<b>320</b>	<b>100.0%</b>
※14	教員の授業の進め方はスムーズでしたか？	そう思う	158	49.7%	108	64.3%
		ややそう思う	95	29.9%	43	25.6%
		どちらとも言えない	50	15.7%	11	6.5%
		あまりそう思わない	8	2.5%	4	2.4%
		そう思わない	7	2.2%	2	1.2%
				<b>計</b>	<b>318</b>	<b>100.0%</b>
※15	授業中は、授業に集中できる環境や雰囲気であったと思いますか？	そう思う	163	51.6%	103	60.9%
		ややそう思う	90	28.5%	50	29.6%
		どちらとも言えない	54	17.1%	12	7.1%
		あまりそう思わない	9	2.8%	4	2.4%
		そう思わない	0	0.0%	0	0.0%
				<b>計</b>	<b>316</b>	<b>100.0%</b>
※16	対面式の講義と遜色ない、一体感・臨場感のある授業だったと思いますか？	そう思う	134	42.3%	96	56.8%
		ややそう思う	90	28.4%	54	32.0%
		どちらとも言えない	64	20.2%	16	9.5%
		あまりそう思わない	26	8.2%	3	1.8%
		そう思わない	3	0.9%	0	0.0%
				<b>計</b>	<b>317</b>	<b>100.0%</b>

※No.12～16は、遠隔授業システムを利用した科目のみ対象の設問

## 授業評価アンケート集計(実験・実習)

No.	質問項目	回答	R3前期	% (R3前)	R3後期	% (R3後)
1	この授業にどれくらい出席しましたか。	90%以上	372	96.9%	43	97.7%
		80~90%	7	1.8%	1	2.3%
		60~80%	5	1.3%	0	0.0%
		40~60%	0	0.0%	0	0.0%
		40%未満	0	0.0%	0	0.0%
		計	384	100.0%	44	100.0%
2	この授業において、時間外学習をどれくらい行いましたか。(授業1回あたりの時間)	3時間程度または以上	102	26.6%	10	22.7%
		2時間程度	96	25.0%	11	25.0%
		1時間程度	103	26.8%	9	20.5%
		30~50分程度	56	14.6%	3	6.8%
		30分未満	27	7.0%	11	25.0%
		計	384	100.0%	44	100.0%
3	この実験・実習を理解するための基礎学力はあったと思いますか？	そう思う	90	23.4%	17	38.6%
		ややそう思う	181	47.1%	17	38.6%
		どちらとも言えない	76	19.8%	7	15.9%
		あまりそう思わない	32	8.3%	2	4.5%
		そう思わない	5	1.3%	1	2.3%
		計	384	100.0%	44	100.0%
4	教員の話し方は明瞭で聞きやすく、実験・実習の方法などの説明はわかりやすいと思われましたか？	そう思う	268	69.8%	35	79.5%
		ややそう思う	93	24.2%	4	9.1%
		どちらとも言えない	23	6.0%	3	6.8%
		あまりそう思わない	0	0.0%	1	2.3%
		そう思わない	0	0.0%	1	2.3%
		計	384	100.0%	44	100.0%
5	板書や配布資料、実験マニュアルなどは、実験・実習の内容理解と実施に役立ちましたか？	そう思う	250	65.1%	35	79.5%
		ややそう思う	100	26.0%	4	9.1%
		どちらとも言えない	31	8.1%	4	9.1%
		あまりそう思わない	3	0.8%	0	0.0%
		そう思わない	0	0.0%	1	2.3%
		計	384	100.0%	44	100.0%
6	実験・実習中やオフィスアワーでの質問に対する教員の対応に満足しましたか？	そう思う	265	69.0%	36	81.8%
		ややそう思う	90	23.4%	2	4.5%
		どちらとも言えない	27	7.0%	5	11.4%
		あまりそう思わない	2	0.5%	1	2.3%
		そう思わない	0	0.0%	0	0.0%
		計	384	100.0%	44	100.0%
7	動物を扱う実験・実習は、安全性に重点が置かれていましたか？	そう思う	287	74.7%	35	87.5%
		ややそう思う	68	17.7%	3	7.5%
		どちらとも言えない	17	4.4%	1	2.5%
		あまりそう思わない	3	0.8%	1	2.5%
		そう思わない	0	0.0%	0	0.0%
		この授業は該当しない	9	2.3%	0	0.0%
		計	384	100.0%	40	100.0%
8	この実験・実習は、シラバスに沿って進められましたか？	そう思う	232	60.4%	34	77.3%
		ややそう思う	90	23.4%	8	18.2%
		どちらとも言えない	58	15.1%	1	2.3%
		あまりそう思わない	4	1.0%	1	2.3%
		そう思わない	0	0.0%	0	0.0%
		計	384	100.0%	44	100.0%

9	あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？	そう思う	147	38.3%	25	56.8%
		ややそう思う	162	42.2%	16	36.4%
		どちらとも言えない	58	15.1%	3	6.8%
		あまりそう思わない	7	1.8%	0	0.0%
		そう思わない	0	0.0%	0	0.0%
		答えられない	10	2.6%	0	0.0%
		<b>計</b>	<b>384</b>	<b>100.0%</b>	<b>44</b>	<b>100.0%</b>
10	あなたは、この授業の内容を理解できましたか？	そう思う	196	51.0%	29	65.9%
		ややそう思う	170	44.3%	14	31.8%
		どちらとも言えない	16	4.2%	1	2.3%
		あまりそう思わない	2	0.5%	0	0.0%
		そう思わない	0	0.0%	0	0.0%
				<b>計</b>	<b>384</b>	<b>100.0%</b>
11	この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？	そう思う	249	64.8%	33	75.0%
		ややそう思う	109	28.4%	10	22.7%
		どちらとも言えない	22	5.7%	0	0.0%
		あまりそう思わない	4	1.0%	0	0.0%
		そう思わない	0	0.0%	1	2.3%
				<b>計</b>	<b>384</b>	<b>100.0%</b>
※12	教員の音声は聞き取りやすかったと思いますか？	そう思う	51	66.2%	14	66.7%
		ややそう思う	16	20.8%	4	19.0%
		どちらとも言えない	9	11.7%	1	4.8%
		あまりそう思わない	1	1.3%	2	9.5%
		そう思わない	0	0.0%	0	0.0%
				<b>計</b>	<b>77</b>	<b>100.0%</b>
※13	教員やモニター画面の映像は見やすかったと思いますか？	そう思う	46	63.0%	15	71.4%
		ややそう思う	18	24.7%	4	19.0%
		どちらとも言えない	9	12.3%	2	9.5%
		あまりそう思わない	0	0.0%	0	0.0%
		そう思わない	0	0.0%	0	0.0%
				<b>計</b>	<b>73</b>	<b>100.0%</b>
※14	教員の授業の進め方はスムーズでしたか？	そう思う	45	65.2%	14	70.0%
		ややそう思う	15	21.7%	3	15.0%
		どちらとも言えない	8	11.6%	2	10.0%
		あまりそう思わない	1	1.4%	1	5.0%
		そう思わない	0	0.0%	0	0.0%
				<b>計</b>	<b>69</b>	<b>100.0%</b>
※15	授業中は、実験・実習に集中できる環境や雰囲気であったと思いますか？	そう思う	45	64.3%	14	70.0%
		ややそう思う	12	17.1%	3	15.0%
		どちらとも言えない	11	15.7%	3	15.0%
		あまりそう思わない	1	1.4%	0	0.0%
		そう思わない	1	1.4%	0	0.0%
				<b>計</b>	<b>70</b>	<b>100.0%</b>
※16	対面式の実験・実習と遜色ない、一体感・臨場感のある授業だったと思いますか？	そう思う	41	59.4%	14	70.0%
		ややそう思う	18	26.1%	3	15.0%
		どちらとも言えない	9	13.0%	2	10.0%
		あまりそう思わない	1	1.4%	1	5.0%
		そう思わない	0	0.0%	0	0.0%
				<b>計</b>	<b>69</b>	<b>100.0%</b>

※No.12～16は、遠隔授業システムを利用した科目のみ対象の設問

## 令和3年度鹿児島大学・山口大学共同獣医学部合同FD研修会 議事録

全体取りまとめ：乙丸

日時：令和3年9月21日(火)13:30～16:10

実施方法：Web

例年山口大学共同獣医学部と合同でFD研修会を実施している。コロナ禍以前においては隔年で各大学で対面により実施していたが、今年度は全面的にWeb会議システムを利用し開催することとなった。

### プログラム

- ①13:30-13:40 開会挨拶（鹿児島大学 共同獣医学部学部長）
  
- ②13:40-14:50 基調講演「教育についてー今日の大学教育に求められるものー」  
講演者：鹿児島大学総合教育機構高等教育研究開発センター  
出口 英樹 先生
  
- ③15:00-15:55 教育ワークショップ（4講座に分かれて教育に関する事項について協議）
  
- ④16:00-16:10 閉会挨拶（山口大学 共同獣医学部学部長）



## 基調講演

文責：乙丸

参加者：教員 84 名（山口大学：41 名、鹿児島大学：43 名）

### 講演テーマ「教育について ―今日の大学教育に求められるもの―」

講演者：鹿児島大学総合教育機構高等教育研究開発センター 出口 英樹 先生

ほとんどの教員にとって、「教育学」については専門的に学ぶ機会があまりなかった、あるいはあったとしても大分昔のことであるという状況に鑑みて、大学（大学教育）とは何かということに立ち返って知見を深めることを目的として、本学総合教育機構高等教育研究開発センターの出口 英樹 先生に講演を依頼した。

講演は大きく分けて 1. 大学とは何か、2. カリキュラムとは何か、3. FD としての教育改善、4. 獣医学教育についての 4 節に分けて行われた。

1 節目では大学史の概要とともに、我が国の大学というものがどのように位置づけられているかの説明が行われた。また、大学教員とは学生に広い知識を授け、学生に深い専門の学芸を教授し、深い専門の学芸を研究するとともに、学生の知的、道徳的及び応用的能力を展開させることができるような学士を育成することを職務とする専門指揮者であると定義された。

2 節目及び 3 節目では、上記の職務をいかに組織的にかつ体系的に行うかが重要であり、カリキュラムにおいて個々の授業科目が適切に位置づけられ、それに応じた内容、方法によって授業を行うことの重要性が説かれた。また、大学（教員）がその専門性に基づいてカリキュラムを定め、構成し、各授業の教育方法や評価方法についての点検、改善を行うため、単なる授業改善にとどまらない FD が必要であることが述べられた。また、アクティブ・ラーニングや単位制度についても説明が行われた。

4 節目では、以上を踏まえ、獣医学教育について獣医師養成という観点からの教育改善、獣医学教育という観点からの制度やカリキュラムの検討、共同学部としての困難性の克服することの重要性が述べられた。

## 教育ワークショップ（産業動物臨床）

文責：安藤

参加者：教員 12名（山口大学：3名、鹿児島大学：8名）

### 議題

#### 1. 新型コロナ下での講義・実習対応について各担当により以下の説明があった

##### 鹿児島大学

- ・共通教育科目について、原則的に対面で実施可能であった。緊急事態宣言等で実施不可の場合には、遠隔講義、オンデマンド配信等で講義・実習を行った。
- ・ポリクリ実習に関しても、原則的には実施を行った。往診等の実習では、人数制限、車の換気等の感染症対策を行ったうえで実施した。緊急事態宣言などで実施不可の場合には、課題を提示してレポートを提出させるなどで出席とした。
- ・養鶏・養豚実習は、2020年度は全面的に中止として、オンデマンドでの配信とレポート提出とした。2021年度は現地実習を農場で行うように調整中である。
- ・養豚実習に関しては、1週間に1回、大隅センターにて宿泊している学生を引率して、農業高校での実習を行っている。

##### 山口大学

- ・共通教育科目について、原則的に対面で実施可能であった。
- ・ポリクリ実習に関しては、緊急事態宣言等で実施不可の場合には中止し、解除後に人数制限をしながら実施した。往診等の実習は、人数制限、車の換気等の感染症対策を行ったうえで実施した。
- ・養鶏場実習は2020年度も実施できており、2021年度は事前PCRを行ったうえで農場の訪問を行うことで実施中である。
- ・養豚実習は豚熱発生後の2019年度から農場での実習は中止している。代わりに、廃用予定のヒネ豚をもらい、大学内で実習を行った後に、病理剖検に回すようにしている。

### 質疑

- ・養豚実習について、鹿児島大学での農業高校での実習内容、山口大学での豚を提供してもらった実習の内容などについて意見交換が行われた。
- ・山口大学の養豚実習の農場での実施実績がないため、EAEVEの中間評価に向けて、農場での実施方法を模索することが提案された。

#### 2. 生体代替実習について（どれぐらい生体を使っているか）

##### 獣医繁殖学実習

鹿児島大学：ビデオ教材（分娩、帝王切開）

模型・モデル：シミュレーター（直腸検査、子宮洗浄）

屠体臓器：牛、馬、豚

生体：膣・直腸検査2頭（2名×15回）、分娩2頭、採卵2頭

山口大学：ビデオ教材（直腸検査、授精、胚移植、妊娠鑑定、分娩、帝王切開）

模型・モデル：シミュレーター（直腸検査、分娩介助）

屠体臓器：牛、馬、豚

生体：直腸検査3-4頭、分娩実習：附属農場での分娩の観察（現地、カメラ）

#### 産業動物診断治療学実習

鹿児島大学：模型・モデル：シミュレーター（牛、豚）

電子機器：電子聴診器（牛の心音、呼吸音）

生体：牛7頭（子牛5頭、成牛2頭）、馬1頭

山口大学：ビデオ教材（整形外科手技）

模型・モデル：骨模型、眼科模型、内視鏡モデル、馬シミュレーター、

直腸検査シミュレーター

屠体臓器：牛、馬

生体：牛4頭、馬4頭（侵襲の大きいものは実施せず、身体検査などを実施）

その他

・山口大学で利用している、牛の直腸検査・分娩モデルや、馬のシミュレーターについて具体的な説明の追加があった。

### 3. その他

有村先生（鹿児島大学）より、EAEVEの中間評価にむけて、山口大学の実習施設の改善点について確認があり、佐々木先生（山口大学）より現在は改善に向けて協議中であることが説明された（説明途中でセッションのタイムアウトで中断）。研修会后、詳細については学部事案であるため、正確を期すために山口大学学部長に確認して欲しいとの追加コメントがあった。

#### 報告

1. 各大学の現在の教員配置（産業動物臨床系）について確認を行った。

山口大学：高木光博、角川博哉、佐々木直樹、谷口雅康、西 康暢、田浦保穂

鹿児島大学：三角一浩、帆保誠二、畠添 孝、安藤貴朗、乙丸孝之介、井尻 萌、森脇 潤、百武幸治、山下紀幸

2. 産業動物カリキュラムについて確認（開講期、主担当）を行った。

講義科目

獣医臨床栄養学（2年前期：1単位：遠隔山→鹿）鹿児島大学：安藤（貴）、山口大学：角川先生

獣医予防管理学（3年後期：2単位：個別）鹿児島大学：安藤（貴）、山口大学：角川先生

獣医繁殖学（4年前期：2単位：個別）鹿児島大学：安藤（貴）、山口大学：高木先生、谷口先生

牛診療学I（4年前期：1単位：遠隔鹿→山）鹿児島大学：乙丸先生、山口大学：高木先生

牛診療学Ⅱ（4年前期：1単位：個別） 鹿児島大学：安藤（貴）、山口大学：高木先生、谷口先生

馬診療学（4年前期：1単位：個別） 鹿児島大学：畠添先生、山口大学：佐々木先生

豚診療学（4年後期：1単位：遠隔鹿→山） 鹿児島大学：井尻先生、山口大学：谷先生

#### 実習科目

獣医繁殖学実習（4年前期：1単位：個別） 鹿児島：安藤（貴）、山口大学：谷口先生

産業動物診断治療学実習（4年後期：1単位：個別） 鹿児島：帆保先生、山口大学：佐々木先生

参加型臨床実習科目：2021年までの特別実習のシラバスには鹿大ー山大間で差異がある

産業動物総合臨床実習（5年後期：3単位：個別） 鹿児島大学：？先生、山口大学：佐々木先生

臨床獣医学特別実習Ⅴ（6年前期：1単位：個別） 鹿児島大学：乙丸先生、山口大学：谷口先生

臨床獣医学特別実習Ⅵ（6年前期：1単位：個別） 鹿児島大学：畠添先生、山口大学：谷先生

臨床獣医学特別実習Ⅶ（6年前期：1単位：個別） 鹿児島大学：安藤（貴）、山口大学：森本先生

臨床獣医学特別実習Ⅷ（6年前期：1単位：個別） 鹿児島大学：大和先生、山口大学：佐々木先生

\*備考：来年（2022年度）より参加型臨床実習の科目名および単位は変更予定

5年前後期通年・必修・集中講義扱い

伴侶動物総合臨床実習 11単位

産業動物総合臨床実習 6単位

夜間・救急病院総合臨床実習 2単位

病理臨床解剖学実習 1単位

### 3. その他

特になし

## 教育ワークショップ（伴侶動物臨床）

文責：馬場

参加者：教員 26 名（山口大学：12 名、鹿児島大学：14 名）

テーマ：コロナ禍における実習について

### 1) 病院実習

山口大学では、1 班あたりの班員を今までの 7~8 人から 4 人に減らし、実習期間を通年で外科・内科とも今まで 6 週間のところを 4 週間（合計 8 週間）に減らしている。その結果、教員が個々の学生により目が届くようになり、指導しやすくなったため、今までよりも学生の学習効果は向上していると感じている。

現在は、基本的な感染予防対策を取りながら実習自体は通常通り行なっている（まん延防止等重点措置期間中は、学生と飼い主が距離を取るようしていた）。1 班 2~3 人、12 班構成。8 つのコースからなる 12 週間の実習を 1 タームとし、通年で 4 ターム実施（1 タームには内科・外科とも 1 週間が含まれている）。1 タームのうち 4 週の休みが設けられており、この休み期間は学生が自由に使える時間となる。

### 2) 夜間救急診療実習

山口大学では、病院実習にも慣れてきた 2 月から始まり、1 日 2 人、5 日間参加する。実習時間は 20 時から翌 8 時まで（途中休憩時間あり）。外来および入院動物の処置・見回りを行う。大学の方針で対面授業が中止されていた期間は、本実習も取り止めていた。

鹿児島大学では、1 日の参加人数を 4 人から 2 人に減らした以外はコロナ禍でも通常通り実施している。通年で 3 週間（3 ターム）実施。実習時間は 19 時から 23 時まで。それ以降は学生が希望すれば延長して診療に参加することもできる。

### 3) 一次診療実習

山口大学では、実習協力病院での受け入れが困難であったため、2020 年度は本実習を実施できなかった。

鹿児島大学では、2020 年度の一次診療の割合が 12.5%程度であり、2019 年度の 20%程度から減少した。

EAEVE では、2019 年度についてはコロナ禍の影響が考慮されるが 2020 年度以降は考慮されないと想定される。コロナ禍でも一次診療実習を行い、中間報告にもその内容を記す必要があるだろう。

### 4) エキゾチックアニマル実習

山口大学では、コロナ禍で実習数はかなり減っている。

鹿児島大学では、2020 年度の実習数は 1/3 程度に減少したが、2021 年度は今まで通り実施できている。実施できている要因として、教員が実習先と研究協力関係を築いていること、実習先が大学からかなり近いことなどがあげられる。

## 教育ワークショップ（病態予防）

文責 小澤

参加者：教員 23 名（山口大学：11 名、鹿児島大学：11 名）

### 議題

教員ごとに、担当している講義や実習のコロナ禍における課題や対応策について説明・紹介した。

### 学外実習について

県外渡航の制限、受け入れ先機関からの中止要請などが原因で、従来通りの実施が難しい。学内に代替品を用意、オンラインで実演、実施時期の先延ばし、スライドによる施設紹介などで対応している。

### 対面実習を実施する際のスペースについて

山口大学の実習スペースは 60 名規模なので、対面実習の実施に大きな支障はない。一方鹿児島大学は実習スペースが狭く、2 班に分けて時間差で実施、実習前の準備の徹底、バーチャルスライドの活用、予習および復習課題の新たな設定などで対応している。

### 遠隔授業実施科目の評価方法について

学生の登校制限により、同じ科目の受講方法に両大学で違い（オンライン vs. 対面）が生じた場合、出席点をはじめとする評価方法の公平性について疑義がある。ただし、大学ごとに開講している科目も多いことから、遠隔授業実施科目であっても両大学の全学生を横並びに評価する必要性はないかも知れない。

### 学外実習の受け入れ先機関との関係性について

山口大学で、学生実習の受け入れをお願いしていた機関から、次年度以降の受け入れを断られるケースがあった。

鹿児島大学では、相手方機関とギブ・アンド・テイクの関係性を構築する意味合いも込めて、将来的に鹿児島県職員や県 NOSAI 職員としての就職を目指す学生の入試選抜枠の確保を検討している。

## 教育ワークショップ（基礎系）

文責 宇野

参加者：教員 17名（山口大学：9名、鹿児島大学：8名）

参加者：教員 17名

議題：講義・実習における課題、改善点、情報の共有

### 1) コロナ禍における講義・実習の状況

講義・実習において各教員が感じた問題点、対応策や工夫について情報共有した。

遠隔授業で学生の反応を把握するために工夫したり、自宅待機期間の学生の精神的に落ち込まないように配慮した。

対面での実習では密にならないように工夫し、対面での実施が困難な場合は、実習の一部を演習形式や生体を使用しない内容に変更した。

遠隔授業、とくに1大学のみがオンデマンド形式の授業の際などに、不公平にならないように出欠を取るのが困難。

### 2) 実習での生体使用の状況

生体使用の状況、生体使用数の削減への取り組み等について情報共有した。

動物実験計画書を提出する等して、必要最小限の数の生体の使用について客観的に審査を受けている。

シミュレーションなどの代替法を取り入れる、同じ個体を複数の実習で使用する、学生の班分けを工夫する等して、生体使用数を必要最小限に留めている。

どうしても代替手段のない、または代替法の確立が困難な実習項目があり、これ以上の使用数削減が難しい。とくに、解剖学実習での使用数削減の取り組みには困難が伴う。

獣医学基礎分野の教育効果を考えると、苦痛を伴う実習はゼロをめざすべきだが、生体を使う実習（安楽死含む）を避けて通ることは難しく、完全に中止すべきではない。

学生へのアンケートでは実習での生体使用に対して概ね前向きな回答が得られており、命の大切さを知り、動物を扱う経験が得られる貴重な機会にもなっている。

### 3) 実習の統合について

近年の動物福祉の考えから、生体を用いた実習が大幅に削減され、実習シラバスの構築が困難となってきているため、基礎獣医学・機能系の実習を統合するための検討を行うことが提案された。

実習間で内容の重複を減らすことにより使用動物数の削減、実習の効率化が可能となった経験からの前向きな意見があった。

以上

令和3年度専任教員のFD参加率(回答様式)

部局名( 共同獣医学部・研究科 )

合計参加率		95.1 % (専任教員 41 名中 39 名 参加)
企画別 参加率	合同FD研修会	92.7 % (専任教員 41 名中 38 名 参加)
	授業評価アンケート	80.5 % (専任教員 41 名中 33 名 参加)
	授業参観	95.1 % (専任教員 41 名中 39 名 参加)
備考		
41名中1名は休暇中		





理工学研究科

## 令和3年度 鹿児島大学大学院理工学研究科FD委員会活動報告

### はじめに

理工学研究科の教育目標は、「今日の諸課題に対応できる倫理的判断力及び人間生活を取り巻く自然についての総合的な知識をもち、自然科学に関する学問の高度化と多様化に幅広く柔軟に対応できる、次世代を担う技術者、研究者、さらには高度専門職業人を養成する」ことである。鹿児島大学の教育理念に基づき、この教育目標を達成すべく、教育の内容及び方法の改善を図るため、理工学研究科のファカルティ・ディベロップメント委員会（以下、FD委員会）は設置された。

理工学研究科の教員は、研究科と併せ、理学部と工学部を兼担し、教育・研究に当たっているため、研究科におけるFD活動は学部でのFD活動と重なる活動もあるが、授業の改善への取り組みも含め、各専攻での年度の始めに立てた計画に従って実施している。

令和3年度も前年度に倣い（1）学生による授業アンケートとそれに基づいた各教員による授業改善計画書の提出、（2）FD講演会の実施、（3）他機関主催FD研修会参加、（4）理工学研究科構成員の活動等の自己点検、（5）学生の研究活動と教育成果の点検を計画した。本報告書においては、実施された活動の概要について報告する。

尚、本報告書は学部FD委員を兼務する理工学研究科FD委員各位のとりまとめや事務職員と事務支援室職員によるアンケート調査の整理等の協力により完成したことを明記し、深く感謝する。

令和3年度鹿児島大学大学院理工学研究科ファカルティ・ディベロップメント委員会  
委員長 川畑 秋馬（全学FD委員会委員）

### 令和3年度 鹿児島大学大学院理工学研究科ファカルティ・ディベロップメント委員会委員

委員長	川畑 秋馬	（全学FD委員会委員、第1号委員）
委員	小金丸正明	（機械工学プログラム、第2号委員）
委員	甲斐祐一郎	（電気電子工学プログラム、第2号委員）
委員	木村 至伸	（海洋土木工学プログラム、第2号委員）
委員	甲斐 敬美	（化学工学プログラム、第2号委員）
委員	高梨 啓和	（化学生命工学プログラム、第2号委員）
委員	大橋 勝文	（情報生体工学プログラム、第2号委員）
委員	横須賀洋平	（建築学プログラム、第2号委員）
委員	松本 詔	（数理情報科学プログラム、第2号委員）
委員	新永 浩子	（物理・宇宙プログラム、第2号委員）
委員	神長 暁子	（化学プログラム、第2号委員）
委員	上野 大輔	（生物学プログラム、第2号委員）
委員	小林 励司	（地球科学プログラム、第2号委員）
委員	内海 俊樹	（生物学プログラム、第3号委員）
委員	原田 隆	（理工学研究科等事務部長、第4号委員）

## 第1章 令和3年度鹿児島大学理工学研究科のFD活動

### 1.1 鹿児島大学の中期目標・年次計画と理工学研究科のFD活動（川畑 秋馬）

鹿児島大学の中期目標・年次計画の大学院課程におけるFDに関連が深い項目を表1.1にまとめた。これらの方針にそって、理工学研究科のFD委員会ではFD活動を実施した。

表1.1 鹿児島大学の第3期中期目標・年次計画の大学院課程におけるFDに関連が深い項目

中期目標	中期計画
【A1】「進取の精神」を発揮して課題の解決に取り組むことのできる多様な人材を育成する。	【B2】大学院課程において、専門性を活かしつつ地球的課題に取り組むことのできる人材を育成するために、課題解決型学修（PBL：Problem Based Learning）等、多様な学修機会を平成31年度までに整備してその成果を評価・検証する。
【A2】地（知）の拠点として、地域課題の解決に取り組むことのできる人材を育成する。	【B4】鹿児島の特徴（島嶼、火山等）を活用し、自治体等との連携に基づいて把握した地域課題やニーズを踏まえ、地域志向意識を醸成し、地域課題解決の基盤となる汎用的能力の育成を図る「地域志向一貫教育カリキュラム」を平成30年度までに整備するとともに、その成果を基礎として、地元就職率向上を目指す「地域キャリア教育プログラム」を平成31年度までに整備し、本プログラムの受講者を年間150人以上に増やす。これらの人材育成にあたっては、試験結果や共通ルーブリックに基づくレポートやプレゼンテーションの評価、ポートフォリオ等のデータを収集・分析してその成果を評価・検証する。
【A3】教育目標の達成に向け、体系的カリキュラムを整備するとともに、学修成果を可視化し、教育内容・方法の改善サイクルを確立し、全学的な教育の内部質保証システムを整備する。	【B8】在学生や卒業生の要望、卒業生に対する社会からの評価を収集し、教育センター高等教育研究開発部及び担当教員を中心とした情報分析体制を平成30年度までに整備し、分析結果を大学全体で共有した上で具体的な教育改善策を実施する。
【A4】学術研究院制度や国際認証制度等を活用し、教育の質の向上を図る教育研究体制を整備する。	【B10】教員の指導力向上を図るため、新任教員等に対する研修制度を立ち上げ、必要に応じて教育学部や附属学校、教育センター高等教育研究開発部から教員を派遣し、カリキュラム開発や指導法、教育相談等に関する研修会を全教員に向けて定期的に開催し、平成28年度までに全専任教員の75%以上の参加を達成する。
【A15】グローバル化が進む社会の現状を理解し、国際的に活躍できる人材を育成するとともに、海外の学術機関等との教育・研究の交流を深め、国際貢献を推進する。	【B32】理系大学院課程において、シラバス及び教員が作成する講義資料の英語化、柔軟な学年暦の整備等を進め、国際的通用性を向上させる。また、学部・大学院の課程において、外国語（英語）による授業科目を、平成33年度までに平成26年度と比較して1.5倍に拡充する。
【A36】学内規則を含めた法令遵守の徹底により、大学活動を適切かつ持続的に展開する。	【B77】研究活動上の不正行為や公的研究費の不正使用を防止するため、鹿児島大学における研究活動に係る行動規範、オーサーシップ・ポリシー、公的研究費の不正使用防止対策に関する基本方針について、教本やパンフレット等を作成し、講習会を実施する機会を増やすなどにより教職員や関係する学生に周知徹底する。また、外部資金の申請等には講習会への参加を義務付ける。更に法令遵守に関わる相談受付、助言等のための環境を整備する。

### 1.2 理工学研究科FD委員会（川畑 秋馬）

令和3年度は理工学研究科FD委員会を3回、いずれもオンラインで開催した。第1回は、令和3年5月7日に開催した。本委員会では、理工学研究科FD委員会の運営体制を明確化するために、同委員会規則の「任務」の条項に自己点検・評価の実施及びそれに基づく教育の改善及び質的向上に関することを加えることについて審議し、承認した。また、令和2年度後期の授業科目に対して各プログラムで実施した成績評価分布の検討結果について確認を行った。さらに、

令和3年度FD活動分担およびFD報告書原稿作成の分担について議論した。第2回は、令和3年11月25日に開催し、令和3年度後期の授業科目に対して各プログラムで実施した成績評価分布の検討結果について確認を行った。第3回は令和4年3月7日に開催した。令和4年度のFD活動計画を決定するとともに、令和4年度のFD活動計画・経費要求書についても承認した。また、FD活動報告書の作成について分担の確認を行った。その後、各委員へ報告書の原稿作成について依頼がなされた。さらに、受講者数の少ない授業科目の授業評価アンケートの実施についての議論もあり、授業改善や教育の質的向上の観点から、来年度以降も受講者数が少ない科目に対しても授業評価アンケートを原則実施することが決まった。

## 第2章 理工学研究科FD講演会とFD活動

### 2.1 理工学研究科FD講演会（川畑 秋馬）

令和3年度の理工学研究科FD講演会は、理学部、工学部との合同の講演会として企画し、令和4年1月19日（水）13時00分～14時00分に開催した。前年度と同様に、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から3会場に分かれ、各会場をZoomで結んだリアルタイムオンライン形式で実施した。講師として、関西学院大学ライティングセンター准教授の福山祐樹先生をお招きし、リモートにてご講演いただいた。

高等教育においては、2010年頃からアクティブ・ラーニングの普及が進み、今日では大学における数多くの授業で、その実践がなされるようになった。しかし、一方で授業内での活動だけが「アクティブ」になっても、学生が授業に主体的に参加しないという問題も発生するようになってきた。そこで本講演会は、「授業において学生の自主性をいかに引き出すか」をテーマに、アクティブ・ラーニングの実践的な事例を中心として講演いただいた内容をそれぞれの授業において参照・活用していただくことを目的に企画した。

講師の福山先生の専門分野は教育工学で、東京大学教養学部附属教育高等化機構、明星大学明星教育センター、さらに、現職の関西学院大学ライティングセンターにて、ゲームを利用した社会問題の学習手法など、ゲームと教育・学習の関係性などについての研究に従事され、学生の自主性を引き出す実践的なアクティブ・ラーニングに関して深い造詣を持っておられることから、講演をお願いした。本講演会では、福山先生が東京大学在職時代に支援や実践をしたアクティブ・ラーニング型授業の事例をご紹介いただき、高等教育におけるアクティブ・ラーニング、特に理系科目の効果的な運営方法についてご講演いただいた。講演題目は、「高等教育におけるアクティブ・ラーニングの実践—理系事例を中心として—」であった。具体的には、アクティブ・ラーニングが求められる背景、アクティブ・ラーニング型授業の類型、アクティブ・ラーニングを取り入れるポイント、アクティブ・ラーニングを導入する際の注意点などについてお話しいただいた。また、遠隔授業におけるアクティブ・ラーニングの実施方法や実施上の工夫などについてもご教示いただいた。

時間的な制約があったが、講演終了後に会場から数件の質問も出され、活発な意見交換が行われた。具体的な実施事例を交えた説得力のある講演内容から多くの重要な示唆をいただき、非常に有益な講演会となった。講演会については、学内の他部局にも開催案内を通知し、事前申し込

みにより当日の視聴を可能とした。本講演会の参加者は、理学系教員 43 名，工学系教員 96 名，その他（他部局教員，及び，事務職員）11 名の合計 150 名であった。



## 2. 2 海外実習報告（横須賀 洋平，神長 暁子）

理工学研究科では、「グローバルに活躍できる理工系人材」を育成することを目標に，グローバル人材育成支援室を設置し，平成27 年度から，大学院共通科目として「理工系国際コミュニケーション海外研修（Graduate Overseas Engineering and Science Studies for Innovation: GOES）」を開講し，その中で，海外での語学研修と，大学，企業などでのインターンシップ等を行っている。令和3年度は，令和2年度と同様に代替プログラムとして，オンライン方式による「GOES HOME 2021」が開催され，8名が参加した。その概要を以下に示した。

研修期間	研修先国・地域	参加人数	研修内容	地域貢献活動
2021/8/16-9/30	オーストラリア (オンライン)	M2 : 4名 M1 : 4名	全研修期間：6 週間 ・語学研修：5 週間， 西オーストラリア大学 附属英語学校によるオ ンライン授業 ・Glocal Camp：1 週 間，企業訪問を含めた 対面授業とオンライン 授業によるワークショ ップ	鹿児島県の産業を 中心に企業訪問 などを通じて調 べ，SDGsの視点 から情報収集 し，昨年度構築 した英語サイト 「Bridge to the world」で情報発 信した。
webサイト	<a href="https://goesgakusei.eng.kagoshima-u.ac.jp/">https://goesgakusei.eng.kagoshima-u.ac.jp/</a>			

Glocal Campでは企業訪問（アサダメッシュ株式会社、米盛建設株式会社）やSDGsをテーマとした課題に取り組み、ワークショップの成果をwebサイトで公開した。今後も参加者の事後報告会などを通して、参加者の増加を図っていききたい。また、新型コロナ感染拡大の要因により、工学系及び理学系の両者において、GOES 以外の大学院生参加型の海外実習は実施しなかった。

## 2. 3 他機関主催FD研修会参加報告（内海 俊樹）

一般社団法人 大学 IR コンソーシアムが主催する「第5回会員向け講演会」に参加したので、次のとおり報告する。本講演会は、令和3年11月30日午後1時から午後3時の日程で、Zoomによるオンライン講演会の形式にて開催された。講演タイトル、講演者と内容は、それぞれ次のとおりであった。講演1, 3, 4は会員校3校からの実践事例についての報告、講演2は賛助会員企業からのAIを活用した大学IRデータ分析事例についての紹介であった。

### 講演1. 神田外語大学における教学IR分析基盤の設計・一部構築

～Data Lake, Excel, Tableauの活用～

神田外語大学 学長室 IR推進チーム 寺澤 岳生 氏

内容：神田外語大学は、外国語学部とGLA（グローバル・リベラルアーツ）学部、1研究科からなる大学であり、学部学生数は約4,000名である。学長室には11名の職員がいるが、そのうちの2名がIR推進チームとしてIR部門を担当している。IR部門は、大学運営上の意思決定および計画立案の支援を目的としており、そのために必要な情報の収集・分析・提供・保管を職務としている。特に、情報の分析は、大学執行部の依頼を受けて分析し、意思決定あるいは計画立案に役立つ分析を心がけており、分析そのものを研究とはしていないとのことであった。分析の結果と解釈は分けて報告しているが、依頼→分析→報告→意思決定→依頼というサイクルをうまく回すことができていないことを反省として挙げていた。また、重要なポイントとして、IR部門はあくまで意思決定や計画立案のための情報提供が目的であり、意思決定や計画立案までは行わないということと、個別業務を支援するのではない（個別業務のためのデータ提供が目的ではない）ことを挙げていた。様々な情報を統合したデータベースを構築し、それらを目的に応じて分析して可視化するツールが必要であるが、統合データベース（DWH）の導入・構築は非常に高価であることから、DWHを購入しないで運用する方式、すなわちデータレイク（Data Lake）方式に取り組んでいるとのことであった。データレイク方式は費用を節約できるが、必要なデータをいつでも利用できる状態に保つためには、データカタログを常にメンテナンスする必要がある、人的な労力は非常に大きいという印象であった。分析結果の可視化には、定型的なものについては半自動化できているが、依頼に基づいて分析する非定型的な可視化グラフはTableauで手作業分析をするとのことであり、可視化ツールの整備の必要性を強調していた。「安価」というのは重要ではあるが、鹿児島大学の規模ともなれば、データ量も分析依頼も格段に多いと予想され、費用と労力のバランスを考慮して検討する必要があると感じた。

### 講演2. AIを活用した大学IRデータ分析事例のご紹介

NECソリューションイノベータ株式会社 関西支社 榎本 宏 氏

内容：NEC ソリューションイノベータ株式会社は、実績、経験ともに豊富な情報処理関連企業であり、AI 活用事例も多岐にわたっていた。大学が関係する話題は、2016 年から開始した AI データ分析実証実験に関するものであった。いずれも、関東または近畿圏の複数の大学で、数千人から一万人を超える学生を対象として実施された分析事例であった。主として、大学の経営の改善や安定化に関する課題解決を目的とした事例が紹介された。例えば、「財務基盤強化」を目的とした場合、いくつかの課題が挙げられるが、その中で、「留年者・退学者の抑制」を課題とし、「退学者・留年者をゼロとする」を目標として掲げ、大学が保有する IT データに対して、設備の故障予知に使われる「インバリエント分析」を適用して解析し、いくつかの特異点を見出すことができた。それらの中には、既知の傾向のみならず、考えもつかなかったような因果・相関関係が含まれていた。結果については、さらに学生に対するヒアリングの実施などで特異点の裏付けを取り、例えば、特別コースを開講したり、学生に対する支援制度の充実を図ったりなどの施策を立案・実行して、その効果を検証するという PDCA を成立させた。また、一般市場の需要予想などに使われる「ホワイトボックス型 AI」による各種教学データの分析や、「機械学習のテキスト含意分析機能」による学生カルテの面談記録などのテキストデータの分析によって、退学・留年などの修学意欲を低下させる要因の把握にも取り組んだ。その結果、既知の要因に加えて予想外の情報を得ることができ、学生の修学指導に活用したり、予兆を発見して早めに学生をケア・支援したりすることが可能となった。大学で蓄積された教学データをクラウド上に登録することで、AI が分析して結果を図表にまとめて提供するサービスも展開しているとのことである。鹿児島大学でも、このようなサービスの活用を検討して良いのではなかろうかという印象を持った。

### 講演 3. 大学の業務改善に役立てるための教員の活動時間の把握

久留米工業大学 IR 推進センター 原 迅 氏

内容：久留米工業大学は工学部 4 学科、学生数約 1500 名、1 研究科 4 専攻、学生数約 30 名であり、専任教員は 67 名である。同校の IR 推進センターでは、教員の研究活動時間の確保を目的とした施策を立案するために、教員の研究時間について調査・分析し、研究時間の確保に向けた施策を検討した。調査は無記名のアンケート方式で実施し、回収率は 64%であった。まず、研究活動時間、教育活動時間、各種学内業務時間、社会サービスの時間について調査したところ、多くの教員は研究活動時間が確保できておらず、教育活動の時間の割合が、全国平均よりも高いことが明らかとなった。また、研究活動時間が長い教員は、教育活動時間も長いという傾向も判明した。研究活動時間の確保を目指して、教員と職員が共同で行うべきことについても調査した。その結果に基づいて、現在、例えば事務業務フローの見直しなどに取り組んでいるとのことであった。

### 講演 4. 大阪府立大学における卒業生調査の分析と活用

大阪府立大学 高等教育推進部門 畑野 快 准教授

内容：大阪府立大学は2012年から学域・学類制を導入しており、4学域13学類、7研究科を設置している。学域学生数は約5,900名、大学院生約1,800名、教職員数760名である。2022年度からは大阪市立大学と統合され、大阪公立大学として新しい一步を踏み出すことになっている。2008年度から学生調査を実施していたが、成長感を指標とした在学生に対する調査を分析すると、学域・学類制の導入は効果があったと判断できた。そこで、卒業5年後の学部卒業生と学域卒業生を対象として、意識・実態の追跡調査を実施して比較した。転職の有無については $\chi^2$ 検定で、満足感については年度を独立変数、年収・キャリアに関する項目を従属変数とした多変量分散分析で検討した。また、在学時と卒業時、卒業5年後の全てに回答した卒業生をサンプルとして抽出し、時系列に沿ったモデルを構築してパス解析（完全飽和モデル）を実施した。その結果、学域卒業生は、学部卒業生に比べて転職率が低く、キャリア満足感や年収が高い傾向にあった。学部卒か学域卒かに関係なく、全体的に成長意識が高い学生は、卒業後も自分のキャリアを肯定的に認識する傾向にあることが判明した。一年次の双方向型授業の経験は、キャリアの上で重要である可能性も見出すことができた。このように、卒業後の意識調査から、「学域制の効果（の一部）を確認することができた」としていたが、精度と信頼性の高い分析が可能となるように、アンケートの回収率を高めるための工夫が必要とのことであった。いかにして回収率を高くするかは、どの大学でも、また、どのアンケート調査でも頭を悩ませる問題である。

教学IRは、今後ますます重要性が増すことを認識し、教員、職員、学生が一体となって取り組む必要がある。大学のIRデータを効率よく収集・分析してアウトプットし、その結果を意思決定および施策・計画の立案に活用するためには、これまでのような部局単位では限界があるような印象がある。例えば、授業アンケートについては、部局の特徴を残しつつも、全学共通で分析できるようなものを工夫し、その分析や結果のアウトプットについては、他のIRデータと統合して活用できるようなシステムの構築が必要ではないだろうか。大学全体としてのデータベースの構築や活用については、教員・職員が業務の一環とする範囲を超えることは想像できる。より効率よく、より実効性のあるものとするためには、情報処理を専門とし、教育分野での実績もある企業と上手に連携することも必要ではないだろうか。令和3年度は、本学でも教学IRに関する講演会が開催された。今後も同様な企画の実施が予想されるが、多くの教職員が積極的に参加し、教学IRに関して理解を深めて頂ければありがたい。かく言う私も、本講演会に参加して、その必要性を強く感じた次第である。

## 第3章 学生による授業評価

### 3.1 博士前期課程の授業評価アンケートの分析結果

#### 3.1.1 工学系専攻の授業評価アンケートの結果報告（甲斐 敬美）

平成28年度から令和3年度までの工学系専攻の授業評価アンケート結果を比較したものを図3.1.1に示す。この6年間に改善傾向は見られるが、ここ2～3年はプラトー現象が見られる。少なくとも今後はこの水準を維持することが重要である。「①出席」の項目は令和2年度および3年度はそれ以前に比べ、比較的大きく増加している。遠隔講義が増えたことが影響しているのかも



しれない。「②予習と復習」の項目だけは、依然3ポイント前後の低い水準にあり、学習時間の確保の観点から対策を講じていく必要がある。

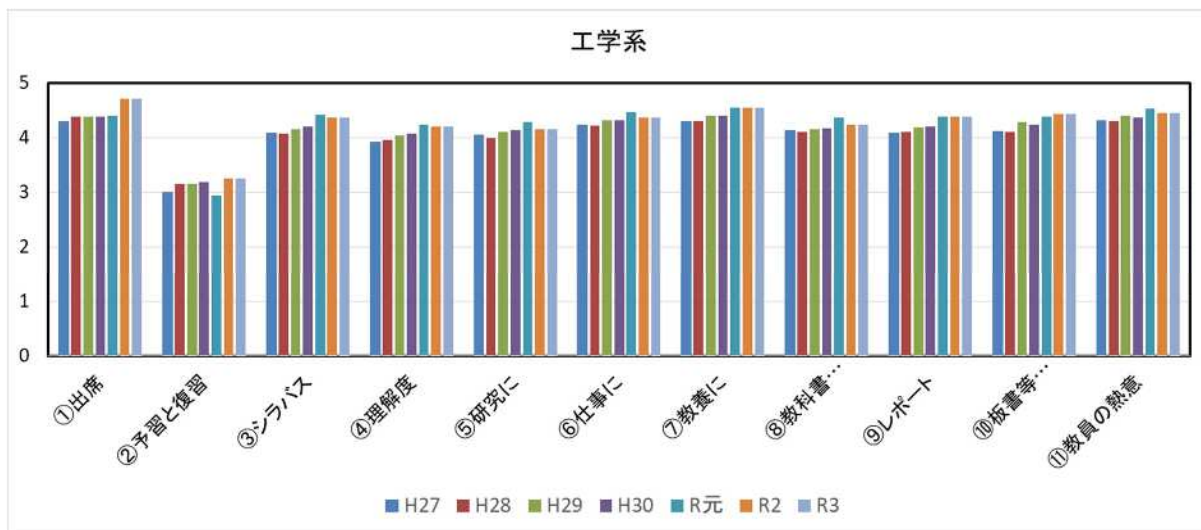


図 3.1.1 博士前期課程（工学系専攻）授業評価アンケート結果の推移

### 3.1.2 理学系専攻の授業評価アンケートの結果報告（松本 詔）

平成 27 年度から令和 3 年度までの理学系専攻の授業評価アンケート結果を図 3.1.2 に示す。①から⑪までの全てのスコアが昨年度とほぼ同じであった。プログラムごとのグラフでは増減が見られるので、理学系専攻全体で平均化したために差異が消えたのだろう。さて令和 2 年度に引き続き、①出席のスコアがそれ以前より高い。これは昨年度と同じ理由で、オンデマンドなどの遠隔授業が増えたためであろう。また、②予習復習のスコアが依然改善すべき項目である。学生自身の研究に直接関係があるように見えない科目も、学習意欲を持って予習・復習を進められるよう対応が必要であると考えられる。コロナ禍の授業を 2 年続けているため、短期的な判断はせずに長期的な視点が求められている。

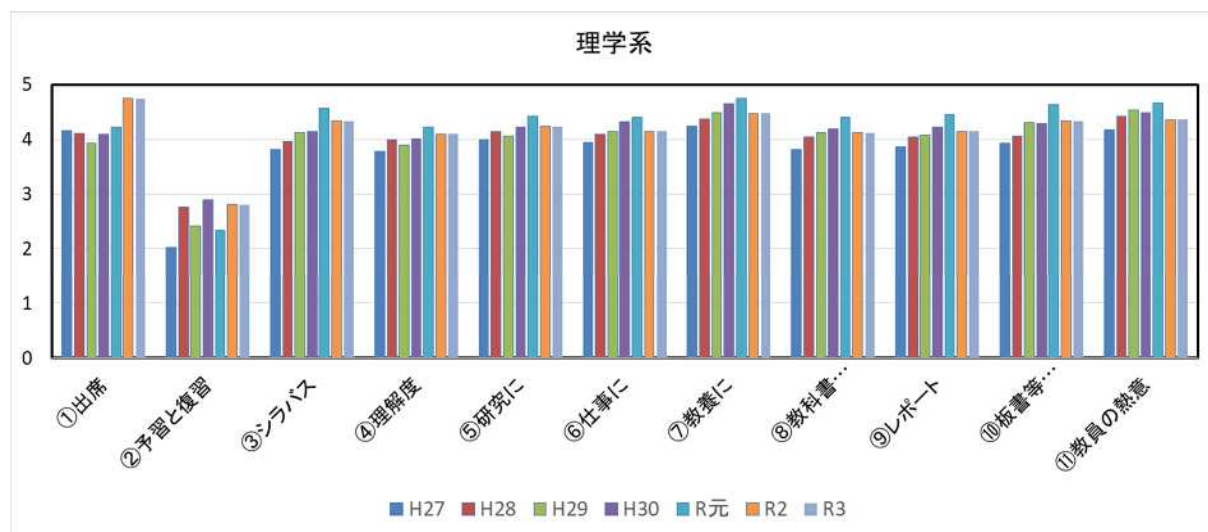


図 3.1.2 博士前期課程（理学系専攻）授業評価アンケート結果の推移

## 3.2 博士前期課程の各プログラムにおける授業評価アンケートの分析結果

### 3.2.1 機械工学プログラム（小金丸 正明）

図 3.2.1 に、機械工学プログラムの講義科目に対して実施された授業評価アンケートの結果を示す。図 3.2.1 の結果は、主なアンケート項目の評価点において、1 年間に開講された科目で平均した値の過去 7 年間における推移を示している。

平成 29 年度よりアンケートの回答選択項目が「5.大いにそう思う、4.そう思う、3.どちらともいえない、2.そう思わない、1.全くそう思わない」の 5 段階から、「5.そう思う、4.どちらかと言えばそう思う、3.どちらとも言えない、2.どちらかと言えばそうは思わない、1.そうは思わない」の 5 段階へと変更となっている。この変更により、高い評点の場合より高く、低い評点の場合はより低くなると推察されるが、図 3.2.1 に示す通り平成 29 年度前後ではほぼ横ばいの傾向を示しており影響は軽微であった。

図 3.2.1 から、評点は 1 項目を除き 4 以上で推移しており、各教員が授業改善に継続的・意識的に取り組んでいることにより、高評点が維持されていると考えられる。評点が 4 に満たない「②予習と復習」は、例年もっとも評点が低い。予習・復習に活かせるようなレポート課題の内容と回数を検討する等、学生が率先して予習・復習を行うようなさらなる取り組みが必要と思われる。

今後も継続的な授業評価アンケートの実施と分析、活用により、教員と学生の意識改善に役立てていくことが重要である。

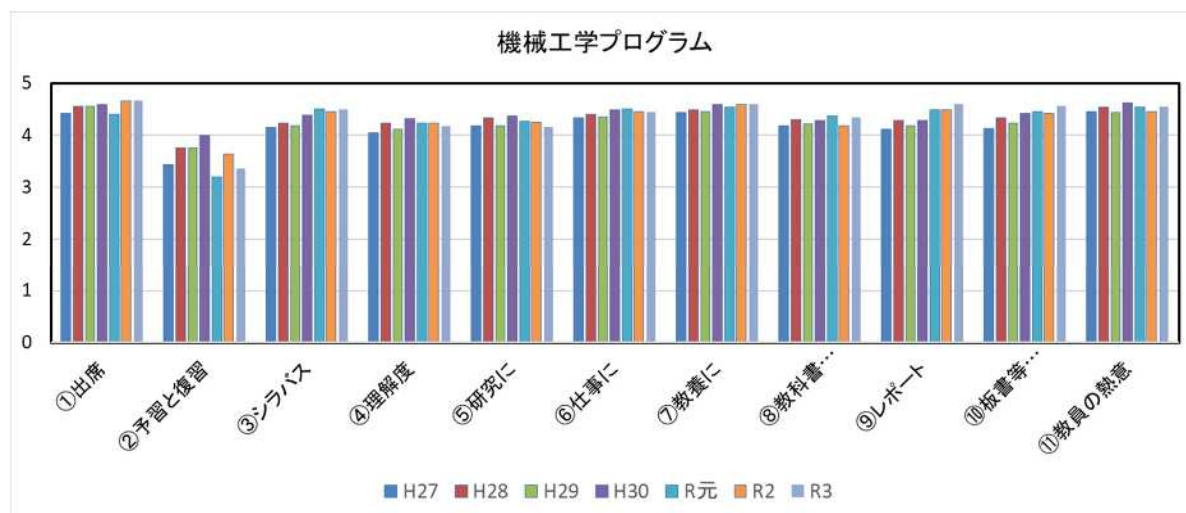


図 3.2.1 機械工学プログラムの授業評価アンケート結果の推移

### 3.2.2 電気電子工学プログラム（甲斐 祐一郎）

図 3.2.2 に、電気電子工学プログラムの過去 6 年分（平成 28 年度から令和 3 年度）の授業評価アンケート結果の推移を示す。令和 3 年度は昨年度と比較して大きな改善は見られなかった。①出席、⑨レポートは、昨年度は大きく改善したが今年度は低下している。今年度は多くの授業が対面で実施されており、授業への出席やレポートや予習・復習時間が減少したことで、④理解度も低下したと考えられる。今後、遠隔と対面授業の両方のメリットを生かせるような授業内容の検討も必要になるとと思われる。一方で、⑤研究に、⑥仕事に、⑦教養にや⑪教員の熱意は昨年度

と比べて大きな変化はなく、改善できていない。大学院生の学力の低下と気質の変化の影響も受けていると考えられるが、この点に対応した授業の改善に引き続き取り組む必要がある。

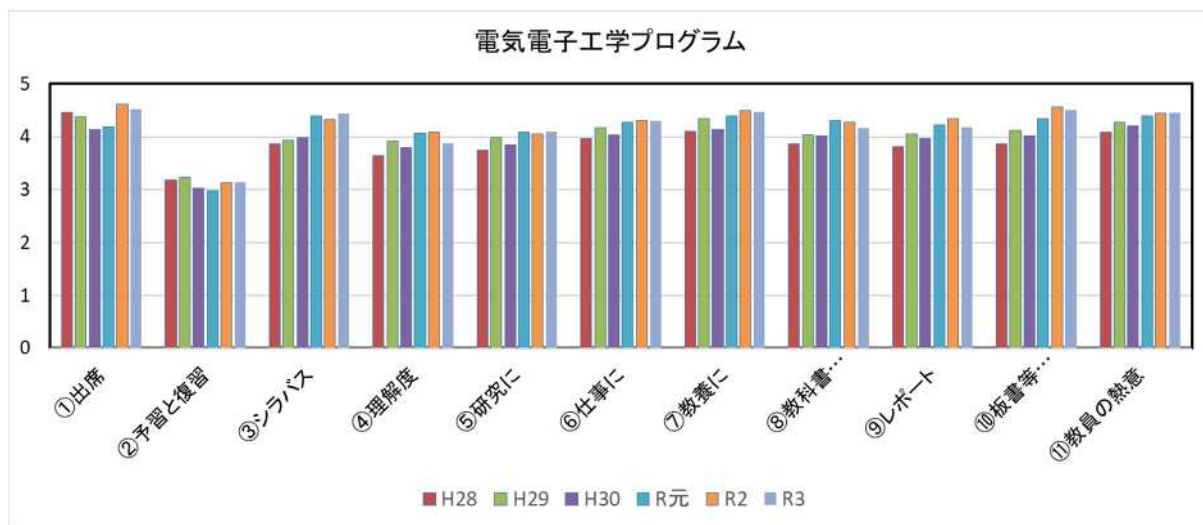


図 3.2.2 電気電子工学プログラムの授業評価アンケート結果の推移

### 3.2.3 海洋土木工学プログラム（木村 至伸）

海洋土木工学プログラムにおいて、平成 28 年度～令和 3 年度の 6 年間に実施した授業評価アンケートの結果を図 3.2.3 に示す。この結果は、授業評価アンケートの主要項目に対する評価について、その年度のアンケート実施科目全体（令和 3 年度は 9 科目）の平均評価である。令和 3 年度は、学士・修士一貫教育制度により大学院へ進学する学部 4 年生の早期履修も可能となったため、授業評価アンケート結果には、その学部 4 年生の評価も反映されている。令和 3 年度の評価は、「②予習と復習」と「⑨レポート」を除くその他の評価項目で前年度の評価を下回っているが、評価としては 4 ポイント以上の高い水準を維持している。大学院の講義に対して学生は所定の満足を得ているものと判断され、授業改善の継続的な効果が表れている結果であると考えられる。

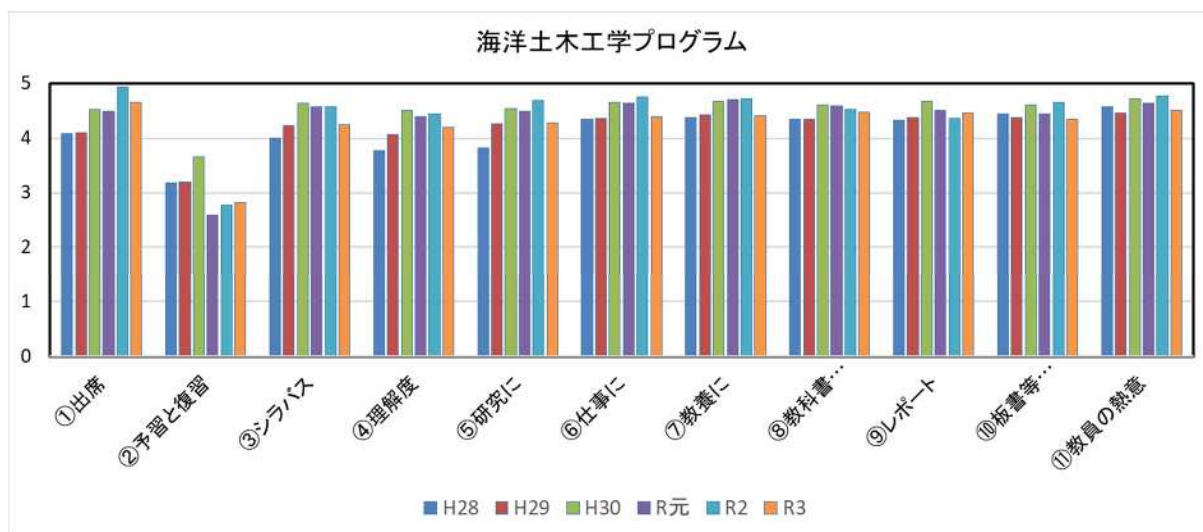


図 3.2.3 海洋土木工学プログラムの授業評価アンケート結果の推移

ただし、「②予習と復習」の評価については、平成30年度に3.65ポイントと改善していたが、その後の3年間は改善傾向にあるものの3ポイントを下回っており、他の評価項目と比較して低い状況が続いている。3ポイント以下ということは、1コマ(90分)の授業に対する予習と復習の時間(レポート作成時間を含む)が3時間以下であることを意味している。「⑨レポート」の評価が4.46ポイントであることを鑑みると、予習と復習の時間は少ないものの、レポート内容は授業の理解に役立っているとも判断できるが、学生の予習と復習に対する姿勢は十分であるとは言えず、“単位の実質化”の観点からも改善に向けた努力が必要である。

### 3.2.4 化学工学プログラム(甲斐 敬美)

化学工学プログラムの最近6年間(平成28～令和3年度)の授業アンケート結果を図3.2.4に示す。ただし、令和元年度までは化学生命・化学工学専攻での集計結果である。項目「②予習と復習」の評価を除き、ほとんどの項目で4を超えており総じて高い評価を得ている。項目「①出席」は年々上昇傾向であったが、この2年間はさらに伸びた。「②予習と復習」は低下傾向にあったがこの項目も高くなった。遠隔講義が増えたことが大きな原因と推測される。その他の項目は、例年と比べて大きな変化はないが上昇傾向は見られる。令和3年度の各項目を理工学研究科(工学系)の平均と比較すると、ほとんどの項目で工学系平均を上回っているが、項目「②予習と復習」は0.59ポイント低い。この点は今後の課題である。教員数の減少、財政の劣悪化や諸業務の肥大化が教育活動を侵食し始めていることが危惧されるが、このような状況においても最大限の改善に努めたい。

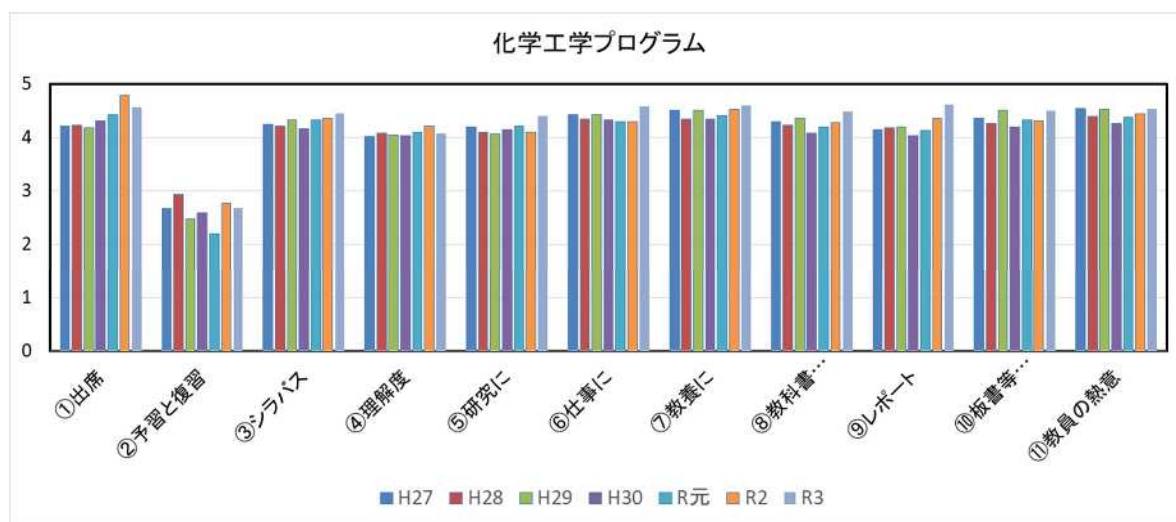


図 3.2.4 化学工学プログラムの授業評価アンケート結果の推移 (令和元年度までは化学生命・化学工学専攻として集計)

### 3.2.5 化学生命工学プログラム(高梨 啓和)

化学生命・化学工学専攻は、令和2年度の改組によって工学専攻化学生命工学プログラムと化学工学プログラムとそれぞれ独立したプログラムとなった。これに伴い授業評価アンケートについても化学生命工学プログラム独自で集計することになった。図3.2.5に最近6年間(平成27～令和元年度)旧専攻で実施した授業アンケート結果と令和2～3年度に改組後のプログラムで実施

したアンケート結果を併せて示した。項目②予習と復習が 2.19-3.04 と低いですが、その他の項目では 4.01-4.72 であり、総じて高い評価を得ている。改組前の令和元年度と改組後の令和 3 年度を比較すると、②予習と復習を除いていずれの項目も上昇している。この傾向は今年度顕著に認められ、とくに⑤研究に、⑥仕事に、⑦教養に、⑧教科書・教材、⑩板書等の明瞭さ、⑪教員の熱意の項目の評価の上昇が目立った。これは、コロナ禍が長引く中でも、対面形式の講義が増えたことの影響と考察する。学部教育と異なり大学院の講義は、比較的小人数なので対面で講義しやすいことが影響したと考えられる。また、継続的な FD 活動が功を奏しているとも考えられる。すなわち、プログラム会議の場で授業評価アンケートの分析結果および考察をフィードバックすることが教員の意識改革等を惹起していると考えられる。

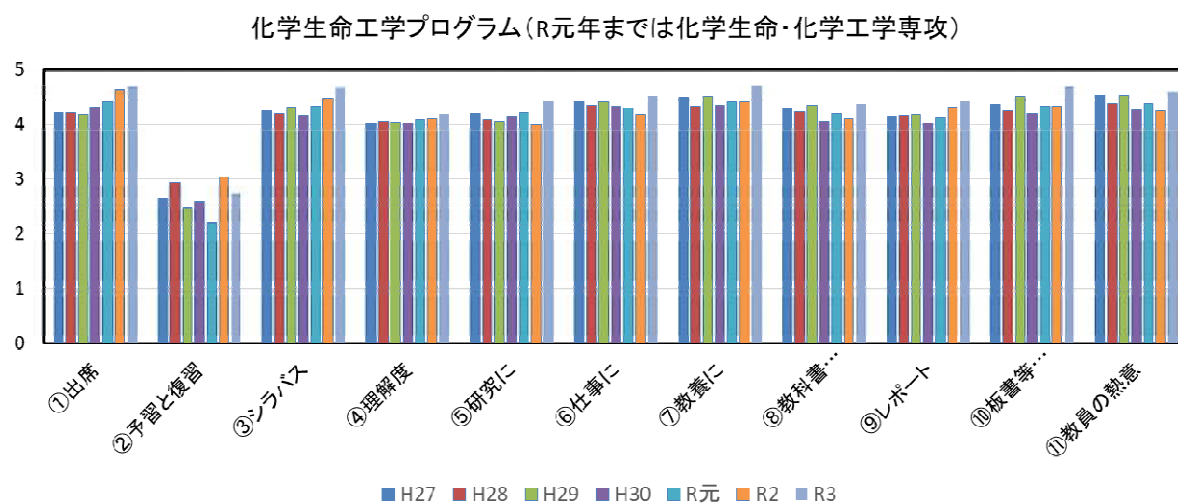


図 3.2.5 化学生命・化学工学専攻および化学生命工学プログラムの授業評価アンケート結果の推移

### 3.2.6 情報・生体工学プログラム (大橋 勝文)

平成 21 年度に改組が行われ、情報工学専攻と生体工学専攻生体電子工学講座が統合して情報生体システム工学専攻が立ち上がり 11 年が経過し、令和 2 年度から情報・生体工学プログラムが立ち上がった。情報生体システム工学専攻を含めた情報・生体プログラムの FD 授業評価アンケートは平成 21 年度から令和 2 年度分の 12 年間のデータが収集されていることになる。ここではその 12 年間のうち直近の 7 年間の経年変化を見ることにする。今年度の FD 活動報告書では、情報生体システム工学専攻のデータと令和元年度の工学系専攻の平均値及び令和元年度の理工学研究科全専攻の平均値と比較することによって評価と論評を加えたい。比較対象となった 11 項目について情報生体システム工学専攻の集計結果を図 3.2.6 に示す。集計した科目数は、18 科目（前期 9 科目、後期 9 科目）であった。平成 27 年度～令和 3 年までで、令和 3 年の今年度の数値は、予習と復習以外の全てにおいて、平成 30 年から令和元年に授業評価が上昇し、高い評価値が続いている。予習と復習のみは遠隔講義が始まった令和 2 年から大きく上昇し令和 3 年の今年も上昇し続けている。授業担当者が遠隔授業開始に伴い、課題の工夫などを行ったために上昇したと思われる。この傾向は、情報・生体工学プログラムのみに見られるので、情報系の講座の多くが動画配信等で行われていることから授業形態の相性がよかったために予習と復習が行いや

すかったと思われる。

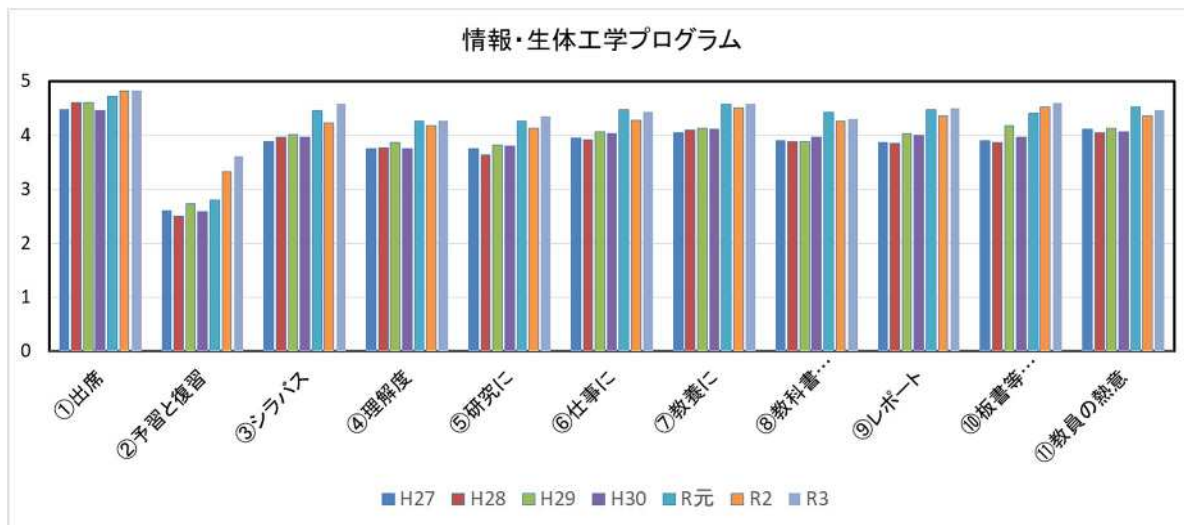


図 3. 2. 6 情報・生体工学プログラムの授業評価アンケート結果の推移

### 3. 2. 7 建築学プログラム (横須賀 洋平)

建築学プログラムの令和3年度の授業アンケートについて、設問項目の平均を図3.2.7に示す。11項目中10項目が4.0を上回り、良好な結果であった。前年度を大きく下回った項目は「①出席」「②予習と復習」「⑧教科書・教材」「⑨レポート」「⑪教員の熱意」であるが、「②予習と復習」以外の評点は4.0以上である。ここ数年上昇傾向にあった「⑧教科書・教材」「⑨レポート」が評点を下げている。昨年度は遠隔授業が中心であったが、今年度は遠隔と対面が混在した授業が多く、授業資料や課題の出題や提出が従来と異なることが評点の低下に至ったと考えられる。「⑤研究に」「⑥仕事に」昨年と比較して評点が上がっており、例年の水準に戻っている。評点に着目すると、10項目は4.0以上であるが、「②予習と復習」は評点3.0を下回っており、大幅に低下している。研究科の平均値を下回る値となり、教員の改善努力が必要である。

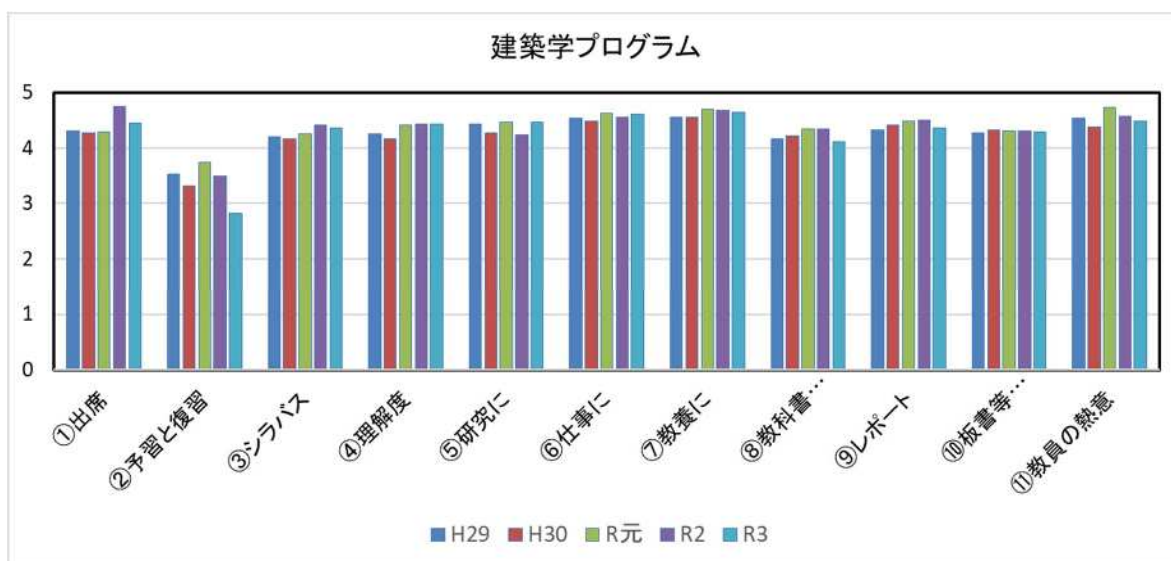


図 3. 2. 7 建築学プログラムの授業評価アンケートの結果の推移

### 3.2.8 数理情報科学プログラム（松本 詔）

直近6年の授業評価アンケートの結果を図3.2.8に示す。まず、各講義の受講人数が少なく、授業アンケートの実施が十分に行われていないこと、また回収率も低いことに注意が必要である。前年度からの数値の上下は多少見られるが、直ちに問題視すべきものは見当たらない。「①出席」については、R2年度とR3年度はオンデマンドで実施された授業もあるため、安易な考察は避けるべきである。他プログラムと比較すると、「②予習と復習」「⑤研究に」「⑥仕事に」の評価が全ての年度を通してやや低いようだ。プログラムの特性上、⑥が低いのは仕方がないかもしれないが、⑤は受講生に幅広い研究視野を持つように指導するために改善する努力をすべきだろう。また、同時に授業の予習・復習をもっと促すなどで②が改善できるだろう。グラフには現れていないが、アンケートの実施率も改善の余地がある。

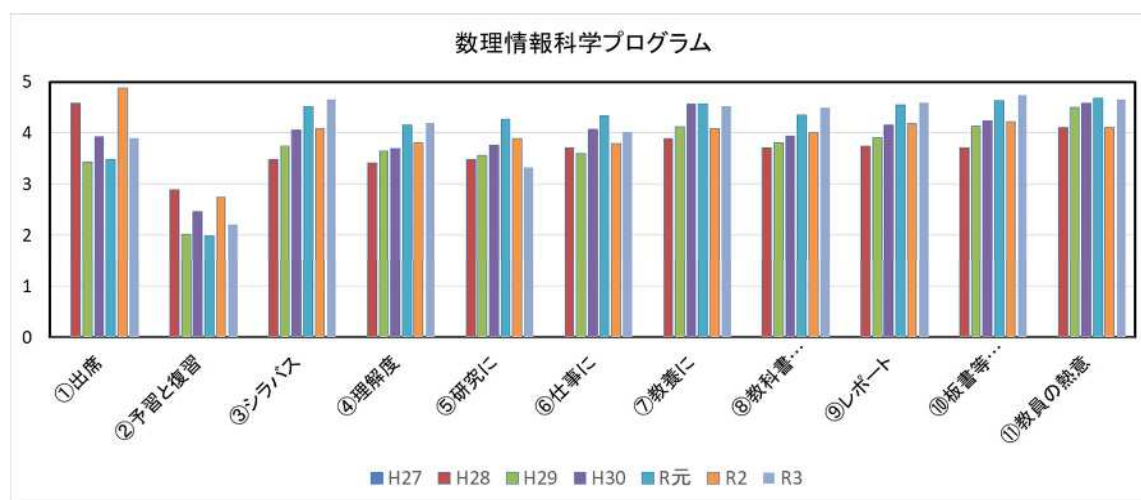


図 3.2.8 数理情報科学専攻の授業評価アンケート結果の推移

### 3.2.9 物理・宇宙プログラムの授業評価アンケートの結果報告（新永 浩子）

令和3年度から過去7年間を振り返ったアンケート結果を図3.2.9に示す。①、②、③、④、⑩、⑪については、エラーの範囲内で右肩上がりであり、その他、ピークアウトした可能性のある項目（⑤、⑥、⑦、⑧）、フラットで顕著な変化がない項目（⑨）の3つに大別される。11の評価指標のうち、6項目で評価が上昇しており、授業改善の成果が現れていると肯定的に捉えられる。一方、ピークアウトした項目は、研究や仕事、教養に役立つか、授業方法としての教科書・教材、という項目であり、これらについては一層の努力が求められることを示唆している。今年度、スタンフォード大学のカール・ワイマン教授（全米ベストティーチャー賞受賞者で、ノーベル物理学賞受賞者）によ（FD/SD）スペシャルレクチャー2021を催し、全学67名の教職員、学生が参加し、多くの学びを得た。ワイマン教授が築かれたような科学的アプローチに基づいた変革的講義法に教員が取り組み、目標が達成できたかを振り返ることは今後ますます重要になるが、教員個人として取り組める範囲は限られるため、研究科として目標実現のためのサポートが強化されれば、今後飛躍できる可能性を秘めている。大学院の講義は人数が少ないため、コロナ禍でも対面で実施されるケースが多いと思われるが、遠隔のみで実施した講義がある場合は、対面の講義群と遠隔のみの群で、どれだけ差があるかを検証する価値はある。

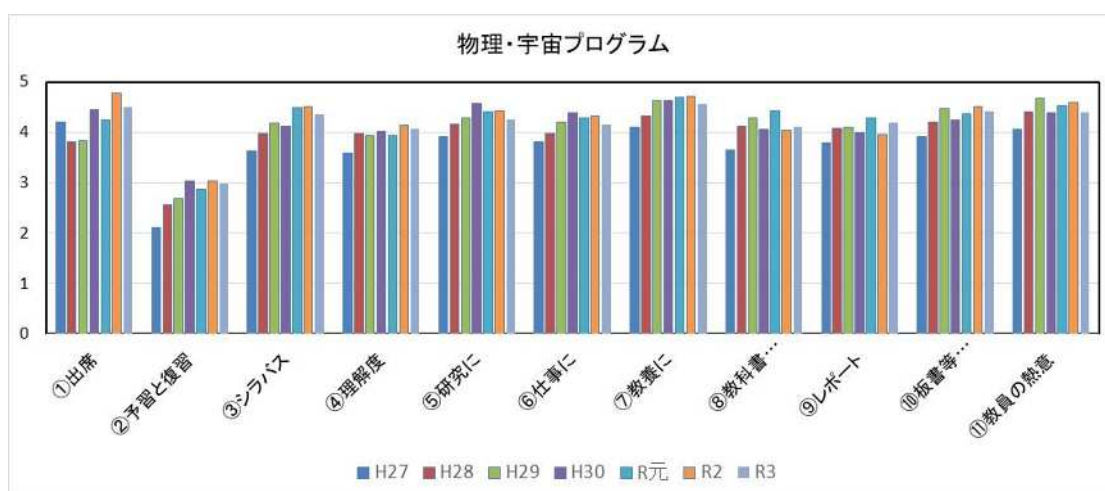


図 3.2.9 物理・宇宙プログラムの授業評価アンケート結果の推移

### 3.2.10 化学プログラム (神長 暁子)

平成 27 年度から令和 3 年度のアンケート結果を図 3.2.10 に示す。①出席と⑨レポート以外のスコアは昨年度と同程度か上昇していることが確認された。昨年度に理学系他プログラムと比較して低かった②予習と復習のスコアも上昇した。改組に伴い、R 元年度までのデータは生命化学専攻のものであり、それ以降が化学プログラムでのアンケート集計となるため、スコアの経年変化については考察することができないが、コロナ禍で遠隔授業を余儀なくされる中、各教員が講義の内容や進め方を工夫した結果が現れたと思われる。①出席と⑨レポートのスコアの低下については、対面の機会が減少している中、同じ研究室の学生がいない等で孤立しそうな学生への積極的なフォローも必要ではないかと考えられる。予習と復習については、研究活動と並行してできるようにする等、教員同士の情報交換も含めて検討していきたい。

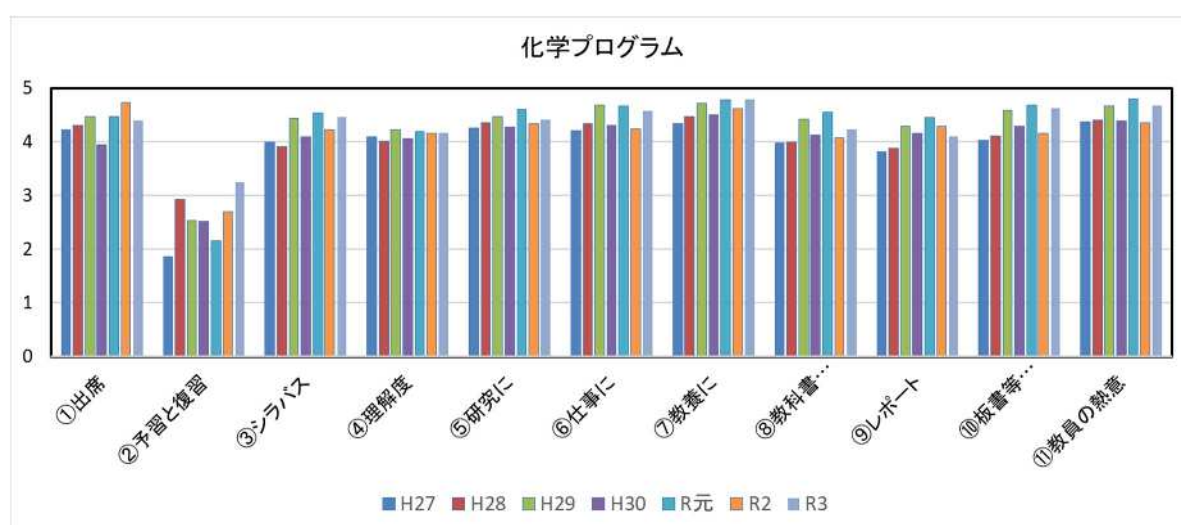


図 3.2.10 化学プログラムの授業評価アンケート結果の推移  
(令和元年度までは生命化学専攻として集計)



### 3.2.11 生物学プログラム（上野 大輔）

平成 27 年度～令和 3 年度のアンケート結果を図 3.2.11 に示す。平成 27～令和元年度までの 5 年間は生命化学専攻の集計値が示されており、改組後令和 2、3 年度のみが生物学プログラムとしての集計値である。このため、連続的なデータ推移評価は今年も困難である上、旧専攻と現プログラムの定員数の違いにも留意の必要がある。ここでは、特に令和 2 年度と 3 年度のアンケート結果について分析を行う。全体的には、11 項目中 10 項目は 4.2 以上の高評価が得られ、9 項目であった前年度より向上した。項目別に見た場合、②予習と復習、③シラバス、⑧教科書・教材、⑨レポートについては、昨年度より高い評価が得られた。また、昨年度に続き最も評価が低い②予習と復習についても、生命化学専攻時には年々評価が下がっていたものの、昨年度から上昇に転じていると見ることが出来る。その他、数値的に前年度より若干低い項目についても、大幅な下降は見られない事から、今後も個々で改善策を講じ続けるのが良いと判断される。以上、昨年度同様、早急に大きな改善が必要な状況には無く、今後も継続して調査結果との照らし合わせに基づく微調整を行ってゆくべきであろう。

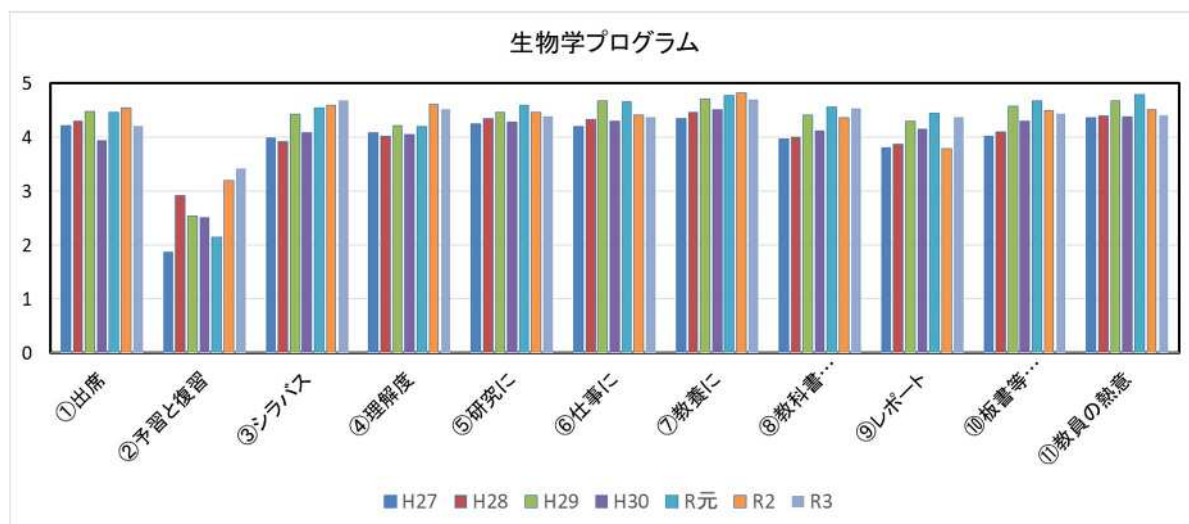


図 3.2.11 生物学プログラムの授業評価アンケート結果の推移  
(令和元年度までは生命化学専攻として集計)

### 3.2.12 地球科学プログラム（小林 励司）

平成 27 年度～令和 3 年度の 7 年分のアンケート結果を図 3.2.12 に示す。改組前の令和元年度までは地球環境科学専攻の集計値を用いている。地球環境科学専攻では 1 学年の定員は 17 名であったが、地球科学プログラムでは 1 学年の目安定員は 6 名である。令和 2 年度、3 年度における実際の 1 学年の人数は 4 人であった。

地球科学プログラムの令和 3 年度のアンケート項目全 11 項目中、9 項目において、4.0 以上の高い水準を維持している。しかしながら、全体的に令和 2 年度より低くなっていることは懸念材料である。「1. 出席」の変動の傾向と、他の項目の変動の傾向が似ている。受講者数が少ないため、1 人 1 人の出席状況が他の項目にも大きく影響してしまっている可能性が考えられる。

「2. 予習と復習」については、これまでも指摘されているように、1 年ごとに評価が大きく変動する傾向がみられる。しかし、全体的に低いままであり、特に今年度はこの 7 年で最も低かつ

た。各科目でレポート課題等を検討したり、学生へ予習復習の指導をしたりするなどの改善策が考えられる。

受講者が少ないため、年度ごとの変動が大きく、分析には限界がある。今後も調査を継続し、長い期間での変動に着目して分析する必要があるだろう。

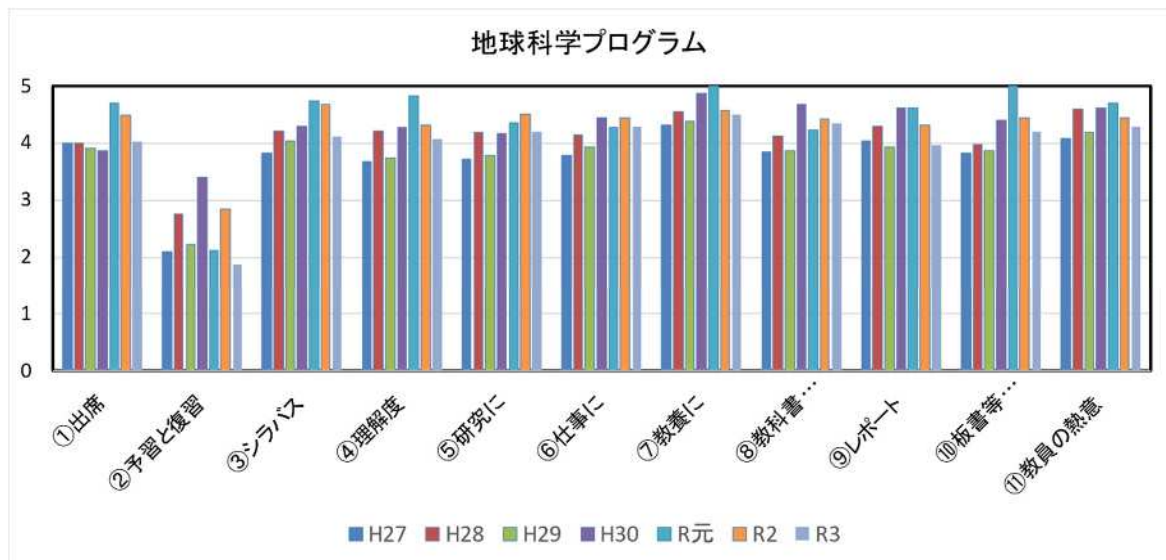


図 3. 2. 12 地球科学プログラムの授業評価アンケート結果の推移  
(令和元年度までは地球環境科学専攻として集計)

### 3. 3 授業計画改善書の活用

#### (1) 機械工学プログラム

学部と同様に、プログラムの FD 委員が収集した授業計画改善書は、授業評価アンケートの評価点や科目 GPA とともにプログラム教育評価委員会が整理して分析を行っている。プログラム教育評価委員会は、整理した内容と分析した結果を「プログラム教育評価委員会報告書」としてまとめている。この報告書はプログラムのサーバに電子ファイルとして保管されており、授業改善を実施する際の資料として利用できるように全教職員に公開されている。

#### (2) 電気電子工学プログラム

授業計画改善書は、各科目の授業評価アンケート評点とそのレーダーチャート、および授業評価アンケートの結果と共にプログラム事務室にて保管され、教員はいつでも閲覧できる。主として理工学研究科 FD 委員が管理し、プログラム FD 委員会において授業改善に向けた活用方法等を議論している。

#### (3) 海洋土木工学プログラム

理工学研究科 FD 委員会が博士前期課程の大学院生に対して実施する授業評価アンケートの結果に基づき、海洋土木工学プログラムの各教員は、担当科目の授業計画改善書を作成することが義務付けられており、シラバスに記載した評価基準との整合性を自己評価した上で、

プログラム教育システム評価委員会に提出している。提出された評価資料に基づき、プログラム教育システム評価委員会では成績評価分布や受講生の合格率などの分析を行い、その結果をプログラム会議で報告している。本プログラムが対象とする教育・研究分野は、海洋学（環境システム工学）分野と土木工学（建設システム工学）分野であり、本プログラムの教員は、いずれか一つの分野に所属している。各教育・研究分野に科目部会を設置しており、これらの科目部会において授業計画改善書を活用した教育の点検および改善を継続的に実施している。

#### （４）化学工学プログラム

各教員は授業計画改善書の作成により授業内容や進め方および成績評価に問題がなかったかを確認するとともに、改善に向けた取り組みを継続的に行ってきた。FD委員は、各教員より提出された授業計画改善書を確認して保管している。不備がある場合は、FD委員が差し戻しを行い、不備箇所を指摘して再提出してもらっている。それでも問題が解決されない場合にはプログラム長と協議の上、対応を検討する。また、令和2年度後期からは授業計画改善書に成績評価についての記載も行うようになったため、この結果を基に成績評価がシラバスに書かれた基準に従ってなされたかの確認をプログラム会議の場で実施した。

#### （５）化学生命工学プログラム

各教員は、授業評価アンケートの結果を受け取り、授業内容や進め方、評価方法に問題がなかったかなどを検証して授業計画改善書を作成し、次年度以降の授業改善に取り組むことを継続的に実施している。FD委員は、各教員より提出された授業計画改善書を確認・保管している。また、授業計画改善書を基にして、単位認定に極端な偏りがないかの状況分析を行っており、受講生全体に占めるA評価の受講生の割合が20%以上の科目、受講生全体に占めるAまたはB評価の受講生の割合が10%未満の科目、受講生全体に占めるF評価の受講生の割合が40%以上の科目が認められた場合は、担当教員に事情を確認することになっている。本年度は、該当する科目がないことを確認した。授業の進め方や評価法について問題点が発見された場合には、プログラム長を中心としたプログラム検討委員会にて対応を検討することになっている。

#### （６）情報・生体工学プログラム

情報生体システム工学専攻を含めた情報・生体工学プログラムでは平成22年度より、授業計画改善書を学科事務室に保管し、全ての教員が閲覧可能となるように管理している。各教員による授業改善への取り組み及び結果を教員全員で共有することで、情報・生体工学プログラム全体の教育内容への継続的な改善が試みられている。

#### （７）建築学プログラム

授業改善計画書に関しては、全科目の評点をプログラム内で閲覧可能にして問題点を共有することになっている。建築学プログラムでは、コースワーク科目など複数教員で担当する科

目も多いため、それらの科目では、授業アンケートの結果を複数教員で確認し、また、定期的に授業方針等の打合せを行い、検討した結果を授業改善に反映させている。

#### (8) 数理情報科学プログラム

授業担当教員は授業アンケート結果を基に作成した授業計画改善書を提出し、保管はFD委員または授業担当教員自身が行っている。受講者数が10名前後の講義が大半であることもあり、授業アンケートの実施率はあまり高くない。授業計画改善書における昨年や一昨年の評点と比較することで、評点の推移を確認することができ、継続的かつ効率的な授業改善につながっている。授業アンケートおよび授業計画改善書をプログラム内の他の教員に公開する仕組みはないが、必要に応じてプログラム会議等で授業状況に関する情報交換は行っている。

#### (9) 物理・宇宙プログラム

令和3年度には、授業計画改善書の提出が5件あり、授業アンケートの結果を受け、分析された。「授業アンケートの結果報告」で記載のグラフに現れているように、約半数の項目でスコアが上昇しており、授業内容は全体として改善されているが、改善できる領域もあることがわかった。引き続き、取り組みを進めていく。

#### (10) 化学プログラム

各教員が授業アンケート結果を基に授業改善計画書を作成し、授業内容や方法についてのアンケート結果の推移を確認し、授業改善に利用することになっており、令和3年度は4件の提出があった。受講者数が少ない等の理由で授業アンケートを実施しなかった科目もあったが、今後はできる限り実施する方向で働きかけていきたい。改組に加え、コロナ禍による遠隔授業の実施等で試行錯誤を余儀なくされる状況ではあるが、アンケートの統計結果を共有し、プログラムとしての活用方向を議論していく予定である。

#### (11) 生物学プログラム

化学プログラム、地球科学プログラムと共に、生物学プログラムも令和2年度に改組された。2年目となる本年度および昨年度の評価アンケートの結果についての、プログラム全体としての活用方針、取り扱いを今後決めてゆく予定である。昨年度に続き、まずは個々の授業のアンケート結果を分析し、授業内容や進め方の改善について個々のレベル取り組むところから始めるべきであると考えられる。来年度以降、ある程度の蓄積に基づく傾向が得られた時点で、全体としての改善点見定めを行う予定である。

#### (12) 地球科学プログラム

令和3年度は7名の授業担当教員から授業計画改善書が提出された。アンケート結果に基づき、授業計画改善書を作成することによって、授業の改善に継続的に取り組んできている。近年は、成績分布の確認がされるようになってきたことから、評価方法の自己点検の役割も果たしている。

## 第4章 GPA制度の現状と学習成果

理工学研究科では平成20年度よりGPA制度が導入された。ここでは、平成30年度から令和3年度までのデータを中心にGPA制度の現状について検討する。

### 4.1 工学系専攻のGPA制度の現状と学習成果報告（木村 至伸）

工学系専攻に在籍するM2学生を対象に、令和元年度から令和3年度までの3年間の累積GPAおよび総修得単位数に関する分布の推移を図4.1に示す。この3年間における累積GPAに着目すると、累積GPA3.0以上である学生の割合は95%と同水準である。令和3年度は、累積GPAが3.6～4.0の高水準に72.1%が分布している。3.8以上の割合は前年度に比べて若干減少し47.2%となり、3.6以上3.8未満の割合が24.9%と前年度に比べて増加した。令和3年度のM2学生が修得した単位は、その多くが令和2年度のM1在籍時であると考えられる。令和2年度は、新型コロナウイルス感染症対策のために遠隔形式による対応を迫られたため、学修・研究環境が十分ではなかったことが要因と考えられる。一方、総修得単位数に関しては、修了要件の30単位の割合が72.8%と昨年度の66.2%から増加しているが、修了要件よりも多く単位を修得した学生の割合は低下している。これも、令和2年度の学修・研究環境の悪化による影響と考えられる。また、令和3年度のM2学生は、大学院の改組により履修課程が大きく変更された学年であり、理工学研究科・工学専攻共通科目を修得する必要もあった。前年度の履修計画とは異なる点があったため、これらの影響についても分析する必要がある。

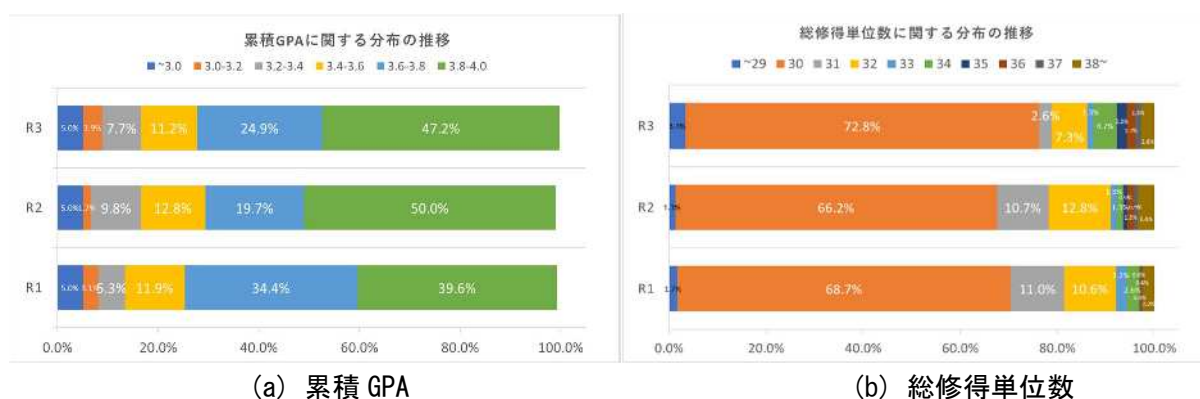


図4.1 令和元年度から令和3年度のM2学生に関する累積GPAと総修得単位数の推移

### 4.2 理学系のGPA制度の現状と学習成果報告（上野 大輔）

理学系における令和1～3年度まで3年間のM2学生の総GPAと履修単位数の変遷を、図4.2に示す。累積GPAに関して、令和3年度における3.8以上の割合は一昨年度から昨年度にかけ12ポイント以上減少し、今年度は更に1.5ポイント程度減少した。また、3.6以上3.8未満の割合も前年度から10ポイント以上減少した。3.4以上3.6未満の割合は若干増加したものの、全体的に減少している。この一方で、履修単位数については、修了要件の30単位取得者が全体の35%以上を占めた前2年に比べ、本年度は30単位であった学生は5%程度と大きく減少し、大部分はそれ以上の単位数を取得する方向へとシフトしている。特に、前年度から大きく増加したのは31単位

取得者 (前年度より 25 ポイント増加) と, 41 単位以上取得者 (前年度から 14 ポイント以上増加) である。これらの事実を総合すると, 今年度の学習成果の増加や減少についての評価を現時点で下すことは難しい状況にあることが分かる。特に, 前年度からの学生を取り巻く状況の大きな変化として, 新型コロナウイルス感染症拡大は無視できないだろう。遠隔授業が多く導入され, 大学通学の自粛が求められる期間も存在した。これらによる影響の可能性についても留意しておき, 今後感染症が収束した後に改めて評価するべきであろう。

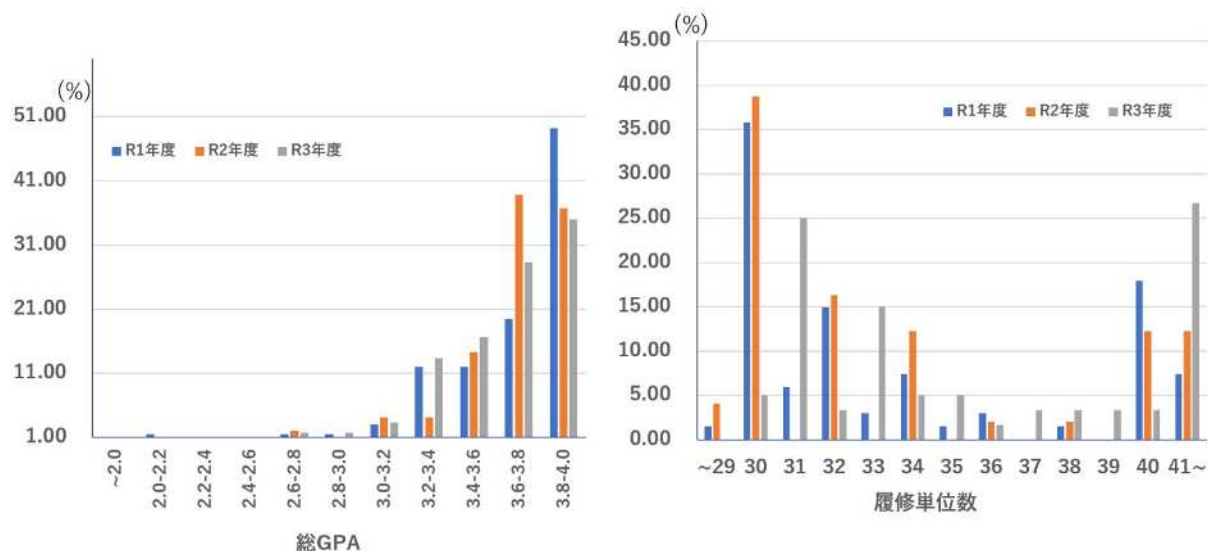


図 4.2 令和 1 ~ 3 年度の M2 の総 GPA と履修単位数のヒストグラム。

## 第 5 章 学生の研究活動と教育成果 (大橋 勝文, 小林 励司)

FD 活動の目的の一つとして, 大学院生の研究発表支援を行っている。平成 22 年度から令和 3 年度までの研究発表件数について, 表 5.1 に示す。令和 2 年度からの改組のため, 各専攻とプログラムの発表件数推移について述べることは難しいが, 全体としての件数は口頭発表, 論文共に昨年度から減少している。これにはコロナ禍による影響があると考えられ, 特に学会の大会開催延期や中止が相次いだことが大きな原因として挙げられるだろう。続いて, 平成 22 年度から令和 3 年度までの各年度の在籍者数を表 5.2 に, 学会等での受賞実績等について表 5.3 に示す。全体の在籍者数については, 昨年度とほぼ同数と述べて差し支え無いだろう。受賞実績の件数についても, 令和元年度計 51 件だったところ, 昨年度は計 22 件と大幅に減少し, 今年度 37 件と増加している。昨年度は, コロナ禍により十分な研究教育活動が行えなかったことが, 今年度はコロナ禍に対応した研究教育活動ができるようになったためと考えられる。



表 5.3 受賞など

博士前期課程

<生物学プログラム>

受賞者名	学年	受賞賞名等
山崎 海都	M2	令和3年度鹿児島大学大学院理工学研究科長賞

<物理・宇宙プログラム>

受賞者名	学年	受賞賞名等
長野杜春	M1	日本金属学会九州支部・日本鉄鋼協会九州支部・軽金属学会九州支部・合同学術講演会 ポスター発表 優秀発表賞
長野杜春	M1	日本金属学会優秀ポスター賞
長野杜春	M1	日本磁気科学会学生ポスター賞
尾中朱莉	M1	日本金属学会優秀ポスター賞
高橋巡季	M2	日本磁気科学会学生ポスター賞

<機械工学プログラム>

受賞者名	学年	受賞賞名等
中島 太聖	M2	Mate2021第27回「エレクトロニクスにおけるマイクロ接合・実装技術」シンポジウム, 優秀発表賞, (2021年6月)
高橋 雄太	M2	MES2021第31回マイクロエレクトロニクスシンポジウム, 研究奨励賞, (2021年9月)
高橋 雄太	M2	Mate2022第28回「エレクトロニクスにおけるマイクロ接合・実装技術」シンポジウム, 優秀発表賞, (2022年2月)
弓場 敦司	M2	Mate2022第28回「エレクトロニクスにおけるマイクロ接合・実装技術」シンポジウム, 優秀発表賞, (2022年2月)

<電気電子工学プログラム>

受賞者名	学年	受賞賞名等
上野 邑真	M2	低温工学・超電導学会 九州・西日本支部奨励賞
木元 佑太郎	M2	電気学会優秀論文発表賞B賞
濱崎 隆佑	M2	電気学会産業応用部門優秀論文発表賞
林原 風雅	M2	電気学会九州支部長賞
千々和 航	M1	第23回日本知能情報ファジィ学会九州支部学術講演会 学生優秀講演賞
肥後 佳季	M1	第29回電子情報通信学会九州支部学生会講演会 学生会講演奨励賞
前村 貴斗	M1	電気学会優秀論文発表賞B賞

<海洋土木工学プログラム>

受賞者名	学年	受賞賞名等
河野優樹	M2	第56回地盤工学研究発表会優秀論文発表賞
東元大介	M1	第56回地盤工学研究発表会優秀論文発表賞
小川大輝	M2	地盤工学会九州支部優良学生賞
阿久根 航	M2	土木学会全国大会年次学術講演会 優秀講演賞
嶋田 祐人	M2	土木学会西部支部研究発表会 優秀講演賞

<化学工学プログラム>

受賞者名	学年	受賞賞名等
森満優斗	M2	第26回化学工学会九州支部学生賞審査会 学生賞
森満優斗	M2	R3年度若手ケミカルエンジニア討論会 優秀発表賞

<化学生命工学プログラム>

受賞者名	学年	受賞賞名等
渡辺隆太	M2	第35回日本キチン・キトサン学会大会 ポスター賞
相田勝郁	M2	高分子・繊維若手研究者奨励賞(第58回化学関連支部合同九州大会)
内田陽介	M1	第25回ケイ素化学協会シンポジウム(優秀ポスター賞)
山下優輝	M1	公益社団法人日本水環境学会第56年会優秀発表賞(クリタ賞)
山田奈瑠実	M1	公益社団法人日本水環境学会第56年会優秀発表賞(クリタ賞)

<情報・生体工学プログラム>

受賞者名	学年	受賞賞名等
近藤烈司	M2	第20回情報科学技術フォーラム(FIT2021) FIT奨励賞
西正満	M2	第22回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会(SI2021) 優秀講演賞
野瀬賢人	M2	SICE優秀学生賞

<建築学プログラム>

受賞者名	学年	受賞賞名等
向井 基紘	M1	建築九州賞「研究新人賞」, 日本建築学会九州支部

博士後期課程

<総合理工学専攻>

受賞者名	学年	受賞賞名等
軸屋雄太	D1	第56回地盤工学研究発表会優秀論文発表賞
中村 友拓	D1	公益社団法人環境科学会2021年会最優秀発表賞(富士電機賞)
新福 優太	D3	日本質量分析学会第69回質量分析総合討論会ベストプレゼンテーション賞



## 第6章 特筆すべき取組及び改善事例（川畑 秋馬）

前年度から引き続き、今年度の前・後期の授業科目に対して成績評価が厳格かつ客観的に評価しているかどうかの点検を実施するとともに、各教員が作成する授業計画改善書に該当科目の成績評価分布（各評価の人数）を記載した。各プログラムのFD委員がプログラム教員から提出された授業計画改善書をまとめ、それらの資料と成績評価分布一覧表に基づいて、各プログラムにおいて授業評価の点検を実施した。さらにその結果は工学部FD委員会にて確認し、教授会において報告した。この取組は今後も継続して実施する予定である。

## 第7章 今後の理工学研究科FD活動への期待（川畑 秋馬）

理工学研究科では、教育内容に対する選択の多様性を認めつつ、高度な専門教育だけでなく、社会の流れに則したイノベーションマインド（革新精神）を有する人材育成を目的として改組により令和2年度の入学者より教育システムを大幅に改革した。改組後は授業科目を5つの科目群（知の探求科目群・知の探索科目群・実践力養成科目群・大学院横断科目群・語学関連科目群）に整理し、それぞれの科目群に新規の科目を導入した。令和3年度は改組の完成年度であったが、令和4年度においては、改組に伴う改善すべき点も見出し、授業改善や教育の質的向上のために、FD活動のさらに充実を図っていくことが肝要である。

毎年度、各部局において全専任教員の75%以上がFD活動に参加することが求められている。令和3年度に理工学研究科で実施されたFD関連の企画への参加状況を表7.1に示す。いずれかの活動に参加した教員は164名中151名で、FD活動への参加率は92.1%と高い値を維持しており、今後も活発なFD活動により、大学院教育が充実することを期待する。

表 7.1 令和3年度専任教員のFD活動参加の状況

合計参加率		92.1 %（専任教員 164 名中 151 名 参加）
企画別参加率	令和3年度 理工学研究科・理学部・工学部合同FD講演会	84.8 %（専任教員 164 名中 139 名 参加）
	大学院授業評価アンケート(前期)	39.0 %（専任教員 164 名中 64 名 参加）
	大学院授業評価アンケート(後期)	32.3 %（専任教員 164 名中 53 名 参加）





医歯学総合研究科

# 医歯学総合研究科 FD 活動報告

## 1. はじめに

医歯学総合研究科 FD 委員会は、大学及び研究科が目指す大学院教育の質向上と研究環境の改善を目的として活動している。桜ヶ丘キャンパスの全ての教職員を対象とした効果的な FD とするために、医学部 FD 委員会、歯学部 FD 委員会と連携して活動を行った。

令和3年度は、前年度に引き続き COVID-19 の感染への対応を行いながら大学院教育、研究活動が進められた。FD 活動も遠隔授業、研究指導を含めた授業評価アンケート調査、授業公開は遠隔でのグループ学習を対象とした。学習支援ツールの操作方法等の講習会は、全学で主催する講習会の参加をアナウンスした。

令和3年度の FD 参加率は、医学部及び歯学部、全学での FD 活動等を含めて算出したところ、82.1%（専任教員 280 名中 230 名参加）であった。

## 2. 授業公開

授業公開は「優れた授業を公開し、参観をした教員が授業方法を学ぶ機会を提供する」ことを目的として実施している。昨年度の学生アンケートで高い評価を得ており、ベストティーチャーとなった教員の授業を公開した。

日時	2021年8月10日（火） 6限目（18:00～19:30）
科目・テーマ	ゲノム医学（修士課程）・遺伝子機能学概論（博士科目） テーマ：総合討論とレポート作成
講師	奥野 浩行 教授（生化学・分子生物学分野）
参観者	10名（科目受講者を除く）
概要	医学・生命科学での研究を行う修士及び博士課程の大学院生にとって、遺伝子・ゲノム機能の理解は不可欠である。本授業ではオムニバス形式で行ってきた授業の総括として、zoomで履修者同士で授業の要点と課題等を話し合い、それらを発表した。 授業参観者も Zoom で見学した。

### 3. 学生による授業評価アンケート

**実施方法の概要** 昨年度と同様に、講義等を主体とする授業科目の評価アンケートと、演習・実験科目の評価として研究環境と研究指導に関するアンケートを実施した。留学生は英語でのアンケートに回答した。歯学大学院係がアンケートを作成、対象学生が鹿児島大学 manaba で回答したデータを集計した。令和3年度から manaba での実施に完全移行したが、授業評価アンケート、研究指導に係る学生アンケートともに例年に比べて回収率が低下したため、回収率の改善を図る必要がある。集計結果は科目責任者にフィードバックし、教育委員会への報告も予定している。

(表：アンケート回収率の推移)

授業評価 アンケート	前期			後期			年度計		
	対象者数	回答数	回収率	対象者数	回答数	回収率	対象者数	回答数	回収率
令和元年度	280	110	39.3%	255	88	34.5%	535	198	37.0%
令和2年度	246	154	62.6%	237	81	34.2%	483	235	48.7%
令和3年度	233	55	23.6%	208	50	24.0%	441	105	23.8%

研究指導に係る 学生アンケート	日本人			留学生			年度計		
	対象者数	回答数	回収率	対象者数	回答数	回収率	対象者数	回答数	回収率
令和元年度	232	104	44.8%	17	9	52.9%	249	113	45.4%
令和2年度	220	120	54.5%	15	8	53.3%	235	128	54.5%
令和3年度	246	42	17.1%	16	12	75.0%	262	54	20.6%

**講義科目アンケート** 修士課程及び博士課程における講義を主体とする科目アンケートは3名以上の受講生がいる科目を対象として授業評価9項目、学習に対する自己評価2項目、全体評価とし、無記名により各項目について7段階の評定尺度で回答し、自由な意見も記載してもらった。

前期は対象35科目55枚、後期は対象22科目50枚の回答が得られた。前期は自己評価、全体評価で前年度より良好な評価であったが、後期は前年度および前期と比較して授業評価、自己評価、全体評価全てにおいて、評価が下がっていた。

**演習、実験科目のアンケート** 博士課程における演習、実験科目についてのアンケートは2022年2月に実施し、医系歯系の別、入学年度、演習科目の授業形態、内容と指導3項目、実験科目(研究指導)6項目、研究中断の有無、さらに正課、課外における英語によるコミュニケーション3項目について回答を求めた。選択項目以外は、5段階の評定尺度で回答してもらった。

医系37枚(内留学生8名)、歯系17枚(内留学生4名)の回答が得られた。

**医系** 昨年度と比較して長期在学している学生が減っている。個人的理由以外での研究の中断が8%となっており、昨年度の15%より減少しているが、さらなる改善が求められている。研究指導では、教員の発展的学習・研修支援及び論文作成の指導に関する評価が低い。自由記載では、オンライン授業の更なる活用が指摘されている。

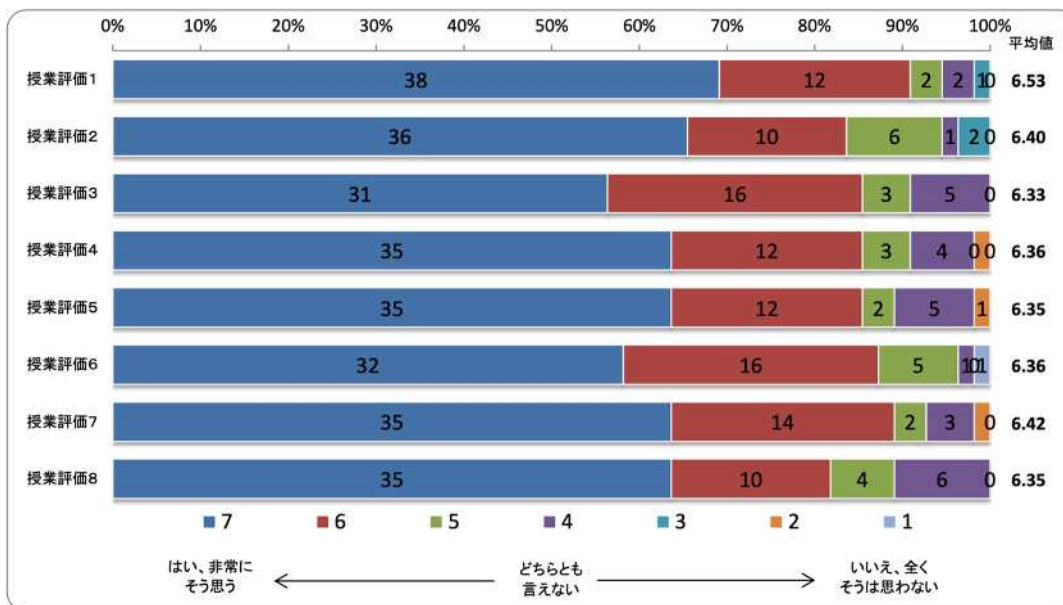
**歯系** 在籍期間は3年以内で、個人的な理由以外での研究の長期中断はなかった。科目の有用性、教員の対応・支援は昨年度と同様の高い評価を得ているが、一部の学生が「論文作成が全くできなかった」と回答しており、検討が必要である。自由記載では、COVID-19により来日できていない留学生がいることが明らかになり、指導には満足していると回答があった。

## 医歯学総合研究科 授業に関するアンケート全体集計 (R3年度 前期)

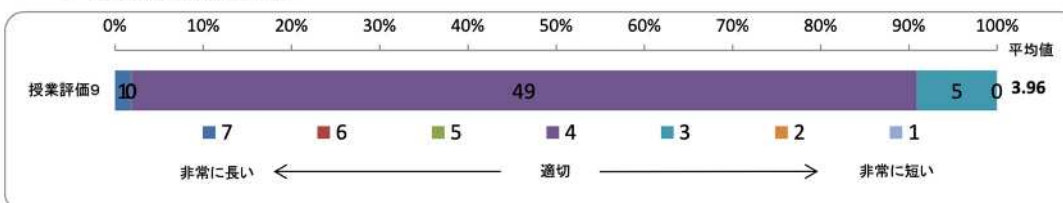
集計 35科目 アンケート回収枚数 55枚

### 【授業評価】

- 1 この科目はあなたのニーズに合っていましたか
- 2 この科目はあなたの現在、将来の研究に有用な内容でしたか
- 3 講義の内容はよく理解できましたか
- 4 この科目のシラバスには、必要な情報が記載されていましたか
- 5 シラバスに記載された学習項目、教育方法、評価が行われましたか
- 6 講義内容や配付資料などはよく準備されていましたか
- 7 教員はあなたの質問を促し、適切に対応しましたか
- 8 教員は参考資料の揭示など、発展的な学習、研究を支援しましたか

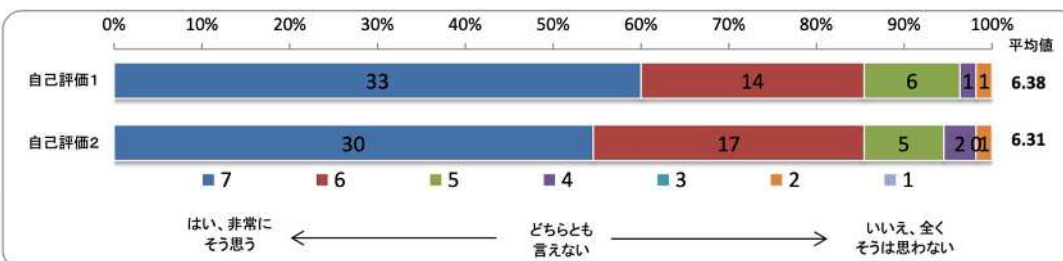


### 9 講義時間は適切でしたか



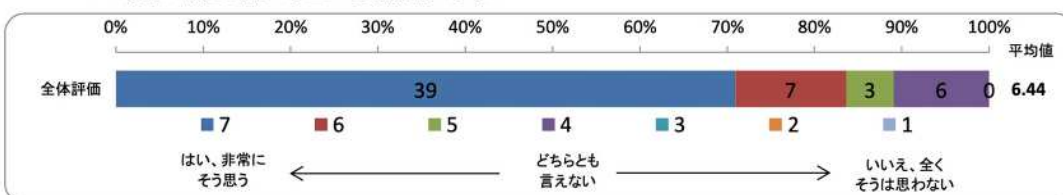
### 【自己評価】

- 1 この科目で新しい知識や考え方を習得しましたか
- 2 授業には積極的に参加しましたか(質問、自習など)



### 【全体評価】

- 1 この授業に満足し、他の学生にも受講を薦めますか

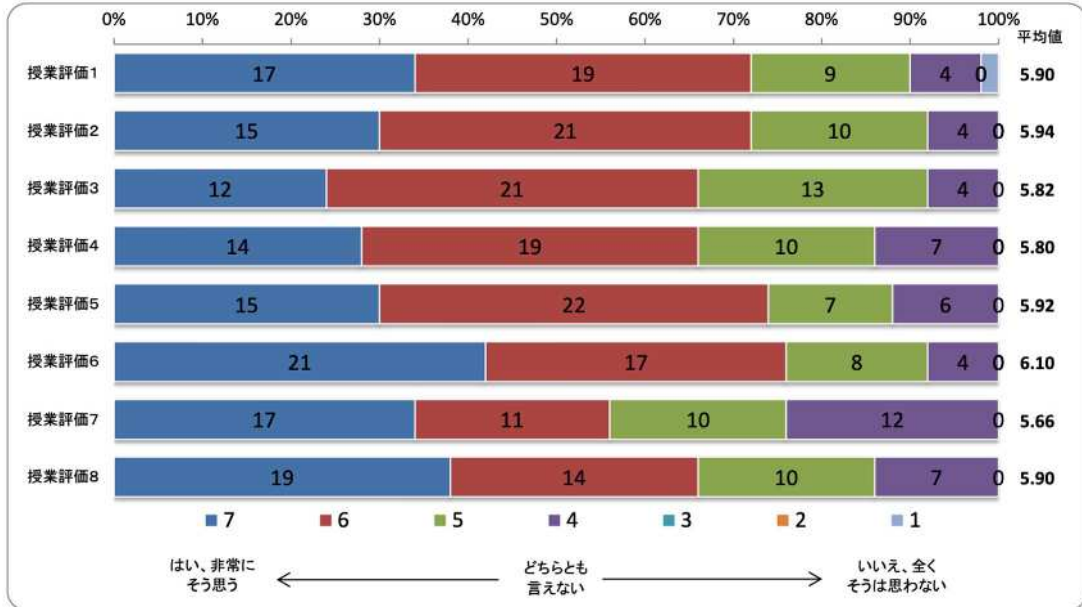


医歯学総合研究科 授業に関するアンケート全体集計 (R3年度 後期)

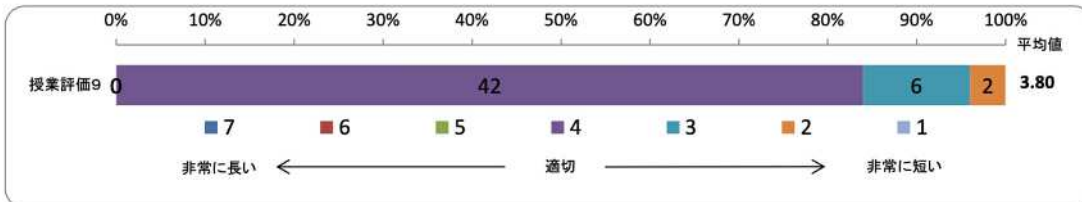
集計 22科目 アンケート回収枚数 50枚

【授業評価】

- 1 この科目はあなたのニーズに合っていましたか
- 2 この科目はあなたの現在、将来の研究に有用な内容でしたか
- 3 講義の内容はよく理解できましたか
- 4 この科目のシラバスには、必要な情報が記載されていましたか
- 5 シラバスに記載された学習項目、教育方法、評価が行われましたか
- 6 講義内容や配付資料などはよく準備されていましたか
- 7 教員はあなたの質問を促し、適切に対応しましたか
- 8 教員は参考資料の揭示など、発展的な学習、研究を支援しましたか

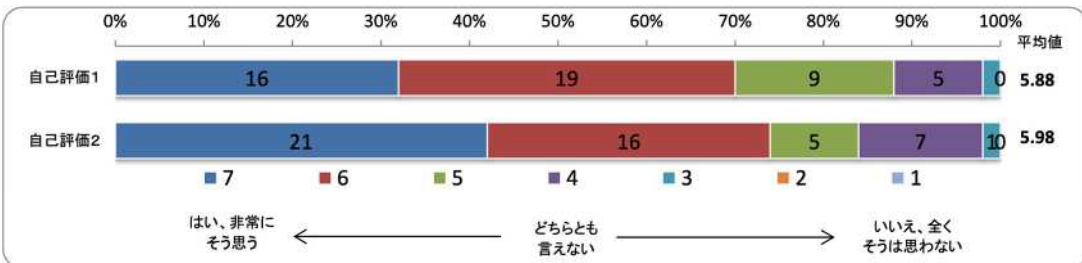


9 講義時間は適切でしたか



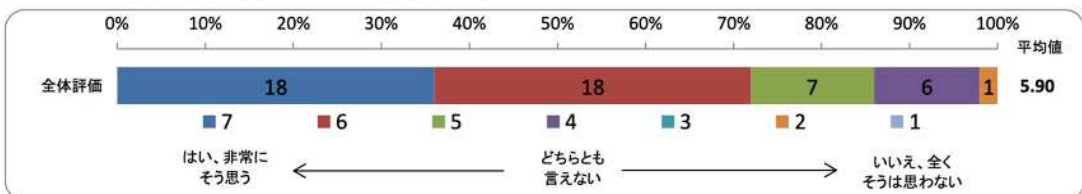
【自己評価】

- 1 この科目で新しい知識や考え方を習得しましたか
- 2 授業には積極的に参加しましたか(質問、自習など)



【全体評価】

- 1 この授業に満足し、他の学生にも受講を薦めますか



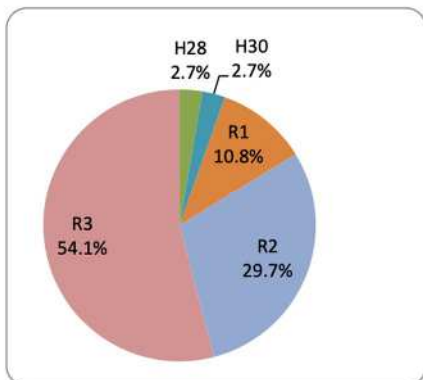
実験科目等アンケート

医 系

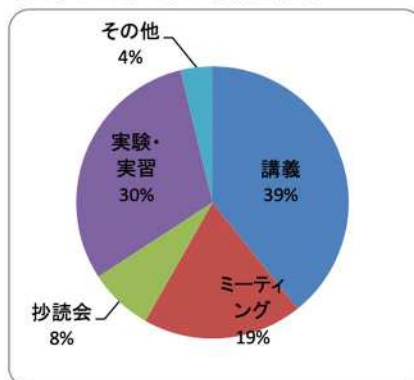
研究指導に係る学生アンケート(2022年 2月実施)

アンケート回収枚数(医系) 37 枚(内、留学生8名)

2 入学年度はいつですか



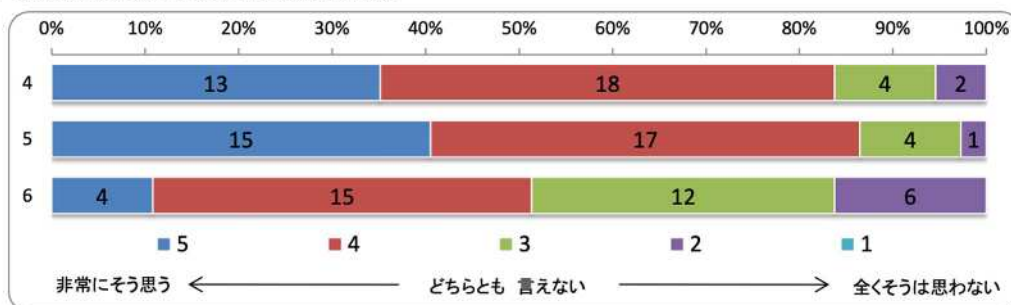
3 あなたが受講している授業科目の授業形態は、次のうちのどれですか(複数回答可)



4 あなたが受講している授業科目はあなたの研究に有用な内容でしたか

5 教員はあなたの質問を促し、適切に対応しましたか

6 教員は発展的な学習、研究を支援しましたか



実験科目(研究指導)

1 直面している問題を解決するために常に教員と討議し、指導を受けることはできましたか

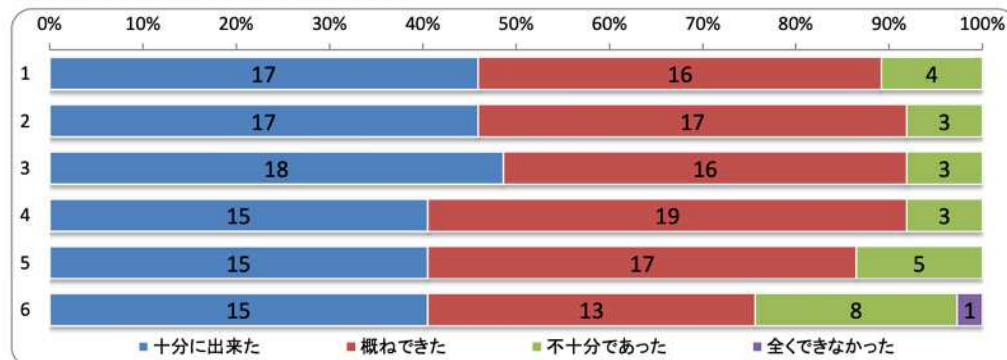
2 研究の遂行と発表に関する倫理的対応の指導を受けましたか

3 論文や参考資料を用いる環境は整備されていましたか

4 効率的、効果的な研究を用いる環境は整備されていましたか

5 研究開発に必要な考え方を修得できましたか

6 論文作成を自ら行うための指導は受けましたか



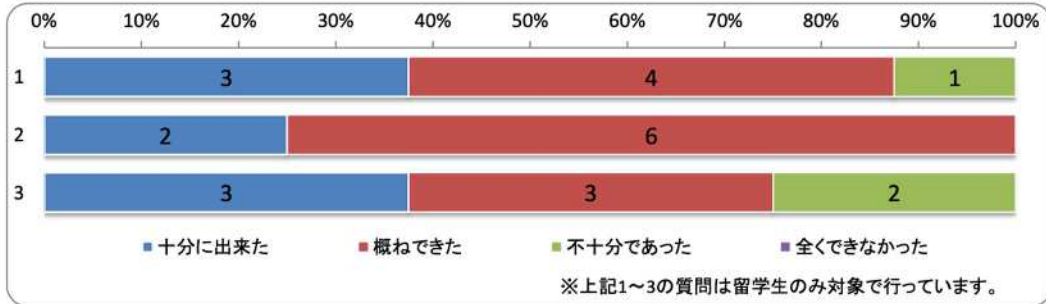
7 個人的な理由以外で研究を長期にわたって中断せざるを得ないことはありましたか





以下は正課・課外における英語でのコミュニケーションに関する質問です。各質問にお答えください。

- 1 あなたの指導を担当する教員や研究室のスタッフの英語能力に満足していますか。
- 2 英語もしくはあなたの母国語によって学習や研究、滞在に関する十分な情報を得ることができていますか？
- 3 英語で教えてもらう授業に満足していますか。



### 自由記載

特に良かった点をお聞かせください

- データ分析の方法について指導頂きました。
- 自分では気がつかない視点を指摘していただいた。
- オンライン授業は非常に良かったその後、オンデマンドで再度視聴できるのも復習となってよかった。
- 研究のスタートに必要な知識や技術を得ることができた

改善すべき点をお聞かせください

- 十分にオンラインやオンデマンドが浸透していないもっと多様な学びを支援してほしい

医歯学総合研究科における英語でのコミュニケーションについてご意見があればお知らせください。

※この質問は留学生のみ対象で行っています。

- 大学病院に勤務をしていない状況でしたが、所属する医局の先生方の協力を得て遂行することができています。個々に謝辞を述べたいと思います。
- オンライン、オンデマンドも100%普及を図ってほしいオンラインやオンデマンドでも双方向性の授業は可能と思うが、あまり実践されている印象はない。
- 受講しているものが複数あるのですが、どれについて聞かれているのかよくわかりませんでした。

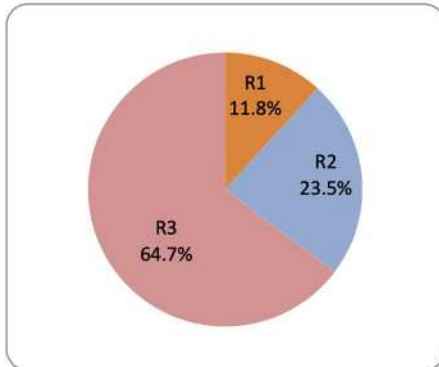
その他、自由に感想をお書きください

## 研究指導に係る学生アンケート(2022年 2月実施)

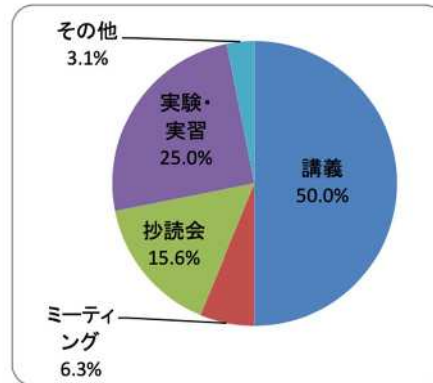
アンケート回収枚数(歯系)

17 枚(内、留学生4名)

2 入学年度はいつですか



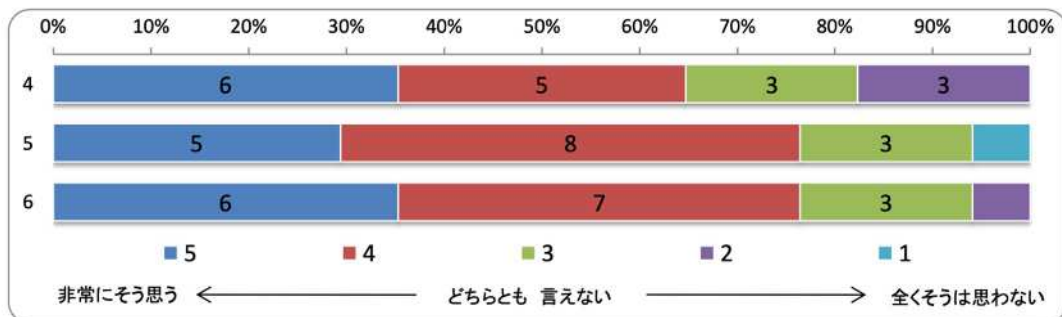
3 あなたが受講している授業科目の授業形態は、次のうちのどれですか(複数回答可)



4 あなたが受講している授業科目はあなたの研究に有用な内容でしたか

5 教員はあなたの質問を促し、適切に対応しましたか

6 教員は発展的な学習、研究を支援しましたか



### 実験科目(研究指導)

1 直面している問題を解決するために常に教員と討議し、指導を受けることができましたか

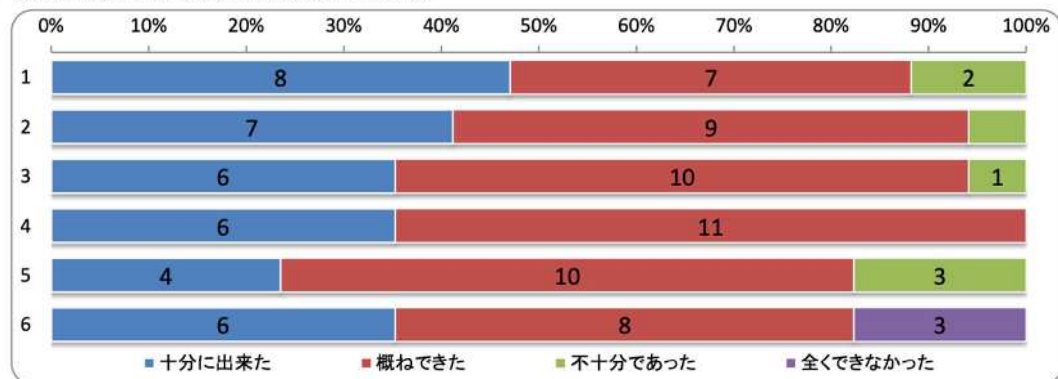
2 研究の遂行と発表に関する倫理的対応の指導を受けましたか

3 論文や参考資料を用いる環境は整備されていましたか

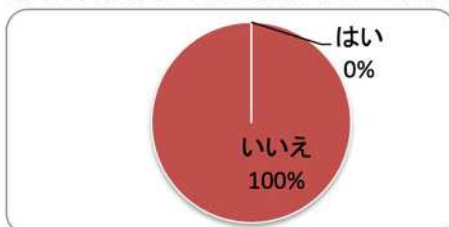
4 効率的、効果的な研究を用いる環境は整備されていましたか

5 研究開発に必要な考え方を修得できましたか

6 論文作成を自ら行うための指導は受けましたか

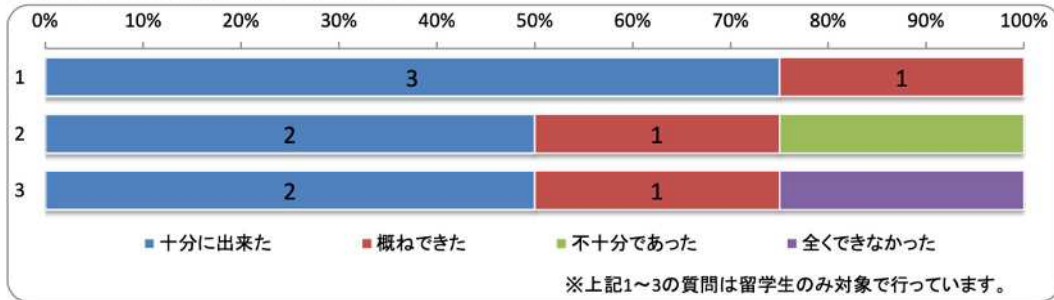


7 個人的な理由以外で研究を長期にわたって中断せざるを得ないことはありませんでしたか



以下は正課・課外における英語でのコミュニケーションに関する質問です。各質問にお答えください。

- 1 あなたの指導を担当する教員や研究室のスタッフの英語能力に満足していますか。
- 2 英語もしくはあなたの母国語によって学習や研究、滞在に関する十分な情報を得ることができていますか？
- 3 英語で教えてもらう授業に満足していますか。



### 自由記載

特に良かった点をお聞かせください

- Due to covid pandemic, I haven't been to Japan yet. I have more to know.

改善すべき点をお聞かせください

- Due to covid pandemic, I haven't been to Japan yet. I have more to know.

医歯学総合研究科における英語でのコミュニケーションについてご意見があればお知らせください。

※この質問は留学生のみ対象で行っています。

- Kagoshima University Graduate School of Medical and Dental Science to communicate & teaches every subject in English very easily and fluently.

その他、自由に感想をお書きください

- I am very satisfied with kagoshima university teaching style

#### 4. ベスト・ティーチャーの選出

本研究科に所属する教員は大学院での教育実績に加え、医系教員は医学部医学科教育、歯系教員は歯学部教育での実績が評価対象となっている。ベスト・ティーチャーは学部FD委員会と共同して、学生、教員からの推薦に基づき医系、歯系の候補者各1名を決定した。

学部・研究科のカテゴリー	推薦枠	候補者
医学部医学科、医歯学総合研究科（医学系）	1名（チームを含む）	医歯学総合研究科 血液・膠原病内科学分野 吉満 誠 准教授
医学部保健学科、保健学研究科	1名（チームを含む）	
歯学部、医歯学総合研究科（歯学系）	1名（チームを含む）	医歯学総合研究科 解剖法歯学分野 峰 和治 教授

#### 5. おわりに

本年度はCOVID-19により学習や研究がどのような影響を受けているか把握するために、従来からの調査を継続して実施し、結果を比較した。授業及び実験科目のアンケート調査では、一部の項目の評価が低下しており、これらの結果を踏まえて教育委員会でその原因を検討し、改善することが期待されている。Zoomをはじめとする遠隔授業ツールについては学生、教員共に利用方法に習熟してきているが、大学院教育の活性化のためにツールの利用方法等に関するFDの必要性が明らかになった。次年度の活動に反映させる予定である。

FD活動に参加、支援いただいた多くの教職員、学生の皆様に感謝いたします。



臨床心理学研究科

## 臨床心理学研究科 令和3年度 FD 活動報告

臨床心理学研究科 FD 委員長 久保 陽子

臨床心理学研究科 FD 委員 廣瀬 幸市

### 1. はじめに

臨床心理学研究科では、FD 活動の強化を目的に平成 27 年度から研究科 FD 会議（FD 研修会を含む）を教授会同日に設定し、ほぼ毎月、定期的に行う体制を整えている。令和 3 年度は、前年度に引き続き COVID-19（新型コロナウイルス感染症）の感染状況が変動する中、遠隔 Zoom での会議形態をとることで、予定通り、年間 11 回の臨床心理学研究科 FD 会議を開催することができた。特に、昨年度に引き続き、研究倫理に焦点をあてた FD 研修として、学内教員による「心理臨床における研究倫理について」と、学外講師を招聘して「臨床心理士養成課程における臨床心理アセスメントの倫理教育実践例の紹介」と題する研修を開催するなど、研究倫理について更なる充実を図った。また、教学 IR 体制への方向性が示される中、当研究科においても「入学生アンケート」の定例化、「フォローアップ・セッションアンケート」や「授業公開・参観」の再開等、FD 活動の根幹ともいえる学生への授業や教育・指導の改善には、丁寧な検討を行った。以下に、令和 3 年度の FD 活動全体の概要を具体的に報告する。

### 2. 臨床心理学研究科専任教員全員による研究科 FD 会議

（特筆すべき取り組み 1）

臨床心理学研究科の FD 会議は、基本的に第 3 水曜日の教授会同日に設定している。

令和 2 年度は、COVID-19（新型コロナウイルス感染症）の感染流行下にあり、FD 活動に直結する授業そのものについても大幅な変更を余儀なくされたが、令和 3 年度は、感染状況が変動する中であったものの、講義・演習科目については、状況により遠隔授業に切り替える等細やかに対応して実施した。また、令和 3 年度には前年度断念せざるを得なかった学外実習（「臨床心理査定・面接実習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ」）や制限が多かった学内実習（「臨床心理地域援助実習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ」）についても、十分な感染症対策を講じた上で実施することができた。これらのことにより FD 活動の主軸となる学生による授業評価アンケートも、例年通りに実施することができ、振り返りと意見交換を実施している。以下、令和 3 年度の臨床心理学研究科 FD 活動実績について表 1 に示した。また、表 2 には、専任教員の参加出席率を示した。

表 1 令和3年度臨床心理学研究科 FD 活動実績

(遠隔 Zoom での開催)

	年月日	内容
第 1 回 FD 会議	令和 3 年 4 月 21 日 (水) 13 : 30～	1. 令和 3 年度 FD 委員会日程 2. 令和 3 年度 FD 活動計画 3. 令和 3 年度 FD 活動予算要求 4. 入学生アンケートについて
第 2 回 FD 会議	令和 3 年 5 月 19 日 (水) 13 : 30～	1. ベストティーチャー賞の選定に関する検討 (1) 2. 授業公開・参観の再開について
第 3 回 FD 会議	令和 3 年 6 月 16 日 (水) 13 : 30～	1. 令和 3 年度フォローアップ・セッションアンケートの再開について 2. 令和 3 年度前期第 1 回授業評価アンケート結果報告と意見交換
第 4 回 FD 会議 (FD 研修含)	令和 3 年 7 月 21 日 (水) 13 : 30～	1. 各部局における教学 IR の現状紹介について 2. 授業評価アンケートの振り返りについて (改善結果の検証) 3. 「心理臨床における研究倫理」(講師: 廣瀬幸市先生)
第 5 回 FD 会議	令和 3 年 9 月 15 日 (水) 13 : 30～	1. 令和 3 年度前期第 2 回授業評価アンケート結果報告と意見交換 2. 令和 3 年度前期フォローアップ・セッションの振り返りと意見交換 (実習委員会合同)
第 6 回 FD 会議	令和 3 年 10 月 20 日 (水) 13 : 30～	1. ベストティーチャー賞の選定に関する検討 (2)
第 7 回 FD 会議	令和 3 年 11 月 10 日 (水) 16 : 00～	1. ベストティーチャー賞の選考のあり方について 2. ベストティーチャー賞の選定に関する検討 (3)
第 8 回 FD 会議 (FD 研修含)	令和 3 年 12 月 15 日 (水) 13 : 30～	1. 令和 3 年度後期第 1 回授業評価アンケート結果報告と意見交換 2. フォローアップ・セッションのアンケート様式について 3. 「全員で考えるコロナ禍を経験した未来の大

		学」令和3年度第1回FD・SD合同フォーラム報告
第9回FD会議 (FD研修含)	令和4年1月15日(水) 13:30～	1. 「臨床心理士養成課程における臨床心理アセスメントの倫理教育実践例の紹介」(講師: 吉川真理先生、学習院大学)
第10回FD会議	令和4年2月16日(水) 13:30～	1. 令和3年度後期第2回授業評価アンケート結果報告と意見交換 2. ベストティーチャー賞の候補者の選定(1)
第11回FD会議	令和4年3月16日(水) 13:00～	1. 令和3年度後期フォローアップ・セッションの振り返りと意見交換(実習委員会合同) 2. ベストティーチャー賞の候補者の選定(2) 3. 令和3年度FD活動の振り返りと次年度に向けての課題

表2 令和3年度臨床心理学研究科専任教員のFD参加率

\*FD会議に複数の企画が重複する回もある。

合計参加率		100.0 % (専任教員 8 名 中 8 名 参加)
企画別 参加率	FD会議(審議関係)※1	100 % (専任教員 8 名 中 8 名 参加)
	FD会議(授業評価アンケート結果に関する検討4回)	100 % (専任教員 8 名 中 8 名 参加)
	FD研修会(2回)	100 % (専任教員 8 名 中 8 名 参加)
	入学生アンケートの検討	100 % (専任教員 8 名 中 8 名 参加)
	全学FD研修会・講演会・フォーラム※2	12.5 % (専任教員 8 名 中 1 名 参加)
備考 ※1 ベストティーチャー賞の選定に関する検討やフォローアップ・セッションアンケートや授業参観の再開等の審議を行った。※2 全学企画のFD研修会等にはFD委員が参加し、FD会議において全教員で共有した。		



令和3年度の臨床心理学研究科 FD 会議は、全て遠隔 Zoom という会議形態をとったことで、予定通り、年間 11 回の FD 会議が開催された。既に述べたが、FD 活動の主軸となる学生による授業評価アンケートは、前期後期の授業 7 週目と 14 週目に実施し、第 3 回、第 5 回、第 8 回、第 10 回の FD 会議において、アンケート結果の報告と意見交換を行った。

研修会は、学内 2 件、学外講師 1 件の 3 件が実施された。学内研修会は、通常の審議等と重複し、議題として位置づけられる。今回は、第 4 回の FD 会議で研究科の教員が講師となり、「心理臨床における研究倫理」、第 8 回では令和 3 年度第 1 回 FD/SD 合同フォーラムの資料を用い、「全員で考えるコロナ禍を経験した未来の大学」について、参加した FD 委員から全教員へ報告がなされ、内容を共有した。第 9 回は、学外講師である吉川眞理学習院大学教授による「臨床心理士養成課程における臨床心理アセスメントの倫理教育実践例の紹介」が開催された。令和 3 年度も前年度に引続き、実務家教員対象の研修会は実施できなかった。次年度以降の実施を予定している。

令和 3 年度の FD 会議において、多く議論したのが「ベストティーチャー賞の選定に関する検討」であった。ベストティーチャー賞については、その実施要項の第 2（推薦）に「ベストティーチャー賞は、表彰される年度当初において、本学の開設する授業を担当する常勤教員として在籍し、教育活動の実績が次の各号のいずれかに該当する者のうちから、別表に定める各学部、各研究科及び総合教育機構（以下「各学部等」という。）のカテゴリーから各 1 名以内、ただしカテゴリー 5 及び 6 については各 2 名以内を推薦することができる」と定められている。つまり、当研究科においては、年に 1 回、1 名以内の推薦を行うことになり、令和 2 年度には 0 名が推薦されたことになる。そこで、ベストティーチャー賞候補者の推薦について、他部局や事務への情報収集や確認をし、現状の整理、候補者推薦の議論を重ね、2 月の第 10 回 FD 会議から 3 月の第 11 回 FD 会議へと持ち越して検討した結果、大多数の意見より、令和 3 年度のベストティーチャー賞候補者については、昨年度同様 0 名の推薦となった。ベストティーチャー賞の選定については、専門職学位課程である当研究科における教育とは何かという重要なテーマにも直結する議題でもあり、来年度以降、改めてベストティーチャー賞候補者推薦の選定基準を議論・検討することとなった。

教員の参加・出席率は、令和 2 年に引き続き、定例会議に位置づけたことにより、出席率は高く、FD 参加率の「1 回でも FD 活動に参加した教員数」となると、いずれも 100%となった。全学あるいは他部局企画の FD 研修会・講演会・フォーラム等には FD 委員が参加し、FD 会議時に詳細に報告し全教員で内容を共有した。

### 3. 授業評価アンケート及びフォローアップセッション実施に対する検討

(特筆すべき取り組み 2)

#### (1) 実施対象科目と実施時期

「学生による授業評価アンケート」は、本研究科開講科目の全て（講義科目、演習科目、実習科目）を対象とし、通常は、前期は6月初旬と7月中旬の2回、後期は11月中旬と1月中旬の2回、毎年計4回のアンケートが実施され、前期後期2回目のアンケートは、受講生に対して評価結果に対する授業改善報告を実施できるようにするために、最終の授業回前（14回目を目途）に実施されるような仕組みを作っている。

令和3年度は、COVID-19（新型コロナウイルス感染症）の感染状況が変動する中であつたが、実習科目を含めた全ての授業が実施できたことから、授業評価アンケートについても、予定通りに実施した。

#### (2) 評価項目

評価項目は、以下の通りである。

##### <講義科目>

1. あなたは本講義科目を熱心に受講しましたか。
2. 本講義科目のテキスト・資料等は適切でしたか。  
(テキスト・資料等を使用した場合のみ回答してください)。
3. 本講義科目の内容は理解できましたか。
4. 本講義科目を通して臨床心理学の理論に興味が増しましたか。
5. 本講義科目の内容に満足していますか。
6. 本講義科目を総合的に5段階で評価してください。
7. 本講義科目に対するご意見を自由に書いてください。

##### <演習科目>

1. あなたは本演習科目を熱心に受講しましたか。
2. 本演習科目の内容は理解できましたか。
3. 本演習科目の内容に満足していますか。
4. 本演習科目を通して講義(理論)の理解や実習体験の理解につながりましたか。
5. 本演習科目を通して臨床心理学に興味が増しましたか。
6. 本演習科目を総合的に5段階で評価してください。
7. 本演習科目に対するご意見を自由に書いてください。

##### <実習科目>

1. あなたは本実習科目に熱心に取り組みましたか
2. 本実習科目での実習体験を通して臨床心理学や臨床業務についてのイメージが増しましたか。
3. 本実習科目で講義や演習で学んだことが役に立ちましたか。

(3) 結果

学生による授業評価アンケートの結果は、以下の通りであった。

表3. 前期第1～2回目の講義科目における授業評価（3科目平均評価点）

	第1回目			第2回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. あなたは本講義科目を熱心に受講しましたか	5.0	3.3	4.3	5.0	3.7	4.4
2. 本講義科目のテキスト・資料等は適切でしたか	5.0	3.3	4.1	5.0	3.7	4.4
3. 本講義科目の内容は理解できましたか	5.0	3.0	4.0	5.0	3.3	4.3
4. 本講義科目を通して臨床心理学の理論に興味が増しましたか	5.0	3.7	4.3	5.0	3.3	4.4
5. 本講義科目の内容に満足していますか	5.0	2.7	4.1	5.0	3.3	4.3
6. 本講義科目を総合的に5段階で評価してください	5.0	3.0	4.1	5.0	3.3	4.4

(科目名)臨床心理学原論／臨床心理学入門／コミュニティ心理学特論

表4. 前期第1～2回目の演習科目における授業評価（7科目平均評価点）

	第1回目			第2回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. あなたは本演習科目を熱心に受講しましたか	5.0	4.0	4.7	5.0	3.7	4.7
2. 本演習科目の内容は理解できましたか	5.0	3.4	4.5	5.0	3.7	4.6
3. 本演習科目の内容に満足していますか	5.0	3.7	4.6	5.0	3.7	4.7
4. 本演習科目を通して講義(理論)の理解や実習体験の理解につながりましたか	5.0	3.9	4.7	5.0	3.9	4.7
5. 本演習科目を通して臨床心理学に興味が増しましたか	5.0	3.6	4.6	5.0	3.9	4.7
6. 本演習科目を総合的に5段階で評価してください	5.0	3.9	4.6	5.0	4.0	4.7

(科目名)臨床心理査定演習Ⅰ／面接演習Ⅰ／臨床心理関連行政論／臨床心理事例研究演習Ⅰ／総合的事例研究演習Ⅰ／学校心理臨床論／福祉心理臨床論

表5. 前期第1～2回目の学内実習科目における授業評価（4科目平均評価点）

	第1回目			第2回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. あなたは本実習科目に熱心に取り組みましたか	5.0	3.5	4.7	5.0	3.8	4.6
2. 本実習科目での実習体験を通して臨床心理学や臨床業務についてのイメージが増しましたか	5.0	3.5	4.7	5.0	3.3	4.7
3. 本実習科目で講義や演習で学んだことが役に立ちましたか	5.0	3.8	4.6	5.0	3.5	4.6
4. 本実習科目での実習体験に満足していますか	5.0	3.5	4.6	5.0	3.5	4.5
5. 本実習科目を総合的に5段階で評価してください	5.0	3.5	4.6	5.0	3.5	4.5

(科目名)臨床心理査定・面接実習Ⅰ／臨床心理査定・面接実習Ⅲ／臨床心理実践研究Ⅰ／  
臨床心理実践研究Ⅲ

表6. 前期第1～2回目の学外実習科目における授業評価（2科目平均評価点）

	第1回目			第2回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. あなたは本実習科目に熱心に取り組みましたか				5.0	3.5	4.8
2. 本実習科目での実習体験を通して臨床心理学や臨床業務についてのイメージが増しましたか				5.0	3.5	4.6
3. 本実習科目で講義や演習で学んだことが役に立ちましたか	(実施なし)			5.0	3.5	4.6
4. 本実習科目での実習体験に満足していますか				5.0	3.0	4.4
5. 本実習科目を総合的に5段階で評価してください				5.0	3.0	4.5

(科目名)臨床心理地域援助実習Ⅰ／臨床心理地域援助実習Ⅲ

表7. 後期第1～2回目の講義科目における授業評価（3科目平均評価点）

	第1回目			第2回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. あなたは本講義科目を熱心に受講しましたか	5.0	3.3	4.6	5.0	3.3	4.5
2. 本講義科目のテキスト・資料等は適切でしたか	5.0	3.0	4.3	5.0	3.0	4.3
3. 本講義科目の内容は理解できましたか	5.0	3.3	4.2	5.0	3.0	4.2
4. 本講義科目を通して臨床心理学の理論に興味が増しましたか	5.0	2.0	4.3	5.0	3.3	4.4
5. 本講義科目の内容に満足していますか	5.0	2.0	4.2	5.0	3.3	4.2

6. 本講義科目を総合的に5段階で評価してください	5.0	2.0	4.2	5.0	3.3	4.2
---------------------------	-----	-----	-----	-----	-----	-----

(科目名)臨床心理面接学原論／集団心理臨床論／ストレスマネジメント論

表8. 後期第1～2回目の演習科目における授業評価（4科目平均評価点）

	第1回目			第2回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. あなたは本演習科目を熱心に受講しましたか	5.0	3.3	4.5	5.0	3.8	4.6
2. 本演習科目の内容は理解できましたか	5.0	3.3	4.4	5.0	3.5	4.6
3. 本演習科目の内容に満足していますか	5.0	3.0	4.4	5.0	3.3	4.6
4. 本演習科目を通して講義(理論)の理解や実習体験の理解につながりましたか	5.0	3.0	4.5	5.0	3.8	4.6
5. 本演習科目を通して臨床心理学に興味が増しましたか	5.0	3.0	4.5	5.0	3.5	4.6
6. 本演習科目を総合的に5段階で評価してください	5.0	3.3	4.4	5.0	3.8	4.6

(科目名)臨床心理査定演習Ⅱ／臨床心理面接演習Ⅱ／臨床心理事例研究演習Ⅱ／  
総合的事例研究演習Ⅱ

表9. 後期第1～2回目の学内実習科目における授業評価（4科目平均評価点）

	第1回目			第2回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. あなたは本実習科目に熱心に取り組みましたか	5.0	3.8	4.6	5.0	4.0	4.7
2. 本実習科目での実習体験を通して臨床心理学や臨床業務についてのイメージが増しましたか	5.0	3.5	4.8	5.0	4.0	4.9
3. 本実習科目で講義や演習で学んだことが役に立ちましたか	5.0	3.3	4.6	5.0	3.8	4.8
4. 本実習科目での実習体験に満足していますか	5.0	3.0	4.6	5.0	3.8	4.8
5. 本実習科目を総合的に5段階で評価してください	5.0	3.8	4.8	5.0	3.5	4.7

(科目名)臨床心理査定・面接実習Ⅱ／臨床心理査定・面接実習Ⅳ／臨床心理実践研究Ⅱ／  
臨床心理実践研究Ⅳ

表10. 後期第1～2回目の学外実習科目における授業評価（2科目平均評価点）

	第1回目			第2回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. あなたは本実習科目に熱心に取り組みましたか				5.0	4.0	4.8

2. 本実習科目での実習体験を通して臨床心理学や臨床業務についてのイメージが増しましたか			5.0	3.5	4.8
3. 本実習科目で講義や演習で学んだことが役に立ちましたか	(実施なし)		5.0	3.5	4.6
4. 本実習科目での実習体験に満足していますか			5.0	3.5	4.5
5. 本実習科目を総合的に5段階で評価してください			5.0	4.0	4.7

(科目名)臨床心理地域援助実習Ⅱ／臨床心理地域援助実習Ⅳ

(4) 集計結果のフィードバックと授業評価報告書の提出及び授業改善に向けた組織的対応  
(改善事例1)

学生による授業評価アンケート結果の取扱いについては、研究科事務補佐員による匿名性が担保された状態で実施され、各担当教員に集計結果がフィードバックされる。各担当教員は、集計結果を確認し、授業に対する自己評価や自由記述欄に記載されている学生からの意見等と照合したうえで、授業の改善方向及び改善策を含めた「学生による授業評価を受けての報告書」を作成する。1セメスターに2回の授業評価アンケート結果については、該当月の教授会にて、FD委員長が報告を行い、加えて同日に開催される研究科FD会議においても学生による授業評価アンケート結果を改めて全専任教員で共有し、意見交換を行っている。令和3年度も第3回、第5回、第8回、第10回の研究科FD会議において、授業評価アンケート結果を報告し、意見交換を行った。

また、令和3年度は、全学FD委員会からの教学IR体制整備に向けた現状照会がなされたが、その際、授業改善の結果の検証方法が問われた。このことにより、第4回研究科FD会議において、それまで曖昧であった授業の改善結果やその検証方法について、改めて検討することになった。当研究科では、そもそも学生による授業評価アンケートを1セメスターで2回実施しており、1回目のアンケート結果を受けた授業改善を2回目のアンケート結果で検証できるように設定されている。さらに、授業担当教員は、授業毎に「学生による授業評価を受けての報告書」を作成しており、授業改善、学生へのフィードバックや改善結果についても記載している。これらのことから、研究科FD会議において、授業評価アンケートの結果報告と授業内容及び方法の改善についての意見交換を実施する際に、「学生による授業評価を受けての報告書」をもとに、各授業の担当教員から授業改善とその改善結果の検証についても報告を受け、全教員で共有し、意見交換を行うこととした。令和3年度後期より実施し、上記、「学生による授業評価を受けての報告書」を積極的に生かし、今後の学生の教育ニーズに応じた授業科目の内容検討及び改善、さらに改善結果の検証についての意見交換を行うなど、ファカルティ・ディベロップメントに活かすことができた。

## (5) 臨床心理学研究科独自の取組みとしてのフォローアップセッション

### (改善事例2)

本研究科では、専門職大学院における臨床心理実習の評価方法として、平成20年度より、九州大学との共同による専門職GPとして「臨床心理実習における客観的評価の方法の構築」と題する臨床心理実習到達度チェックシステムを導入し、各セメスターにおいて臨床心理実習の客観的評価を実施してきたが、これらの評価システムは学生や教職員の負担が大きかったため、平成23年度～平成25年度の間中断された。しかしながら、臨床心理実習において、学生が主体的に到達度評価を行い、かつ教員が学生に対して適切なフィードバックを行える形での教育方法の実践は、実務実習教育上、重要であることが再確認されたことから、平成26年度より臨床心理実習到達度チェックシステムの中から、学生が学内及び学外実習体験を指導教員と共有することを目的としたフォローアップセッションの部分が再開されることとなった。令和3年度も、より充実した臨床心理実習の実現と教育方法の改善を目指して継続された。

なお、この試みは臨床心理実習科目のGPA導入を視野に入れた新たな評価方法の構築可能性を検討することを目的としていたこともあり、これまでセルフモニタリングの機会として学生自身による臨床心理実習到達度チェックシートにもとづくポートフォリオの作成を義務付けていたが、こうした作業自体に負担を感じている学生もいるため、平成29年度からポートフォリオ作成については、各臨床ゼミの方針に委ねることとなった。そのため、令和3年度もチェックシートに設定された評価項目毎の統計的な数値化は行わず、心理臨床の本質である個々学生の学びを重視した形のフォローアップセッションを実施し、その内容は、第5回と第11回のFD会議（実習委員会との合同会議）で報告され、実施時間や実施形態等の実施方法と受講生の声を共有し、改善すべき点を話し合った。

本研究科の学生たちは、学修の目標について、例えば、ポートフォリオの一部であるセルフモニタリングシート（表11）の「今期の目標」をセメスターの始めに設定し、実習終了後の指導教員とのフォローアップセッションを通して、「成長した点」、「課題」、「フォローアップセッションでの気づき」等について話し合うなどして、セメスター毎に自身の学修や課題を振り返る作業を行っている。このような指導教員とのフォローアップセッションは、学生個人で実施される場合や学年毎に実施される場合など様々な実施形態があり、どのような形態で実施するかは指導教員に任されており、指導教員はゼミ学生の学習状況や態度、関係性等からセメスター毎に実施形態を検討して実施している。個人で実施される場合は、臨床ゼミでは取り扱いづらい指導が得られ、学年別や臨床ゼミ全体で実施される場合には、他学生の振り返りを知ること、自身の学修をより相対的なものへと深化させることが可能になる。当研究科の学生たちは、このようなフォローアップセッションを通して、専門職業人としての臨床力を向上させていくことが期待される。

また、この臨床心理学研究科独自の取組みとしてのフォローアップセッションについては、その定着を目的に、教員と学生にフォローアップセッション・アンケートを実施して

いたが、平成30年度末には目的を達したとして、フォローアップセッション・アンケートを終了していた。しかし、専門職学位課程である当研究科は、他の臨床心理士養成大学院と比べ、臨床心理実習教育の充実に力点を置いており、学内実習や学外実習等について指導教員とともに振り返りを行うフォローアップセッションは、重要な指導の一つであり、そのあり方や改善を検討することが必須と考えられたことから、学生からの感想や要望等も聞く必要性が見直され、令和3年度の第3回FD会議において、フォローアップセッション・アンケートを再開することとなった。なお、後期より項目の見直しも行った。本アンケートは、学生が記入後、研究科専門職大学院支援室事務補佐員へ提出し、学年毎に取りまとめたアンケート結果については、専門職大学院支援室事務補佐員からFD委員長にフィードバックされ、研究科FD会議において、全教員に共有され、フォローアップセッションのあり方や実施方法等について検討された。令和3年度後期については、COVID-19（新型コロナウイルス感染症）の感染状況のため、遠隔にて実施した臨床ゼミが多かったが、アンケートの回答率は100%（30名）だった。設問1のフォローアップセッションの感想については、29件寄せられ、1年間（2年間）の振り返りや来年度への心構えができた（23名）、不安や悩みを聞いてもらえた（3名）他の人の意見が聞けてより明確になった（4名。重複あり）等肯定的な意見が多かったが、アンケート結果をどう活かしているのかを問う感想も寄せられた。また、設問2の実施方法や目的などについての要望については、7件の意見が寄せられ、実施への感謝、複数学生で実施できたことがよかった等の肯定的意見と、対面でやりたかった、履修指導と同日に実施できるのでは、時間や形式を統一してもいいのではという要望も聞かれた。フォローアップセッションのあり方については、来年度以降もアンケートを積み重ねながら研究科FD会議で検討していきたい。

表 11 「セルフモニタリングシート」の設定項目（ポートフォリオの一部）

1. 今期の目標 (自由記述)
2. 成長した点 (自由記述)
3. 課題 (自由記述)
4. フォローアップ セッションでの気づき (自由記述)

#### 4 入学生アンケートの定例化

(特筆すべき取り組み3・改善事例3)

本研究科は、臨床心理士養成に特化した専門職学位課程である。これまでは断続的に実



施していた入学生へのアンケート調査であったが、令和2年度には、平成29年度に国家資格である公認心理師ができたことを契機に入学者のニーズ調査が必要と考え、在籍生対象に入学時のアンケートを実施した。その結果から、本研究科の理念や方向性はよく知られており、また入学時のニーズともマッチしていることが示唆された。入学生へのアンケートについては、入学後の臨床心理士、公認心理師といった高度専門職業人を養成する学習へとスムーズに導入する教育のあり方を検討する目的に加え、今後の入試広報等に繋がるものと考えられたことから、令和3年度から定例化して実施することとなった。

令和3年度の入学生アンケートの結果は、以下の通りであった。

回答期間:2021年5月7日(金)～5月14日(金)回答数 :15件(回答率 100%)

項目1 本研究科を志望・受験した理由をご記入ください。複数、理由を記入して構いません(回答 15)

- \* 専門職大学院だから 9名 : 国立の専門職大学院だから 2名
- \* 教員や専門領域: 6名
- \* 資格取得のため 5名 : 臨床心理士になりたいから 3名  
: 公認心理師、臨床心理士の2資格 2名
- \* その他 1名 : SV 制度が充実、実習時間が多い、少人数教育、地理的要因、他大学院に落ちたから、地域援助に力を入れている

項目2 本研究科をどうやって知りましたか。(回答 15)

- \* HP(ネット含む)8名    \* 知人 3名(うち 2名は HP と重複)
- \* 鹿児島大に通っていた 2名    \* 説明会 3名    \* 知っていた 1名

項目3-1 入学前に本研究科のホームページは見ましたか。

15件の回答



項目3-2 HP には知りたい、役に立つ情報がありましたか。それはどんな項目ですか。また不足している内容があれば記述してください。(回答 15)

<役に立った>

- \* 教員情報 6名    \* カリキュラム 5名    \* 入試関係名    \* 公認心理師対応 1名
- \* 「役に立った」など HP の感想 2名    \* 実習について 4名    \* 就職情報 2名

<欲しい情報>

- \* 院生のスケジュールや生活概要 2名
- \* 奨学金情報 1名
- \* 臨床ゼミの内容 1名

項目4 本研究科の資料請求等の内容や事務手続き（回答 9）

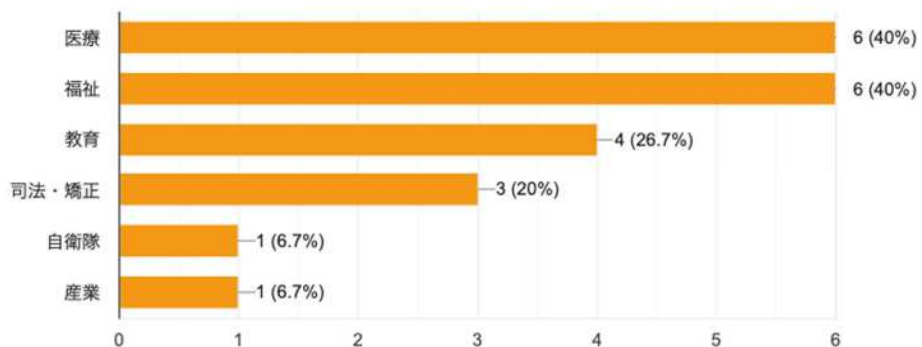
- \* 肯定的（スムーズだったなど） 6名
- \* 入試時期が遅い 3名
- \* 提出書類との兼ね合いで日程調整をしてほしかった 1名

項目5 本研究科以外に大学院を受験されましたか。どこか差しさわりがなければ具体名を教えてください。また、合格通知後、本研究科を選択するにあたって、何が決めてとなりましたか。（回答 12）

- \* 受験していない 8名
  - \* 九州圏内 A 大学 1名、B 大学 1名、C 大学 2名
  - \* 九州圏外 D 大学 2名（中国地方）、D 大学 1名（関東地方）、E 大学 1名（関東地方）
- <決め手>
- \* 専門職大学院である 1名
  - \* 教員や分野 2名

項目6 入学前、臨床心理士としてどのような職域に就きたいと考えていましたか（複数回答可）

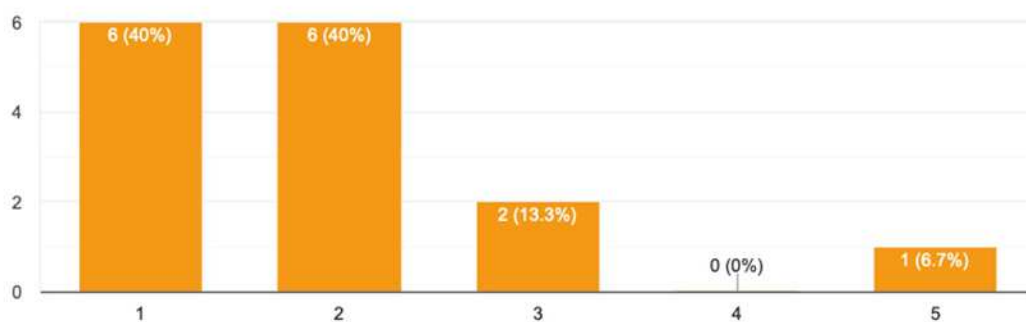
15件の回答



項目7-1 入学前、本研究科のカリキュラムは魅力あるものでしたか。（回答 15）

※ 1: 魅力ある ～ 5: 魅力ない

15件の回答



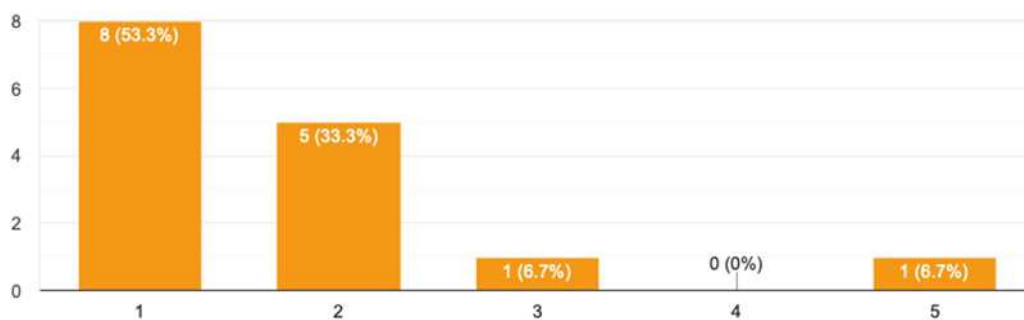
項目7-2 特に、魅力があると思われた点をご記入ください。(回答 11)

- \* 実習が多い 8 名
- \* 知識だけでなく実践技能も学べる 1 名
- \* 様々な領域を幅広く学べる 2 名
- \* 基礎心理学の講義もある 1 名

項目8-1 入学前、本研究科の実習(学内実習・学外実習)は魅力あるものでしたか。(回答 15)

※ 1: 魅力ある ~ 5: 魅力ない

15件の回答



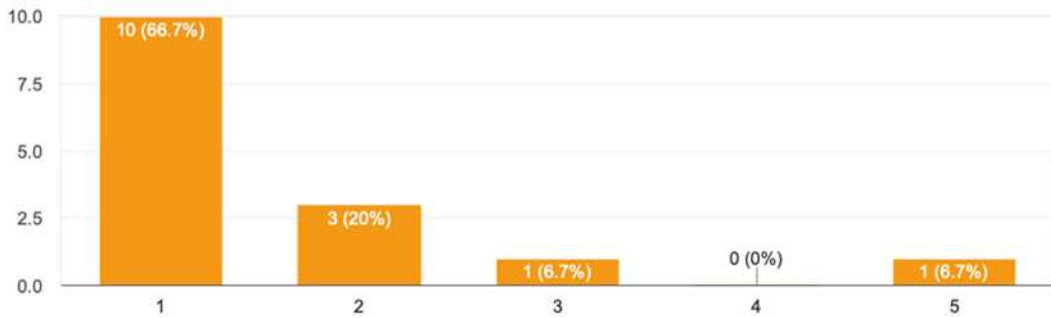
項目8-2 特に、魅力があると思われた点をご記入ください。(回答 13)

- \* 時間が多い 7 名
- \* 学外実習の領域 5 名
- \* 事例の担当とSVが受けられる 2 名

項目9-1 入学前、本研究科の教員(その研究領域)は魅力あるものでしたか。(回答 15)

※ 1: 魅力ある ~ 5: 魅力ない

15 件の回答



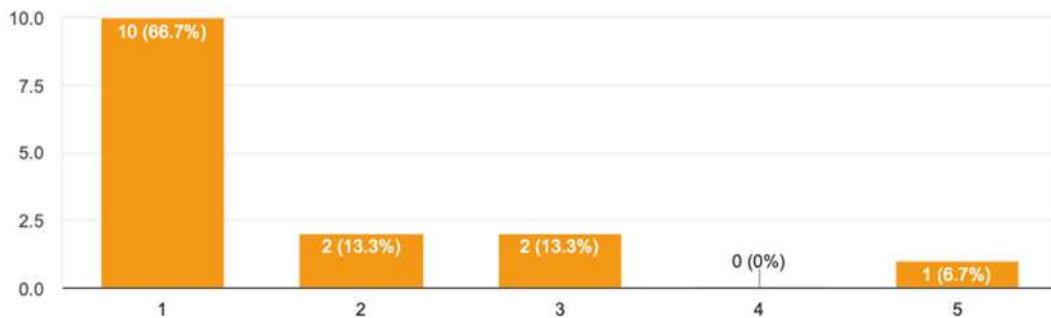
項目9-2 特に、魅力があると思われた点をご記入ください。(回答 12)

- \* 教員の専門に興味がある(専門領域が幅広い含) 6 名
- \* 教員の臨床経験が豊富 5 名
- \* 説明会等の対応がよかった 1 名

項目10 入学前、鹿児島大学のキャンパスはどのくらい魅力を感じましたか(駅からのアクセスの利便性など含む)。(回答 15)

※ 1: 魅力ある ~ 5: 魅力ない

15 件の回答



## 5. 臨床心理学研究科 FD 研修会の開催

(特筆すべき取り組み 4)

本研究科では、学外講師による FD 研修に加え、FD 委員が全学・学外で研修した内容を FD 会議で共有することが定例化している。令和3年度は、出張を伴う講演や会議への参加は困難となったが、表 13 に示すように、学外講師 1 回、研究科内講師 1 回、学内研修会参加報告 1 回という研究科のニーズにマッチした内容の研修会が 3 回実施された。

表 13 臨床心理学研究科内で開催された研修会(他の議題との包括開催もある)

月日	テーマ	講師
7月21日	「心理臨床における研究倫理」	廣瀬幸市氏(研究科教授)
12月15日	「全員で考えるコロナ禍を経験した未来の大学」 令和3年度第1回 FD・SD 合同フォーラム報告	廣瀬幸市氏(研究科教授)
1月15日	「臨床心理士養成課程における臨床心理アセスメントの倫理教育実践例の紹介」	吉川眞理氏(学習院大学教授)

## 6. 授業公開・参観の再開

(改善事例 4)

研究科設置直後数年ほどは開催されていたが、専任教員が附設心理臨床相談室で相談活動を担当することに加え、学生が担当する全てのケースに専任教員によるスーパーヴィジョンを行う等の実習指導が相当時間をかけて実施されるため、授業時間割をスライド形式で編成せざるを得ず、結果、授業参観の実施が困難となっている。また、守秘義務の関係から、授業公開及び授業参観は、研究科内のみとせざるをえない実状もある。その中、平成30年度には、授業公開・参観期間として1ヶ月を設定し、授業参観を受け入れるべく体制を整えて予め告知し、授業公開・参観に取り組んでいたが、上記、スケジュール調整が厳しい状況もあり、実績がないままとなっていた。令和2年度のFD活動報告にあるように、今後、この授業公開・参観の再開に向けて、実施方法等検討する予定であったが、他教員の授業参観を希望する声が挙がったことを契機に、授業公開・参観を再開することとなった。第2回研究科FD会議にて検討し、授業期間全体を実施期間として設定し、適宜、参観を希望する教員が直接、授業担当教員と調整して実施する体制とした。授業期間内に授業公開・参観が実施された場合、参観教員が「鹿児島大学大学院臨床心理学研究科授業参観報告書」を作成し、FD委員会に提出し、FD委員長が9月と2月の研究科FD会議にて全教員へ報告する。令和3年度は、前期に1件の授業参観が実施された。今後は、研究科FD活動において、より積極的な授業公開・参観が実施され、授業改善に繋がるような工夫が要ると思われる。

## 7. 臨床心理学研究科FD活動の特記すべき取り組みや改善事例

令和3年度の臨床心理学研究科FD活動における特記すべき取り組みや改善事例については、上記、2～6に詳細に記載しているが、以下に要点をまとめる。

### (1) 臨床心理学研究科専任教員全員によるFD会議 (特記すべき取り組み 1)

臨床心理学研究科では、研究科FD会議を教授会同日に設定し、ほぼ毎月、定期的に開催する体制を整えている。令和3年度は、COVID-19(新型コロナウイルス感染症)の感染状

況が変動する中、遠隔 Zoom での会議形態をとることで、予定通り、年間 11 回の研究科 FD 会議を開催することができた。

(2-1) 学生による授業評価アンケート結果を踏まえた授業改善

(特記すべき取り組み 2・改善事例 1)

本研究科では「学生による授業評価アンケート」結果を授業改善に活かすために、各 Semester 第 1 回目のアンケートを 7 回目授業で、第 2 回目のアンケートを 14 回目授業において実施し、翌回の第 8 回目と第 15 回目には、各教員が受講生の意見に対するフィードバックと改善への工夫を授業内で行うことを組織的な取り組みとして実施している。令和 3 年度は、年間 4 回の授業評価アンケートを実施し、結果は教授会で報告され、同日に開催される研究科 FD 会議にて、全教員で共有し検討された。

改善事例としては、学生による授業評価アンケート結果を受けて、授業担当者が作成する「学生による授業評価を受けての報告書」に、授業の改善結果の検証まで記載することに改めた点が挙げられる。報告書内には授業改善、学生へのフィードバックに加え、改善結果の検証についても記載され、該当月の研究科 FD 会議において、全教員間で共有し、内容に関する検討を行った。

(2-2) 臨床心理学研究科独自の取り組みとしてのフォローアップセッション

(特記すべき取り組み 2・改善事例 2)

臨床心理実習をより充実したものにするために、臨床ゼミ担当教員による学生個人または集団を対象としたフォローアップセッションを実施している。これによって、学生の臨床実習に伴う不安が軽減されたり、集団の場合には学生間で振り返りを共有したりすることで自身の学びが相対化されるなど、より充実した学内・学外実習の学修となっている。また、2年間を通して、臨床ゼミ担当教員からの継続的な指導を受けることで、自己成長の過程を振り返ることができ、臨床心理士としてのアイデンティティと実践力の基盤づくりが可能となっているのではないかと考えられる。

改善事例としては、このフォローアップセッションは重要な指導の一つであり、そのあり方を検討するために学生からの感想や要望等も聞く必要性が見直され、既に終了していたフォローアップセッション・アンケートを再開した。アンケート結果は、実習委員会との合同会である該当月の研究科 FD 会議において、全教員間で共有し、実施方法や内容について検討を行った。

(3) 入学生アンケートの定例化

(特記すべき取り組み 3・改善事例 3)

特記すべき取り組みであり、改善事例でもあるが、これまで断続的に行なっていた入学生アンケートについて、令和 3 年度からは定例化して実施することとなった。これには、令和 2 年度に実施した入学者ニーズ調査の結果から、入学後の高度専門職業人を養成する学修

へとスムーズに導入する教育のあり方を検討することに加え、入試広報等にも繋がること  
がわかった。早速、不足している情報等は、令和3年度の入試説明会の内容に反映された。

#### (4)臨床心理学研究科 FD 研修会の開催

#### (特記すべき取り組み 4)

令和3年度は、学外講師によるFD研修会を1回、研究科内講師のものを1回、学内研  
修会参加報告1回の研究科FD研修会を行った(詳細は「5.臨床心理学研究科FD研修会  
の開催」を参照)。また、予定されていた「実務家教員向けのFD研修会」については、  
COVID-19(新型コロナウイルス感染症)の感染状況が変動する中、講師の調整ができず  
開催できなかった。臨床心理分野専門職大学院に対して文部科学省から課されている課題  
でもあり、引き続き、次年度に開催を計画している。

#### (5)授業公開・参観の再開

#### (改善事例 4)

授業公開・参観について、令和元年度から授業公開・参観期間を設けるなどの取り組み  
はなかったが、令和3年度は教員の参観希望があり、授業参観を実施できた。以前のよう  
な授業公開・参観期間を特定せずに、授業期間全体を公開・参加可能な期間として、教員  
間で調整した上で参観を実施する形式をとることとした。また、実施後は、参観者が「授  
業参観報告書」をFD委員会に提出し、研究科FD会議において全教員で共有することとし  
た。令和3年度は、前期に実施された授業参観1件について、第4回研究科FD会議で共  
有された。

本研究科におけるFD活動は、臨床心理分野専門職大学院として、高度専門職業人である  
臨床心理士養成を主眼とする上でも重要な活動である。今後は、入学生アンケートと授業評  
価アンケートに続く修了生アンケートの検討も始まるが、臨床現場で活躍する修了生から  
のフィードバックを得ることで、より充実した大学院教育が目指される。COVID-19(新型  
コロナウイルス感染症)の感染状況が変動する中、今後も大学院教育にはさまざまな社会変  
動への柔軟な対応が求められるであろう。それゆえ、受講生の体験に着目したFD活動を継  
続し、計画的かつ柔軟性のある授業改善への取り組みが必要と考えられる。

以上







連合農学研究科

# F D活動報告書

(令和3年度)



鹿児島大学大学院連合農学研究科

令和4年3月

# 大学院連合農学研究科FD活動報告

## 1. はじめに

大学院連合農学研究科（連大）は、佐賀大学、琉球大学と鹿児島大学の3大学が連合した農林水産学系の博士課程大学院である。連大では、高度な専門的能力と豊かな学識をそなえた研究者の養成を目的とし、構成大学が連合して多彩な教員組織と教育研究体制を整え、地域社会や世界で貢献する博士人材を養成している。また、社会人並びに留学生を積極的に受け入れており、九州・沖縄からアジア、アフリカを見据えた農林水産学の教育研究の中核となるとともに、農林水産業及び地域の発展に寄与することを目的としている。

本研究科は、昭和63年（1988年）に設立されたが、平成21年（2009年）に4専攻11連合講座を3専攻9連合講座に改組し、単位制導入の改革を行った。令和3年4月1日現在、日本人学生53名、外国人留学生52名、計105名が在籍している。

博士の学位（農学、水産学、学術）は、12単位以上修得の上、学位論文の審査及び最終試験に合格して授与されるが、職業人教育や国際感覚を養うことを意図した人材養成学生支援セミナーや国際農学特別講義などを通じて大学院教育の実質化を目指している。さらに、年に一度、地理的に離れた3構成大学の学生が一堂に会して行う農学特別講義（一般セミナー）の実施や、多地点制御遠隔講義システム（SINET）を用いた授業を行うことで教育方法等の工夫を行っている。特に、SINETによる「農学共通講義（英語）」では、全国6連大から選出された教員（鹿児島連大からは2名選出）による先端研究に関する講義を英語で実施している。このセミナーでは、全国6連大の様々な地域の学生と同一の講義を共有することで、専門知識に加えて農林水産学における諸課題を俯瞰することが可能となっており、他に類を見ないユニークな教育システムとして高く評価されている。このような連大ならではの教育連携をさらに強固にするために、全国6連合農学研究科の博士課程学生の教育・研究指導委託に関する覚書を平成29年（2017年）10月に取り交わした。

本研究科では、学生1人に対し主指導教員1名、副指導教員2名の計3名による指導体制を取り入れているが、副指導教員には他の構成大学・研究科の教員を原則含めており、学生の研究指導においても「連合」する体制を構築している。また、1年次の学生には「中間報告会」、2年次の学生には「中間発表会」を課すことで、学位取得へ向けた研究の進捗状況の検証を実施している。

FD活動に関しては、平成19年度に代議委員会の傘下としてFD委員会が設けられ、農学特別講義（一般セミナー）を中心とした授業アンケートの集計・解析評価を行い、改善に向けて取り組んでいる。令和3年度は合計5回のFD委員会開催した。

令和3年度の活動報告では主に、農学特別講義（一般セミナー）、人材養成学生支援セミナーI、分野別セミナー、及びティーチング・アシスタント／リサーチ・アシスタント制度による活動について取りまとめている。

## 2. 農学特別講義（一般セミナー）

令和3年度鹿児島大学大学院連合農学研究科（博士課程）「農学特別講義（一般セミナー）」が、令和3年11月8日（月）から11月10日（金）までの3日間開講された。開講趣旨は、本連合農学研究科に在籍する学生に本学の教育理念に基づき、幅広い専門領域の先端知識に触れるとともに、各学生によるプレゼンテーション、専攻セミナーなどを通じて発表能力、課題探求能力、創造性を養うことにある。本研究科開設以来、各構成大学の輪番制で継続実施されているが、今年度は新型コロナウイルス感染症対策により昨年度に引き続きオンラインでの実施となった。内容は、外部から招聘した講師による講義4コマと、学生による「専攻セミナー（プレゼンテーション）」で、参加学生数は61名だった。

初日：11月8日（月）

初日は13時から受講受付ののち、13時30分から開講式が行われた。総合司会と進行は、本講義全体を通じて三好和睦副研究科長により執り行われた。開講式では、寺田竜太連合農学研究科長による挨拶と、三好副研究科長から日程と注意事項が説明された。

続いて14時から15時30分までセミナーAが開催された。講師は京都大学大学院農学研究科の近藤直先生で、講義題目は「90億人時代のための農畜水産物のセンシング技術」であった。農畜水産分、食品の特性を生かした光センサを中心に、これまで観察困難であった農作物や農作物の情報を可視化する技術を紹介いただいた。同時に、今後の地球人口の増大ならびに環境保全のためのロス削減、新しい食文化について、これまでの研究例、実用例を交えながら活発な議論が行われた。コーディネーターは、琉球大学農学部 平良英三代議委員。

続いて、15時40分から17時10分までセミナーBが実施された。横浜国立大学環境情報研究院の松田裕之先生により「SDGs後の自然保護区と野生動物管理」をテーマに講義が行われた。SDGsが提唱されて以降、環境保護・環境保全が取り込まれる一方、環境保全のために管理保護されている自然保護区では野生動物による人間への被害の問題が後を絶たず、自然保護における人間と動物の関係性のあり方についてご講演いただいた。学生にとって、環境問題に対して異なる視点から改めて着目する貴重な機会となった。コーディネーターは、鹿児島大学水産学部 山本智子代議委員。

二日目：11月9日（火）

前日に引き続き、9時から10時30分までセミナーCとして、西九州大学の安田みどり先生による講義「忍者も使った菱に秘められた機能性の解明と商品化への挑戦」が行われた。昔から日本に自生する水草の一種であり、佐賀県神埼市に自生する“菱”をテーマに、菱の成分の機能性と、産学官連携で開発した菱を用いたお菓子やお茶、化粧品のエキスの商品の開発秘話についてご講義いただいた。質問は、オンラインのコメントでも多く寄せられ、充実した議論が行われた。コーディネーターは、琉球大学農学部 高良健作代議委員。

続いて、10時40分から12時10分までセミナーDが実施され、京都大学大学院農学研究科の池田俊太郎先生による講義「資源動物のエピゲノム研究」が行われた。細胞のDNA塩基配列は同一であるのに細胞の機能や形態が大きく異なっているのは「エピジェネティック修飾」によって、どの遺伝子を機能させどの遺伝子を動かなくするというのを調節しているからであること、エピジェネティック修飾の種類やその解析方法、資源動物でのエピゲノム研究の現状についてご講義いただいた。コーディネーターは、鹿児島大学農学部後藤貴文代議委員。

2日目の午後は13時40分から専攻セミナーの1年生の専攻セミナー（プレゼンテーション）が行われた。昨年度は全体を2グループに分けたが、今年度はA～Cまでの3グループに分け、1グループあたりの人数を少なくすることで、1人あたり10分の発表時間と3分の質疑応答の時間を確保するよう改善した。このことは、事後アンケートの結果において学生の満足度が昨年度よりも向上する結果に繋がったと思われる。

セミナーの後は例年であれば懇親会あるいは関係施設見学が開催されるのだが、今年度も遠隔開催の為、昨年度に引き続きそれぞれのグループの最終発表が終われば解散であった。プレゼンテーションは昨年度の改善点を活かしてよりよい内容となったが、一堂に会しての交流ができなかったことは学生からも非常に残念との声が多く聞かれた。

三日目：11月10日（水）

最終日は、9時から12時10分まで2年生の専攻セミナー（ポスターセッション）が行われた。昨年度は3専攻を2グループにグループ分けしたが、今年度はZoomのブレイクアウトルームを使用して、A～Kまでの11グループに細分化した。一人当たり1時間の持ち時間で、発表者以外の学生は自由にブレイクアウトルームを移動して質疑ができる形とし、よりオンライン学会に近いポスターセッションとなるよう改善した。昨年度の学生からの声を反映して改善することができ、学生からはオンライン学会のよいトレーニングになったという声が聞かれた一方、ポスターを事前に見ることができればより活発な質疑応答につながるのではないかとの意見もあった。

閉講式は三好副研究科長の司会進行により執り行われ、寺田連合農学研究科長の閉講の挨拶をもって、すべての日程を終えた。

2021年度 農学特別講義（一般セミナー）時間割（日程表）

会場：オンライン開催

	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00
11/8(月)										
						13:00-13:30 受付	13:30-14:00 開講式	14:00-15:30 セミナーA (講義) 「90億人時代のための 農畜水産物のセンシング 技術」 近藤 直 先生 京都大学大学院 農学研究科	15:30-15:40 休憩	15:40-17:10 セミナーB (講義) 「SDGs 後の自然保護区 と野生動物管理」 松田 裕之 先生 横浜国立大学 環境情報研究院
11/9(火)										
	8:30-9:00 受付	9:00-10:30 セミナーC (講義) 「忍者也使った妻に秘 められた機織りの解明 と商品化への挑戦」 安田 みどり 先生 西九州大学	10:30-10:40 休憩	10:40-12:10 セミナーD (講義) 「資源動物のエビゲノム 研究」 池田 俊太郎 先生 京都大学大学院 農学研究科	12:10-13:40 昼 食	13:40-15:10 専攻セミナー (1年生プレゼンテーション)	15:10-15:20 休憩	15:20-16:50 専攻セミナー (1年生プレゼンテーション)		
11/10(水)										
	8:30-9:00 受付	9:00-10:30 情報交換セミナー (2年生ポスターセッション)	10:30-10:40 休憩	10:40-12:10 情報交換セミナー (2年生ポスターセッション)	12:10-12:20 休憩	12:20-12:50 閉講式				

令和3年度「農学特別講義Ⅰ（一般セミナー）」参加学生へのアンケートの集計結果は次表のとおりである。〔参加学生：61名 アンケート提出者：55名 アンケート回収率：90%〕

### 令和3年度農学特別講義Ⅰ（一般セミナー）アンケート調査結果

#### ・セミナーの理解度について

〔回答項目〕	セミナーA	セミナーB	セミナーC	セミナーD
ほぼ理解できた	45名 (82%)	40名 (73%)	43名 (78%)	21名 (38%)
半分程度理解できた	10名 (18%)	14名 (25%)	12名 (22%)	30名 (55%)
理解できなかった	0名 (0%)	1名 (2%)	0名 (0%)	4名 (7%)

#### ・セミナーの企画・運営等について

〔回答項目〕	日程（時期）	日程（日数）
良 い	54名 (98%)	53名 (96%)
悪 い	0名 (0%)	1名 (2%)
そ の 他	1名 (2%)	1名 (2%)

#### ・専攻セミナーについて

〔回答項目〕	グループの分け方
良 い	51名 (93%)
改善すべき	4名 (7%)
そ の 他	0名 (0%)

#### ・専攻セミナーについて

〔回答項目〕	1年次 プレゼンテーション	2年次 プレゼンテーション
意義がある	43名 (78%)	46名 (84%)
少しは意義がある	10名 (18%)	8名 (14%)
そ の 他	2名 (4%)	1名 (2%)

#### ①セミナーの理解度について

参加者から「分野が異なるものの大変分かりやすかった」、「研究分野は少し違ったが興味深く聴講した」という意見が聞かれる一方で、「専門的な部分ではほぼ理解が及ばなかった」との意見もあった。

#### ②セミナーの運営・企画等について

「時期」「日数」については、90%以上の学生から「良い」との評価を得られた。

#### ③専攻セミナーについて

専攻セミナーは、「自身の研究へのアイデアをもらった」、「自身の研究の遅れに気づくことができた」、「先輩たちの発表に刺激を受けた」等の意見と、「グループ内のマネジメントが問題だった」、「いくつ

かのポスターはデータが見えず、他の学会で採用されているようにファイルを期間限定で事前共有できるページを作成したほうがよい」等の意見があった。

#### ④セミナー全般について（学生の意見・感想）

- ・ポスターセッションが学会のポスター発表に近くてよかった。
- ・オンラインでの開催であったが、オンラインでの良さ、改善点を改めて考えることができた。
- ・普段の研究活動では触れることのない分野の話がきけて自分自身の知識の幅が増えた。
- ・分野が少し異なるため、研究方針などで困っているところを聞きにくいと感じた。
- ・英語での講義の事前資料は参考資料の情報を入れてほしい。当日の講義の内容を予習しないと理解できない。

セミナーA、BおよびCについては、73～82%の学生が「ほぼ理解できた」、18～25%の学生が「半分程度理解できた」と回答しており、「理解できなかった」と回答した学生は1名のみであった。一方、セミナーDについては、「ほぼ理解できた」と回答した学生は38%にとどまり、「理解できなかった」と回答した学生も4名いた。これは、セミナーDの「遺伝子のエピジェネティック修飾」というテーマが、セミナーA、BおよびCのそれと比較してより専門的な内容であったためと思われる。学生の意見・感想にもあったように、講師の先生に予習のための参考資料を幾つかあげていただくようにすると良いかもしれない。

今年度はオンラインでのポスターセッションを行ったが、文字が小さくて不鮮明なため内容が良く理解できないポスターも幾つか見受けられた。この点については、事前にオンラインで指導教員に見ていただくよう、学生に指導する必要があるかもしれない。また、事前にポスターのファイルを共有しておくという意見については、それによりポスターの提出期限が早まることや特許等に関連した秘密保持について考慮する必要がある等の問題は生じるものの、検討する余地があると思われる。

次年度の開催においては、以上のようなことを踏まえて、より良いものに改善していくこととした。

### 3. 人材養成学生支援セミナー I

「人材養成学生支援セミナーI」は、大学・研究所・企業等で活躍中の方々を招き、企業や社会でどのような人材が求められているかなど、今後の研究者・指導者としての道をひらくことを目的としており、今年度は令和3年7月29日（木）に各大学をオンラインで結んで開講された。例年は各大学に講師をお招きして講義をしていただくが、今年度は新型コロナウイルス感染症の影響により、所属機関から講義をしていただくこととなった。セミナーは4つの講義と質疑応答からなり、その概要は以下のとおりである。

講演1 中井克樹氏（滋賀県琵琶湖博物館研究部/総務部広報営業課（兼）滋賀県琵琶湖環境部自然環境保全課生物多様性戦略推進室）

題目：大学院博士課程から地方公務員へ：試験研究機関と行政部局でのキャリアの活かし方

本講演では、中井先生のこれまでの経緯、博士課程を経て滋賀県庁に就職され、その後どのように仕事をされてきたのかについてお話しいただいた。1996年に琵琶湖博物館が開設されてから、どのような活動をされてきたのか、博士課程での研究がどのように活かされたのか、外来種対策で活躍されたことなど、興味深いお話をお話しいただいた。現在も学会や行政の各種専門委員会で専門家として支援を行う日々を過ごしていらっしゃることを紹介された。

講演 2 田代暢哉氏（一般社団法人プラントヘルスケア研究所）

題目：博士課程で身につけていたら得する精神論だけではない人生術とスキル

本講演では、田代先生の佐賀大学農学部を卒業後の経緯をまず紹介され、その後佐賀県庁でのお仕事について詳しく話された。佐賀県庁での Evidence-based control の研究で、日本植物病理学会学術奨励賞、日本植物病理学会賞、農林水産技術会議会長賞を受賞され、啓蒙書 2 冊を執筆され、その後 EBC 研究会を立ち上げられ、現在は一般社団法人プラントヘルスケアを総説され病害虫防除技術開発に携わられていることなどをお話しいただいた。

これまでのお仕事の中で、研究の考え方がいかに役に立ったか、夢をかなえるための人生術、夢をかなえるために今読んでおくと役立つ本などをお話しいただいた。

講演 3 久永絢美氏（国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構（農研機構））

題目：農研機構の概要と研究内容の紹介

本講演では、所属されている農研機構の概要やこれまでに携わってきた研究課題及び業務内容を中心に紹介していただいた。取り組んでおられる研究として、カンキツ類に含まれている機能性成分が健康維持機能に及ぼす影響の解明や、機能性成分の含有量保証技術を開発するプロジェクト、「果樹・茶の育種・生産プロセスのスマート化」を目指して、栽培性と市場競争力に優れるカンキツ新品種の育成やゲノム情報を活用した効率的な育種素材の開発などご講演いただいた。先生の講演は、学位取得後の進路として、研究者としての将来像や就職先について考える上で学生に良い刺激となった。

講演 4 広瀬直人氏（沖縄県工業技術センター）

題目：地域に密接した公設試の研究～黒糖に関する研究例～

本講演では、広瀬先生が組んでおられる黒糖の研究を例として、公設試における研究活動についてご紹介いただいた。大学や独法研究機関と連携して実施した課題、大学や他研究機関の研究成果を利用して実施した課題などの紹介があり、「現場に近い」公設試の特徴である研究機関連携を通じた実用化研究について説明いただいた。先生のご講演は、学生達がキャリア形成を考える上で良い刺激となった。

**人材養成学生支援セミナー I 2021 日程表**  
Human Resource Development Seminar I 2021

	8:50	9:00	10:30	10:40	12:10	13:30	15:00	15:10	16:40
7月29日(木)	開講挨拶	<b>講演 1</b> 「大学院博士課程から地方公務員へ：試験研究機関と行政部局でのキャリアの活かし方」 村山 功枝 中井 克樹 滋賀県立琵琶湖博物館(委) 滋賀県琵琶湖環境部自然環境保全課 生物多様性戦略推進室	休憩	<b>講演 2</b> 「博士課程で身につけていたら得する精神論だけではない人生術とスキル」 田代 暢哉 一般社団法人 プラントヘルスケア研究所	昼食	<b>講演 3</b> 「農研機構の概要と研究内容の紹介」 久永 絢美 国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構	休憩	<b>講演 4</b> 「地域に密接した公設試の研究～黒糖に関する研究例～」 広瀬 直人 沖縄県工業技術センター	
	講義大学	講義大学	鹿児島大学(水)		佐賀大学		鹿児島大学(農)		琉球大学

#### 4. 分野別セミナー

平成 24 年度から、構成大学間の連携を促進し、さらに地域特性に根ざした産学官の連携も視野に入れて、連大生を中心とした若手研究者の意欲の向上に資することを目的とした「分野別セミナー」を開催している。令和 3 年度は、1 件の分野別セミナーが開催された。



(1) セミナー名称：応用生命科学専攻 分野別セミナー（農芸化学）

開催日時：令和4年2月22日

会場：Zoom 会議システムを用いたオンライン方式（ホスト；琉球大学農学部）

「食品ロスに新たな価値を」～食の循環による SDGs 実践事例～と題し、株式会社日本フードエコロジーセンター代表取締役の高橋巧一氏による講演を行った。獣医師である高橋氏は、神奈川県相模原市で、大手の食品製造業者から得られる食品廃棄物を独自の乳酸発酵技術により液体飼料を製造する食品リサイクル事業を行っている国内最大の企業の代表である。液体飼料の低コスト化、安定生産化、肥育の最適栄養配合化など多くの課題を乗り越え、その飼料で肥育した豚はブランド化して販売が行われており、食品リサイクルの成功例として国内外で最も注目される現場の貴重な講演を聴講できた。また応用生命科学専攻の学生を中心に6名の研究報告があった。

## 5. ティーチング・アシスタント／リサーチ・アシスタント制度による活動

大学院生の多くは、教育研究機関に就職し、教育者となるものも多い。ティーチング・アシスタント（TA）制度は、大学院生の将来の指導者としてのトレーニングの機会提供を目的として実施している制度である。同時に大学院学生の処遇の改善の目的もある。また、大学院生が将来指導者となり、プロジェクトを先導する機会もあるだろう。その時の経験として、リサーチ・アシスタント（RA）制度は、本研究科の構成大学が行う研究プロジェクト等に、本研究科の優れた学生を研究補助者として参画させ、研究活動の効果的推進、研究体制の充実及び若手研究者としての研究遂行能力の育成を図ることを目的としている。同時に本研究科の構成大学における学術研究の一層の推進に資する研究支援体制の充実・強化を図るだけでなく、若手研究者の養成・確保を促進するためにある。

連大においては、本年度も各構成大学で TA 採用学生を対象に TA 研修会を開催した。それぞれで開催された研修会で、1) 鹿児島大学の教育理念と TA の心構え、2) TA 業務に関わる注意事項、および3) 安全衛生、等について、それぞれの代議委員から、詳細に（日本語と英語で）説明が行われた。令和3年度に連大ではティーチング・アシスタントを35名、リサーチ・アシスタントを17名採用した。

例年、連大では、ティーチング・アシスタントには、アンケートシステムによる「TA 活動実施報告書」を提出させている。その中で「TA は将来学生を指導する際のトレーニングとして有益でしたか？」という問いに対する回答では、TA 採用者の94%が「とても参考になった」、「まあまあ参考になった」と回答した。

次年度においても、TA としての心構えの徹底および技能の向上をはかり、大学院生のそれぞれの専門分野での研究の向上を目指すだけでなく、教育上の指導者としての能力向上に資するよう継続的に改善を講じていく予定である。そのため大学院生の指導教員は、より積極的に大学院生を指導・助言するように、学内周知を徹底したい。RA は、本研究科の各構成大学で実施される研究プロジェクト等の効果的推進のため、研究補助者としての役割が期待されている。RA 期間は大学院生自身の研究能力を磨きながらプロジェクト運営を見ることが出来る貴重な機会と言える。本研究科教員が研究代表者を務めるプロジェクト等では積極的に RA を採用し、周囲の研究科教員も RA を継続的・協動的に適切な指導を行うなど努めたい。今後も本研究科全体で、大学院生を研究者の有望な卵として、彼らの資質向上に向け、教育研究に協力して取り組み必要がある。

## 6. おわりに

本報告書では、農学特別講義（一般セミナー）、人材育成学生支援セミナーⅠ、分野別セミナー、修了生・在学生を対象としたアンケート、及びティーチング・アシスタント／リサーチ・アシスタント制度による活動について取りまとめた。令和3年度の農学特別講義（一般セミナー）は、当初は沖縄での開催を予定していたが、会場や対面でのプログラムがコロナウイルスの感染症対策の基準を満たすことができないことから、オンラインでの開催に変更して実施した。学生や代議委員は、各構成大学の SINET 会場や所属研究室、職場、自宅等から SINET とオンライン会議システムを通じて参加し、招聘した4名の講演者の最先端の講義を英語で受講した。さらに、学会のオンライン開催を見据え、学生各自の研究のオンラインプレゼンテーションを行い、コロナ禍の時代に即したプレゼンテーション能力を向上させるとともに、多彩なバックグラウンドを持つ教員・学生との討論・意見交換を行った。初めてのオンライン開講は試行錯誤の部分も多かったが、特に大きなトラブルはなく、学生からも高い評価を得ることができた。特に、自分の PC のモニターで受講する学生にとっては、講義のスライドが会場の最前列で受講するかのごとく鮮明であり、音声も問題なく聴講することができた。このようなオンライン開講の利点は、コロナ禍が収束した暁においても連大の教育システムとして積極的に活用していく部分と考える。

人材育成学生支援セミナーⅠでは、社会で幅広く活躍する学位取得者の方を招聘し、これまでの経験やフィロソフィーに関する講義を行っている。本セミナーは、学位取得後のキャリアパスの明確化の点で教育効果が高く、豊かな学識を備えた研究者や高度技術者の養成に寄与しており、民間企業も含めた幅広い職種への就職の動機づけとしても有意義である。例年は7月下旬や8月上旬に対面形式で実施していたが、感染状況等を鑑みてオンライン形式で開講した。農学一般セミナーと同様に、大きなトラブルもなく予定の内容を終了したが、学生からも高い評価を得ることができた。特に、連大で学位を取得した講演者の講義は、受講生が描く将来像と重なる部分も多く、高い共感を得た。

以上、連大のファカルティ・デベロップメント（FD）活動では、このようなセミナーや研修会、アンケートを通じて教員や学生の意見を吸い上げ、連大として改善できる部分については随時見直しを図っており、教育の質の向上に勤めている。今後もこのような考え方と方向性に沿って、FD 活動を行っていく予定である。

令和3年度 鹿児島大学大学院連合農学研究科FD委員会委員

委員長	寺田 竜太	研究科長
委員	三好 和睦	副研究科長
委員	北垣 浩志	(佐賀大学)
委員	近藤 文義	(佐賀大学)
委員	嬉野 健次	(琉球大学)
委員	平良 英三	(琉球大学)
委員	石橋 松二郎	(鹿児島大学)
委員	後藤 貴文	(鹿児島大学)
委員	佐野 雅昭	(鹿児島大学)

